恐竜文学大全

東 雅夫 編



河出文庫

恐竜文学大全

東 雅夫 編

河出文庫

ひ5-2

恐竜文学大全　東 雅夫 編　河出文庫

¥950

ISBN4-309-40554-1
C0193 ¥950E
9784309405544
1920193009507
定価　本体950円（税別）

気の遠くなるような何億年もの昔、人類が歴史に登場する遙か以前に、この地上に覇を唱えていた、驚くべき巨大生物!!
明治期の奇想天外な物語から、科学エッセイ、SFや幻想文学の名作、さらには現代詩や短歌に至るまで、日本文学のなかに、その恐ろしくも崇高な姿を現した古代の王者《恐竜》のすべてを集大成した、初めての大アンソロジー。



河出書房新社

星　新一　一九二六〜一九九七。『ボッコちゃん』『気まぐれロボット』等。
井上雅彦　一九六〇年生。『異形博覧会』『1001秒の恐怖映画』等。
豊田有恒　一九三八年生。『モンゴルの残光』『倭王の末裔』等。
小林恭二　一九五七年生。『瓶の中の旅愁』『カブキの日』等。
景山民夫　一九四七〜一九九八。『普通の生活』『遠い海から来たCoo』等。
荒俣　宏　一九四七年生。『別世界通信』『帝都物語』等。
中谷宇吉郎　一九〇〇〜一九六二。『雪の結晶』『冬の華』等。
種村季弘　一九三三年生。〈ネオ・ラビリントス〉全八巻（刊行中）等。
W・A・カーティス　一八六七〜一九四〇。

カバー写真　カスモサウルス（1980）

カバー装幀　村上光延　　フォーマット　粟津　潔

宮沢賢治　一八九六〜一九三三。『春と修羅』『注文の多い料理店』等。
吉田健一　一九一二〜一九七七。『ヨオロッパの世紀末』『瓦礫の中』等。
清岡卓行　一九二二年生。『アカシヤの大連』『ふしぎな鏡の店』等。
河野典生　一九三五年生。『街の博物誌』『明日こそ鳥は羽ばたく』等。
山野浩一　一九三九年生。『伝説の名馬』『花と機械とゲシタルト』等。
筒井康隆　一九三四年生。『虚人たち』『文学部唯野教授』等。
井辻朱美　一九五五年生。『遙かよりくる飛行船』『コリオリの風』等。
東　雅夫　一九五八年生。『クトゥルー神話事典』『日本幻想作家名鑑』等。



河出文庫 今月の新刊

失われた古代の王者

明治の奇想天外な物語から、SFの名作、珠玉のエッセイ・短歌まで〈恐竜幻想〉のすべて!!

定価998円 本体950円


河出文庫
恐竜文学大全
東 雅夫編
河出書房新社
恐竜文学大全
東 雅夫編
河出文庫
kawade bunko

河出文庫

恐竜文学大全

東　雅夫 編



河出書房新社

恐竜文学大全　目次

恐竜文学大全

午後の恐竜

星新一

1

男は目をさました。ねどこのなかで軽くのびをする。どこかで、近所の幼い子供たちの、夢中になってさわいでいる声がする。

「わあ、怪獣だ。怪獣だ」

と叫びあっている。そのなかに、幼稚園へかよっている彼の坊やの声がまざっていることも、すぐにわかった。

男は手をのばし、枕(まくら)もとの時計を取る。カーテンごしの陽(ひ)の光で時計を見る。午前十時半。

「そろそろ起きるとするかな……」

男はつぶやく。彼にとって、日曜の朝のこの寝坊ぐらい好ましいものはない。これを味わうために毎週の勤めをしているような気になることもあるのだ。

もっとも、けさは七時ごろだったか、妻に一回ゆり起された。

「ねえ、あなた。ちょっと起きてみない。面白いわよ」

と、ささやかれたような気もする。

しかし、男はねむい声、ふきげんな声でどなりかえした。

「おれを起すな。日曜の朝ぐらい、ゆっくり眠らしておいてくれ。一週間分の疲れをこれで回復するのだ」

そして、毛布を引っぱって頭の上までかぶり、ふたたび眠りの国へと戻った。

妻も起すのをあきらめたのだろう。男はいま、みちたりためざめを迎えることができた。眠りのなかで、なんだかわからないが不安にみちた夢を見たようにも思えた。だが、それもめざめと明るさのなかで、すぐに忘れてしまった。さらに、それを確認するような口調で男は言ってみた。

「のどかだなあ……」

彼は三十歳ちょっと。努力したかいがあって、このあいだやっと自分の家を持つことができた。この家。小さく、都心へ通勤するにはけっこう時間がかかり、借金もたくさん残っているが、とにかく自分の家なのだ。

家族は妻と坊やひとり。数カ月後には、もうひとり子供がうまれる予定だ。こんどは女の子だといいな。男は楽しく空想した。高望みすればきりがないが、いまのところ大きな不満のない生活といえた。

玄関から子供が、叫び声とともにかけこんできた。

「わあ、怪獣だ。怪獣だ」

男はそれにねころんだまま声をかける。

「怪獣ごっこをやっているのかい」

「あ、パパ。起きていたの」

坊やはあわてて声をひそめた。パパを起さないよう、母親に注意されていたのを思い出したのだ。男は言う。

「ああ、おはよう。だれと怪獣ごっこをやってるんだい」

「ううん、ごっこじゃないよ。本物なんだよ。とってもすごいんだ」

坊やの顔には、興奮がいっぱいにひろがっていた。楽しさできらきらする目。わくわくする心で息づいている胸。手は制しきれぬリズムで休みなく動いている。

しかし、本物とはなんのことだ、と男は思った。真に迫った遊びとでもいった意味なのだろう。男はこのさい、坊やの語法のあやまりを直してやるべきだと考えた。来年は小学校だ。けじめなるものを、少しは教えておかなければならない。

「おい、こっちへ来なさい。遊びの時には、本物などと言ってはいけない」

「だって、本物なんだもの」

「本物の怪獣など存在しないんだ。テレビに出てくるのも、なかに人間が入っているぐらい、知っているだろう。言葉づかいはちゃんとしなさい」

「だって、パパ……」

坊やののどから不満げな文句が、しかし、はずんだ声で出た。男の声は大きくなる。

「だって、なんなのだ」

「自分でみてごらんよ」

坊やに言われ、男はカーテンを引き、くもりガラスの窓の戸をあけた。そして、そこに見た。

「うむ……」

男はうなり、うなずくばかりだった。ワニのしっぽを短くし、からだをずんぐりさせたような形。くすんだ茶色をしており、体長は二メートル半ぐらいだろうか。のそのそと歩いている。

「マストドンザウルスっていうんだって」

と坊やは言った。遊び仲間のだれかに教えられたのだろう。近ごろの子供には、古代怪獣の名にくわしいのがいる。

「ふうん……」

男はため息をついた。異変はそばの怪獣だけではなかった。あたりには妙な植物が何本もはえている。幹にはウロコのようなものがついており、いずれも空へむかって、いやに直線的に伸びている。なかには十メートルを越す高さのものもあった。

「シダのたぐいだろうか……」

葉の形がお正月の飾りに使うそれに似ていた。しかし、もっとずっと大きい。そのため、あたりには緑色の光がただよっている。こんなもの、昨夜まで影も形もなかったのに。

「これは、どういうことなのだ……」

また男はつぶやき、そこに呆然と立ちつくした。坊やのほうは、少しもじっとしていられない。雪のつもった朝も楽しいが、きょうはそれよりはるかに刺激的なのだ。いつのまにか坊やはそとへ出て「怪獣だ、怪獣だ」と叫んでかけまわっている。

そこへ、さっきのかどうかはわからないが、またマストドンザウルスがあらわれた。男は気がつき、あわてて叫ぶ。

「気をつけろ、坊や。その変なやつに近よっちゃだめだ。あぶないぞ。逃げろ……」

そのとたん、怪獣は坊やにむかって、大きな口を開いた。体長の三分の一はありそうな口だ。ノコギリよりとがった、ギザギザの歯の列が白く光り……。

2

厚いコンクリートの壁にかこまれた、大きな地下室のなかで、大ぜいの男女が忙しげに動いている。そのなかで最も年長の、制服姿のひとりが叫んだ。青ざめた顔をしており、いらいらした感情のこもった口調だ。

「おい、ＸＢ８号との連絡はまだとれないのか」

「まだです。無電を総動員し、最大の努力はしているのですが……」

壁ぎわに並んだ計器類のランプが点滅し、ピーピーいう信号音や、ブザーの音。コンピューターの磁気記憶装置の回転。

「急げ。なんとしてでも、連絡をつけねばならぬ」

「はい、司令官」

おたがいに話しあうざわめき。そのなかで、だれかの驚きの叫び。

「おい、なんだ。このワニのお化けのような怪物は。どこから出てきたのだ。だれかのいたずらか……」

「きゃっ、こわい……」

女性のかん高い悲鳴。だが、それらを押えつけるように、制服のいかめしい司令官の声。

「ワニがどうした。くだらんことでさわぐな。ＸＢ８号との連絡をとれ。それ以外のことは考えるな……」

3

窓のそとのマストドンザウルスは、すさまじさの発散する口を大きくあけたかと思うと、坊やにむかって勢いよく閉じた。それを見て男は、のどに絶望的な声をつまらせながら、両手で目をおおった。

しかし、子供の頭の砕ける音も、苦痛の音も聞こえてこない。響いてきたのは坊やの笑い声だ。面白くて面白くてたまらないという、心からの笑い声。

「あははは、どうだ、怪獣……」

男がこわごわ目をあけると、坊やは無事だった。坊やは小走りに怪獣を追いかけ、手の棒きれでたたいた。いや、本人はたたいているつもりなのだが、そこにはなんの反応もなく、棒は空を打つだけのように動いた。目にははっきりと見えているのだが、実在しているのではないらしい。

男は窓から手をのばした。そこにあるシダの葉をむしってみようと思いついたのだ。しかし、それはできなかった。なんの手ごたえも、感触すらもなかった。葉は鮮明にそこに見え

ているのに。男はむなしく何回か手のひらを開閉してから言った。
「夢を見ているのだろうか。しかし、おれはさっき目をさました。眠っているのではない。となると、幻覚だろうか。だが、坊やも同時にそれを見ている。坊やに怪獣の名を教えた子供もいる。そうなると、幻覚なんていうものではない。どうしたんだ……」
疑問をつぶやく彼の声は大きくなり、それを耳にした妻がやってきて言った。
「あなた、お起きになったのね」
「ああ、おまえか。自分では起きたつもりでいるが、とても信じられん。なんだ、これは。一夜にして立体テレビが開発され、世界じゅうにむけてワイド版の放送を開始したとでも考えるべきなのだろうか」
「あたしにだって、わかるわけがないわ」
「いつからこうなんだ」
「けさからよ。だけど、朝のうちは樹もこんなに大きく茂ってはいなかったわ。あなたに教えてあげようと起したんだけど……」
その記憶は彼にもあった。どなりかえして眠りつづけたことだ。男はうなずく。
「そうだったのか。あの、ふとったワニのような怪物も朝からいたのか」
「さっきまでは、もっと小さいサンショウウオみたいなのがうろついていたわ。細長く、おなかのほうが赤っぽく、ぬるぬるした感じの皮膚の、なんだか気持ちの悪いやつよ」

「よく悲鳴をあげなかったな」
「でも実在じゃないでしょ、それにそうたくさんはいなかったし、すぐになれたわ」
女性や子供は、すぐ環境になれてしまうもののようだな、と彼は思った。それにくらべ、おれのような男性は、原因や理由を知りたがる。
「それにしても、どうしてこんなことが起ったのだろう」
「蜃気楼(しんきろう)みたいなものじゃないの、そのうち消えちゃうわよ。あなた、朝ごはんなに食べる……」
妻にとっては、日常的な仕事のほうが重要らしかった。実体のないものより食事のほうを優先させるのは、当り前のことかもしれない。妻は彼にとって、この問題を真剣に論じあうにふさわしい相手ではなかった。
「ああ、トーストとコーヒーだけでいい。ここへ持ってきてくれ。そとを眺めながら食べる」
どこからかまた、一団の子供たちのあげる歓声が聞こえてきた。もう愉快で愉快でたまらないという、うわずった声だ。眺めているうちに彼の心にも、遠いむかしの子供のころの日々が戻ってきたようだった。すばらしい贈り物の待っていたクリスマスの朝のめざめ。それをうんと大きくし、あたりにばらまいたようなのだ。
妻は蜃気楼とか言っていた。男は蜃気楼を見たことがなかった。見たくて見たくてたまら

ないが、一生見ずにすごしてしまうものがあるが、そのひとつだった。しかし、これがそうとはちょっと考えられない。蜃気楼とは、もっとぼやけたものじゃないだろうか。これはあまりにも鮮明すぎる。そこに彼は、なにかたまらなく不安なものを感じた。

男はトーストをかじり、コーヒーを飲んだ。この窓のそとはせまい庭で、そのむこうは道だ。そこをとなりの家の主人が通りかかった。中年の人で、犬を連れての散歩のかえりらしかった。

「おや、こんにちは……」

声をかけられ、男は返事をする。

「きょうは妙なことが起りましたなあ……」

ほかにあいさつのしようがなかった。その時、また変な生物があらわれた。背に大きなヒレをつけた、巨大なトカゲのようなやつだ。ゆっくりと歩き、去ってゆく。犬がほえかかる。隣家の主人はそれをなだめ、おとなしくさせた。犬の目にも見えるらしい。人間だけの集団幻覚でもないらしい。男は聞いた。

「この一帯だけの現象なんでしょうか。ずっとむこうはどうなんでしょうか」

「あっちのほうでは、さっきとても大きなトンボが飛んでましたよ。害はないといっても、いい気持ちじゃありませんね。どうやら、世界じゅうらしいですよ。テレビをつけてごらんなさい。なにか言ってますよ。要領をえないことですが……」

「そうしましょう」

男はスイッチを入れた。甘ったるい歌声が流れ、若い女性の顔がうつった。別なチャンネルを回すと、ニュース解説のアナウンサーらしいのが、まじめな表情でしゃべっていた。

「……この不可解な現象は、依然として世界的な規模でつづいております。これまでの経過をくりかえしますと、外国の生物学者がプールの底をはっている三葉虫を発見し、新聞社に通報したのが最初のようです。もっとも、発見はしましたが、手でつかもうとしてもできなかった。わが国の時間にして、本日の午前一時ごろのことです。三葉虫とは太古の海底に栄えた原始的な生物で……」

ゲストの生物学者が、その先をしゃべった。

「この三葉虫は、いまから四億年以上も前の、カンブリア紀にすでに発生し……」

要するに、化石にしか残っていない古い古い生物というらしい。それから、この現象は進化に関係があるらしいとも言った。幻としてあたりに出現しているこれらの動植物は、あきらかに進化のあとをたどっているという。学者は図をめくりながら、いろいろな古生物の名を口にした。

妻の言っていた大きなサンショウウオのような図もあった。さっきのマストドンザウルスの名も出た。しかし、その図は必要なかった。その時、テレビスタジオのなかを、それがゆっくりと通りすぎていったのだ。

アナウンサーが言った。
「進化のお話はわかりました。で、なぜこんな現象が起ったのでしょう」
「さあ、わたしの専門は古生物学でして、それ以外のこととなると、どうも……」
「では……」
アナウンサーはそれ以上あまり突っこまなかった。失礼でもあるし、解答が期待できないと知っているからでもあろう。それからアナウンサーは、なるべく外出をひかえるようにと注意した。あたりに気をとられ、運転をあやまって事故を起すといけないからだ。だが、だれも外出しようとしないだろう。休日なのだし、どこかへ行かなくても、これでけっこう面白いのだ。
窓のそとの樹は、種類が少し変ったのか、より高くなり、葉も多くなった。

4

「おい、ＸＢ８号との連絡はまだとれないか。どうだ」
制服の司令官は表情をひきつらせながら、ヒステリックに言った。だれかが答えた。
「だめです。さっき、それらしい電波が入ったのですが、うつろな笑い声だけでした。問いかけても答えません。それに、あまりにも瞬間的だったので、位置のつきとめようがなかったのです」

「呼びつづけるんだ。あのＸＢ８号という最新原子力潜水艦は、水爆弾頭のミサイルを十発もつんでいるんだ。まちがいがあったら大変なことだ。事故で沈没したとはっきりしてくれたら、どんなにありがたいだろう」
「司令官。沈没を期待するようなことをおっしゃっていいのですか」
「もし、かりにだ、どこかの外国に発射してみろ。まちがいですむことではない。ただちに報復がなされ、それをきっかけに全世界が核戦争に巻きこまれる」
司令官はこまかくふるえ、そばの者は泣きそうな顔になった。広い部屋のどこかで、また女の悲鳴がした。
「あら、こんな大きな卵が……」
「卵が割れて、黒いコウモリみたいのが出てきたぞ。いや、コウモリだったら卵からうまれはしない……」
司令官はにがにがしげに言った。
「よけいなことでさわぐな。そんな場合ではない。原子力潜水艦ＸＢ８号との連絡だけを考えろ。とりかえしのつかないことになるぞ」
「しかし、司令官。さっきからの、この幻覚みたいな現象はなんなのでしょうか」
「わからん。その方面へ問い合せてみてくれ。生物学の分野なのか、心理学の分野なのか、

気象学か地質学かさっぱりわからん。ああ、なにもこんな非常事態の時に、こんな子供の夢みたいなさわぎが加わらなくてもいいのに……」

5

男は午後のひとときを、そとをながめることですごした。

とてつもなく大きい、黒く、三角のような翼の鳥が、どこからともなくあらわれて空を舞っていた。一羽でなく、いくつもいくつも。翼の裏が変に赤っぽいのもいる。

なかには、空中でおたがいに激しく争っているのもある。鋭い歯の並んだくちばしで、かみつきあうのだ。男は妻を呼んだ。

「おい、きてみろ。面白いぞ」

彼女はそばへ来て、空をあおいだ。

「ほんと、壮観ねえ。あれ、なんていう鳥なの」

「知るもんか。あるいは、翼手竜とかいう種類なのかもしれないな。そんな名前をなにかで読んだことがある」

「長いしっぽを下げて飛んでるのもあるのね。すごいわ……」

「面白いことは面白いが、しかし、おれは不安でならない。さっきからそうなんだ。これか

らどうなるのか……」

しかし、男には、どう不安なのか説明することができなかった。妻もしばらく沈黙をつづけた。彼女もまた、そんなけはいを感じたのかもしれない。

遠くから、子供たちの歓声が聞こえてきた。

「わあ、恐竜だぞ。大きいなあ、すごく大きいなあ……」

それはやがて、こっちにもやってきた。丸い小山のようなと呼ぶべき感じで、全長は、さあ二十メートル以上はあるだろうか。子供たちの叫びにまざる言葉で、ブロントザウルスという名らしいとわかった。胴からは長いくびが伸び、その先に小さな頭がついている。

ゆっくりとゆっくりと歩いている。なにを急ぐ必要があるんだ、といわんばかりだ。午後の明るい陽のなかの恐竜は、堂々として偉大で、どこか荘厳で、気品すらあり、生命そのもののようだった。地球の王者にふさわしいのは、人間でもライオンでもなく、これ以外にないようにさえ思われた。しかし、小さな頭についている目は、ユーモラスなくせになにか悲しげで、いやに人間的なところもあった。

「あら、うちがつぶされるわ……」

妻がかん高い声をあげ、彼にしがみついた。恐竜の足が、屋根にむかってふみおろされたのだ。せっかく作った、この家が……。

しかし、もちろんなんともなかった。ちょっと薄暗くなっただけで、やがてもとに戻った。

恐竜は長いしっぽをひきずりながら、幻の森のどこかへ消えていった。彼と妻は、顔を見あわせて笑いあった。

男はふと思いついた。ちょうどいい機会だ。この際、坊やに進化について教えておくとするかな。しかし、それはやめておくことにした。教えようにも、彼にはその知識があまりなかったのだ。それに、幼稚園ていどの子供には理解しにくく、見物して面白がるだけに終ってしまうだろう。

ゴジラのような形の大きな恐竜が通っていった。さっきのより動作がいくらかすばやい。男は百科事典があったことを思い出し、ページをくって、それがイグアノドンという名前らしいとわかった。こんなことで百科事典が役に立つとは、買った時には考えもしなかったな……。

さまざまな恐竜があらわれ、去っていった。背中にギザギザのついたやつ、つののあるやつ、時どきそれらが争い、また、巨大な翼手竜も空からおりてきて、争いに加わったりした。それなのに、音はしない。静かななかで、音声部分のこわれたテレビのように、激しい争いのドラマが展開された。どこか異様だ。

しかし、壮大なショーではあった。彼と妻はいつまでも見あきなかった。きっと、どこの家庭でもそうしていることだろう。

6

「XB8号はどうした。まだわからんか。核兵器をつみこんだ潜水艦は……」

司令官が叫んだ。声がかれかけている。しかし、答は変りない。

「まだです」

電話のベルが鳴り、だれかがそれを聞き、報告した。

「XB8号の艦長が、特殊ガスの小型ボンベを持ち出していることが判明したそうです。神経性のガスで、人の意志を麻痺させ、どんな命令にも服従させる効力を持っているやつです」

それを聞いて、司令官は思わずすわりこんだ。しかし、なんとか立ちあがりながら言った。

「なんだと。特殊ガスの管理がそんなルーズなことでどうするんだ。こうと知ってたら、出航前に艦長のやつを射殺すべきだったんだ。しかし、もうまにあわぬ。おそらく、計画的な行為だ。艦の乗員たちは、艦長の言うがままだ。どう発展するかわからんぞ。おい、艦長の精神状態のデータを、担当の心理学者に問い合せてくれ。早くだ」

緊張した命令が飛んだ。そのなかで、だれかが叫んだ。

「あ、壁から恐竜の首が……」

「幻影のことなど、気にしている時じゃない」

7

午後の陽ざしが傾くにつれ、恐竜の数もへり、植物のようすも変化していった。
「もう、これでおしまいなのかしら」
妻に聞かれ、男は言った。
「いや、そうじゃないだろう。気温の変化のため、恐竜の時代が終ったということなのだろうさ。ほら、変な形だが、羽毛らしきものをつけた鳥が飛んでいる。ぶかっこうで大型のリスというか、小さな小さな鼻の短いゾウといった感じの動物が歩いている。ホニュウ類の先祖だ。寒さにたえられる種類だよ」
「あら、べつにあたし寒くないわよ」
「いや、この幻の進化のドラマ。それが氷河期に入りかけたということさ」
坊やがそとから帰ってきた。つまらなそうな、さびしそうなようすだった。恐竜がいなくなったからだろう。
「どうした。おなかでもすいたのか。そのへんにお菓子があるよ」
「ううん。まだすいてないよ。小さなお馬みたいなのが歩いていたけど、だれも名前を知らないんだ。パパ、知ってる……」
男は教えるべき知識を持ちあわせていないことを残念に思った。恐竜以後の古生物については、百科事典のどこを引けばいいのか見当がつかなかった。坊やはまたそとへとかけだしていった。
幻の植物はいつのまにか、枝にくねりのある見なれたものとなりつつあった。
「もう、そろそろ夕方よ。これ、いつまでつづくのかしら」
「わからんよ……」
しかし、男の背中にはその時、疑問に答えるかのように、なにかぞっとするものが走った。不安が恐怖へと高まったのだ。

8

「司令官。心理学者から電話です」
「よし、よこせ。……もしもし、なにか判明したか」
「はい、この異常現象について、ひとつの仮説を立てたのですが……」
そう聞いて、司令官はがっかりした。
「なんだ。こっちの知りたかったのは、XB8号の艦長と精神状態についてだったのだ。狂

気の傾向が発見できたかどうか……」
「申しわけありません」
「しかし、まあ、聞いておこう。この変な現象の仮説とやらを」
「簡単にいえば、きわめて大規模なパノラマ視現象じゃないかと思います」
「それはなんだ……」
「人間が死に直面した瞬間、過去の人生をごく短時間のうちに、順を追って見る現象のことです。あっというまに、すべてを回想するとでもいいましょうか。その規模と範囲をぐっとひろげ……」
司令官は小声で聞きかえした。
「人類のパノラマ視現象とでもいうのか」
「いいえ、動植物すべてを含めてのものでしょう。いまの進行のスピードから考えて、この現象の開始した時刻をコンピューターにかけて逆算してみました。それによると、約二十四時間ほど前じゃないかと思います。原始生命で人の目にはふれなかったでしょうが……」
「なんだと。うむ……」
外部には極秘にされているが、それはXB8号が一切の連絡を絶ったころと一致している。
司令官はいやな予感を覚えた。
艦長の狂った頭が、水爆ミサイルを全弾ぶっぱなす決意を、その時刻にかためたためかもしれない。それは、もはやなにものを以てしても阻止できない勢いとなった。また現実に、阻止する方法もない。
その変化を地球上の全生命が感じとった。生命の持つ神秘な敏感さ、それが微妙に感じとり、伝えあい、この壮麗なパノラマ視現象をくりひろげている。全生命がその最後を飾ろうとしているので、かくも鮮明なのであろう。地球が太陽のまわりを、何億回、何十億回とまわりながらたどってきた生命の過去。それがこの一日という、かすかな瞬間に再現されているのだろう。
人間は変に思考する能力があるため、かえってわからなかっただけなのだ。運命はきまったのかもしれぬ。司令官は思った。もはや、いかに努力しても手おくれなのだ。司令官は受話器をにぎったまま、しばらく言葉が出なかった。
部屋のなかがさわがしくなった。どこからともなく原始人があらわれたのだ。男性もいるし、女性もいる。いずれも裸で、かみの毛を長くのばしている。前衛的な若者のヌーディスト大会という感じもするが、もっと素朴で健康的だ。裸の一団を前にし、目のやり場に困る者、じっと見つめる者、品のない冗談を言う者、さわぎは大きくひろがる。
「おい、静かにしろ。電話中だ……」
司令官がどなったが、ちょっとおさまりそうにない。原始人のなかには、火をおこそうと木をこすりあわせているのがある。超近代的なエレクトロニクス設備のそろったこの地下室

との対照は奇妙だった。
　また、石のヤジリで矢を作り、弓につがえる原始人もある。人類の持ったはじめての飛ぶ武器。原始的な火から核兵器へ。矢からミサイルへ。これが文明なのだ……。
　だが、司令官はそんなのに目をとめ、感慨にひたっているどころではなかった。受話器にむかって大声で聞く。
「いまの調子で進むと、現代まであとどれくらいの時間があるか」
「おそろしい計算なので、やる気にもなれません。手をつけても、やり終るまでの時間があるかどうか。……あ、この部屋に長いキバのマンモスが入ってきて……」

9

　陽はかげろうとしている。思いがけぬ日曜日も終ろうとしている。野生の馬が走り、空をツルのむれが飛び、クマがねそべった。
「晩のごはん、なんにしましょう。買物に出かけるひまがなかったので、おかずは缶詰でもあけましょうか。あなた、お酒を飲む……」
　妻が聞いたが、男はふるえながら言った。
「そんなことより、坊やを早く呼んでこい。そのへんでシカでもながめているはずだ」

　やがて坊やが戻ってきた。
「パパ、なあに」
「ここにいっしょにいなさい。うちにいるんだ」
「もうすぐ夜になるからなの……」
「そうだよ。夜になる。長い長い夜にね」
　妻が聞きとがめ、口を出した。
「それ、どういうことなの」
「なんでもない。わからなくていいんだよ」
　そとのたそがれのなかで、古代人どうしが戦っていた。戦う人たちの武器は、めざましく改良され、強力になってゆく。近代戦……。
「もうすぐ今になるんだね。パパ、それから未来があらわれるんでしょ。早く見たいな」
　坊やが目を見開いて言った。
「だまって、もっとそばにいなさい。おまえもだ……」
　男は妻子を強く引きよせた。
　その時、空気をつんざく音がした。それがミサイルの音とは知りようがない。しかし、その音を耳にしてからなにもかにもが超高熱の爆風ですっとぶ、ほんの一瞬のあいだに、男はこの壮大なパノラマ視現象の最後を見た。自分の楽しかった少年時代、悩みの多かった学生

時代、卒業、就職、そして結婚。子供の誕生、やっと自分のものになったこの家、これまでに健康で育ってきたこの坊や……。

危険水域

井上雅彦

「そうだな……」
引退した灯台守も、確かに、こう証言している。「……あれがやってくるのは、いつも今ごろだ……」

まるで、誰かの小説のような事の運びだった。

通信部には特派員など、星の数ほど控えている。チャンスさえあれば、ピュリッツァー賞をものにしようという、いずれ劣らぬ強兵(つわもの)揃い。――そのなかで、なぜ、彼に白羽の矢がたったのか。軍の巡視船をこっそり追いかけて、ことの真相を確かめる仕事が、彼にまわってきたのは、なぜなのか。

旅支度をしながら、彼自身にも、さっぱりわからなかった。――決定が下される直前に局

長のデスクの前で、女版ロバート・キャパを目指しているグラマーなカメラマンとしていた無駄話を思いだしても……である。
「ジェフ・ゴールドブラムでなければ、いけない理由があるんだよ」
目を丸くする彼女に、彼は言った。「『ジュラシック・パーク』の、あの脇役は」
「だけど、あの俳優って――」
彼女は言った。「何を演ってても、ザ・フライに見えちゃうわ」
「そこなのさ」
ここぞとばかりに、彼は力説した。「蝿男でなければならなかったんだ。ゴールドブラムは、おそらく、一九五八年の『蝿男の恐怖』の初代蝿男デビッド・ヘディスンの身代わり……だったのさ」
「身代わり？」
「デビッド・ヘディスンが、かつて出演した、ある映画のオマージュ……としてね」
尊敬にかわりつつある彼女の視線を感じながら、彼は言った。「『ロスト・ワールド』――史上初の恐竜映画さ。……そう考えると実に、スピルバーグらしい趣向だろう」
もちろん、ヘディスンの出ているのは二五年のオリジナル版ではなく、六〇年のリメイク版のほうだ。だが、職場の女性の関心を引くには成功したようである。もっとも、局長の関心まで引いてしまったのは誤算だった。あまり根拠の無い――でも、半ば本気で考えた――

珍説を、あの局長は、じっと聞いていたに違いない。そして……彼を選んだ。
「なんだって、俺が、こんな取材を――」
今――小さなヨットのばかでかいエンジン音を、海霧のなかで聞きながら、彼は局長を呪っていた。あのサイモン・オークランドそっくりの、百貫でぶの局長め。横に、あのグラマーな美人カメラマンが同行していなかったら、とっくに投げだしている取材だぜ。
局長が、映画マニアの彼を選んだ理由――それを、彼がすっかり思い知らされるハメになるのは、問題の海域に入って、まもなくのこと……だった。
「あれがやってくるのは……」
引退した灯台守は、凪いだ海面を眺めながら、話し終えた。「……いつも、今ごろなのだ。去年のカレンダーの印を見ても……」
「まさか」
彼女が、ぶるぶる震える指を突き出した。「あれ……のこと？」
彼と元灯台守とが、一斉に舷側を見る。
「……！」
彼の背筋に寒気が走った。白い海霧の合間に見えるもの。「まさか――あれが！」
元灯台守は、ゆっくり首を振った。「違うよ。……あれは、灯台だ」
灯台守は、パイプをくわえた。「海の上から、元の職場を見るのは、妙なものだが」

それでも、彼の動悸は治まらなかった。
首の長い灯台は、ゆっくり遠ざかる。
海霧は、古いミルクのように、ねっとり濃度を増してきた。そして……温度も。
「寒いわ」
白霧のなかで、彼女が言った。「寒い」
熱い珈琲でも煎れようか。
そう声をかけるより早く、彼女は、白霧のなかに、呑みこまれるように消えていく。
彼女の名を呼ぶ。……長い沈黙。
一瞬、冷気に襲われる。かつて、銀幕の霧のなかに現われた殺人鬼たちの顔が、次々に彼の脳裏を掠める。……イーウェン・ソロンだったか、ウェルナー・クラウスだったか。ロンドンの闇を切り裂く怪人の顔。ライオネル・アトウェル……マイケル・ガウ……。
その瞬間――悲鳴が白霧を引き裂いた。
彼女の悲鳴。まぎれもない恐怖の絶叫が、闇をつんざいたのだ。彼は、足がすくんだ。
彼女は、何を見たのか。まさか。背後に感じる、ただならぬ気配。恐ろしい冷気。
彼は、ゆっくり振り向いた。
そして……彼は見た。
殺人鬼の幻想はおろか、現実の様々な常識も、一瞬にして、粉々に砕け散った。

彼の口から、彼女と同じ悲鳴が、飛びだした。――それは、映画で、フェイ・レイが叫んだのと、同じ叫び声だった。……そう。キング・コングを目撃した時の。
想像を絶する巨大な怪物が――首の長い、前世紀の怪物が――白い海霧のなかで、彼を見下ろしていたのである。

「こんなに近くで見たのは、はじめてだ」
引退した灯台守は、興奮して言った。
「あれは……恐竜の一種だわ」
彼女が言った。「アパトサウルス?」
「昔は、ブロントサウルスといったものさ」
彼が言った。「特に、この映画――『ロスト・ワールド』ではね……」
沈黙は、潮風のように、三人を冷やした。
半透明の恐竜は、白霧のなか、月に向かって、鎌首をもたげた。
「あれが映画だなんて、信じられない……」
女流カメラマンは、ぽつりと言った。「あの霧をスクリーンにして上映してるの?」
「原理は、わからないが」
彼は言った。「あれをやってるのが、かなりの恐竜映画マニアであることは、確かだ」

霧の中で恐竜は、次々と姿を変えた。『キング・コング』の雷竜、『前世紀探検』の剣竜、『恐竜100万年』の暴竜……。
「あれが、やってくるのは」
元灯台守が、言う。「いつも、今ごろなのだ。白霧の出る頃、豪華なヨットで乗りつけては、海に向かって、上映会をやる。最初は、本当の海の怪物かと驚いたが……いったい、どんな道楽者がやってるんだか……」
「しかし、今年は時期と場所が悪すぎるな」
彼が言った。「ぐずぐずしていると、軍の巡視船が駆けつける。その前に、取材開始。謎のヨットの恐竜マニアにコンタクトだ！」

「なあに、とるにたりない発明じゃよ」
どことなくネモ船長に似た老人は、不思議な笑いを浮かべて言った。「この特殊映写装置など。あのデルガド兄弟の造型した巨猿や恐竜……オブライエンやゼーマン、ハリーハウゼン……フィル・ティペットや、デニス・ミューレンの偉大な仕事に比べれば……な」
「いったい、何のために」
彼は、訊いた。「この海で、上映会を？」
「あいつに、見せるためさ」

老人は答えた。「この美しい海に、ひとりぼっちで棲んでいる、あいつにな……」
それ以上の答えは聞けなかった。軍の巡視船がやってきたのである。謎の老人のヨットは、巡視船の警告を無視して、逃走した。危険水域をどこまでも。それから、いくらも時間は経っていなかった。軍の監視と周辺諸国の猛反対のなか、核実験が強行されたのは。
例の老人が軍に拿捕され、監禁されているという噂を、彼が耳にしたのは翌晩だった。確かめようもない。闇の淵から、海草と放射能をしたたらせた巨大なものが這いあがり、基地を襲撃した、まさにその夜だったから。

過去の翳

豊田有恒

国道から左へ折れる地点で迷ったが、目標の小学校は、すぐにわかった。清戸迫町の教育委員会がたてたものらしい、案内板があるから、ここにまちがいない。
おれは、車を降りて、助手席のほうにまわった。ドアをひらいてやると、由紀子は、ゆっくりと降りてきた。わざと、レディのような身振りで、車から降りたので、おれは、おもわず微笑んだ。すくなくとも、そのゼスチュアにはふさわしくない恰好だったからである。おれたち二人とも、ほこりだらけのひどい服装をしている。そうなることが判っていたので、ジーンズのラフなスタイルで、でかけてきたのだが、由紀子の頬っぺたには、泥までついていた。
「もう四時半だ。今からでも、開けてくれるかな？」
おれは、由紀子の手をとって、ひきずるように歩きはじめた。小学校の校庭には、もう生

徒の姿はなかった。宿直室らしいところへまわると、中年の人がまだ残っていた。
「東京の仙波と言います。遅くなってすみません。今からでも古墳をあけてもらえますか？」
「ああ」
用務員らしい中年の人は、そう答えてから、鍵束を持って立ちあがった。
清戸迫古墳を見学したいという申請は、すでに出してあり、そのＯＫも貰っている。しかし、途中あちこちで時間をくってしまったので、予定時刻の三時をとっくに過ぎてしまっていた。
校舎の右側の崖のところに、錆止めの赤い塗料をぬりつけた鉄の階段があり、その上のほうに踊り場のような形で、小屋がけした建物があった。
おれは、用務員のあとから、階段を登っていった。登りつめたところにある建物は、鉄筋コンクリートで、重々しい鉄扉がついている。合鍵でキイが開かれるのを待ちかねて、おれたち二人も、なかに入った。望みの装飾壁画と、おれたちとのあいだには、無情なガラス壁があった。早くから知られていた九州の装飾古墳が、ほぼ全滅状態になっているのと比べると、いちはやく保存の手を打ったわけである。ガラス壁のむこうには、壁画の剝落をふせぐため、加湿器が置かれてあった。
九州の王塚や竹の塚の装飾壁画が、なまじ早く知られていたため、もはやデザインすらも

判らなくなりかけているのと比べ、この清戸迫は、小学校の工事のとき、偶然に発見された横穴であるから、適切な処置が加えられている。九州では、絵がよく判るように、撮影のたびごとに、壁画に水をぶっかけたというような、乱暴な話も伝わっている。

その点、この装飾古墳は恵まれているわけだが、すくなくとも、おれたち二人の観賞の妨げにはなっていた。ガラス壁に水滴がこびりついて、壁画がよく見えないのである。

「スポット照明は、二分以内」

用務員は、言葉すくなに言いながら、スイッチに手をかけた。二分のあいだに、よく眺めておけというつもりらしい。スポットライトをあてれば、玄室内部の温度が上昇する。壁画の保存のためには、観賞の不便も仕方のないことかも知れない。

「スイッチを入れてください」

おれは、叫んだ。スイッチが入れられると、玄室の奥の壁画が、はっきり浮かびあがった。巨大な朱色の渦状文があり、その下に、線画のようなタッチで、騎馬の人物が描かれている。突然変異的な例外ともいうべき、高松塚の壁画などと比べると、はるかに稚拙な手法である。

「なるほど、アンモナイトだわ」

由紀子が、うなずいた。

この巨大な渦状文は、ふつう太陽をデザイン化したパターンだと、言われている。しかし、九州では、すべて同心円で表わされている太陽が、なぜ東北に限って、渦巻きになっている

のか、説明がつかない。

おれと由紀子は、この渦状文を、アンモナイト化石をデザイン化したものだと、信じている。かなり大胆な仮説だが、おれたちは、本気だった。

実際、おれと由紀子は、古代史の研究会のなかでも、むしろ異端のほうだった。まえに、東北地方の古代遺跡めぐりの行事のとき、おれたち二人だけは、いわき市の大久（おおひさ）町の大久川流域を、目的地に加えるように主張し、仲間たちの冷笑を買ったことがある。おれたちが参加している古代史のサークルは、せいぜい縄文時代くらいまでの遺跡しか、対象としていない。そのとき、由紀子は、古生物学者として大久川流域の重要性を説いたが、古すぎるという理由で、仲間たちの誰一人、関心を示してはくれなかった。

いわき市の大久川流域では、フタバスズキリュウの化石が発見されている。当時高校生だった発見者の鈴木直氏は、いま古生物学者としての道を歩んでいる。一人の高校生が、全長八メートルの日本初出のクビナガリュウの化石とであい、発見者の特権として、その学名に名をとどめ、やがて古生物学を志ざす。これは、ひとつのロマンの世界とすらいえる。

すくなくとも、おれと由紀子は、この重大な発見地を見逃がせない気持だった。しかし、仲間たちは、冷淡だった。古代史のサークルという会の性質上、古墳や神社仏閣の見学を、主たるイベントとしている。確かに古すぎると言われれば、古すぎるにちがいない。縄文遺跡までさかのぼっても、せいぜい七千年。それに対して、フタバスズキリュウは、七千万年

まえの化石である。タイムスケールが、一万倍もちがうわけである。

おれと由紀子は、とうとう、会の公式行事をボイコットしてしまった。べつだん、おれたちが、行かなければならない理由も見当らない。折からの古代史ブームで、会員が増えている。会の行事は、バス二台を仕立てて、とどこおりなく済んでしまった。

白河市の近くの泉崎古墳や、このいわき市の中田古墳など、一度みたいと思った目的地も、行事のスケジュールに入っていたが、おれたちだけは、後日ふたりで行くことにして、意地を張って参加しなかった。そして、その機会が、きょう訪れたわけである。

おれは、スポットに照らされた壁画を、もう一度みつめなおした。中央に巨大な渦状文があり、それに接して、古墳時代人らしい大きな人物がいて、左手をあげている。その右に、やや小さな騎馬人物像がある。渦状文の左には、びっくりしたような身ぶりの人物がいて、そのうしろに犬らしい動物がいる。

これは、アンモナイト化石が、発見されたときの様子を伝えているのではないだろうか？

頭足綱四鰓目は、絶滅種として、いまに子孫を伝えていない。しかし、その化石は、日本では、すくなくとも千年も昔から、知られている。菊石、カボチャ石などと呼ばれるのが、それである。ヨーロッパでは、トグロを巻いた蛇に似ていることから、蛇石と呼ばれている。白亜紀後期のアンモナイト・パキディスクスは、直径二・五メートルにも達する。このアンモナイトの近縁の種であるオウム貝――ノーチラスは、いわば生きている化石である。

古代人にとって、渦状文をもつ石――つまり、アンモナイトの化石は、なにかの凶兆あるいは吉兆をあらわす、呪術的なものだったのではないだろうか？

そう考えると、この壁画も、うまく解釈できる。

中央にいる貴人は、アンモナイト化石を発見して、騎馬の武人に、人を呼びにやらせようとしている。そして、左手の下人は、単純に驚きを表わし、そのまた後ろで、犬が吠えている。そういう状況を絵にしたのだとも考えられる。

そんなことを考えているうちに、おれの目のまえで、スポットライトが消えた。あざやかな朱一色の壁画は、おれの目の虹彩のなかで、しばらく残像となって輝いていた。

泉崎や中田などの装飾古墳と比べると、はるかに保存状態もよく、収穫というべきだった。

おれたちは、横穴式の古墳をでて、車のところに戻った。

「すくなくとも、白水の阿弥陀堂を見るより、有意義だと思うわ」

由紀子は、車のシートに坐りこんでから、ぽつりと呟くように言った。

いわき市にある白水の阿弥陀堂は、古代史サークルの遺跡めぐりの見学コースに加えられた重要文化財である。藤原の基衡の女が、亡夫である岩城の則道の冥福を祈るため建立したものである。平安後期の特徴をよく留めている。白水という地名は、平泉の泉という字を分解したものであり、平泉の中尊寺を手本としていることが判る。阿弥陀堂の建物は、明治三十五年に国宝に指定されている。

しかし、古生物学的にみれば、この装飾古墳のほうが、はるかに重要といえる。

アンモナイト化石をデザイン化したと、おれたちが解釈している渦状文の壁画は、福島県下にしか分布していない。そして、その装飾古墳のある地域は、日本列島では珍しい中生代白亜紀層のある地帯と、完全に一致する。

一見すると突飛な解釈のようだが、おれたちに言わせれば、それなりの根拠もある。装飾古墳というのは、九州と東北にしかない。例外的な高松塚古墳を除外すれば、九州から、近畿、中部、関東地方をとびこえて、いわゆる海上の道から、東北地方に伝播したとみることができる。しかし、九州では、同心円で表現されている太陽が、東北では渦状文になっているなど、デザイン・パターンのうえの相違もすくなくない。渦状文は、ほんとうに、太陽をデザイン化したものだろうか？　そのあたりも疑わしくなってくる。

おれは、車を走らせながら、あれこれと考えていた。

由紀子は、古生物学の研究者である。現在、R大学の大学院で、研究している。その由紀子が、たまたま古代史に興味をもったのは、野尻湖の発掘に参加してからだった。野尻湖では、二万人という素人のボランティアが参加して、日本古代を発掘する作業が行なわれたが、さまざまな収穫があった。

オオツノシカやナウマン象の化石には、明らかに人為的な傷痕があった。それは、とりもなおさず、二万年前の原日本列島人が、これら大型哺乳類を狩りの獲物とし、それらの絶滅

に一役かったことを証明している。

由紀子が、古事記や日本書紀に目を通すようになったのは、それからだった。

そのころ、日本の古代史学界は、折からの邪馬台国ブームによって、よりどりみどり切りとり自由のような状態になっていた。

ブームが過熱して、妙な方向へ向かいはじめた。出版ブームも、はじめのうちは、在野の良い研究を吸いあげるという功績をもうけたが、そのうち、邪馬台国で一発当てようという傾向さえ現われてきた。

おれと由紀子は、そういう状態のなかで、地道に日本古代史を勉強した。

おれは、ルポライターである。動物学にちょっぴり興味があり、しかも古代史にも関心があった。

おれは、市内を走りながら、あれこれと考えつづけた。いわき市は、日本最大の面積をもつ市である。合併によって成立した市であるから、いくつかの中心地区を持っている。国鉄の平（たいら）駅のあたりが最大の繁華街だが、しばらく走りつづけると、完全に市街地からでてしまったようになり、暗い国道を通ることになる。さらに走りつづけると、市街地のようなところにでて、「いわき市」という標識にでくわす。つまり、そこまで来ても、まだ、いわき市を通りぬけていなかったことになる。

おれは、かすかな爆音のようなものを聞いた。飛行機のものだろうと思ったが、そのとき

は、べつだん気にもしなかった。そして、帰路を急いでいるため、前車との距離をつめたところだった。

すさまじい音響と同時に、前車が、ブレーキライニングの悲鳴をあげて急停止したのは、まさに、そのときだった。おれは、まっしぐらに、そのリアバンパーめがけて、突っこんでいった。おれは、夢中で、ブレーキペダルに足を突っぱった。咄嗟の判断がよかったのだろう。おれの車は、かなり速度をおとして、前車のトランクルームに吸いこまれた。

さきほどの大音響と比べると、きわめてささやかな激突音が起こり、おれの車は前車に追突した。

おれは、とっさに、車からとびおりた。たとえ、どのような弁解をしようと、追突したほうに非があると、見なされてしまうにちがいない。

おれが、前車の運転席をのぞきこんだとき、由紀子も、車をおりて、すぐそばに来ていた。

そのとき、おれは、十台ばかり前方をみて、呆然として立ちすくんだ。そこには、飛行機の尾翼のようなものが倒立していた。あきらかに、飛行機の墜落事故が起こったにちがいない。だが、そう見えたのは、一瞬のあいだだけであり、前方では、すぐ火の手があがった。

「上を見て！」

由紀子がわめいたのは、そのときだった。右手のはるか上方に、傾きかけた巨大なものが、のしかかるように、そびえたっていた。五十万ボルトの送電塔である。さきほどの飛行機は、

そこに激突したにちがいない。

鉄塔は、きゅうに傾斜をました。まるで、スローモーション・フィルムで見るように、なかほどから二つに折れ、こちら側に倒れかかってくるところだった。

「逃げるんだ！」

おれは、叫んでから、走りだした。車列の左側にまわりこみ、由紀子の手をとって、ものの五、六歩も走ったろうか。そのとき、すさまじいショックが襲い、おれの目の前に五十万ボルトの超高圧電流の火花が炸裂した。

それから、どれくらい意識を失っていたか判らない。

目をさましたとき、おれは、海岸に倒れていた。打ちよせてくる波が、おれの右手を洗っていた。あるいは、海水の冷たさのために、意識をとりもどしたのかもしれない。

おれは、のろのろとした動作で、上半身を起こし、あたりを見やった。すぐ近くに由紀子の姿を認めたので、体をひきずるようにして近づき、そっと頭を抱えおこした。おれの腕のなかで、由紀子の髪が風にあおられて、しなやかに舞った。

「由紀子！」

呼びかけると、彼女は、かすかに薄目をあけ、それから、あたりを見まわそうとするかのように、頸をねじまげてから叫んだ。

「ここは、どこなの？」

「事故にあったらしい」

おれは、それだけ答えてから、あらためて、あたりを見まわした。近くには、おれたち二人の車は、見あたらなかった。あるいは、事故のショックで、二人とも車からはなれたところに投げだされたのだろうか？　おれたちが辿っていた国道は、海岸に近いところを走っている。もしかしたら、車だけ、上の国道のところに残され、二人とも崖下の砂の上に放りだされたのかもしれない。

おれは、あたりを見廻した。人家は、ひとつも見あたらなかった。

とつぜん、おれは、妙なことに気づいた。

あたりは、眩しいばかりの陽光に照らしだされている。おれたちは、夜の国道を走って、東京都内へ戻ろうとしていた。してみると、この海岸で、夜のあいだずっと、気絶していたことになる。

「暑いわ」

由紀子は、そういって、ジャンパーを脱ぎすて、だしぬけに立ちあがった。おれも、立ちかけながら、早春の陸奥にふさわしくない気温に気づいていた。シャツ一枚になってみると、ちょうどぴったりの暑さだった。

「きれいな海岸だわ」

由紀子が言った。おたがい無事だったことを、喜びあうべき場面だが、それらしい感想は

でてこなかった。

「なるほど、きれいな海岸だ」

おれは、うなずいてから、あたりの様子に、ちょっとばかり違和感をもちはじめた。

いわき市をでぬけて、国道六号線を南下してきた。たぶん、勿来の関のあたりに、さしかかっていたにちがいない。勿来海岸は、海水浴場として有名である。このあたりから、鹿島にかけて、鹿島灘に沿って、平磯、大洗、大竹、下津など、有名な海水浴場が続いている。しかも、おれは、以前には、勿来海水浴場に、一度きたことがある。もし、これくらい俗化していない場所があれば、とっくに第一級の穴場として紹介されているはずである。

「きれいだわ」

由紀子は波打際に立ったまま呟いた。たしかに美しい浜辺である。あたりには、海浜小屋のあとも、コーラの空カンも、まったく見あたらない。打ちよせる波すらも、コバルトブルーの透明度をたもったまま、砕けて白い飛沫をとばしている。

一方は、岬のような岩場になっていて、そこで砂浜がとぎれている。

おれは、海と反対のほうを見やった。そこには、崩れかけた岩石が露呈していて、電柱ひとつ見あたらなかった。十メートルばかり浜より高くなっているが、自然のままの景観になっていた。

由紀子は、かがみこんで、貝をひろいあげた。砂浜には、砕けた貝殻が、打ちよせられて

いて、貝のかけらと砂とで、きらきらした真珠色の光沢が、つくられていた。きょう日、たいていの浜辺では、貝拾いには、たいへんな忍耐が必要だが、ここでは、完全なままの貝殻を拾いあげるのも、それほど困難ではなさそうにみえた。

「三角貝(トリゴニア)！」

　由紀子は、拾いあげた貝を手に持ったまま、教えられたセリフを口にするかのように、音節ごとにはっきり口にして言った。

「三角貝(トリゴニア)だって？」

　おれは、由紀子の手から、その貝をひったくるように、もぎとった。おれの手に、ハマグリでもアサリでもない、異様な二枚貝の半片があった。

「三角貝(トリゴニア)が、いるわけはないわね」

　由紀子は、熱に浮かされたような目付きで、おれを見まもった。

　三角貝(トリゴニア)は、現生しない二枚貝なのである。日本では、中生代ジュラ紀、白亜紀の化石として出土した例が多く、約八十種が知られている。ごく近縁の種(しゅ)が、オーストラリアのグレート・バリア・リーフに生残っているので、新三角貝(ネオトリゴニア)と呼んでいるが、もちろん、中生代に繁茂した種とは、異なるものである。

　古生物学徒である由紀子には、それが判っているのである。だからこそ、にわかには信じられない気持なのだろう。

「三角貝(トリゴニア)だ」

　おれは、断言した。三角貝のなかでも、岩手県から出土しているプテロトリゴニア・ホッカイドアナのような種類である。学名のプテロは、翼の意味であり、貝殻の両端が翼のように張りだしているため、そう命名されたのである。

　おれは、海岸にかがみこんで、貝拾いをはじめた。べつだん、なんの忍耐も必要なく、おれは、次のサンプルをひろいあげた。

　水道のホースを、ぐにゃぐにゃに巻きつけたような貝だった。常識的に考えれば、オオヘビガイということになるだろう。しかし、それは、オオヘビガイではありえない大きさを持っていた。おれが持っている断片だけでも、十数センチの大きさがある。もし完全な標本なら、五十センチを越えていたろう。

「ニッポニテス？」

　おれは、その貝の名を口にしてしまった。

　古生物学マニアなら、当然それしか思いあたらない解答である。

　ニッポニテスは、アンモナイトの異常巻の化石である。整然とした渦状文のアンモナイトは、ジュラ紀の産物として有名であるが、まったく秩序を無視したぐにゃぐにゃの巻き方の化石も発見されている。発見された国名をとって、ニッポニテスと命名されているが、はじめのうちは、あまりにも異状な巻き方のため、病気の個体が化石として残ったものと解釈さ

れたほどである。しかし、他にもたくさんの標本が発見されるようになり、アンモナイトが、そういう形で特殊化していったのだと認めないわけにはいかなくなった。

ニッポニテス・ミラビリスは、北海道三笠市で発見されている。三笠市の中生層では、最近、ティラノサウルス属に分類される、日本最初の肉食恐竜――ミカサリュウの化石が、発掘されたばかりである。

アンモナイトは、絶滅する寸前の白亜紀後期に、およそ法則性を無視した畸形的な亜種ニッポニテスを生みだしたことが、確認されたわけである。

おれと由紀子は、二つの証拠をつきつけられ、しばらくのあいだ、海岸で棒立ちになっていた。

はるか沖合では、鳥のようなものが宙を舞っていた。しかし、それは、ふつうの鳥のような飛びかたではなく、海中の魚を狙っているようだった。

遠すぎるので、確認する方法はなかったが、おれには、それが、プテラノドン――中生代白亜紀の翼竜のように思えてならなかった。

おれと由紀子は、どちらからともなく歩きはじめた。

海と反対の崖のほうへむかうと、斜面のなだらかなあたりに、ひとつの道が刻まれていた。

その道は、あきらかに人為的なものであり、上方にむかっていた。

おれは、海岸の丘陵の上に、国道六号線があることを期待しながら、砂に足をとられながら登っていった。

おれは、丘陵の上で、呆然と立ちすくんだ。目の前には、まったく人手を加えていない自然が、はてしなく連なり、国道をおもわせるものは、なにひとつ見あたらなくなっていた。

目のまえには、羊歯(しだ)に似た、人くらいの背丈の草が生いしげり、はるか彼方に、森があった。

「ここは、どこなんだ？」

おれは、ひとつの問いかけを試みた。それを知らないかぎり、一歩も先へすすめないような気がしたからである。

「こんな植物相(フローラ)は考えられないわ」

由紀子も、おれの傍らに立ちどまり、前方を見つめたまま、上ずった声をあげた。おれは、うなずいたきり、黙りこんでしまった。おれは、あたりの様子を、くわしく観察した。羊歯のあいだにまじって、小灌木が生えている。それは、裸子植物――ソテツ、イチョウの類らしい。そして、むこうの森のあたりには、太い幹を直立させて、針葉樹らしい大木が峙(そばだ)っている。

「白亜紀後期……？」

由紀子は、呟くように口にしてしまってから、はげしく頭(かぶり)をふった。あまりにも信じられないことなので、なんとかして、否定しさろうとしているのだろう。

だが、おれも、ちょうど、由紀子と同じことを、口にしようとしたところだった。

森を形づくっている針葉樹は、メタセコイアやナンヨウスギの一種のようにみえる。それらが地球上に現われるのは、中生代白亜紀以降のことである。そして、おれたちは、白亜紀以降には存在するはずのない、三角貝やアンモナイトを、化石としてではなく、貝拾いの獲物として、たった今ひろってきたばかりだった。

だが、もしかしたら、なにかのまちがいかも知れないと、思いなおしたりしてみた。メタセコイアもナンヨウスギも、ともに現生している植物である。

鹿島灘沿岸は、日本の代表的な中生層をなしている。それが広く知られている証拠に、国民宿舎に白亜紀荘という名がつけられたりしている。

もしかすると、おれたちは、その種のプレイランド、あるいは、植物園に迷いこんだのではないだろうか？　そう考えてみれば、辻褄のあわないことではない。

なにしろ、すぐ近くの常磐ハワイアン・センターには、ハワイがあるくらいだから、中生代がそっくり復元されていたとしても、なんのふしぎもない。

おれは、なかば冗談めかして、自分を納得させようとつとめた。だが、まもなく、おれは、その説明が、気休めにしかならないことに気づいた。

あたりには、人手を用いた形跡がまったく見あたらない。もちろん、入園者の通路すらない。

さきほどの道は、羊歯の叢みを三つにわけて続いている。しかし、それは、踏分道のようなものにすぎない。

おれと由紀子が、無言のまま、立ちすくんでいると、突然、かん高い声が湧きおこった。キジの鳴き声のような感じだが、はるかに大きな声である。

それから、やや遅れて、羊歯の叢みをかきわける音が、近づいてきた。

「なにかの群よ、隠れなければ」

由紀子にうながされて、おれは、夢から覚めたように、叢みのなかに這いこんだ。

ざわざわという音が近づいてくる。羊歯のあいだから、踏分道をかけていくものの姿が見えた。

尾を水平にのばし、二足歩行して、かなりのスピードで駆けぬけた。

「恐竜だ！」

おれは、小声でささやいた。

「しっ、黙って！」

由紀子は、口に指をあてて、ささやきかえした。

おれは、目のまえをかすめて、走りさったものの正体を、ぼんやりと考えてみた。

体長は、二メートル半くらいで、かなり大きな頭部をもち、立った高さは、ふつうの人間くらいだった。

しかし、あっというまに走りすぎてしまったため、おれには、ほとんど、なにも判らなかった。五、六頭はいたようだが、正確なことは、なにひとつつかめなかった。

「オルニトレステスのようだったが」

おれは、かなり思いきった推測を、口にだしてみた。

おれの古生物学の知識のなかには、あの大きさに相当する恐竜は、せいぜい二、三種しか思いうかばなかったからである。

ふつう、恐竜というのは、巨大なものだと思われがちである。したがって、専門の研究者でない、おれみたいな古生物マニアは、最大の陸上捕食獣であるティラノサウルスや、七十八トンという地上最大の体重をもつブラキオサウルスに興味をもつことはあっても、人間なみの大きさの恐竜には、ほとんど関心がなかった。

おれが、かろうじて想いだしたオルニトレステスは、「鳥の掠奪者」の意味の学名をもつ小型恐竜である。大型恐竜の卵や、始祖鳥などを捕食していたと考えられるため、その学名がついたのである。オルニトレステスは、生態型(エコタイプ)からいえば、いまのハイエナのような存在だったのかもしれない。

「ちがうわ」

由紀子は、おれの根拠のない推測を、一言のもとにしりぞけた。

そういえば、オルニトレステスは、もっとヒョロ長い首をして、小さな頭と団扇(うちわ)みたいな

大きな手をもっている。

「コンプソーグナトス、ストルシオミムス？」

おれは、乏しい知識のなかから、人くらいの大きさの恐竜の名を、たてつづけに並べてみせた。しかし、由紀子は、首を振るばかりだった。

おれたちは、あの動物の走りさったあとの踏分道に戻った。あれが何であれ、この踏分道が、動物たちのお気に入りの道路として使われていることは、ほぼまちがいない。

「これから、どうしよう？」

「海のほうへ行ったわ。戻ってみようかしら？」

由紀子は、言った。羊歯の叢みからおどりでた動物たちは、おれたちが来たほうに走りさっていった。今あとを追えば、海岸にいるはずである。

一瞬、おれの心を、恐怖がかすめたが、好奇心が勝ちをしめた。

おれたちは、そろそろと用心ぶかく、もときた道を戻りはじめた。

さっきの崖のところに来たときは、かなり慎重に振るまった。十メートルばかり下の浜辺をそっと見おろしてみたが、そこに、かれらの姿はなかった。

安心して波打際に下りてみると、三本指の足痕が、点々として続いていた。足痕は、岬になった岩場を迂回するような形で、上へむかっていた。

おれたちも、浜辺をはなれて、岬のほうへ岩場を登りはじめた。

登りつめたところで、おれは、立ちどまった。岬につづく岩の割れ目に、おれたちの車を発見したからである。車は、割れ目に転落していた。ヘッドライトが割れ、右前輪が宙に浮いている。頭から逆さに突っこみ、割れ目にはまりこんだような形で、それなりに安定している。右のドアは、岩層に密着しているから、開くことができないが、左のドアは、岩角から身を乗りだせば、開けることができる。

「持ちだせるものをとっていこう」

おれは、岩角にとびうつり、左のドアを開きながら、由紀子のほうを振りむいて叫んだ。さきほどの動物にであってから、身の危険を感じていたので、なにか武器になるものを、とってこようと思ったのである。さしずめ、ジャッキ・ハンドルなどは、頃合(ころあい)の得物になるにちがいない。

おれは、ハードトップのドアに、体重を乗せかけて、安定を確かめてから、車のほうに身を移した。

車内をかきまわしてから、トランクのほうに、体をずらしていき、おれは、いろいろなものを持ちだした。

もとの岩場に戻ったとき、おれは、持ちきれないくらいのものを抱えていた。おれは、用心のいいほうだから、いろいろなものを、車のなかに持ちこんでいる。

カメラを忘れた場合に備えて、中古で買ったバカチョン・カメラを、車専用にグローブ・

ボックスに放りこんであるし、ガス欠に備えて、スポイトとポリタンクを、トランクに備えている。雪道の脱出用のタイヤチェーンも、常に積んでおくし、発煙灯や懐中電灯は、それぞれ二組ずつ用意しておく。

おれは、そういったガラクタを運びだすついでに、ガソリンタンクから、ポリタンクにガソリンを移してくることを忘れなかった。

由紀子は、おれのものものしい扮装に、なかばあきれていたが、べつだん文句をつけることもなく、そのまま進みはじめた。

おれたちは、実際は、車からそれほど離れてはいなかったのである。せいぜい五十メートルくらいだろう。あのとき、車を降りたときの間隔そのままになっていた。

岬を越えて、むこう側に降りかけたとき、おれたちは、すさまじい場面にでくわした。そのあたりも砂浜になっている。そして、その砂浜には、全長十メートルばかりの巨大なものが乗りあげていた。四つの鰭足(ひれあし)をもち、長い首をくねらして、うごめいている。そして、そのまわりには、さきほど、おれたちのまえを駈けぬけた二足歩行の動物が、ひしめいている。

かれらは、身長に不似合な大きな頭と、ピンポン玉のような眼をして、巨大な海棲動物のまわりを、敏捷に動きまわっていた。宙に浮いた前肢には、白く湾曲した武器のようなものを持っていた。かれらは、その武器を、なんとかして、巨大な動物の腹に突きさそうとしているように見える。しかし、関節の形状のためにちがいない、下から突きあげるような動作

しかできないらしく、白い武器は空を切るばかりである。

そのうちの一頭は、岩場の上から、石を投げつけている。しかし、両手で抱えた石を、落とすだけだから、有効な打撃とはなっていない。

考えてみると、オーバーハンド・スローで物体を投げられるのは、ホモ・サピエンス――人類だけの特技である。ゴリラやチンパンジーですら、アンダースローでしか、物を投げられないのである。

人間なみの大きさの六頭は、巨大な海竜を仕留めようとしているのだった。

六頭の素姓のほうは、おれには、判らないままだったが、巨大な獲物のほうは、おれにも、おぼろげながら判った。

「クビナガリュウ、いや、もっと、はっきり言ってしまえば、フタバスズキリュウにちがいない」

おれが興奮して叫びたてると、由紀子は、はじめてうなずいてから、左手の崖のほうを目で示した。

そこには、五頭ばかりの死体が転がっている。それらは、体長一メートルに足りないくらいで、あきらかに撲殺されたものであった。フタバスズキリュウの幼体らしい。

「魚竜（イクチオサウリア）の類では、卵胎生であることが確認されているけれど、首長竜では、よく判っていなかったわ。もし、かれらが卵生だとすれば、産卵場所が必要なはずよ。ネッシー・クビナガリュウ説でも、その点が、いちばんの弱点だった。クビナガリュウは、ノトサウルスと同じように、陸上にあがって卵を生んだにちがいないわ」

由紀子は、説明してくれた。おれは、うなずきながらも、ひとつの疑問にとらわれた。

「判った。ここが、フタバスズキリュウの産卵場所にちがいない。だが、あいつを包囲している六頭は、いったい何者なんだ。かれらは、共同で狩りをしているんだ。知能の低い恐竜に、そんなことが、できるはずがない。もし、それができるとすれば、リカオン――ハンティング・ドッグに近い生態型（エコタイプ）の恐竜が、過去に存在したことになってしまう」

おれは、叫びつづけた。

かれら六頭は、明らかに、共同して巨大な獲物にたちむかっている。しかも、その前肢は、湾曲した武器らしいものを、握りしめてすらいるのだ。それを、どう説明すべきか、おれには、判らなかった。

かれらは、いったい何者なのだろう？　あの頭骨は、すくなくとも三十センチはある。しかも、前方視に適したピンポン玉のような眼球を持っている。体の大きさで比べれば、鳥類の駝鳥なみの大目玉である。視覚が発達しているということは、大脳の前頭（フロンタリス・マヨール）葉も発達しているということである。

「リカオンって、言ったわね。でも、それは、違うわ。あの体型は、すくなくとも、捕食獣じゃない。哺乳類型の爬虫類では、すでに古生代に、いろいろなタイプが現われている。そ

れらは、現在の中型捕食獣のような生態だったと考えられているわ。ディキノドンのような捕食獣が、それよ。ソ連で発見されたイノストランケビアは、復元図を見るかぎりでも、サーベル・タイガー――スミドロンに、そっくり。両脚を左右に開いて、お腹を地につけて、這いずるようなポーズをしているけれど、もし毛をはやして復元すれば、サーベル・タイガーとしか見えない。つまり、イノストランケビアは、サーベル・タイガーの先行種（アンテシーデント）なのよ」

由紀子が説明するあいだも、目のまえの闘争は、続けられていた。小型の六頭は、敏捷に動きまわり、手にもった武器を、巨大な獲物の腹へ突きさすことに、成功しはじめていた。フタバスズキリュウは、名のとおりの長い首をくねらし、狩人（ハンター）たちを撃退しようとするが、アンモナイトですら噛みくだくという鋭利な歯も、いたずらに空を切るばかりだった。

眺めているうちに、おれは、狩人（ハンター）が手にしている白い武器が何であるか、判りはじめてきた。それは、なにか巨大な動物の肋骨のようである。もしかしたら、それは、フタバスズキリュウ自身の肋骨かも知れない。そうだとすれば、皮肉な話である。

横合の一頭が、白骨の剣を突きだして、まっしぐらに走りよった。さほど鋭利とは思われない切先が、たるんだ腹部にずぶずぶと吸いこまれ、鮮血をとびちらせた。

「共同で狩りをしているんだ。かれらは、リカオンのような肉食獣の先行種では、ないだろうか？」

おれは、由紀子に否定された、さきほどの問を、むしかえした。

「ちがうわ。待ってよ。そう、オーストラロピテクスの先行種とみるほうがあたってる」

「待ってくれ、オーストラロピテクス――つまり、われわれ人類の先祖ということになる。人類のような生態型（エコタイプ）をもつ種（スピシー）が、恐竜時代に……」

おれは、絶句した。

おれが沈黙を守っているあいだに、戦いの帰趨は、急速に定まりはじめていた。

白骨の剣を突きさされた海竜の動きが、目にみえて緩慢になってきた。時折、鎌首をもちあげて、うるさそうに、狩人たちを追いはらおうとするが、すでに、その力は失（う）せかけている。長い鎌首は、伸びきって力を失い、ぱたりと砂浜におちる。もはや、敏捷な襲撃者をとらえるだけの力を残していない。

死闘は、すでに終焉に近づきはじめていた。狩人たちが背にとびのり、自由に剣をふるっても、もはや、海竜には反撃する力がなくなっていた。

一頭が、スズキリュウの背にとびのり、白骨の剣でえぐったところに口をつけ、鮮血をすすり、肉を噛みちぎった。おそらく、その一頭が、群（バンド）のボスなのだろう。それを合図のように、他の五頭も、それぞれ、犠牲（いけにえ）に群がり、肉を食いちぎりはじめた。

海竜の頭部と尾が、せりあがってくるが、それは、もはや断末魔のあがきに等しい。巨大な獲物は、生きながら食われているのである。

　そのとき、きぇーっというような、異様な咆(ほ)え声が湧きおこった。そして、十頭ばかりの別の狩人(ハンター)が現われた。新手の狩人は、なかば死体と化した海竜のそばに進んできて威嚇の声をあげた。この巨大な獲物の屠殺者である六頭は、とびさがって、身構えた。

　明らかに、二つのグループは、異なる群(バンド)に属している。新手の群は、六頭の狩人(ハンター)が仕留めた獲物を、横どりするつもりらしい。

　新たな群のほうも、同じ種類である。二つの群に分かれて戦っているところをみると、かなり知能がたかいらしい。おれの知るかぎりの、いかなる恐竜の復元図とも、まったく違っていた。

「最初の連中は、獲物をとられてしまうぞ」

　おれは、呟いた。どうやら、壮絶な戦いを見まもっているあいだに、はじめの連中に感情移入してしまったらしい。

「かれらと接触できないかしら？」

　由紀子が、妙なことを言いだした。おれは、それをきいて、とんでもないことを、考えついた。

「はじめのやつらを助けてやったら、どうだろうか？」

「えっ？」

　由紀子は、訊きかえした。

「つまり、助けてやって、恩を売るんだ。そうすれば、やつらと接触できる」

　おれは、アンドロクレスと獅子みたいなことを、考えていたのである。

「大丈夫なの？」

「ああ、こっちには、これだけ、武器がそろっている」

　おれは、背中のナップザックを降ろして、なかから、コーラの空カンをとりだし、ポリタンクのガソリンをうつし、ティッシュペーパーをひねってさしこみ、ライターで火をつけて、放りなげた。即製の火炎ビンは、新手の群のなかにとびこんだ。

　あたりが火の海になり、すさまじい咆え声が湧きおこった。

　おれは、岩場の上に立ちあがり、手頃な石をつかんで、投げつけはじめた。草野球の経験が、おもわぬところで役にたち、新手の狩人たちに命中しはじめた。

　そのときになって、かれらは、ピンポン玉のような目玉を、こちらに向けた。おもいがけぬ伏兵に、はじめて気がついたのである。かれらは、当面の敵をほうりだして、こちらの岩場に登りはじめた。

「来るわ」

　由紀子は、不安そうに、おれのうしろにかくれた。おれは、ジャッキ・ハンドルをもって身構えた。おれなりに自信もあるつもりだった。

　かれらは、体型からみて、平地の恐竜にちがいない。木のぼりを得意とするヒプシロフォ

ドンなどとは、あきらかに違っている。
はたして、かれらの岩のぼりは、決して器用とはいえない身振りだった。前肢で岩角をつかんで登ってくる様子は、なんとなく不ざまな感じだった。
おれは、先頭の一頭のまえに、ジャッキ・ハンドルを叩きつけた。そいつは、頭蓋を割られ、すさまじい悲鳴をあげて転落していった。
つづく一頭めがけて、由紀子が、ひとかかえもある岩を、いったんさしあげてから放りなげた。そいつは、胸で岩を受けとめた形で、そのまま仰むけに落ちていった。
はじめのグループが、行動を起こしたのは、そのときだった。海竜の腹から抜きとった白骨の剣をかまえ、岩場のほうに駈けよった。かれらは、敵の背後から、剣を繰りだした。
新手の群は、岩場を登りかけた状態で、前後にはさみ打ちにされたような形になった。おれがハンドルを横なぐりに振りまわすと、一頭が横っとびに崖下へ落ちていった。すでに五頭が失われ、勢力が半減しているにもかかわらず、かれらは攻撃をやめなかった。おがみ突きに繰りだされる白骨の剣を、ハンドルで薙ぎはらうと、それは二つに折れた。おれは、踏みこんで、そいつの頭上に、一撃をくらわせた。恐竜特有の空隙のある頭骨が陥落して、そいつは即死してしまった。
下からの攻撃もすさまじく、白骨の剣を突きさされ、つぎつぎに敵は斃されていった。すべてが終ったとき、十頭ばかりの新手の群は、ことごとく死にたえていた。それに対する味

方の損害は、重傷を負った一頭だけだった。
おれが、岩棚の上から見おろすと、群のボスらしいやつが、血まみれの白骨の剣をもったまま、こちらを見上げていた。おれは、その丸い眼に敵意がないことを知った。初めて出あった異なる生物から、なぜ、そんなことが言えるのか、おれにも判らない。だが、理屈ではなく、本能的に敵と味方を区別していたのかもしれない。
そいつのほうも、同じようだった。なにかの大動物の肋骨から作ったものらしい剣を、ぐっと下にむけて持ちかえ、敵意のないことを示そうとしているようにみえた。
おれは、やつにむかって、なにかを言わなければならないと感じた。
こんなとき、どう言えば、いいのだろうか？
われわれは、友だちだ。というようなことを口にすべきだろう。
「おれたちは、一緒に戦った。おまえたちの敵は死んだ」
おれは、ジャッキ・ハンドルで、足許に倒れている敵の死体を打ちすえながら、ゆっくりと話した。すると、そいつのほうも、なにかかん高い声で叫びはじめた。その声には、一種のアクセントがあり、言葉になっているようだった。おそらく、おれの助勢を感謝しているのだろう。
おれは、岩棚の上から、たったいま同盟したばかりの友人を見おろしながら、複雑な気持だった。

いま、おれが、相対（あいたい）している生物は、おれの古生物学の常識を、足許からくつがえすような存在だった。

恐竜が、共同作業で敵を斃し、しかも骨製の武器を使いこなし、いま現実に、おれと会話している。これは、これまでの古生物学の知識では、とうてい説明できないことである。

もしかしたら、おれたちは、恐竜というものを、過小評価していたのではないだろうか？　恐竜の習性や知能について、現生する爬虫類のパターンを、当てはめすぎていたのではないだろうか？

一定方向に向けられた草食恐竜の足痕は、各地で発見されている。これまで、鰐の習性などから推測して、恐竜は、群棲はするが、群行動をとることはないと説明されてきた。したがって、それら足痕の化石も、肉食恐竜に追われたりして、たまたま、そこに居あわせた草食恐竜が、一定方向に逃げたとき、つけられたものであると、簡単に片づけられていた。しかし、草食恐竜が、いつも群行動をとっていたというふうには、理解できないのだろうか？

おれは、いま、かれらが群行動をとるところを、はっきりと目撃している。

おれは、共に戦った相手に、共感することすらできた。そして、おれが、そいつのほうにむかって、岩棚を降りていこうとしたとき、由紀子が呼びとめた。

「待って、接触をあせってはまずいわ」

おれは、おとなしく従い、由紀子のあとにつづいて、もときた道を戻りはじめた。岬を越

えたところで振りむくと、おれが助けてやった狩人（ハンター）たちは、ある間隔をおいて、ついてくるところだった。

おれたちが、岩場にはさまっている車のところに来たとき、かれらのあいだから、ざわめきが起こった。おれたちは、かれらの足痕をたどったつもりだったが、岩場にきて見失ってしまい、かなり高く登って、偶然に車に行きあたった。かれらは、もっと下のほうを渡って、岬を越えたにちがいない。

当然のことながら、かれらは、内燃機関をもつ自動車なるものに、はじめて出くわすわけである。

車を見まもりながら、かれらは、あきらかに会話していた。かれらは、言葉をもち、しかも旺盛な好奇心も持っているらしい。

「いったい、かれらは、何者なんだ。すくなくとも、トカゲの仲間ではない」

おれは、訊いた。さきほどから中途半端になっている疑問に、なんとしても解答を見つけたいと思った。

「ドロマエオサウルス類じゃないかしら？　あるいは、それが、もっと進化した種（スピシー）でしょうね」

由紀子は、はじめて、手がかりになりそうなことを、答えてくれた。

ドロマエオサウルス？　おれの知識のなかには、含まれていない名だった。サウルスとい

う学名がついているところを見ると、恐竜の仲間にちがいない。だが、かれらは、おれの知る恐竜のイメージとは、かけはなれていた。

「かれらのほうも、接触したがっているんじゃないかな？」

「そうね、ここまで、ついてきたわ」

おれは、とうとう、かれらと、最初の接触（ファースト・コンタクト）を試みる決心をした。

車のなかには、遺跡めぐりのため用意したランチボックスに、サンドイッチが残っている。

おれは、車のドアをあけて、ランチボックスをとりだし、なかから、ハムサンドをつかみあげ、自分で一口くってみせてから、かれらのほうにむかってさしだし、食えというゼスチュアをしてみせた。

ハムサンドを岩角に乗せて、二、三歩しりぞくと、群のボスらしいやつがすすみでて、尾でバランスをとりながら、かがみこんでそれを手にとった。

おれが、野菜サンドを口にしてみせ、食えというゼスチュアでうながすと、ボスは、ハムサンドを口に入れた。

対向性のある五本指の前肢は、おもったより器用に動く。

ボスは、ハムサンドを呑みこんでから、なにやら、かたわらの部下にむかって、叫びかけた。やはり、かれらは、肉食性というより雑食性にちかい食性をもっているようである。

おれは、かれらの一頭に目をつけた。そいつは、やや湾曲した大腿部に、傷を負っている。

敵の剣が、なかほどで折れ、そのまま突きささり、血をだしている。

おれは、ジャッキ・ハンドルを、そこに置いてから、車からもちだした救急箱を手にして、その一頭に近よった。

おれは、そいつのまえで止まり、かがみこんだ。かがみこむということは、おれの頭部を、そいつの牙の下におくことを意味する。つまり、こちらの敵意がないことを示す意思表示である。

おれは、そいつの傷口を消毒し、サルファ剤の粉末を塗りつけ、ガーゼをあてがってから繃帯してやった。

「アンドロクレスと獅子――といったところだわ」

由紀子が、冷かすように言った。たしかに、そのときのおれの心境は、獅子の足から棘（とげ）を抜いてやるアンドロクレスのそれだった。

おれは、そいつから、ゆっくりはなれた。すると、そいつは、じっとおれを見つめたまま、あきらかに穏やかな調子で、なにごとか話しはじめた。

そのとき、さきほどのボスが、なにやら話しかけてきたので、そいつは、名残りおしそうに、おれのそばからはなれていった。

恐竜たちは、別れの声らしいものを残し、おれたちのそばから、立去っていった。おそらく、きょう仕留めた獲物を運ぶ仕事が残っているのだろう。

おれと由紀子は、呆然とかれらを見送った。由紀子のほうは、うっとりしたような目付きで、いつまでも黙ったままだった。

古生物学というのは、きわめて地味な研究分野である。研究対象は、ものいわぬ化石ばかりであり、そこから研究の緒をつかむだけでも、気の遠くなるような忍耐が必要である。

おれたちは、いま、実際に生きた恐竜を観察する機会に恵まれた。由紀子にとって、それは、夢のような境地なのであろう。

「あたしたち、どうして？」

由紀子が訊いた。いつもは、もっと現実的なのだが、いま置かれている状況に、不安は感じていないらしい。

「よく判らないが、あの事故のせいとしか思えない。送電鉄塔には、五十万ボルトの超高圧電流がながれている。事故のショックで、ここへ飛ばされてきたんだ。強大なエネルギーが作用して、時空を逆行させることになったんだろう」

おれは、自分でも、判ったような判らないような答え方をした。

「あたしたちは、白亜紀末期の日本にいるんだわ」

由紀子は、確信をもって断言した。

白亜紀末期の日本列島は、アジア大陸の東端をなして隆起し、造陸運動の最先端となっていた。北海道では石狩平野以西、本州では東海地方を除く大部分、そして、九州北部の僅か

な部分が陸地であり、そのかわり、いまの日本海や瀬戸内海や玄海灘なども陸地になっていた。

したがって、動物相（フォーナ）、植物相（フローラ）は、アジア大陸とまったく同じである。

おれたちは、元いた位置を保ったまま、七千万年前の世界に、落ちこんでしまったことになる。

「さっき、きみが口にした、ドロ……ナントカサウルスのことだが……」

おれは、訊いた。さきほど聞かされた、あまりポピュラーでない恐竜の名を、もう忘れてしまっていた。

「ドロマエオサウルスでしょ？」

「ああ」

おれは、ちょっと、ぶっきらぼうな返事をした。

「ドロマエオサウルスのことは、ごく最近まで、ほとんど判っていなかったわ。バーナム・ブラウンが、カナダのレッドディア湖で、足と頭骨の化石を採集したきりで、そのまま長いあいだ眠っていたからよ。当時の古生物学の知識では、あまりにも異常すぎて、分類の方法がなかったからでしょうね」

由紀子は、話しはじめた。

ドロマエオサウルスについての報告が出されるのは、最初の発見から、半世紀以上もたっ

た一九六九年になってからだったという。

この獣脚亜目(テロポーダ)に属する恐竜は、これまでの恐竜に関する古生物学上の常識を、完全に覆えすものだった。鋭い歯と爪と蹴爪によって武装された姿には、小型恐竜ながら、その獰猛さをうかがわせるものがあったろう。しかし、この恐竜の一番の特徴は、その巨大な頭脳である。ほぼ同じ大きさの駝鳥などよりはるかに大きく、哺乳類に近いくらいまでに進化している。

発見者のブラウンが、発表をためらったのも当然といえる。もし、当時、研究データを発表していたとすれば、ブラウンの学者的生命は、その時点で即座に終っていたにちがいない。

実際、化石のサンプルが増えてくると、この恐竜の異様さは、ますますはっきりしてきた。直径五センチという大きな目が、正面を向いてついているという眼窩(がんか)の構造は、他の恐竜には見られない特徴である。また、両足の構造も、二足歩行によく適応して、軽快なものである。おなじ獣脚亜目のうちでも、ティラノサウルスなどを含む大型のカルノサウルス類のように、鈍重ではなかったと考えられる。

ドロマエオサウルスは、ティラノサウルスと同時期に生存したが、はるかに敏捷で、獰猛で、狡猾であり、ある意味では、陸上肉食動物最大の暴君竜(ティラノサウルス)より、ずっと恐ろしい存在であったと言われる。

それでは、この突然変異的といえる、恐竜族のエリートは、突然に現われたのだろうか?

これまで謎とされていたレッドディア湖の化石に研究の転機が訪れたのは、一九六四年のことであった。

この年、ジョン・オストロームによって、ひとつの化石が発見された。それは、白亜紀初期のものと思われ、ディノニクスと命名された。

この恐竜は、発達した脳と、対向性の手と、三本の足趾(あしゆび)を持ち、一風かわった尾をそなえていた。尾のうちの一部が、長く四十五センチにもわたって、棒のようになっている。これだと、後方に延びきった形になり、体を前傾させて走ると、尾の先端は、地上から一メートルも持ちあがってしまう。あきらかに、ディノニクスは、尾を使わずに、二足歩行できたのである。さらに、三本ある足蹠のうち地面につくのは、二本だけであり、残りの一本は、前方にむかって蹴爪になっていた。つまり、タイの闘鶏の足にくくりつけるナイフのような役をしたわけである。

一本足で立ち、もう一方の足で、相手を攻撃するためには、たいへんなバランス感覚と運動神経が必要である。頭蓋の発達は、そういう運動機能とも関係がある。

走るときには、尾を後方へ水平にむけて、バランスをとりながら、かなりの駿足を誇ったものと思われる。

このような特徴からみて、同じ獣脚亜目のなかでも、ストルシオミムスによって代表される「駝鳥型恐竜」と近縁であることが判るが、脳容積と攻撃力が、格段にちがう。

に相当する。
あきらかに、ディノニクスは、さらに何千万年か後に現われるドロマエオサウルスの先祖
そして、白亜紀末になって登場するドロマエオサウルスは、ディノニクスを、何度もくりかえしてモデルチェンジした結果、われわれが考える恐竜時代の動物とは、あらゆる点で、ずばぬけた存在に変っている。
由紀子は、そういうことを、おれに判りやすいように説明してくれた。おれは、きょうの友人たちが、このドロマエオサウルス類であることを理解した。
「ドロマエオサウルスが、いわき地方にいたのか？」
おれは、ひとつだけ質問した。訊きたいことは山ほどあったが、生きのびる方法を考えなければならないと、そろそろ思いはじめていたので、由紀子のように、恐竜天国に感激してばかりもいられなかったのである。
「もちろん、ドロマエオサウルスの化石は、日本では発見されていないわ」
由紀子は、まず否定の返事をしておいてから続けた。
いわき市からフタバスズキリュウの化石が発見されたとき、古生物学界は騒然となった。
しかし、クビナガリュウが、日本で発見されたのは、かならずしも、それが最初ではない。
一九二六年、断片的な化石が発見されたが、戦災で焼失してしまった。したがって、スズキリュウの発見は、ある程度は予想されていたわけである。

しかし、世間の反響は、冷たかった。アメリカのように、カーネギー財団が発掘費用の提供を申しでるというような現象は、この国では起こりえない。おおかたのマスコミは、怪獣(?)の骨発見という程度の、次元の低い報道でお茶をにごしてしまったのである。さらに、いわき地方の人々の無理解もあった。三角貝やアンモナイトなどを集めている土地のアマチュア古生物学者も、ひとつの厚い壁になった。あるいは、他所者に手柄をたてさせたくないといった狭い郷土愛が、逆作用したのかもしれない。専門の調査団のほうも、乏しい文教予算にしばられ、長期発掘など思いもよらない。
いわき地方には、三角貝やアンモナイトなど、白亜紀末期の示準化石が発見されている。もし、ある予算を投入して調査を続行すれば、すくなくとも翼竜――プテラノドンの化石は、出土する蓋然性が、きわめて強い。これは、学界の定説とすらなっている。さらに欲ばれば、カモノハシ恐竜の一種ケネオサウルスや海竜モサザウルスなども、かなり期待できる。
しかし、日本という国では、役にもたたない怪獣探しに、国家予算を投入するような酔狂な役人は、一人もいないことになっている。
滞在費が底をついて、調査団は、宝の山に入りながら、引きあげないわけにはいかなくなった。
おれたちは、ここで、古生物学界のニュースターともいうべき、ドロマエオサウルスにでくわしたのである。

日本では、外国人学者を締めだしているため、かえって調査研究のいきとどいていない不毛の分野がある。古生物学界もそのひとつで、化石が発見されていないからといって、そういう生物が棲息していなかったという証拠にはならないのである。

「これを見て！」

とつぜん、由紀子が叫んだ。おれたちが立っている岩棚から十メートルばかり下の岩角に、ひとつの肉塊がぶらさがっていた。

長さ一メートルくらいで、ながい首と丸っこい胴体がついている。おれは、岩角に降りて、締めた鶏をぶらさげるみたいに、首っ玉をつかんで、それを取ってきた。

「スズキリュウの幼体だ」

おれは、言った。誰が、このプレゼントをこっそり置いていったか、よく判っていた。きょう知りあったばかりの友人の一人にちがいない。

おれは、日が西へ傾きかけているのを知って、作業を急がなければならないと思った。岩棚からまっすぐ登ると、羊歯と灌木の野にでる。おれは粗朶を拾いあつめて、車がはさまっている割れ目の上の岩棚に戻った。

由紀子は、そのあいだ、スケッチブックにむかっていた。できるだけ記憶が正確なうちに、記録しておくのが、科学者の勤めなのだろう。そこには、フタバスズキリュウと、あの新しい友人たちの絵が、鉛筆でスケッチされていた。

おれは、岩場を降りて、車のトランクを開け、工具を持ってきた。工具セットのなかから、ドライバーをとりだし、狩りの獲物のおすそわけにむかいあった。おれたち――ホモ・サピエンスには、あの友人たちとちがって、鋭利な爪は備っていない。獲物を料理するためには、ナイフがない以上、せめてドライバーが必要だった。

哀れな幼体をいくつかの肉片に分解し、さっそく火をおこしてから、おれは、由紀子を呼んだ。

「バーベキューの仕度ができたぞ」

おれは、目のまえに、五本の串をならべてみせた。セットからとりだした一文字と十文字のドライバー、千枚通し、ネジ式ドライバーなどである。その先に肉片を突きさし、火にかざして焼くわけである。

「恐竜の御馳走ね」

由紀子は、べつだん、ためらいはしなかった。現生爬虫類とのつきあいも、じゅうぶんある。学問のためだから、比較解剖も経験している。ありきたりの女の子のように、拒否反応を示すはずがない。

ぶよぶよした白身の肉は、鶏肉を水っぽくしたような感じだった。

「赤い柄のやつは、注意したほうがいい。そいつは千枚通しだから、がつがつ食べると喉を突くかもしれない」

おれが冗談めかして言うと、やっと、由紀子も笑ってくれた。

「ランチボックスのなかに、ソースとお塩があったわ」

由紀子は、そういって、甲斐甲斐しく立ちあがった。

焼きあがった肉に、塩をかけて口にいれると、香ばしい味がひろがった。鶏肉をあっさりとさせたような感じで、鶏特有の臭味がなく、なかなかいける味だった。

食事が済むと、あとは、寝る仕度だった。おれは、夜通し火をたいて交代で寝ることを考えた。しかし、火もちのよさそうな薪木が見つからなかったし、一晩もやしつづけるだけの量も確保してなかった。

結局、おれたちは、車のなかで寝ることにした。車は斜めになってはいるが、それなりに安定している。ガラス一枚でも、なにかの危険から身をまもることができるだろうと、思ったからである。

おれは、リクラインさせた車の助手席で、由紀子と抱きあって寝た。

「恐いわ」

あたりまえの女の子のような感想が、由紀子の口もとからもれたのは、そのときになってからだった。昼のあいだは、生きた恐竜を見た感激で、すっかり興奮しきっていたのだろう。

だが、夜になってみると、心細さがこみあげてくるのだろう。

おれは、シートの下から、ボロ布のようなバスタオルをとりだした。窓をふくため、使い

ふるしたタオルを、車内においておくのは、おれの習慣である。

夜は、かなり寒かった。が、バスタオル一枚をかぶって、身を寄せあっていれば、なんとかしのげそうな気がした。

翌朝、おれたちは、話し声で目ざめた。話し声といっても、人の声ではない。きぇーっというような、かんだかい声で、はじめて聴くと、かなり耳ざわりである。

おれたちが、シートからはねおきたとき、フロントガラスのむこうには、丸い眼をして三角につきだした、昨夜の友人の顔があった。ボンネットの上に這いあがったやつを、こうして正面からみると、ちょっと河童に似た感じで、どことなくユーモラスな顔である。

「おはよう」

おれは、ドアをひらいて、足をのばして、岩場に渡りながら、声をかけた。それに対して、かれらは、あきらかに挨拶らしい言葉を口にした。

由紀子が、ドアのところに出てきたので、おれは、手をさしのべて、こちら側の岩場に渡してやった。

きのうのボスと、繃帯を巻いてやったやつだけは、はっきり識別できた。しかし、他のやつは、きのうの連中かどうか、よく判らなかった。どれも似たような体つきをしているからである。ただし、かれらのほうも、数が増えていた。十二、三頭いる。かれらの個体差を、おれのほうが呑みこんでいないから、そのなかに、きのうの仲間が混じっているかどうか、

よく判らなかった。

　ボスは、ひときわ大きいので、すぐに判った。由紀子の講義をきかされたあとなので、注意して観察してみると、ナイフのような鋭い蹴爪が生えていた。もし、あの蹴爪で、胸許を蹴られれば、大の男でもかるく即死するにちがいない。

　おれは、きのうの行動をふりかえってみて、おもわず、ぞっとした。岩場の上で、かれらの敵と戦ったとき、おれは、かなり、慢心していたわけである。こちらが高い位置をしめていたから、かれらも蹴爪をふるうことができず、有利に戦うことができたが、もし平地で対決していれば、おれのほうがやられたかもしれないところだった。

　岩棚の上にでると、おれは、またしても、プレゼントを提供された。そこに、山のように果物が積んであった。マンゴスチンのような紫色の果皮をした、名も知れぬ植物の実である。もちろん、由紀子にも判らないらしい。白亜紀の植物について、おれたちが知っていることは、化石となったものだけである。軟い果肉が化石となることはないから、おれたちが知らないのも、むしろ当然といえる。

　ボスは、その果物を手にとって、一口くってみせてから、なにごとか叫びはじめた。きのう、おれがハムサンドを提供したときと、逆の立場になっている。その立場を、すぐさま利用できるということは、かなりの学習能力を持つ相手とみるべきである。

　おれは、ただちに、その果物にかじりついた。溶けるような甘い香りのする果肉だった。

「かれらは、雑食性よ」

　由紀子が、果物を頬ばりながら、ささやいた。駝鳥型恐竜と同じく、雑食性とみるべきである。

　昨夜、肉をたらふく食ったあとなので、朝の果物は、たいへんありがたいプレゼントだった。

　ボスが、歩きはじめたのは、そのときだった。そのあとから、群も移動していく。十メートルばかり行ったところで、こちらをむいて止まったので、岩棚の上から手をふると、むこうも前肢を動かした。別れの合図かも知れないが、きのう別れたときには、そんなゼスチュアは、見せなかった。

「ついてこいと言ってるんだわ」

「よし、行ってみよう」

　おれたちは、歩きはじめた。おれは、ジャッキ・ハンドルを手にもち、バーベキューの串につかったドライバー・セットを、ジャンパーのポケットに押しこんだ。

　道は、いったん海岸に降りる。きのう、おれたちが、放りだされたところである。そして、崖をのぼる道になる。途中の急なところには、大きな岩があてがってあり、ステップになっている。おれが、人工的なものだと感じたのは、その点である。

　登りつめると、平野がひらけている。しばらくすすむと、おれたちが、羊歯のかげから、

はじめて、かれらを見かけた地点にでる。そこから、針葉樹の森を通りぬけて、三十分ばかり歩くと、台地のようなところにでた。

台地の斜面をのぼると、はるかむこうに、煙をはく山がみえた。もちろん、活火山にちがいないが、現在の地形に比定することはできない。このあたりの地形は、のちの新生代造山運動によって、めちゃめちゃに、ひっかきまわされてしまうからである。

「集落よ」

台地の上で、由紀子がさけんだ。確かに、おれたちの目の前に、五十戸ばかりの集落があった。

羊歯の葉で葺(ふ)いたものらしい楕円形の小屋がならんでいた。

人間の家とは、まったく違う。尾のない人間は、縦に寝れば、一本の線になってしまう。したがって、最大多数の線を収容する家を想定すると、四角にならざるをえない。しかし、かれらは、尾をふくめて丸くなって寝るにちがいない。

集落のむこうには、川が流れていた。家々のつくりは質素だが、かなりの大きさがある。

「恐竜が集落をつくったなんて」

由紀子は、うめくように言った。たしかに、これまでの常識では、考えられないことである。

おれたち人類は、地球上の支配者として君臨し、唯一無二の万物の霊長として、ふるまっ

ている。つまり、かつて、いかなる生物もなしとげなかった文化を発達させるべく、神の恩寵にあずかった選ばれた種(スピシー)だと、思いあがっている。

しかし、はたして、人類だけが、最初に文化を持った生物なのだろうか？　この地球の進化をつかさどる大きな力——あるいは、大文字(キャピタル)で始まる主(ロード)というものがあれば、はじめから冒険をするはずがない。

哺乳類というひとつの種を創造するに際しても、進化の神は、きわめて慎重だった。哺乳類の活躍の場は、新生代になって急速に拡大するが、そのプロトタイプは、中生代より以前の古生代に、すでに現われている。エダフォサウルスやペリコサウルスのような先祖から、哺乳類型爬虫類が生まれてくる。モスコプス・ディキノドンなどの生物が、その例である。これら獣形類は、ペルム紀から、中生代の三畳紀にかけて、適応放散する。おそらく、毛もはえていたにちがいない。

進化の神の慎重さを示す例として、剣歯虎をあげることができる。完成型の剣歯虎スミロドンは、いわば最終モデルである。しかし、それより二億年もまえに、ペルム紀のイノストランケビアという獣形類において、その試作モデルがあらわれている。さらに、カンガルーの仲間が肉食獣化しただけの有袋剣歯虎スチラコミルスも、テストされている。これらは、いずれも、スミロドンの先行型(アンテシーデント)である。

その意味で、魚竜(イクチオサウリア)はイルカの先行型であり、三畸竜(トリケラトプス)は、サイの先行型である。

われわれ人類だけが、なんの予告もなしに、進化の神の抜擢をうけて、だしぬけに出現したと考えること自体、不自然なのではないだろうか？
進化の神は、ホモ・サピエンスという種（スピーシー）をテストしてみるまえに、人類の先行型にあたる生物を、どこかでテストしていたのではないだろうか？
おれたちは、いま、目の前に、その証拠をつきつけられていた。
古生代にすでに出現している哺乳類が、進化の覇権を握るまで、一億年以上もかかってしまったのは、何故なのだろうか？　答えは簡単である。哺乳類よりはるかに優秀な連中が、すでに権力の座についていて、いっこうに地球政権を譲りわたしてくれなかったからである。
中生代のあいだを通して、哺乳類が未来の王者の風格をあらわしたことは、一度もなかった。
中生代の哺乳類は、体を矮小化することによって、細々と生きてきたにすぎない。そのため、中生代の哺乳類化石は、ほとんど発見されていない。たとえば、モーガンコドンという原始哺乳類は、一ミリの歯と一・五センチの頭骨をもつ、吹けば飛ぶような、小さな生物にすぎなかった。
おれたち人類は、ともすれば、恐竜というものを、過小評価しがちである。巨大な怪獣のイメージが、抜きがたく定着している。魯鈍な巨体と、空っぽな脳みそをもった生物という理解が、ふつうである。

もし、そうだとすれば、例えようもなく愚鈍で畸型的な生物が、一億年以上も政権を握っていたことになる。

彼らは町を作らず、偉大な帝国を作らず、知恵はなく、あるのは少しばかりの欲望だけ。
彼らは毎日を強いられて生き、
来たるべき明日のことなど気にしなかった。
友もなく生涯を送り、ひとりぼっちで死んだ。
土くれとなった彼ら――人は、それに命を吹き込む。

W・E・S

W・E・スウィントンの「恐竜」（小畠郁生訳）の巻頭の献辞である。
専門の研究者ですら、頭から恐竜を劣等な生物と決めつけてしまっているのである。しかし、一億年以上も君臨した恐竜には、それなりに完成した点があったはずである。
鈍重な特殊化した例をあげつらうつもりなら、恐竜のうちの特殊化した例をあげるまでもなく、われわれ哺乳類のなかに、いくらでも見つかる。たとえば、メガテリウムという地上性のナマケモノは、全長六メートルにおよぶ体をもっていたが、知能はきわめて低かった。
おれたちは、ボスに導かれて、集落のなかに入っていった。尾のある里人たちは、みな活潑に動きまわっていた。三角貝やアンモナイトも、かれらの重要な食料らしい。貝殻から、

アンモナイトをとりだす作業を行なっているやつもいた。イカ、タコのような頭足類は、中生代にはまだ貝殻から抜けだしていなかったのである。

かれらは、種としての起源は違っても、われわれ人類と同じ生態型をもつ先行種なのである。

おそらく、化石として確認されているドロマエオサウルス類より、さらに進化した生物にちがいない。かれらは、進化の階段に足をかけた途中にある。その前途には、洋々たる未来が、待ちうけているはずである。

おれは、いったん、そう思いかけてから、あることに気づいた。

おれたちが、いまいる時代は、白亜紀の末期である。つまり、恐竜の大絶滅の寸前ということになる。もちろん、ドロマエオサウルス類も、例外ではないはずである。新生層からは、その化石は、一例も報告されていない。

しかし、おれの目の前にいるかれらは、活気にみちあふれている。絶滅の予兆らしいものは、ひとかけらも持ちあわせていない。

集落の中央の広場で、大勢の叫び声が起こったのは、そのときだった。

ボスは、しなやかな動きで、身をひるがえして、走りだした。おれは、いまはじめて、かれの種族が、全力疾走するところを目撃した。尾をピンとのばし、体を前傾させながら、かなりのスピードで走る。

おれと由紀子も、いそいで、ボスのあとを追った。そこには、小屋があった。小屋というより、巣と呼ぶべきかもしれない。明らかに、ふつうの動物の巣とちがうところは、柱をたて、それに羊歯の葉をふいてあるところだが、つる葉を編んでしばりつけてある部分は、見あたらなかった。

ボスのあとにたって、小屋のなかをのぞきこむと、そこに、一頭の仲間がいた。そいつは、ボスよりかなり小ぶりな体つきをして、入口と反対のすみにうずくまり、なにかを食っているところだった。

器用に動く両手で、長い尾と首をした三十センチばかりの獲物を、せっせと口へ運んでいた。おれは、そのとき、ある事実に気づいて愕然とした。いま、そいつが手にしているのと同じ動物が二、三匹、まるで、まとわりつくように、そいつの膝のあたりを這いまわっている。それらは、四肢を地について、のたくるような動きをしているが、無細工に大きな頭と、蹴爪のついた後肢をもっている。

口に運ばれている一匹も、地を這っている小さなやつらと同じ生物で、腹を大きく噛みさかれ、瀕死の重傷を負っているが、まだ生きていた。

大きいほうの一頭は、さらに一噛みして、小さな生命にとどめをさすと、その死体を無感動に放りすて、ピンポン玉のような眼を見開いたまま、足許の一匹をつかみあげた。

「かれらの仲間の幼体を食ってるんだ!」

おれが叫びたてると、由紀子も、はじめて口をひらいた。

「単にそれだけじゃない。たぶん親子でしょうね」

おれは、由紀子の言葉をきいて、かなりのショックを受けながら、ふたたび、おぞましい光景に目をやった。

小さな幼体は、母親の手のなかにぶらさげられ、やがて襲ってくる不吉な運命を予知するかのように、キーキー泣き声をあげながら、身をよじった。

母親は、手をさしあげて、幼体を口へ運ぼうとした。そのとき、ボスが、白骨の剣をふるった。手から叩きおとされた幼体は、悲鳴をあげた。

哀れな母親は、子供の血で染まった口から、なにごとか声を発した。ボスは、それに対して、威嚇に近い声をあげ、白骨の剣を繰りだした。剣は、母親の腹に突きささった。

惨劇がおわったと思ったのは、おれたちの早とちりだった。おれたちが、小屋からでたあと、ボスの命令で、仲間たちが、二つの死体を運びだした。母親の死体と、その母親に食われかけていた仔の残骸とである。

ボスは、四十頭ばかりいる住民に、訴えかけるように話した。そして、みずから母親の死体にむかい、その肉を三片ばかり切りとり、生残りの三頭の仔に与えた。三頭が肉にかじりつくと同時に、母親の体が解体されはじめた。なにかの序列があるらしく、ボスからはじまり、つぎつぎに肉片をえぐりだし、口へ運んでいく。母親の死体は、あっというまに、仲間

の胃袋におさまってしまった。

おれと由紀子にひとつの小屋があてがわれたのは、真昼の宴がおわってから、しばらくたってからだった。おれと由紀子は、むかいあって坐りこんだ。

ショックがおさまってみると、最初の邂逅（ファースト・コンタクト）では判らなかったことが、いろいろ判ってきた。

おれたちは、ドロマエオサウルスから進化したらしい種族にでくわしたわけである。まずはじめにすることは、発見者の名誉ある権利を行使することだった。

「爬虫綱（レプティリア）に属することは、まず、まちがいないな」

おれが、そういったとき、由紀子は、ちょっと考えていたようで、返事が遅れた。

「待って。はたして、恐竜は、爬虫綱（レプティリア）だったのかしら？」

「なんだって？」

「よく、比喩的に冷血動物だなんて言うわね。でも、恐竜は、温血動物だったとは、考えられないかしら？」

そういえば、最近では、古生物学界では、いろいろな新説が、発表されている。恐竜温血説も、そのひとつである。これまでの学界のアプローチには、大きな誤まりがあったのではないだろうか？　身長二十五メートル、体重八十トンのブラキオサウルスが、もし冷血だったとすれば、とうてい新陳代謝（メタボリズム）が追いつかなかったはずである。現代人であるわれわれは、

恐竜を「大きなトカゲ」ととらえやすい。そのため、単なる「大きなトカゲ」にすぎないコモドオオトカゲを、コモドリュウと呼んでしまったりする。しかし、恐竜とオオトカゲのあいだには、人間と象よりはるかに大きな相違がある。現存する爬虫類のなかから、もっとも恐竜にちかいものを探すなら、それは、むしろ、鰐の類であるが、その鰐ですら、恐竜とは、はるかにへだたっている。いわゆる双弓亜綱(ディアプシダ)のなかには、喙頭目(リンコセファリア)——現存するムカシトカゲの仲間をふくむ鱗竜上目(レピドサウリア)が設けられ、このなかに、ヘビ、トカゲの類は、すべて含まれてしまう。しかし、双弓亜綱のなかには、もうひとつの上目(じょうもく)——オーダーがあり、祖竜上目(アルコサウリア)のなかに、絶滅した槽歯目(テコドンティア)、鰐目(クロコディリア)、翼竜目(プテロサウリア)、竜盤目(サウリシア)、鳥盤目(オルニティシア)など、ほとんどすべての有力な恐竜をふくんでしまう。すべての翼竜、すべての肉食恐竜、すべての草食恐竜が、ほとんど入ってしまう上目(オーダー)に、現存する鰐だけが加入している——とされている。分類学的にみて、これほど不可解なことはない。鰐と恐竜との決定的な相違は、化石によって検証しようのない点——つまり、それが、冷血か温血かという点だったにちがいない。

「恐竜綱(ディノサウリア)をたてることに、異議はありませんか?」

由紀子は、ちょっと、おどけて言った。おれは、たったひとりで拍手を送りながら答えた。

「異議なし」

おれたちの二人の決定に従えば、両生綱(アンフィビア)、爬虫綱(レプティリア)の次には、恐竜綱(ディノサウリア)がくることになる。

そして、次に鳥綱(アベス)、哺乳綱(マンマリア)がきて、脊椎動物門(ベルテブラタ)の分類が完成することになる。

「ところで、恐竜綱を爬虫綱から独立させるとして、おれたちの友人の扱いは、どうなる?」

「恐竜綱、双弓亜綱(ディアプシダ)、祖竜上目(アルコサウリア)として、位置づけるしかないわね。ただし、その場合は、温血を獲得しなかった鰐(クロコディリア)目は、爬虫綱の一部として独立させる鱗竜上目といっしょに、脱退してもらうしかないわね」

「それで、その次は?」

「竜盤目(サウリシア)のなかの獣脚亜目(テロポーダ)に、入ることはまちがいないわ。でも、ダチョウ型の恐竜をふくむコエルロサウルス上(ディビジョン)科には、入れたくない。むしろ、ドロマエオサウルス上科というのを、あらたに設けるべきだわ」

やっと、おれの友人の落ちつき先が決まったところで、おれたちは、名誉ある発見者の特権——つまり命名の権利を行使することになった。

「フタバスズキリュウの場合、化石の発見地の双葉町というのを、とっているでしょ。でも、かれらは、白亜紀末のいわき市のあちこちにいたと思うの。そこで、和名は、イワキセンバリュウ、学名は、ドロマエオサウルス・イワキエンシス・センバとすれば、いいと思う」

由紀子は、発見の功をおれに譲ってくれ、学名に、おれの苗字の仙波を残してくれた。命名の儀式が終ったところで、おれたちは、きょう一日のあいだに経験したことをもとに、かれら——イワキリュウの生態のことを、考えはじめた。

イワキリュウは、これまで知られた恐竜の常識をはるかに越える、優れた生物である。かれらは、群をなして狩りをおこない、集落をつくるほどまで、進化の発展段階を登りつめてきた。かれらに比べれば、ネズミのような原始哺乳類は、体型を矮小化することによってのみ、細々と生きながらえている、劣等種族としか思えない。

矮小な哺乳類デルタテリジウムなどは、卵を強奪することによって、こそこそと生きのびていたにすぎない。しかし、その先祖は、すでに古生代のペルム紀に、ある地位を占(し)めていた。爬虫類のうちのある種は、進化の糸にひきずられて、当時すでに、哺乳類にちかい段階に到達していた。盤竜目(ペリコサウリア)は、背中に放熱用の背鰭(せびれ)のような突起を発達させ、肉食のペリコサウルス、草食のエダフォサウルスのような分化した形態にまで進化していた。さらに、獣窩目(テラプシダ)になると、哺乳類化がいっそう強くすすみ、いろいろな方向に、適応放散(ダイバージェンス)をおこない、分化(ディファレンシエイト)していた。大型草食動物の方向にむかったディノケファルスや、くちばしをもった草食獣モスコプスなどの乱歯亜目に対して、それを捕食する牙をもった獣歯亜目も、たくさん棲息していた。獣歯亜目に対して、鼬竜亜目(イクチドサウリア)のような真正哺乳類と呼べる種(スピシー)すら、すでに出現していた。

古生代の化石から判断するかぎり、来たるべき中生代は、哺乳類の天下になるべく予定されていたかのように見えた。ところが、中生代は、いわば、哺乳類の暗黒時代になってしまった。なぜなら、原始哺乳類より、はるかに優れた種族が、地球政権の座についてしまった

からである。その優れた種族こそ、恐竜だった。

哺乳類が政権を簒奪(さん)するまでには、さらに二億年の星霜が必要になったのである。実際、哺乳類の起源は、鳥類などよりはるかに古く、恐竜の起源とほぼ等しいとすらいえる。その哺乳類が、地球政権の王座を、ひさしく占めることができず、二億年ものあいだ失意のどん底に追いやられていたのは、より強固な、より完成された、ひとつの種(しゅ)——恐竜(ディノサウリア)によって、優占的(ドミナント)な地位を、独占されていたからである。

その哺乳類の適応放散(ダイバージェンス)が起こるのは、地球政権の独裁者である恐竜類の大絶滅のあとからである。いわば、哺乳類は、火事場泥棒のような手段で、政権を強奪したといえる。

「この集落には、五十戸ばかりの家があったわ。でも、住民は、五十人——いや、五十頭ばかりしかいなかったでしょ」

由紀子は、不意に妙なことを言いだした。台地の丘の上に、イワキリュウたちの集落があった。そこには、五十戸ばかりの家があった。しかし、住民の数は、それほど多くはない。一戸に一頭というくらいの頭数でしかない。事実、おれたちが、かれらから与えられた小屋は、ながいあいだ無住になっていたらしく、天井の羊歯を通して、星が見えるという状態になっていた。おれたちは、この小屋に住むにあたって、羊歯の葉をとってきて、屋根を葺(ふ)きかえなければならなかったほどである。すくなくとも、この小屋に住んでいた住民が、居住するのをやめたということが判る。死んでしまったのか、他所(よそ)へ移ってしまったのか、その

原因は、はっきりとはつかめないが、集落のなかには、はっきり目だつくらいに空家がある。どう考えても、かつては、今の数倍の住民がいたことはまちがいない。

ふつう、爬虫類は、群をつくらない。なぜつくらないかというと、仔を扶養しないからである。つまり、卵を生みっぱなしだからである。

これまで、恐竜も、爬虫類の一種とみなしてきた学界は、爬虫類の例からみて、恐竜もそうであったと決めこんでしまっていた。しかし、それにしては、群行動をおもわせる足痕化石が、たくさん発見されすぎている。

古生物学界でも、足痕化石について、パニック状態で一定方向へ逃げたときのもの——という都合のいい説明にとらわれず、もっと積極的な説明をうちだしている学者もいる。そうした学者によれば、ブロントサウルスの生態的地位は、哺乳類における象のようなものだったと定義される。仔や牝を群のなかに囲いこみ、大地を踏みならして、移動するブロントサウルスの大群に対しては、他の肉食恐竜も、なかなか手だしができなかったろう。草食性のブロントサウルスでも、あの巨大な体で群をなして防御すれば、たいていの肉食恐竜などは、踏みころされてしまうにちがいない。こうなると、水から首をつきだしている、おなじみの復元図も、かなり怪しくなってくる。かれらが、象と同じ程度に水浴を好んだろうことは、想像にかたくないが、巨大な体重を軽減するために、水中生活をおこなったという説明は、根拠を失ってくる。

祖竜上目にふくまれる、ほとんど全ての恐竜は、仔を扶養し、群をつくるという段階まで、進化していたことはまちがいない。あの空っぽの脳髄の代表者のように罵倒されるブロントサウルスですら、例外ではなかった。

仔を扶養しないという、爬虫類の性質だけを用いて、すべての恐竜の劣等性を立証しようとした古生物学者たちも、やむなく特例を認めてしまっている場合がある。

翼竜目（プテロサウリア）の場合がそれであり、上空の親が、空中から投下する魚を、まだとべない仔が、大口をあけて受けとめている、有名なプテラノドンの復元図が、ひとつの矛盾を提供する。翼竜のような生態の生物では、もし親が卵を生みっぱなしにしたとすれば、飛ぶことのできない生まれたばかりの仔は、たちまち餓死してしまう。その矛盾を説明するためには、かれらが、恐竜より高等だと定義する鳥の生態を参考にして、復元図を描くほかはなかったのである。しかしながら、現存する爬虫類のなかには、仔を扶養するものは一例もない。翼竜だけを例外としてしまったため、かえって矛盾が大きくなってしまったわけである。

恐竜綱は、爬虫類のなかから進化してきた。爬虫類との境界にある槽歯目（テコドンティア）は、恐竜綱および鳥綱の共通の祖先といえる。西欧流に生物進化を優劣の尺度でとらえることをやめにすれば、恐竜は、鳥とならんでいることになる。すくなくとも、中生代のあいだは、空、陸、水——あらゆる方面に適応放散した恐竜は、地球上の支配者であり、鳥も哺乳類も、影の薄い存在でしかなかった。

恐竜が優秀な生物であることは、まちがいない。しかし、かれらは、白亜紀末に、地球上から姿を消した。

おれたちは、まさしく、その時代にいあわせているのである。

ボロボロのタオルにくるまって、寝ようとしたとき、由紀子は、ひとつの声をききつけた。それは、犬の遠吠えを、一オクターブあげたような、薄気味わるい声だった。

おれたちは、タオルをはねのけて、起きあがった。小屋の外にでてみると、台地のはずれのところに、一頭のイワキリュウが、凍りついたように、シルエットになっていた。

近よってみると、その体軀の大きさから、あのボスであることが判った。

爬虫類は、その一生のあいだ、成長する。鳥類になると、生殖可能になってから、体が成長することはない。そして、人類は、むしろ、早期成熟の傾向すらある。

恐竜は、おそらく、生きているあいだ成長するという、爬虫類から受けついだ形質から、まだ自由になっていないのだろう。

ボスの並はずれた大きさは、そのまま、仲間うちでの最年長者であることを示しているにちがいない。

青白い光を弱々しく投げつけてくる新月にむかって、咆哮していたのは、ボスだった。その様子には、新月にむかって、新たな力を賦与してくれるよう、祈っているような仕草すら見受けられた。

翌朝、おれたち二人が目覚めたとき、イワキリュウの集落のなかは、すでに秩序ただしく動きはじめていた。

白骨の剣をとって狩りにでかけるのは、男たちの仕事のようである。そして、石を打ちつけて、アンモナイトの貝殻を割っているのは、女や成長しきっていない幼体の仕事のようにみえた。

石器文化のまえに、骨角器文化を想定するのは、いまや定説となっている。かれら——イワキリュウは、骨角器文化の段階まで、進化していることになる。

おれと由紀子は、集落の中央の広場で、ボスと朝の挨拶をかわした。

「おはよう」

おれは、できるだけ親愛の情をこめて、ボスに挨拶した。

昨日の惨劇のあとだけに、おれの身振りは、なんとなく、わざとらしいものになってしまった。

しかし、人類——ホモ・サピエンスでも、ネアンデルタールの段階では、同族の肉をくらうという習慣は、きわめてポピュラーなものだった。十九世紀、あるいは二十世紀の初頭まで、人類は食人の習慣を捨てきれなかった。明治初年、モースが、大森貝塚人の食人の風習を指摘してみせたとき、明治人たちは、ナショナリスティックな、ヒステリーにちかい反応を示したものである。

したがって、かれらイワキリュウが、仲間を食ったことに対して、非難を加えるつもりはなかった。おれたち人間ですらそうなのだから、まして、恐竜が、そうしたところで、べつだん驚くにはあたらないだろう。

だが、おれは、母親が仔を食った事実のうらに、単なる共食いということだけでない、なにかの予兆を感じとっていた。

おれと由紀子は、狩りの一行に、同行することになった。きのうの海岸のほうにむかい、途中で車のところまでくると、一行は、そこで立ちどまった。おたがいに言葉が通じないので、意思がかよわなかったが、狩りにいくとみえた五、六匹の一行は、あきらかに、おれたちを車のところまで、護衛してくれたのだった。そのなかには、おれが繃帯を巻いてやったやつもいた。

繃帯のイワキリュウが、叫び声をあげ、白骨の剣をふるうと、他のものも、示しあわせたように姿を消した。

「護衛してきてくれたところをみると、なにかの危険があるということじゃないだろうか？」

おれは、言った。

「そうね、きのう獲物を横どりしようとした、他の集落のイワキリュウを警戒しているんだわ」

由紀子は、答えた。かれらは、一種の社会を持っている。それは、集落国家のようなもので、敵対する他の集落のものに対しては、きわめて排撃（エクスクルーシブ）的なものとして、機能するらしい。

「用心のため、タイヤチェーンを持っていこう」

おれは、トランクをあけ、チェーンを一本とりだして、ベルトにはさんだ。もし、他の集落のイワキリュウと遭遇したときには、まえの教訓を生かして、戦わなければならない。平地で戦う際、蹴爪の攻撃を避けるためには、はなれたところから、チェーンを振りまわせば、有効な打撃になるにちがいない。

おれたちは、きのうの岩場に降りてみた。すると、血なまぐさい臭いが鼻についた。そこには、血と肉片のこびりついた白骨が、ころがっていた。大きい一体は、フタバスズキリュウのものらしい。そして、十個ある等身大のものは、あのとき斃した敵のものにちがいない。おれが、ジャッキ・ハンドルで脳天を叩きわった一頭は、岩棚から落ちた位置で、白骨になっていた。きのう、あれから、イワキリュウたちは、住民総出で、獲物を解体して、運んだにちがいない。

おれのほうは、死臭に胸が悪くなりかけていたが、由紀子は、平気なものである。いまや、古生物学徒として、稀有（けう）の標本をまえにして、いっこうに、その場から立ちさろうとしなかった。

白骨の頭部だけは、そのままになっている。肉が少ないので、食用にならないからである。

頭部を手にとって、口をひらいてみると、不揃いな歯列があらわれる。ふつう、復元図などをみると、同じ大きさの三角の歯が、生えそろっている絵になっているが、あれは違う。何度でも生えかわる恐竜の歯は、上下に嚙みあうようにはなっていないから、のこぎりの歯のように整然としているわけではない。大きいものもあれば、小さいのもあるし、欠けているところもある。古生代、すでに、哺乳類の爬虫が獲得していた、犬歯、門歯というような分化現象は、まったく見られない。

「この頭蓋骨からみて、脳容積は、二百CCくらいはあるわね」

由紀子は、感心したという口調で言った。おれは、反吐がでそうになるのをこらえながら、うなずいた。

古生物学の決め手は、現存する生物との比較研究にある。もちろん、それにとらわれすぎてしまうと、温血である恐竜を「大きなトカゲ」としか考えられなくなってしまうが、そこからスタートすることだけはまちがいない。

由紀子は、群馬県新田郡のスネークセンターや、南伊豆のワニ園などにも、実習に行っている。ハンドバッグ製造のため、バラバラになったワニの死体のなかで、弁当を食ったという話をまえにきいたことがある。仔ワニの死体は、背と腹の皮を財布などに加工したのち、頭や手足の部分は、剝製にして、キーホルダーに加工して、売るのだそうである。

「恐竜類は、二億三千万年前の三畳紀から数えはじめたとしても、新生代が始まる七千万年まえまでは、確実に地球の支配者だったわ。翼手目コウモリのように空をとぶ翼竜もいたし、犀に相当する角竜亜目（セラトプシア）、アルマジロのような曲竜亜目（アンキロサウリア）、象に相当する竜脚亜目（サウロポダ）など、のちに哺乳類が経験する適応放散のパターンを、すべて試みてしまっている。でも……」

由紀子が、情熱をこめて喋りはじめたのを、おれは、いささか、もてあましはじめていた。すさまじい臭気に、気がくるいそうになっていたからである。

「ただし、矮小な生物は、むしろ例外だった。三十センチ以下の恐竜がいないのは、温血でありながら、皮膚に毛をもたない恐竜のただひとつの弱点だったといえるわ。体型が小さくなると、体温が放散して、生きていけなくなるからだわ。恐竜が適応放散できなかった食虫目のような形態に、原始哺乳類は、ひたすら体を矮小化することによって、かろうじて生きのびることができたのよ」

由紀子のお喋りが核心をついてきたので、おれは、おもわず、話につりこまれた。

体長十センチにみたない原始哺乳類は、王者である恐竜のお目こぼしにあずかった生態に生きることによって、かろうじて、絶滅をまぬかれたわけだ。

そのほかの生態系は、すべて恐竜だけでカバーしてしまった。学術的な定義でいえば、恐竜とは双弓亜綱（ディアプシダ）だけを指すわけだが、広義に解釈すれば、側弓亜綱（パラプシダ）——魚竜の類、広弓亜綱（ユウリアプシダ）——クビナガリュウの類まで、含まれることになる。これらを恐竜の定義に加えれば、中生代の動物の九十パーセント以上を、恐竜だけで占めてしまったことになる。

新生代になって現われる哺乳類の全てのパターンは、恐竜ですでにテスト済みである。三騎竜(さんきりゅう)トリケラトプスの化石が発見されたとき、発見者は、野牛とまちがえてしまい、バイソン・アルティコルニスという、誤まった学名をつけてしまっている。つまり、角竜は、野牛あるいは犀の先行型(アンテシーデント)といえるわけである。哺乳類時代になっても、犀のような完全モデルが現われるまえに、カブト虫のような角をもつブロントテリウム、並行した二本の角をもつアルシノイテリウムなど、さまざまな試作品(プロトタイプ)がテストされている。

魚竜とイルカ、ブロントサウルスと象、プラコケリスとセイウチ、プテラノドンとコウモリ、アロサウルスとライオンなど、先行種と後発種との関係を示す例は、いくらでもある。つまり、現存哺乳類の適応放散のパターンは、すべて、恐竜の形を借りて、テスト済みだということである。

「ただし、ひとつだけ、これまでの古生物学の知識では、説明できなかった目(オーダー)があるわ。霊長目(プリマーテス)よ」

由紀子は、言った。

おれは、由紀子の分析に、ぐいぐい引きずりこまれた。

霊長目人科人属人種——ホモ・サピエンスというのは、地球上はじめて言葉や文字や文化をつくり、はては科学技術文明とやらまでつくりあげる、選ばれた種のはずであった。かつて、いかなる種も、そういった方向に進化することなど、ありえないはずであった。

ホモ・サピエンスは、神の御心によって、地球の政権を担当すべく創造された、高貴なる種族でなければならなかった。人類のもつ進化の形質はあらかじめプログラムされた軌道に乗せられているため、外観上の分化を行なうことはなかったが、人類は自からつくりだした知恵の光によって、水に潜り、空をとび、地を走るまでの段階に達した。人類の獲得した可能性は無限であり、社会、言語、道具の使用などの能力は、かつていかなる地球上の生物にも侵犯されたことのない、聖域(サンクチュアリ)のはずであった。

しかし、おれは、ここで、おれたち人類の増上慢な考えに対する、はっきりした反証を、この目で見てしまった。

これまで、魯鈍な巨大な図体をもてあまして亡んだとされていた「大きなトカゲ」が、おれたち人類の神聖をけがす第一歩を踏みだしていたことを、すでに知らされてしまった。

地球上を制覇した恐竜のなかには、雑食性で小柄な体軀をもち、仔を扶養し、道具を用い、集団で狩猟する——という方向に適応放散をとげた種(スピシー)が、すでに存在していたのである。

かれら、イワキリュウ——ドロマエオサウルス・イワキエンシス・センバは、霊長類型恐竜とでも呼ぶべき存在であった。

この地球の進化を司どる大きな存在——神と呼んでもいい、あるいは大文字(キャピタル)ではじまる主(ロード)は、だしぬけに、神自身の姿を模倣した選民として、人類を創造したのではなかった。人類の出現の七千万年まえ、ひとつのモデルを試行していたのである。

現存人類の先行種にあたる、そのイワキリュウは、洋々たる将来を約束された選ばれた種（エリート）であった。

「なぜ、かれらが絶滅してしまったのだろう？」

おれは、歩きながら言った。由紀子が、ようやく標本の検証を終えたからである。

おれたちが、惨劇の場から百メートルばかり進んだとき、由紀子が答えた。

「白亜紀末、ドロマエオサウルスばかりでなく、すべての恐竜類が大絶滅したわ」

おれたちは、岬のむこうにつづく砂浜を、歩いていった。砂浜を歩いていくと、つぎの岬があり、その先の海上に、なにかが舞っていた。

それは、はじめて目撃したときには、はっきりとは確認できなかった。プテラノドンであった。この先の岬に巣があるのだろう。海上を舞いながら、ときどきダイブして、海面の魚をとらえてくる。

プテラノドンは、翼幅八メートルにもおよぶ、巨大な翼竜（プテロサウリア）である。最近アメリカでは、翼幅十五メートルと予想される翼竜の化石が発見されている。零戦（ぜろせん）よりも、大きいことになる。もし、その巨大な翼竜が冷血だとすれば、地を這うだけの生体のエネルギーをつくりだすことも、難しかったにちがいない。

由紀子は、目で見るプテラノドンの生態に、うかれていた。

後頭部に突出した舵のような部分は、ジェット戦闘機の層流安定板のような役割をはたしている。飛行に際して、首がねじれるのを防いでいるわけである。

プテラノドンは、ときどき、岬の上に戻っていく。海から吹きつける風に乗ってとぶかれらは、コウモリほどの飛翔力も持っていない。巨大な翼幅のわりに、体重はきわめて軽い。内部が中空になった、やわな骨格しか持っていないからである。

したがって、雛（ひな）の口に餌（え）を押しこんでやるような微妙な飛行はできない。鳥とちがって、空中から雛の口めがけて、魚を投下して戻っていくわけである。

かれらは、いったん翼を休めたら最後、うまく気流に乗れるまで、風待ちしなければならないのである。

由紀子は、プテラノドンをスケッチし、メモをとっていた。おれは、死臭からはなれたので、忍耐づよく、彼女の作業が終るのを待った。

おれたちは、プテラノドンの巣のある岬のところから、また岩場を登りはじめた。岬を迂回して、むこう側にでる道が見つからなかったし、そろそろ、ここらあたりで戻らないと、友人たちの集落に戻れなくなるかと思ったからである。

岩場を登りつめると、羊歯の下生えの叢みのところどころに、針葉樹が茂っているという景色にもどった。ここは、友人たちの通路になっていないらしく、踏分道のようなものは、見あたらなかった。

南のほうにむかって、五分ばかり進んだとき、行手の針葉樹の林が、ざわざわと騒いだ。そして、羊歯の葉がなぎたおされ、巨大なものが出現した。

それは、無細工に大きな頭部をふりたて、おれたちの行手に立ちふさがった。前肢には二本の指しかついていない。巨大な頭部には、不揃いな乱杭歯が、むきだしになっている。見るからに醜悪な生物だった。傷を受けているらしく、上体が血まみれになっていた。

「逃げろ」

おれは、由紀子に声をかけて、走りだした。

そいつは、頭のてっぺんまでの高さが、四メートルを越えていた。もし、現代の東京に出現したら、二階の窓に首をだすような恰好にちがいない。したがって、頭から尾の先まで計れば、七、八メートルにはなるだろう。イワキリュウとは比べものにならない、巨大な体軀である。

しばらく走りつづけ、そのものを引きはなしたとき、由紀子が、だしぬけに立ちどまり、あえぎながら言った。

「ミカサリュウよ」

「なに、ミカサリュウだって！」

おれは、大声をあげて、訊きかえした。

ミカサリュウというのは、北海道三笠市から、化石が発見されている、日本最初の肉食恐

竜である。発見されたのは、頭骨だけで、一九七六年の暮であった。

これまで、日本では、旧日本領サハリンのニッポンリュウなど、草食恐竜の化石は発掘されているが、調査が行きとどいていないためもあって、肉食恐竜の化石は、出ていなかった。ミカサリュウの発見は、世界的な大ニュースというべきである。もし、これが、アメリカなら、カーネギー財団あたりが出資して、探検隊が派遣されるくらい、ニューズ・バリューのある発見である。

しかし、日本の大新聞は、隣国の汚職には興味があっても、古生物学上の大発見には、ほとんど興味を示さず、簡単な「怪獣発見」の記事ですましてしまった。

ティラノサウルス科の化石は、ほとんど、北米とモンゴルで発見されている。アメリカのそれが、ティラノサウルス・レックス——暴君竜の王者と命名されているのに対して、ソ連では、タルボサウルスと命名されている。名前はどうであれ、体長十五メートルという巨大な体軀をもつ、史上最大の陸棲肉食動物であることに変りはない。しかし、これらの化石は、いずれも、白亜紀末の内陸地帯で発見されている。

それに対して、ミカサリュウは、当時のアジア大陸の海側にちかいところで発見されている。白亜紀末には、日本列島は、まだ島ではなく、アジア大陸の東端を占めていた。そのころは、津軽海峡をへだてるプラキストン線はなかったから、北海道も東北も、アジア大陸の東端の同一の動物相（ファウナ）をもつ地域だった。

ミカサリュウは、頭骨の大きさから推定して、六メートルの全長をもつものと考えられた。ティラノサウルス科の矮小化した地方亜種とも考えられるし、あるいは成長しきっていない個体の化石が、たまたま発見されたケースとも解釈できる。

おれたちが出くわした奴は、七、八メートルの体長を持っていた。

由紀子が止まってしまったので、まもなく、ミカサリュウは、追いついてきた。由紀子にしてみれば、生きたティラノサウルス科の標本を、観察する機会に恵まれ、おおいに学究心を燃やしはじめたのだろうが、おれのほうは、そうは行かなかった。なにしろ、相手は、獲物になりそうな動物と見れば、情け容赦なく襲いかかる肉食動物である。

いまや、おれたち二人の生命のほうが、問題だった。

おれは、ベルトからタイヤチェーンをとりはずし、振りまわしはじめた。

ティラノサウルスについては、ひとつの異説がある。北米やモンゴルで発見された化石では、大腿部の関節に、奇妙な病痕がある。その病痕は、関節炎のためだと説明されている。白亜紀末になって、巨大化するという定向進化をとげたメガロサウルス上科に属する肉食恐竜は、体長十五メートル、体重十トンというような大きさにまで達し、捕食動物としては過適応におちいってしまったという。つまり、大きくなりすぎたわけである。かれらは、その体重を機能的に生かせるだけの関節形状をもたなかったため、すべて関節炎をわずらっていたと説明される。

足の痛みをこらえながら、他の動物を捕食するわけにはいかない。かれらは、死んだ恐竜の肉を食っていたのではないか、という疑問が提出されるようになった。肉食恐竜の王者は、一挙に屍肉食のハイエナの生態にまで、おとしめられたのである。

だが、おれの目のまえにいるミカサリュウは、決して、鈍重ではなかった。関節炎を病んでいるとは、とても思えない活潑な動きを示した。海辺にちかいところに棲むミカサリュウは、あまりにも巨大化しすぎる進化の過適応を回避し、地方亜種として頃合な大きさに、おちついたのかもしれない。

おれは、鎖り鎌の分銅のように、タイヤチェーンを振りまわし、ミカサリュウの右手に、かなりの打撃を与えたつもりだった。しかし、巨大な肉食動物は、いっこうに、ひるんだ様子をみせなかった。まるで、痛みを感じないかのようにみえた。

事実、かれらの退化した二本指の前肢は、捕食行動には、たいした役割をはたしているわけではない。しかも、哺乳類ほど神経組織が発達していないから、少々の打撃にはひるまない。

おれと由紀子は、一本の針葉樹の幹のかげに逃げこんだ。ミカサリュウは、木のまえで立ちどまり、巨大な口をひらいて咆哮した。木のどちら側から廻りこむべきか、迷っているようだった。

おれは、幹の右側から顔をだし、チェーンをふりまわしながら、やつの足めがけて、叩き

つけた。チェーンの先端は、三本趾（ゆび）のついた足首の上のところを、ばしっと叩いた。鉄の重量がめりこみ、皮膚を切りさいた。今度は、あきらかに痛手を受けたらしく、ミカサリュウは、唸りながら、首をふりまわした。巨大な頭部が迫ってくるので、その鼻面めがけてチェーンを振りおろすと、皮膚が破れ、血を噴きだした。しかし、それによって、上体をかたむけてきたミカサリュウの動きを、止められるわけではなかった。ぐっと突きだしてくる巨大な頭部が、木の幹に食らいつく寸前に、おれは、横っとびに避けた。

「走れ、由紀子！」

おれは、はねおきながら、由紀子に声をかけた。ふたたび、二人して走りだすと、ミカサリュウをひきはなすことができた。

羊歯の叢みのなかを逃げながら、おれは、ときおり振りむいた。何度目かに振りむいたとき、ミカサリュウは、五十メートルばかり後方で、止まっていた。その前後に動くものがいる。イワキリュウの群である。かれらが敵か味方か判らないが、ともかく、おれたちを追っているミカサリュウを牽制してくれたことは、まちがいない。

おれは、由紀子に声をかけて、もときた道を戻りはじめた。

ミカサリュウのまわりには、五、六頭のイワキリュウが群がっていた。そのなかに、繃帯をしたやつがいた。さきほど、おれたち二人を、護衛してきてくれた友人たちにちがいない。巨大なティラノサウルス属は、敏捷に動きまわる連中を、もてあましているようである。

しかし、友人たちのほうも、白骨の剣で仕留められるような、なまやさしい相手と戦っているわけではない。

横側からまわりこんだ一頭が、ミカサリュウの脚めがけて、白骨の剣を突きたてようとした。だが、剣はまっぷたつに折れ、はねとばされた持主の上に、三本趾の大きな足が、振りおろされた。

友人たちのうちから犠牲者がでたのを見て、おれは、チェーンを振りまわしながら、駈けよった。さきほど、すこしばかり傷つけた左足首めがけて、横殴りにチェーンを打ちつけると、血がとびちった。反対側を向いていた首が、こっちへ向きなおったので、おれは、二、三歩さがりながら、鼻面めがけて一撃して、とびのいた。

巨体がのけぞったところで、むこう側から繃帯が、攻撃をかけた。白骨の剣は、有効な打撃にはならないが、すくなくとも、強大な顎を、引きつけておく役にはたっている。

おれは、足首の同じ個所めがけて、くりかえし、チェーンを叩きつけた。

二、三歩ふみだしたミカサリュウは、あきらかに、片脚をひきずっていた。足首のところは、皮も肉もそげおちて、白い骨がむきだしになっていた。

おれは、やや横にまわり、足首の裏側にまわるように、チェーンを振りまわした。チェーンは、アキレス腱に命中したが、まだ、それだけでは、打撃になっていない。そのとき、横合から、一頭がとびだして、白骨の剣を突きだした。チェーンの打撃で、厚い表皮が剝がさ

れ、むきだしになった腱のところに、尖った刃先が突きさされた。
　巨体が平衡を失って、左側に倒れてきた。ミカサリュウは、右脚で地をかいて起きあがろうとする。だが、バランスをとることができず、もがくばかりである。退化した二本趾の小さな前肢は、まったく助けにならない。巨体が、倒れたまま円を描きはじめたので、頭部もチェーンの射程内に入った。チェーンを振りあげて叩きつけると、片眼がつぶれた。おれは、めちゃめちゃにチェーンを振りおろした。
「横から狙うのよ」
　由紀子が叫びたてた。そうだ、恐竜の頭蓋骨には、側頭部に二つの穴があいているのだ。
　おれは、チェーンを横なぐりにして、攻撃しはじめた。側頭部の外皮をぶちやぶったところで、ミカサリュウは、ぐっと頭をもちあげた。おれの友人の一人が、その背にとびのったからである。おれは、チェーンを持ちかえて、前面から叩きつけて、牽制した。ふたたび、頭部が、こちら側にむきなおったので、横なぐりの攻撃にもどった。
　何度めかの攻撃で、チェーンの先が、側頭部にめりこんだとき、巨大な体が、大きくそりかえった。太い尾や、まだ健在な片脚などの動きが、きゅうにチグハグになった。まるで痙攣しているようで、もはや反撃してはこなくなった。
　おれは、動かなくなった頭部にまわりこんで、側頭部の傷めがけて、ジャッキ・ハンドルを突きさし、内部をかきまわすように、こじりあげた。頭部が、はねあがったように起きあ

がり、ハンドルは、おれの手から、もぎとられた。だが、その頭部は、ぱたりと落ち、動かなくなった。それでもまだ、後脚と尾は、ひくひくと動きつづけていた。
　由紀子は、血だらけになったおれのほうに近よってきて、いったんしがみついてから、するりと身をぬけだし、巨大な頭部に近よった。
　おれが破壊した側頭窓から、脳漿が流れだしていた。由紀子は、そこに立ったまま、じっと見まもっていた。
「チッポケな脳ミソの神話が崩れたわけね」
　由紀子は、そう言ってから、説明してくれた。
　恐竜の脳のメカニズムについては、ほとんど判っていない。化石からみて、脳腔の容積を推測し、その二分の一が、脳容積だと決められていた。なぜ、二分の一かというと、現存のスフェノドン（ムカシトカゲ）や、ワニの脳腔には、その容積の半分しか脳がつまっていないから、恐竜もそうにちがいないと、推定されたからである。
　もし、ティラノサウルス属が、冷血で、脳腔の半分の脳しか持っていなかったとすれば、スローモーション・フィルムのような緩慢な動きしかできなかったはずである。
　ともかく、おれたちは、ミカサリュウを斃すことができた。繃帯を巻いた友人も、おれたちとの再会を、喜んでくれているようだった。
　繃帯は、叫び声をあげて、歩きはじめた。まるで、いっしょについてこいと言っているよ

うだった。

　二十分ばかり歩くと、ひとつの岩山の下にでた。繃帯は、そこで立ちどまった。岩壁の下に、大きな岩が張りだし、羊歯がおおいかぶさっているところがある。奥行きのすくない岩屋になっている。

　繃帯は、岩屋のなかに入りこんで、ピンポン玉のように目をくるくるさせながら、おれのほうを見まもった。

　おれと由紀子は、岩角を乗りこえて、岩屋のなかに入りこんだ。そのとたんに、ふたたび血の臭いが鼻をついた。

　岩屋のなかにうずくまっているものを見て、おれは、タイヤチェーンに手をかけて、身がまえた。そこには、一頭のミカサリュウの巨体があった。

　繃帯は、おれの手を押しとどめるようにして、ミカサリュウのほうに、一歩ちかよった。おれは、おそるおそる近づきながら、巨体のそばに、小さな体が、三つ四つ、横たおしになっているのを認めた。そして、それらは、いっこうに動こうとしなかった。大きいやつも、小さいやつも、すでに死んでいたのである。巨大な体の横にまわりこんでみると、横腹が大きく破られ、内臓がどろりととびだし、おびただしい血潮の溜りができあがっていた。

「歯の痕だわ」

　そこここに死んでいる二メートルばかりの死体をあらためながら、由紀子が叫んだ。

　それらの死体には、巨大な顎（あぎと）によってつけられた傷が、ついていた。おそらく、このミカサリュウの仔どもたちは、一噛みで絶命したにちがいない。巨大な死体のほうも、やはり、それを上まわる体軀をもつ、同じミカサリュウによって、噛みころされたにちがいない。

「さっきのやつが……」

　おれは、身ぶるいしながら、さきほど、血まみれの姿で出現し、おれたちの手で斃されたミカサリュウのことを思いだした。

「一家心中とでも呼ぶべきかしら……」

　由紀子が、そう呟いたとき、おれは、もうひとつの例を、思いだしていた。あのとき、イワキリュウの母親も、自分の子を食っていた。その突発事件に驚いたボスは、母親を殺した。高度の知能をもつイワキリュウのあいだで、その行為が、死に値する反社会的行為とされていることが判る。

　おれたちは、岩屋をあとにして、集落のほうへむかって、ゆっくりと戻りはじめた。

　おれにも、なにかが、つかめはじめていた。五十万ボルトの高圧電流は、おれたち二人を、車もろとも、タイムスリップさせ、白亜紀末期へと、吹きとばした。そして、それは、おれたちの知る恐竜絶滅の時代だった。もちろん、それは、一年や二年で完了するような現象ではない。恐竜という種のうえに翳（かげ）りがではじめてから、おそらく何万、何十万年もかけて、大絶滅が完了するのだろう。

「恐竜は、共食いによって、亡びたんだ」

おれは、勢いこんで、言った。恐竜絶滅の原因については、さまざまな説がある。造山運動説、寒波襲来説などが、ポピュラーであるが、ほかにも、いろいろな説がある。中生代末期に裸子植物から被子植物への植生の転換が起こる。被子植物にふくまれるストリキニーネなどのアルカロイドの中毒のため絶滅したという説もある。しかし、いずれの説も、決め手を欠いている。

「そう単純には割りきれないわ。でも、共食いをはじめるきっかけになった、なにかの原因があるはずよ。宇宙線による遺伝子異変かもしれないわね。地球をとりまく、ヴァン・アレン帯に亀裂が生じて、宇宙線が濾過されずに地上に降りそそいだ。その宇宙線は、進化の頂上にのぼりつめた種族にかぎって、遺伝子のバランスを崩したとも考えられる。特に恐竜は、毛がなかったから」

おれは、うなずいた。

それは、極度に発達した種(しゅ)の、種としての自壊作業にもとづく、退嬰(たいえい)現象だったともいえる。

ティラノサウルス類やブロントサウルス類は、巨大化するという定向進化の頂点に達し、それ以上は巨大化できない限界にきていた。ドロマエオサウルス類は、人類の先行型として、巨大な頭脳を発達させたが、すきまだらけの頭蓋骨の限界いっぱいまで、脳容積をふやして

しまった。

恐竜類は、進化の袋小路に入りこんでしまったのである。

もはや、マイナー・チェンジをしたくらいでは、次の段階に飛躍進化できないくらい、遺伝子の形質が固定化されていた。

そこに、なにかの要素が、引き金の役をはたしたのである。超新星の爆発によって、あるいは、ヴァン・アレン帯の割れ目によって、おびただしい宇宙線が、地上にふりそそいだ。

毛や羽毛のある鳥や哺乳類は、生きのびた。毛のないものでも、ヘビ、トカゲ、カメ、ワニなど、それこそ「ちっぽけな脳みそ」をもった連中は、宇宙線の照射をうけてたとえ遺伝子に狂いが生じても、どちらの方向へも適応していく潜在力をもっていた。

しかし、恐竜だけは、違っていた。温血という体組織を獲得しながら、それを維持する充分な能力をもたず、遺伝子の構造の限界ぎりぎりまで、無理な進化を重ねてきた。

かれらに対する影響は、大きかった。仔を扶養するという、鳥類に先がけて獲得した習性は、まっさきに狂いはじめた。かれらには、仔を暖かくつつみこむ毛も羽毛も、備わっていなかった。

地球の生物の進化をつかさどる大きな存在は、恐竜をマイナー・チェンジすることを、あきらめたにちがいない。もはや、どのようなマイナー・チェンジを行なっても、このモデルを存続させることは、不可能だと知ったからである。

そして、主（ロード）、あるいは神とでも呼ぶべき何かは、試作品（プロトタイプ）のまま、ながいあいだ――二億年もの年月、お倉（くら）にしておいた哺乳類というモデルに、フルチェンジをほどこし、市販してみようという気になったにちがいない。

だが、哺乳類というモデルも、何度もモデル・チェンジをくりかえし、人類という最終量産タイプにおちついたときには、さまざまな欠陥が、目につきはじめた。

爆発する人口、自然破壊、戦争、公害など、さまざまなマイナス面を、生みだしている。

「人類にも、絶滅するときが来るんだな？」

「そう、二十世紀は、その翳（かげ）りが現われた、はじめじゃないかしら」おれと由紀子は、うなずきあった。

大相撲の滅亡

小林恭二

1　王立相撲研究所名誉所長、サー・トーマス・リプトンの挨拶（あいさつ）

拍手とともに、トーマス・リプトン卿（きょう）が登壇する。リプトン卿はその恰幅（かっぷく）のいい体軀（たいく）を幾分そらせ気味に咳払（せきばら）いをひとつすると、鷹揚（おうよう）に話しはじめる。

「皆さんも御存知の通り、このレスリングに似たスポーツについて本格的な研究がはじまったのは、近々二十年のことです。にもかかわらず、この研究は毎年おそるべきスピードで進（しん）捗（ちょく）しました。そして、今やその全容が明らかにされるのも時間の問題と言われております。それはひとえにここにお集りの研究者及び、民間の篤志家（とくしか）の皆さんの御努力のたまものであります。ここに政府を代表してあつくお礼を申し上げる次第です。

さて、今回のシンポジウムでは三人のパネラーの皆さんに、大相撲の滅亡について語っていただきます。言うまでもないことですが、大相撲の滅亡は、相撲というスポーツを考える上で避けて通れない大問題であるとともに、二十世紀から二十一世紀にかけて大隆盛を誇りながら、あっという間に謎の没落をとげた日本国を考える上でも、見逃せないモデルケースです。

幸いにして、今回のパネラーの皆さんはいずれ劣らぬ第一級の相撲研究者であるとともに、それぞれ専門分野においても確固たる地位を有する碩学ばかりであります。大相撲の滅亡について、おそらくは従来の相撲研究の枠を超えた新しい視座が提出されるものでありましょう。その期待の切なることを語ってこの第五回相撲研究者学術会議の開会の辞とさせていただきます」

大きな拍手に送られてリプトン卿、下手へと去る。

2　アイオワ州立大学理学部クレア・コーフマン博士の演説

続いて登場したのは白衣姿のクレア・コーフマン博士である。博士はたいそう小柄で痩せぎす。すかさず「ワシュウヤマ！」の掛け声がかかる。会場がどっとわく。博士は一瞬むっとするも、すぐ気をとりなおして大学ノートを開く。

「わたしは、大相撲の滅亡について、主として生物学的な見地から述べさせていただこうと思う。どうか御静聴願いたい。

わたしの結論は実に簡単なものであります。彼らの滅亡の原因はただひとつ。つまり太りすぎなのであります。皆さんは実に簡単なことを見落としておる。あんなに太ってスポーツなんぞできる筈がないのだ。むしろ、あんな不健康なスポーツが何年にもわたって隆盛を誇ったことの方が問題なのだ。そもそも人間、太ってロクなことがないのであります。やたらずうずうしくなるわ、意味なく偉そうにするわ、声はでかいわ、デリカシーはないわ、痩せてる人間をバカにするわ、汗はかくわ、大食いだわ」

会場から今度は「イシンリキ！」のかけ声。聴衆げらげら笑う。男、その度の強そうな眼鏡で野次の方向をにらみつけるも、スポットライトに目を射られた様子で、すぐ草稿に目を落とす。

「ま、いいでしょう。わたしは真実を語るだけだ。

大相撲への巨漢力士の台頭は一九八〇年代の小錦の登場を嚆矢とする。皆さん御存知の相撲界最古の巨漢力士です。発掘された骨及び当時の記録を照らしあわせてみると、最大時で五五〇ポンドから六〇〇ポンドあったと見られる。後の巨漢力士からみるとかわいいものだが、これでも日本人の目には脅威に映ったらしく、当時のマスコミには、

『技が未熟だ』

『心がなっとらん』
『醜怪だ』
『気持わりぃ』
『元寇以来の国難』
『シコふまにゃシコを』

といった反小錦的あるいは反巨漢力士的意見が散見されます。

が、大型力士はほどなく長い低迷期を迎えることとなる。彼らの肉体と精神が、その急速な重量化に即応することができず、あちらこちらで悲鳴をあげはじめたのです。当時の巨漢力士は例外なく内臓疾患やら、膝関節の摩耗やら、腰椎の変形やらに苦しみ、一時的に好成績をあげてもすぐに致命的故障を負うのが常でありました。

この事態が一変するのは二十一世紀に入ってからです。どう事態が変化したかというと、力士の食性が変化したのです。わたしの研究によると、二〇〇二年頃から再度力士の巨大化がはじまるが、それは食性の変化と相前後して起こっている。それはこんな具合にはじまったと思われます。

ある親方、そう仮に山登親方とでもしましょうか、彼はどうやったら力士たちの体質改善ができるか、日頃ない知恵をしぼっていたが、ある時ふとグッドアイデアを思いつく。

『大型力士がうまく育たないのはひょっとして食べもんのせいと違うか』

それまでの力士の食生活は非常にバランスのとれたものでした。彼らはチャンコ鍋とかゴッツァンデスとか呼ばれるシチュー料理を常食としていましたが、これにはおよそ思いつく限りの栄養素が、当時の最新スポーツ医学にのっとって、バランスよくしかも大量にぶちこまれており、栄養的には最上のものとされていました。山登親方はこれに疑問を抱いたのであります。

『動物園の象はあれだけ大きな身体で草しか食わん。鯨はプランクトンとかいう虫みたいなもん食っとるが風邪ひとつひかん。ライオンは肉しか食わん、海豹は魚しか食わん。でもみーんな元気にやっとる。それが人間だけは、健康のためにはいろんなもん食わないかんいうて、あれやこれや食いまくって、それでもって身体壊しとる。ひょっとしていろんなもん食うのが身体に悪いんと違うか。毎日同じもんばかり食っとった方が相撲強くなるんと違うか』

スポーツマンらしくきわめて単純な精神の持ち主である山登親方は、早速自分の部屋に戻り、それを試してみました。すなわち、野菜の好きな力士には野菜ばかり食わせ、肉の好きな力士には肉ばかり食わせたのです。

結果は親方の目論見通りでした。野菜ばかり食った力士も、肉ばかり食った力士も見事健康なまま巨大化しました。山登親方はこのふたりをそれぞれ草食竜、肉食竜となづけました。

この草食竜、肉食竜はともに、その後に横綱にまで昇進し、特に草食竜は八十一連勝を達

成し不世出の大横綱として後に神としてまつられたことは皆さんも御存知の通りです」
　会場がざわつく。
「ちょっと待ってください」
　会場の中ほどの紳士が手をあげた。
「確かに、草食竜、肉食竜という力士が存在したことは我々も知っているが、その名のごとく同じものしか食べなかったという記録はどこにもない。あなたの推論はお話としては面白いが科学的とは言いかねる」
「そういう意見がでることは予期していました。むろん、実証はちゃーんとしてあります。これを見てください」
　博士が壇上においたのは、二個の頭蓋骨模型である。
「こちらが草食竜の、こちらが肉食竜の頭蓋骨模型です。まず、草食竜の方。御覧の通り顎関節の幅が異常に広い。しかも歯よりもずっと低いレベルにある。これは上下の歯をすべて同時に接触させ、えさを押しつぶすために最適な構造です。
　次に肉食竜。こちらは草食竜とはまったく違う。巨大な肉塊を切り裂くため顎ははさみのようになっています。顎の関節の位置も高い。これは肉食動物に多く見られる顎構造です。
　それから、歯にも注目してください。草食竜は臼歯中心だが、肉食竜の方はかくのごとき乱杭歯です。更には草食竜の場合、骨と一緒に多くの小石が出土している。この小石は胃中

の植物繊維をくだくため、彼がのみこんだものと考えられる。これなども彼が信じられぬほどの量の植物を摂取していた傍証となります」
　会場はしんとする。
「よろしいですか。では話を続けさせていただく。
　この山登親方の成功はあっという間に相撲界に広がったと思われます。そしてそれ以後、力士はみな単一の食物から栄養を摂り、しこうして、ますます個性的に巨大化していきました。
　たとえば二十一世紀中葉の横綱琴馬場は、九〇〇ポンドの巨漢でしたが、その骨格は実にユニークなものでした。巨大な内臓器官を支えるため骨盤が下さがりとなり、そればかりか恥骨がはりだして内臓を受けとめるかたちとなりました。足は短くなりましたが、その分手と首が長くなりました。これは相撲で言うフトコロが広くなる効果を持ったのは言うまでもありません。更には、莫大な体重を支えるため、足裏が象のごとき円形となりました。
　総じて言えば、この琴馬場の体型は白亜紀前期に栄えたブラキオサウルスに酷似しています。ブラキオサウルスは重量七〇トンほどもあった大型恐竜で、首をのばした高さは四階建てのビルディングにも匹敵しました。彼らが常食としていたのは、もっぱら木の芽、それも木の高いところにある新芽でした。
　さて、ここからが重要なのですが、そこから類推して琴馬場はもっぱら木の芽、それも新

芽を常食にしていたに違いないとわたしは考えるのです。

つまりです。食性を単純化した力士たちは、その理由ははかりかねるものの、その身体の形状を徐々に古代の恐竜どもにもとめていったというのが、わたしの推論なのです。

このような例は他にも多く見られます。

たとえば、記録に残る沢山錦の風貌は間違いなく肉食恐竜のそれを示しています。

抜群山は生の魚しか食わなかったと言われていますが、アサガヤから出土した彼の骨を見ると、両手はほとんど魚のひれのようなものに変貌しています。

わたしの推測によれば、二十一世紀後半にはほとんどの力士が恐竜化していたと思われます。実際の話、平均体重が六〇〇ポンドにもなろうとする者たちが、人間であり続けられる筈がありません。

とすれば当然のことながら、精神面における退行も並行して著しく進んでいた筈であります。なんとなれば、人間太ってロクなことがないからであります。

そう、人間太るとずうずうしくなるわ、暑苦しくなるわ、声はでかくなるわ、ずぼらになるわ、無神経になるわ、借金ふみたおすわ、人のこといじめるわ、威張るわ、頭悪くなるわ、獰猛になるわ、色魔になるわ、人非人になるわ、とにかく太った奴らは恐竜みたいなもんなのであります。そうですとも、体重八〇キロを超えた人間はすべて、能なしの、おたんこなすの、どてかぼちゃの、ポンポコプーの、ヘナヘナパーの、とにかくアロサウルスにも劣る

ようなやつなのです。

というわけで、大相撲の滅亡の理由はすべていまわしき肥満に起因しているのであります。わたしの見るところ、この会場にも肥満のしすぎで滅亡を間近にひかえているような御仁がいっぱいいる。まあ、せいぜい気をつけることですな」

博士はそう言って聴衆をひとにらみすると下手にさがる。聴衆はあっけにとられた様子で拍手もない。

3 パリ第二大学ジャン・ポール・ブルジョアジー教授の演説

白衣の男にかわってあらわれたのは、今度はうってかわってでっぷりと太った男である。教授は大儀そうに演壇につくと、体格に似ぬかぼそい声で話しはじめる。

「いやはや、ああいう予断と偏見に満ちた人間がいるとは、困ったものですな。ああいう人間がいるから我々肥満者は生きにくい。実際、痩せている人間ときたら意地は悪いし、神経質だし、ちょっとのことにもすぐ怒るし、人のことをあしざまに言うし、ひどいのになるとデブは生きる資格がないなんて平気で言う。自分を何様だと思ってるんでしょうな。ま、それはそれとして、コーフマン博士の意見には基本的かつ決定的な事実誤認がいくつかみられます。

そのひとつは二十一世紀に入ると、ほとんどの力士が巨大化（まあ彼に言わせると恐竜化ですが）したということ。

確かに、二〇〇キロ台の力士も多くなりましたし、三〇〇キロを超す力士も珍しくなくなりました。わたしの調べたところの最重量力士は沼王という力士で、晩年には三五〇キロにも達したと言います。しかしながら、一面小兵力士もまた大相撲の全歴史を通じて存在し続けました。

たとえば沼王と同時代に活躍した自棄嵐は一一〇キロ台で三十五場所にわたって大関をつとめましたし、猫の富士は実に九八キロの軽量で関脇を七場所つとめました。ちなみに、猫の富士は金星を五個あげていますが、そのうちの二個は先ほど話にあがった草食竜から奪ったものであります。

わたしは大相撲滅亡の原因は、力士の巨大化とはまったく無縁だと考えます。

では何か？　ずばり言ってそれは大相撲の極度の繁栄にあります。

御存知の通り、大相撲は二十一世紀中葉、日本の国力を背景に極盛期を迎えました。

大相撲は全世界の注目するところとなり、ゆくところ巨額のカネが動くようになりました。

たとえば、このユカタを見てください。右胸のところに小さくShell と書いてある。この広告料が当時のカネで三億円とも四億円とも言われます。左胸にCoke。これも同様の値段。それから背中にまわって、『ナボナはお菓子の横綱です』。これが驚くなかれ三十億円だったと言われます」

会場から「ほーっ」という声。

「これだけでもすごいものですが、これに加えて百億単位の放映料、更には湯呑み、フロシキ、せんべい、フンドシ、鬢付油、ブロマイド、キーホルダー、ジャケット、まんじゅうなどの大相撲グッズを合わせると、大相撲一場所で動くカネは、小国の国家予算を優にしのぐとまで言われました。

これだけカネが動いて堕落が生じない筈がありません。

二十世紀の半ばまで、大相撲はハングリースポーツの一面を濃くもっていました。力士の多くは貧しい農家の出身で、食うためなら何でもするというのが、力士のプロトタイプとなっていました。

それが二十一世紀に入って一流の力士はおろか、十両になるのがやっとの力士でも年間数億の収入を得るようになりました。それでもってちょっと顔がいいとかになると、更に莫大なカネがころがりこむ。相撲をやめた後も後援会が何かと面倒をみてくれる。

世の親たちが、こぞって子供を力士にしたがったのは当然と言わねばなりません。

たとえば、ここに栃蒲鉾という二十一世紀のはじめに大関になった力士の記録があります。ちょっとふりかえってみましょう。

栃蒲鉾はものごころつくとともに父親から相撲のてほどきをされました。父親は若い頃力

士をめざしていたのですが、怪我ではたせず、息子に夢をたくしたのです。彼は繰り返し言いました。おまえは将来横綱、それも名門春日野部屋の横綱となるのだ、と。

幸い、栃蒲鉾は十年にひとりという才能に恵まれていたため、英才教育は見事実を結び、リトル相撲に入った頃には、栃木に栃蒲鉾ありの声がきこえるようになります。

中学に入ると、栃蒲鉾の強さに磨きがかかり、近郷の力自慢の大人でもかなわなくなります。こうなればマスコミがほうっておく筈もなく、栃蒲鉾が所属する中学の相撲部には常に地元紙の記者がはりつくことになりました。が、これは栃蒲鉾にとって必ずしも幸せな結果をもたらしませんでした。栃蒲鉾はこのために、凡庸な教師たちの嫉妬の的となり『相撲がつよけりゃいいってもんじゃない』とか『この父親の操り人形が』とか『のぼせやがって』とか『大耳野郎』とか言われていじめられるようになったのです。

この経験は栃蒲鉾少年をひどく懐疑的にさせました。

高校進学後、栃蒲鉾の動向はその地方では社会問題にまでなりました。というのも、その地方は甲子園でおこなわれる全国高校相撲大会で長らく優勝しておらず、天才栃蒲鉾に期待をよせたのです。

が、一年二年と栃蒲鉾の属する馬力高校は甲子園にゆくことができませんでした。理由は明白、栃蒲鉾と他の相撲部員の実力の差がありすぎたのです。マスコミは、馬力高校が負け

るたびに、栃蒲鉾以外の相撲部員がふがいないからだと責めたてました。

栃蒲鉾は今度は他の相撲部員の憎悪の対象とされました。

栃蒲鉾はここにおいてマスコミを深く恨みました。それと同時に、他の相撲部員をマスコミの攻撃にさらさないため、自分の力のすべてを出しきっても甲子園相撲大会に出場しようと決意します。

この栃蒲鉾のスポーツマンらしからぬ爽やかな決意は、ほどなく他の部員たちにつたわるところとなり、彼らは大いに感動するとともに、今まで自分たちがひがみ根性から栃蒲鉾をいじめたことを後悔するようになりました。

その年の夏、馬力高校相撲部は驚異的な強さで県予選を勝ち抜き、甲子園への切符を手にしました。

夏の全国大会では、けっきょく馬力高校はベスト4どまりでしたが、栃蒲鉾の投げ技は全国の相撲ファンの目を釘付けにし、彼は当然名門春日野部屋に入門することになると思われました。

しかし、その年から導入されたドラフト制は栃蒲鉾の夢をはばみました。栃蒲鉾は三流もいいところの藪波部屋から指名されたのです。マスコミは栃蒲鉾がバカなスポーツマンらしく、思考放棄して藪波部屋に入ることをのぞみましたが、彼は藪波部屋に入るのを拒否し、大学相撲に進みます。

その後、栃蒲鉾は世紀のスキャンダル『空腹の一日』を経て、あこがれの春日野部屋に入りますが、この時には相撲にかける情熱は完全に擦り切れてしまった後でした。

彼は莫大な契約金で、マイクロソフトの株と国債を買う一方、原宿にクッキーとクレープの店、自由が丘にアクセサリーとギフトの店をオープンさせました。

栃蒲鉾はその後、大関にはなんとか昇進しましたが、横綱にはなれませんでした。稽古嫌いもあるでしょうが、大事な試合で必ずふがいなく負けてしまうのを常としていたからです。当時の人々はそれを見て、やれ精神力がないだの、手抜きだの、細く長く生きようとしてるだの、金の亡者だのと批判しました。

しかし、実のところ真相は別にあったと思われます。栃蒲鉾は徹底的に相撲に飽きていたのです。いや、相撲自体は嫌いでなかったかもしれません。しかし、彼は相撲界をとりまくカネとマスコミにとことん嫌気がさしていたのです。

結局のところ、栃蒲鉾は凡庸な成績を残したまま早々と大相撲を去りました。この彼の生き方は、その後の相撲界に大いなるニヒリズムの影をおとすことになります。

若い入門者たちは、栃蒲鉾を見て思いました。

『あれだけ才能があっても横綱になれないのだろうか？　いや、違う。栃蒲鉾関は横綱になれなかったのではなく、ならなかったのだ。苦労して横綱になったところで、責任ばかり大きく、稼げるカネは大関とさして違わないのを知ってて、栃蒲鉾関はわざと横綱にならなかったのだ。なんというナウい生き方！　そもそもオレたちが相撲をやるのはカネのためだもんね。名誉のためじゃないもんね。同じカネがもうかるなら楽な方がいいに決ってる。寿命削って横綱を張るよりは、そこそこやって大関、苦労して関脇になるよりは適当にやって小結、これぞコストパフォーマンスにひきあう二十一世紀の相撲取の生き方だ、よーし楽して生きるぞ』

この考えは相撲取のみならず、一般の青年たちにもカッコいいものとして受け入れられ、大相撲は更にファン層を広げるという皮肉な結果を得ました。が、そんなわけで土俵からは名勝負が失われてゆき、大相撲はどんどん空疎なものとなってゆきました。

無論、親方たちは口々に、

『これというのもみーんなあの手抜きの栃蒲鉾が悪いのだ』とか、

『ワシらの若い頃はカネのことなんかこれっぽっちも考えなかったもんじゃ』とか言いあいましたが、その舌の根もかわかぬうちに、より大きな利権を獲得するため、暗闘につぐ暗闘をくりひろげていたわけですから、若い力士に示しがつく筈もありませんでした。

かくして、大相撲は滅亡への道を歩みはじめました。その後のことは皆さんが御存知の通りです。

結局のところ、大相撲滅亡の原因はカネとマスコミにあります。あまりにもカネとマスコミが大相撲に集中した結果、大相撲はその前の時代に滅びたベースボールのように動きがと

れなくなったのです。力士が恐竜化したのではなく、大相撲という組織が恐竜化したのです。これが大相撲滅亡の原因のすべてであります」

でっぷり太った男、軽く一礼して下手へと去る。

4　成都工科大学諸葛愚昧博士の演説

長身の男が西条凡児のごとく自ら拍手をしながら登場する。

「いや、面白い御意見でしたな。栄極まれば自ら衰う。まったく世の中うまくできています。しかし惜しいことにブルジョアジー教授は肝心のことを忘れておられる。大相撲は日本で生まれ、日本で滅亡したスポーツです。それを考えるにあたって、日本の特殊性への考察を抜きにしてどうして正鵠を射た結論を導き出すことができましょうや。

というわけで、わたしは日本という国の特殊性から大相撲の滅亡を考えてみました。

西洋の人々はよく、我々東洋人をいっしょくたにして考えます。あれも東洋の神秘これも東洋の神秘といった具合に。しかし、これはとてつもなくおおざっぱな考え方です。実際、我々中国人は実に合理的な民族です。我々には、日本人のあの不可思議な行動様式は到底理解できません。おそらく韓国人もタイ人もフィリピン人もインドネシア人もマレーシア人もインド人もカンボジア人も理解しかねるものと思われます。（もっとも我が中国の宿敵であ

るベトナム人には理解できるかもしれませんが。）

その神秘な日本の中でも特に神秘なのが相撲であります。

本来スポーツは一個の完成された美であるべきです。なのになぜ相撲は醜悪なコスチュームで競うのでしょう。

あるいは、スポーツは平等であるべきです。なのになぜ相撲にはあんなに階級があるのでしょう。

相撲は、決して大袈裟な表現でなく近代最大の謎なのです。その謎が二十世紀から二十一世紀にかけて日本の中心にあった。これを我々はどう考えたらいいのでしょう。

ここでわたしはひとつの仮説をたててみました。

すなわち、相撲は日本民族のあらゆる近代へのアンチの意思表明であり、それゆえ日本民族からあれだけ熱烈な支持を得たのだ、という仮説です。

たとえば、かつて相撲界でよく言われた言葉に『武士の情け』というのがありました。これについてちょっと説明しましょう。

ここに千秋楽を七勝七敗で迎えた力士がいるとします。彼は、ここで一勝すると八勝七敗で勝ち越しとなり、次の場所での昇進が約束されます。反対にここで負けると地位が降下し、下手をすると十両落ちをします。この差は甚大なものです。皆さんはこういう場合、さぞや当の力士は緊張したとお思いでしょう。

しかし、事実はまったく逆でした。千秋楽を七勝七敗で迎えた力士は皆、鼻唄(はなうた)まじりで土俵にのぼりました。

なぜでしょう？　この答こそ『武士の情け』に他なりません。日本の社会ではこういう時対戦相手は絶対勝ってはならないのです。自分も七勝七敗ならともかく、そうでなければとりあえず道を譲る。これが武士道なのです。

万が一、七勝七敗の力士に勝ってしまうとその力士はもはや相撲界、いや日本では生きてゆけません。なぜなら日本社会は武士道にそむくものは絶対受け入れないからです。更に言えば、わざと負けた力士は絶対そのことをもらしてはいけません。自分は全力を尽くしたけれども、それよりも相手が強かった、ということにしておかねばならないのです。ですから、千秋楽、七勝七敗の力士と対戦する力士は、いつも必要以上に闘志満々をよそおいます。それに対して、七勝七敗の力士はいかにも心細気な演技をして土俵にのぼらねばなりません。日本の観客たちは、決して七勝七敗力士が負けないことを知っていますが、それでも心配そうに彼をみつめます。この三者の呼吸の中に日本の美の心があるのです。そして、それは我々ガイジンには絶対理解できないものなのです。

我々が理解できない相撲をとりまくメンタリティーと言えば、『武士の情け』の他に『ユーシューの美』というのもあります。

これは引(ひ)き際(ぎわ)のきれいさとでも訳すべきものですが、これがまた相撲においては、たいへ

んなウェートを占めています。

力士が横綱になると、翌日から親方たちは彼の引退時期を考えはじめます。というのも、親方たちは、その力士がいかに横綱にふさわしい相撲をとるかということより、いかに横綱の名に恥じない引き際を見せるかということを心配しているからなのです。

そんなものですから、横綱在位中いかに素晴らしい記録をうちたてても、引き際があっさりしてない力士は決して大横綱とは呼ばれない反面、どんなに凡庸な横綱でも力の衰えを知るや電光石火で引退した者は、名横綱と呼ばれます。

実際、二十世紀末の横綱屋島などは、横綱在位三場所で、しかもその三場所をすべて優勝しながら、体力の衰えを理由に引退しました。彼はその潔(いさぎよ)さから『花は桜よ、山は白富士、相撲取なら屋島関』と歌われました。もっとも後に明らかにされたところによりますと、当時スター不足に悩んでいた相撲協会が、窮余の一策としていやがる屋島を無理やり引退させたというのが真相のようですが。

そろそろ結論にいきましょう。

わたしはこれらの事実を調査してつくづく思ったことがあります。それはこの相撲こそは史上もっとも不可思議な、そしてもっとも反近代的なスポーツだということです。そして、それはまったく日本人の不可思議で反近代的なメンタリティーによっているのです。わたしはこのようなスポーツが、ひいてはこのような人種が、二十一世紀まで生き伸びたこと自体

が奇跡だと考えます。となれば、その滅亡は外的もしくは内的な原因によるよりも、むしろ寿命がきたからと考える方がリーズナブルであります。彼らは、自ら引退の時期をさとって滅亡していったのです。それ以外に滅亡の原因はないとわたしは確信します。御静聴ありがとうございました」

盛大な拍手。男、堂々と胸をはって退場。

5　サー・トーマス・リプトンの挨拶(あいさつ)

冒頭の挨拶を述べたトーマス・リプトン卿(きょう)が再び登場する。

「三人の御説を皆さん、どう思われたでしょうか。わたしにはいずれも真相らしく思われました。おそらく、いろいろな要素が複雑にからまりあった結果、大相撲は滅亡したのでありましょう。大相撲の滅亡の原因は、日本民族の滅亡の原因と同じく、もっともっと総合的なものなのです。では恒例にのっとり、不可思議な大相撲と不可思議な日本民族が滅亡したことを祝って乾杯したいと思います。皆さん、お手元にシャンパンはお持ちでしょうか？　では皆さん、日本民族の滅亡と世界の平和を祝して乾杯！」

乾杯のあと、聴衆盛大な拍手。リプトン卿満面の笑みで退場。

クラシック・パーク

景山民夫

「あー、おっがねがった！」

映画館を出て、野蒜準三(のびるじゅんぞう)が最初に口にしたのは、そういう言葉だった。

「んだな、おっがなかったなや」と、野蒜につづいて映画館から真夏の太陽の下に出てきた同僚の藁火仁志(わらびひとし)も、目を瞬(またた)かせながら同様の感想を述べた。

「にしてもよ」と、駅に向かって歩きながら、藁火は首を傾(かし)げた。

「あのドケチの町長が、なして映画代から電車賃まで公費使って、俺たち二人に『ジュラシック・パーク』観てこいなんて命令出したんかな」

「その点がな、俺にも納得いかねえ点なのよ。うちの町には、四年前に銀映座がつぶれっちまってから一軒の映画館もねえんだから、まあこの霜尻(しもじり)の町まで観に来るっきゃねえのは仕方ねえとしてもよ、なして『ジュラシック・パーク』っていう風に、作品まで指定したんだ

かがな」
「そんなに文化的な映画とも思えねがったしなあ」
　自分たちの町までの電車の切符を自動券売機ではなく窓口で買い、しっかりと領収書をもらいつつ、藁火はまた、首を傾げた。
「町役場の鑑賞指定出すかどうかの判断なら、俺たち観光課ではなくて、教育課の職員よこすだろうしよ」
「いぐら何でも、あんなおっがねえだけの映画に、町の教育委員会の指定が出るわけもねえよな。後ろの席の小学生、ティラノザウルスが人間喰ったとこで泣いたべ」
「俺の隣のガキんちょは小便チビッて、おっ母ァに殴られとった」
「わがんねえな？」
「なして『ジュラシック・パーク』なんだべな？」
　腕組みをして首を傾げた二人を乗せて、第三セクターの運営に移行したおかげで、何とか廃線の憂き目を見ずに運行がつづけられている、ディーゼル車輛二両だけのローカル線は、麦畑の中をガタンゴトンと走って行った。
「おお、野蒜課長補佐に藁火主任、帰ったか。どうだった映画は？　参考になったべ、大いに勉強になったんでないか」
　町役場に戻った二人に、町長の膳舞（ぜんまい）源次郎は、〝発展〟と自筆の金釘流（かなくぎりゅう）で大書した扇子（せんす）を

バタバタ音を立てて使いながら声をかけた。
「勉強といえば、ま、古生物学の勉強にはなったと思いまっし」と、野蒜が渋々答えた。
「だけんど」と、藁火がその言葉をうけて言った。
「うちの町は、福島県のいわき市みてえに恐竜の化石が出るわけでもねえし、観光課員としては、あまり勉強の成果を仕事に生かせるとも思えねぐて、ちょっと申し訳ねえんですが」
「いや、とにかく観てきてもらって、話はそれからと思ったもんだから、詳しいこと、何も説明してねえんで、それは仕方ねえ。実はな……」と言って、膳舞町長は、二人に向かって手招きした。
「君たち二人に、折入って話がある。ま、町長室さ入って」
　顔を見合わせた野蒜と藁火を尻目に、膳舞はそう言うと、さっさと自分の執務室、といっても六畳ほどの古ぼけた板の間の部屋であるが、そこへ通じる引き戸を開いて入って行ってしまった。
「折入って話が、だと」
「あのフレーズが出ると、町の財政赤字が二割増えるって、前の観光課長だった築紫（つくし）さんが言ってたもんな」
「築紫さんて、あの、猿崩しの崖から身を投げて死んだっちゅう、あの人か？」
「んだ、蟒蛇（うわばみ）谷のゴルフ場開発の件で失敗して、責任とって投身自殺したっちゅう、あの人

だ。あれから六年になるけんど、いまだに遺体は見つかっとらんけどな」
「俺は、まだ死にたぐねえな」
「俺も、まだ死にたぐねえ。一昨日、母ちゃんから四回目の妊娠を告げられたばかりだもの」
扉の前でボソボソ語り合っている二人に、町長の「おーい、なして来ねえのか。早く入ってこい」という言葉が飛んで、野蒜と藁火は仕方なく町長室に足を踏み入れた。
「んじゃ、そこ閉めて。折入って内密の話があるから、そこ閉めろって」
立て付けの悪い引き戸を、グリグリギギと藁火が閉め終えると、町長は二人に、机のこちら側のパイプ椅子に座るように命じた。
「ま、諸君も既に知っておるようにだな」
扇子をパチンパチンと、閉じたり開いたりしながら、膳舞町長はいつもの説教口調で喋りはじめた。
「当、蔵敷町の経済の状態というのは、バブル崩壊のあおりをまともにくらったせいもあって、非常に逼迫しておるわけです」
「あの、町長。ちょっとお言葉を返すようですが、町の予算の赤字は既に十億円に近くなっているわけでして、その、逼迫という言葉は、ゆとりが無い状態をいうわけですから、この場合は適切でないんでないかと」

野蒜がそう言うと、藁火もうなずきながら後に従った。
「それに、うちの町の赤字はバブルとは何の関係もなくて、見切り発車のゴルフ場開発がそもそもの発端だったんでないんでしょうか。後はその、買い手も決定してないのに開発やっちまった資金の、金融機関からの借入金の利子が積りつもっただけで」
「それがバブル崩壊だっちゅーとるんです。バブルさえ崩壊せんだったら、あのゴルフ場の買い手はいくらでもあった筈です」
そう言い切られてしまっては、二人に返す言葉はなかった。
「そこで儂が考えついたのが、起死回生の経済立て直し案というわけでね、一大観光開発プロジェクトを町をあげて推進したい」
「猿崩しの崖、何メートルある?」と、野蒜が小声で藁火に訊ねた。
「普段なら五十メートルはあるだけどね、今年は夏前の長雨で、崖の上から川面までが、四十五、六メートルってとこかね。でもその分、切り立った岩が水没しとるで、あんまし痛くなく死ねるかもしんね」
「話を聞かんかね」と、膳舞町長が大声を出したので、二人の会話はそこで打ち切りとなった。
「しかもだ、これは単に観光客を誘致するだけのプロジェクトではないのです。なるほど、昨年一年間で、我が蔵敷町を訪れた観光客は、たったの百八十余名。それも大半は、どこで

どう勘違いしたのか、岡山県の食敷市と間違えて来た人たちだった。しかし、これからは違います。このプロジェクトにより、観光客は来る、プロジェクト関連の仕事に従事する人間が増えることによって、過疎化の防止どころか、Uターン現象が確実に起こる。それもです、プロジェクト従事者を若い女性中心にすれば、農家の嫁不足の解消にもつながるという、一挙に三得の計画となるわけであります」

「で、何をどうするですか、具体的には？」と、藁火がショートホープに火をつけながら訊ねた。

「よかろう、儂が、ここ二年間にわたって練りに練り上げたプロジェクトの全貌を、いま白日の下に明らかにしましょうず」

妙な物言いをして、町長は自分の机の後ろ、杉板張りの壁に吊るしてある、ロールアップ式の図面を引き下ろした。その図面には、何やらアミューズメント・パークの地図のようなものが描かれていた。

「君たちに、今日わざわざ映画を観に行ってもらったのも、このプロジェクトをよりスムーズに理解してもらうためです。これぞ、蔵敷町が日本に、いや、東洋に誇る大テーマパーク・プロジェクトなのです」

「あの、出来れば日本語で説明してもらえると、判りやすいんですけんど」

「つまり、えかくデカい遊園地を作ろうと、町長はそう言うとられるんだと思うよ」と、野

蒜観光課長補佐は藁火主任に言った。

「そういうことでよろしいんでしょうか」

「そういうこと」と、膳舞町長が嬉しそうにうなずいた。

「場所はこの図で判るとおり、蟒蛇谷の元ゴルフ場計画地。あそこは既に六割がた、杉林の伐採も終っているから、後の工事の進みも早いちゅうことです」

「そのせいで、去年の台風十九号のときに鉄砲水が出て、谷の下の滑子村で十三人の死者が出ました」

「そういった尊い犠牲に報いるためにも、このプロジェクトを成功させねばならんのです」と、町長は胸を張った。

「とはいっても、これは単なる遊園地ではないよ。それでは東京ディズニーランドに勝てるわけがない。このプロジェクトの凄いところは、蔵敷町の特徴をフルに生かして、昔の日本の街並みを満喫出来るところにある」

「まあ、うちの町の特徴といえば、電気、電話、電車以外は百五十年前とほとんど変らんということしかないから。町営水道も鹿落し川の水をそのまま引いとるだけだし」と、藁火が小さな声で言った。

「それはつまり、日光江戸村みたいなものですかのう？」

野蒜の問いに、膳舞は「チッチッチッ」と顔の前で人差し指を振ってみせた。

「もっと大スケール、もっと壮大。江戸時代はおろか、奈良、飛鳥から神代の昔までを味わってもらえるものにしようというのが儂の考えです」
「それでその、俺たちが今日、映画を観に行かしてもらったのと、このプロジェクトには、どういう関係があるんだろか？」
藁火がそう訊ねると、町長はここぞとばかり胸を張った。
「実は今日、君たちに『ジュラシック・パーク』を観に行ってもらったのは、プロジェクトのトータルなイメージが、あの映画によってつかめると思ったからです。ま、儂の場合はねえ、映画になる前の原作、読んどったんじゃがねえ」
そう言うと、膳舞町長は、これ見よがしに窓の脇にある本棚の、マイケル・クライトンの上下二分冊になっている翻訳本を指さした。
「しかし、ま、概念つかむだけじゃったら、映画でも充分かと思ってね。そう、ズバリ言って、このプロジェクトの名前、遊園地の名称は、その名もズバリ！」と言って、町長は扇子をパッと開き〝発展〟の二文字を自分の頭上にかざして見得を切った。
「〝クラシック・パーク〟といいます」
野蒜と藁火は、その一言でガクン、と顎を落とし口を開いてしまった。
「蔵敷町のクラシクと、昔の街の再現の意味をひっかけて〝クラシック・パーク〟。この名称を考えついたとき、儂は自分の才能が怖しいと感じた」

「確かに怖しい」と、野蒜と藁火が同時に言った。
「そしてだ」
町長はそれも耳に入らない様子で説明をつづけた。
「名前だけではねえですぞ。あの『ジュラシック・パーク』に勝るとも劣らない企画、これがあるから近県はおろか、日本全国から観光客が押し寄せてくるという、とっておきの目玉商品も考えてあるわけです」
「それはどげなものなんですか」
野蒜が訊ねると、町長は机の前を離れて引き戸の方へと歩を運んだ。
「それを説明する前に、このプロジェクトの成功のために、どうしても必要だった人物を紹介しとかにゃならんだろね」
そう言って、膳舞は引き戸を、またガリボリベキキと音を立てて開き「おーい、ゴンゾ、こっちさ入ってこ」と事務室に向かって声をかけた。町長が口にした名を聞いて、野蒜と藁火は、また思わず顔を見合わせた。ヌッ、という音を感じさせて町長執務室に入ってきたのは身長が百八十センチを超えている大男で、背丈だけでなく横幅も相当にあり、汗まみれの開衿シャツを内側から脂肪と肉が押し広げてパンパンにはちきらせているという異様な風体の男だった。
「儂の甥っ子の鱈野目権造は知っとるよな。ここんとこずっと、東京の大学に行っとったか

ら、町から離れとったが、このプロジェクトのために、大学の研究室を辞めて蔵敷町さ戻ってきてもらった」

「あの、小学校の理科の時間に、一人で蛙十四匹解剖したゴンゾが？」

「馬芹の爺さまんとこの鶏、科学の実験だちゅうて生んだ卵をケツから押し込んで皆殺しにしたゴンゾが、東京の大学に行っとっただがね」

「ロクでもないことばっかし覚えてるんだね、君たちは」と、権造は二人を見下ろしながら東京の言葉で冷やかに言った。

「ま、いまでは日本の遺伝子工学の若手ホープと言われている僕ですが、今回、故郷の町の財政立て直しのために、一肌脱がせていただくことになりました。ひとつよろしく」

「ちゅうわけでだな、このゴンゾは遺伝子たらの研究では日本で五本の指に入るエリートよ。ゴンゾさえいてくれたら、今回のプロジェクトの成功は、まず間違いなしっちゅうこんだね」

「で、その目玉商品は何なんですか」

藁火がそう訊ねるのを待っていたかのように、権造は手に提げていたアタッシェ・ケースを机の上で開き、何本かのカプセルのような物を取り出して見せた。

「これが僕の研究の輝かしい成果というわけです。町長の依頼を受けて以来、僕は蔵敷町周辺の様々な土地をフィールドワークしてサンプルを採取してきました」

「そげに運動したわりにゃ、相変らず太っとんな」と、藁火が野蒜に向かって囁いた。

「お前、フィールドワークとフィールドアスレチックを取り違えてるんでねえか」と、野蒜は答えた。

「それによって〝クラシック・パーク〟の構想を現実のものとすることが可能となったのです」

権造は二人の会話を無視して言葉をつづけた。

「あの、何度も同じようなこと聞いて、町長さんにも申し訳ねえと思うんだどもね」と、野蒜がおそるおそる口をはさんだ。

「そろそろ、その、目玉商品ちゅうんがですね、どったらものなのか、教えてもらえねえもんだろか」

「よろしい、まずこのサンプルは何のDNAかというと……」

権造が一本のカプセルを目の前まで持ち上げて言った。

「鬼です」

「鬼？」と言って、また野蒜と藁火の顎がガクンと落ちた。

「諸君も子供の頃に聞いたこと、あるべが。板取の家が代々住職やっとる上新田の陰能寺に、鬼の角が寺の宝として蔵の中に入っとってよ、年に一回、秋の大祭のときにご開帳で見してもらえるっちゅう話はよ」

「それは、ま、俺も小学生のときに見た覚えがあるけんどもね、連れてってくれた先生は、あれは本当は鬼の角ではねえ、せいぜいが何かの化石で、角みてえに見えるから寺が檀家を増やすのに宣伝で鬼の角だって言ってるだけだって……」
「黙らっしゃい、素人が！」と、町長が大声を出した。
「ゴンゾは、ちゃーんと科学的な検査さ繰り返してだな、これがそういった生物、つまり鬼という風に古代に呼ばれておった、まあ、原始人なのか先住民族なのか宇宙人なのかは判んねども、そういった存在の角であるどいう結論に達しとるんでよ」
「少くとも、生物の肉体の一部であることは、この角の角質をコンピューターで分析した結果からも判っていることです」と、権造は誇らしげに言った。
「そして二番目のこのサンプルは……」
「次も大体は想像がつくなや」
野蒜は藁火の耳元でそう呟いた。
「河童です。これは、五本松の尻子家に代々伝わる、河童のミイラの嘴部分をサンプルとして採取して、DNAを検出することに成功したものです。これからも、明らかに生物であったという反応が出ています」
「あれも一目で、昔どこぞのテキ屋が見世物ネタで持って回っとったんを、宿代のカタかなんぞに置いていった、作りもんと判る代物だべ」

「んだな、嘴は鳥だろうって、俺の父っちゃが言うとった。胴体は毛を刈り取った猿のミイラで、それに亀の甲羅をニカワで貼っつけて、頭の皿も亀の腹んとこを丸く切ったもんだ」
二人がボソボソと耳打ちをしている間に、権造は三番目のカプセルを取り出した。
「これは人魚です」
「これも有名なやつだなや。三十年ぐれえ前に『少年マガジン』が取材に来とってよ、大伴なんたらいう研究家の人が、体はやっぱり猿でねえかって言っとったそうだ。下半身の魚みてえな部分は、体よりずっと古いそうだで、鱗なんぞは、ほとんど石みえてになってるちゅうて、時代の違うもんを強引にくっつけたのに呆れ返ったちゅう話よ」
「上半身は明らかに哺乳類のDNA、そして下半身は魚類のそれを持つという、まさに貴重なサンプルでした。そして次は、これです」
四番目のカプセルを頭上にかざして、権造が声を張った。
「これこそ、まさに〝クラシック・パーク〟の目玉中の大目玉。いままでの、鬼も河童も人魚も、いわば平面的な動きしか期待出来ない生きものでしたが、これは違う。このサンプルのDNAをクローン培養して、大人の個体に育て上げれば、その生きものは、パークの中を縦横無尽に動き回り飛び回り、まさにパークのシンボルともなるのです」
「飛び回るっちゅうと、つまり、それから生まれる生きものっちゅうのは……？」
「左様、天狗です。それもカラス天狗です。このサンプルは、鷲糞ヶ峰の金剛神社の御神体

である、天狗の嘴から採取いたしました。化石状になってはおりましたが、これまた明確な生体反応を得ることが出来たのです」
「古代鮫の歯だっちゅう結論が、戦後すぐに新聞に載ったやつではなかったべか？」
「そういう話は聞いたことがある。正式調査は、東北大がアホらしくてやんねって断ってきたらしいけどもな」
「以上の四点のサンプルから採取したDNAをベースに、僕はですね、最新のクローン培養技術を駆使して、これらの伝説上の生きものと思われてきた生物たち、即ち、鬼、河童、人魚、天狗を、この二十世紀末の日本に於て、再び肉体を持った生物、動き歩き考え行動する実在のものとして、生まれさせることの可能性に、ついに到達したのです」
「あの、もうそれは作っちまったんですかね、河童とかカラス天狗とかは」
　野蒜の質問に、権造は首を横に振った。
「いや、それはまだです。大切なのは、まず環境の整備だからね。個体が出来ても、ずっと檻に入れておかなけりゃならないようだと、クローン特有の、そっちの環境に順応してしまうという現象が起こって、パークの中での活発な活動が期待出来なくなってしまうんだな」
「いつ頃、作るんですか」
「パークの完成から逆算して、オープニング時には成体となっているように作るつもりなんだよね。それまでは実験をつづけて、どの生物がどのぐらいで大人になるかのデータを取る

作業が重要だ」
「とにかく」と、膳舞源次郎町長は誇らしげに胸を張って言った。
「諸君には当面、蟒蛇谷の工事に専念してもらいたい。ゴンゾには、町役場に隣接して研究施設を作り、さしあたり、そこでクローン培養の実験に入ってもらうことにしてある。河童や鬼や天狗が、実際に作れる段階になったならば、蟒蛇谷の方に施設を移して、そこで研究をつづけてもらう。蔵敷の町ん中、鬼や河童が歩き回るようになっても、こりゃちょっと困りもんだでねえ」
　そう言って、町長は〝発展〟の扇子で顔に風を送りながら「デヒャヒャヒャヒャ」と笑った。
「こんな費用、町長はどっから引っぱり出してきたんだべ」
　数十台のブルドーザーやパワーシャベルが間断なく動き回っている蟒蛇谷の斜面を見下しながら、ヘルメットに安全靴という姿の藁火仁志は溜め息まじりに言った。
「表向きはな、プロジェクトに賛同してくれた金融機関の融資と、施設工事の請負いとバーターに前倒しで仕事を受けてくれた建設会社の好意ってことになってるだども」と、野蒜準三が、谷を鳥瞰出来る丘の端の岩に腰かけて、缶コーヒーを片手に答えた。
「どうも町長、例の竹下総理のときの〝ふるさと創生一億円〟を、かなりプールしてたみて

だな」

「あれも強引な金の引っぱり方だったもんな。人口一万人以上の市町村にしか一億円が下りねえってんで、町役場は死亡届を半年間まったく受理しねがったしよ、新生児は全部三つ子だの五つ子だので届け出して、後から当人以外は死亡したことにしちまって、三千八百人の人口を無理矢理、一万人にデッチ上げたんだもんな」

「その金は、役場と町議会への報告では、ゴルフ場開発の損失の補塡に当てたってことになってるども、実態を知ってる築紫課長は消えちまってるべ。どうも、五千万以上、町長のポケットに残したみてでよ、それを今回、建設会社にバラまいたみてえだなや」

「それよりな」と、藁火は野蒜と並んで岩に腰を下ろし、ショートホープを作業服の胸ポケットから取り出した。

「ゴンゾの研究、本物だと思うか？」

「本物なわけがねえっぺ」と、野蒜は一蹴した。

「鬼の角も、河童のミイラも、人魚の鱗にカラス天狗の嘴も、俺たち子供の頃から、みーんな偽物だっちゅうことは知っとるだろうがよ。化石だの作りもんだってことはよ。町長自身だって、それは知っとるんでないのか」

「ちゅうことはだよ、俺たちは一体、こうやって何をやっとるわけなんだろ」

眼下の工作機械の動きを眺めて、藁火は煙草の煙を吐き出しながら、頭を抱えた。

「施設が出来ても、目玉商品が作れながったら、客なんか来っこねえべ」

「まあ、町長としてはよ、とにかくこうやって金が動けば、ゴルフ場開発の借金の一時的穴埋めにはなるって考えてんだべな」

「だども、いつかは責任とるときがくるんだべ」

「そうさ、でな、前回は行方不明になった築紫課長が責任とった形に……」

そこまで言って、野蒜蔵敷町観光課長補佐は、自分の言葉の意味にようやく気が付いた。

「それ、非常にまずいんでないかい。前回は築紫課長が責任とったちゅうこんは、今回は俺ってことになるでないの」

「だから危ねって、俺、言おうとしとんのよ」

「どうすべえ」と、野蒜は立ち上がって、コーヒーの空き缶を、眼下に見える完成したばかりの権造の研究所に向かって放り投げた。

「告発するしが、ねえんでねえの」

「告発って、駐在さんに言うだか」

「そんなことして何になるって。検察に訴えるだよ。仙台のゼネコン汚職だって、東京地検特捜部が動いたべ。証拠揃えて、検察にタレ込むしか、野蒜さん、あんだの生き残る道はねえかもしれねえよ」

「証拠って、何を揃えるだね」

「ま、一番はゴンゾの研究がインチキだってことを立証するだね。あの、カプセルに入ったサンプルのDNAあったべ。あれを盗み出して、東京のしかるべき研究所で分析してもらうだね。ゴンゾが言ってるような、鬼だのカラス天狗だののDNAでねえってことが判れば、パークの建設計画を中止させるなり、変更かけることが出来るべ。検察が動けば、業者も金融機関も考え直すんでないか」
「それだな。『ジュラシック・パーク』の映画で、サンプル盗み出したのは悪役で、最後は恐竜に喰われちまったけども、俺たちは正義のためにやるだな」
「正確に言うと、正義と保身のためだけんどもな」
そう言って、藁火は腕組みをすると、権造の研究所をハッタと見据えた。
翌日の朝には、野蒜と藁火は、第三セクターのディーゼル車輛の座席に座って、東京を目指していた。
「それにしても、なしてこんなに簡単に、DNAの入ったカプセルが盗み出せただか、俺、いまもって納得いがねえな」
野蒜は膝に置いたボストンバッグを両手で抱えながら、小さな声で藁火にそう言った。
「研究所の鍵が、ヘアピンで開く南京錠一つってのもよ」
「それが、ゴンゾの研究がインチキだっていうことの証拠でねえか」と、藁火は答えた。

「本当に貴重なサンプルなら、あんな杜撰な管理はいくら何でもしねえべ」
「んだな。研究所の中、焼酎の空き瓶だらけで、酒臭えったらなかったもんな。酔っ払って遺伝子の研究やる奴もいねえもんだろうし、やっぱしゴンゾと町長、グルになって資金転がしやって、どこかの段階で金かき集めてトンズラさ、こくつもりだったに違えねえだよ」
第三セクターのローカル線からJRへ、そして新幹線へと乗り継いで、二人が東京に辿り着いたのは、その日の夕方だった。藁火が前日に連絡をとっていた、国立大学の遺伝子工学科で助手をやっているという又従兄弟が、東京駅まで迎えに来てくれていたので、早速、DNAのカプセルを渡して検査を依頼することにした。
「これの正体っていってもねえ、DNAのあらゆるパターンと照合しなきゃならないかもしれないんで、相当に時間がかかるかもしれませんよ」と、その、権造とは正反対にスリムな体格で理知的な顔立ちの、藁火の又従兄弟の青年は言った。
「下手すると、三、四ヵ月はかかるんじゃないかな。研究の合い間にしか、コンピューター使えませんから」
「ええです、俺ら、町役場に辞表置いてきてるで、喫茶店のボーイでも、コンビニの店員でもして、のーんびり待ちますで、とにかくそのサンプルの正体を調べて下さい」
時給六百円で働いている、野蒜と藁火の勤め先のコンビニエンス・ストアに「DNAの正体が判りました」という電話がかかってきたのは、ちょうど二ヵ月後のことだった。

「ちょっと問題がありますんで、出来れば電話ではなく直接にお話を」
　国立大学まで二人が出かけてみると、助手の又従兄弟どころか、研究室の教授、助教授、聴講生までが待ちかまえていた。
「結論を、まず申し上げます。どのサンプルも、調査依頼のあったような、鬼とか河童などといった、伝説上の生物のＤＮＡではなく、れっきとした実在の生物のものでした」
「な、言ったとおりだべ」と、藁火が野蒜の肩を叩いた。
「これで町長は一巻の終りだなや」
「それもですね」と、又従兄弟は言葉をつづけた。
「遺伝子学上、非常に貴重な発見といえるものなのです。つまり、鬼の角とされていたものは、ティラノザウルスの歯の化石で、そこからティラノザウルスのＤＮＡが検出されました。他のものも同様に、河童の嘴からはイグアノドンの、人魚の鱗からは魚竜の仲間テムノドントサウルスの、そして天狗の嘴といわれるものからは空を飛ぶトカゲであるクエネオサウルスのＤＮＡが検出されたのです。これはまさに画期的な発見なのです」
「ちょっと待ってくんねが。つまり、その、それから検出されたＤＮＡは、どれもが本物の恐竜のものだったたってことけ？」
「そうです」と、又従兄弟が答えた。
「ということは、それを元にクローン培養をすると……」

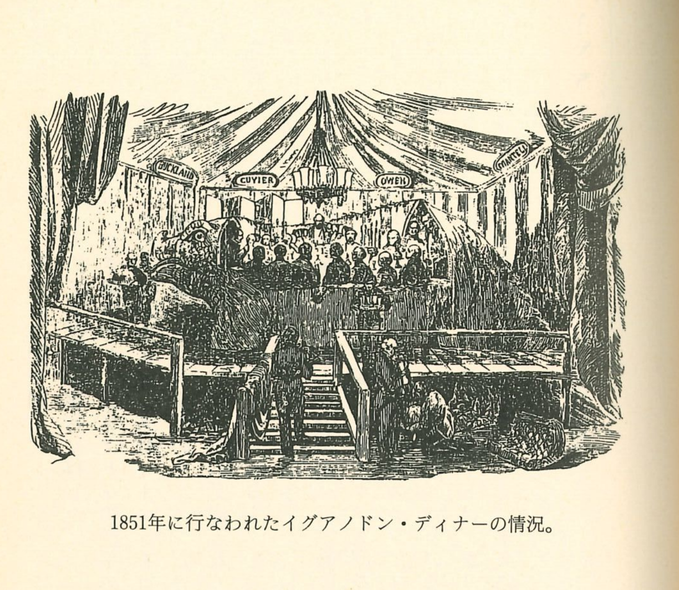
　顔を見合わせた野蒜と藁火が、大あわてで大学を飛び出し、電車を乗り継いで蔵敷町に飛んで帰ると、そこには映画の『ジュラシック・パーク』そっくりの大施設が完成していて、日本全国はおろか世界中から本物の恐竜パークの噂を聞いてつめかけた数万人の客が開園を待っていた。

恐竜レストラン

荒俣宏

博物学絵師には奇人が多い。しかしそのなかでもベンジャミン・ウォーターハウス・ホーキンズ（一八〇七－八九）ほど奇妙な人物はいなかったのではないか。ノンセンス詩人エドワード・リアとともに「ノーズリーホール」の私設動物園つきの絵師となり、史上名高い『ノーズリーホール動物誌』の出版に際してはシカやアンテロープの類を描いており、つぶらな瞳をもつシカの絵は後年ウォルト・ディズニーのバンビにも影響をおよぼしたといわれる。

しかしホーキンズが手がけた仕事のうち最大のものは、一八五一年のロンドン万博に際してクリスタル・パレス内につくられた「イグアノドン」の復原模型だろう。この万博の目玉として制作されることになった恐竜模型は、当時イギリス最高の比較解剖学者と謳われたリチャード・オーエンの指導により、ロンドン市内にあったホーキンズの作業場でつくられた。



1851年に行なわれたイグアノドン・ディナーの情況。

彼は模型を制作する途中、恐竜の模型を題材にしたショーを考案できたら話題を呼ぶのではないかと思いつき、ひとつのアイデアを実行に移した。

アイデアというのは、できあがったイグアノドンの模型のなかにテーブルを据えつけ、そこで晩餐会をひらくことだった。ホーキンズはオーエンをはじめとする招待客をアトリエに迎え、図のような大晩餐会を催した。科学者のオーエンだけはさすがに「不謹慎だ」と批判したが、この趣向はいっぺんにロンドンじゅうの話題となり、恐竜晩餐会の開催依頼が彼のもとに殺到した。ホーキンズは力を得て、ニューヨークのセントラル・パークに恐竜の模型を設置し「恐竜レストラン」を開催する企てに着手した。しかしニューヨークで模型の制作にはいったかれに対し、ヒルトン某という判事が「反宗教的」なる理由をかかげて反対運動を起こし、一八七一年のある日暴徒を煽ってホーキンズ邸を襲わせ、完成間近の模型を破壊してしまった。傷心のホーキンズは、以後プリンストンに住んで恐竜の壁画などを描きながら、晩年は無名の博物画家として淋しい日々を送ったという。しかしこのショーマンが制作したイグアノドンと「奇怪な晩餐会」のエピソードは、クリスタル・パレスに代表される一八五一年ロンドン万博の数多い逸話のひとつとして、永久に語り継がれていくだろう。

イグアノドンの唄——大人のための童話

中谷宇吉郎

カインの末裔の土地

終戦の年の北海道は、十何年ぶりの冷害に見舞われ、米は五分作か六分作という惨めさであった。豊作でさえ米の足りない北海道のことであるから、この年の冬は、誰も彼も皆深刻な食糧危機におびやかされた。

それにこの冬は、例年にない珍しい大雪であった。毎日のように、暗い空からは、とめどもなく粉雪が降りつづき、それが人々の生活の上に重苦しくおおいかぶさっていた。この雪に埋れた不安な生活の上に、陰鬱な日々がただ明け暮れて行くのを、じっと我慢して春を待つより仕方がなかった。

私たち一家は、この冬を、羊蹄山麓の疎開先で送った。此処は有島さんの『カインの末裔』の土地であって、北海道の中でも、とくに吹雪の恐ろしいところである。「吹きつける雪のためにへし折られる枯枝がややもすると投槍のように襲って来た。吹きまく風にもまれて木という木は魔女の髪のように乱れ狂った」というのは、有島さんの有名な描写である。この荒涼たる吹雪の景色は、今日も少しも変らない。そしてこの無慈悲な自然の力に虐げられている人間の姿もまた、往年の名残りを止めている。

終戦の年の冬は、この自然の猛威の他に、今一つ食糧危機という恐ろしい脅威が加わっていた。見渡す限りの土地は雪に埋もれている。吹雪の日には、雪までも白くはなく、死んだような灰色である。葉の落ちた闊葉樹はもちろんのこと、雪に蔽われた針葉樹にも、緑のは全然見られない。この一点の緑もない世界、満目ただ灰色一色の世界では、食糧の不安感が、ひしひしと人の心に迫る。「雪が解けて、たらの芽でも何でも、青いものが出て来るようになれば」と、人々は遠い春をはるかに望んで、力弱い溜息をもらす。

北海道の長い冬休みを、子供たちとこの疎開先で過した。遊び道具も本もない疎開先の生活で、とくに連日の吹雪の夜など、子供たちはよく私に話をせがんだ。幸い薪だけは豊富にあったので、どんどんストーブにくべて、その周囲に皆が寄りそっていた。勢よく燃える薪の音が、戸外の激しい風の叫びをわずかに押えて、生命の営みを辛うじて表象しているというような夜が、毎晩つづいた。電灯はもちろんうす暗かった。凄じい風の音につつまれなが

ら、それは妙に気の滅入る沈黙の世界であった。

失われた世界

子供たちは、もう浦島太郎の時代をとっくに過ぎていたので、話といっても、そう種はなかった。それに本も手近にはないので、すぐ話の種につまって、大いに弱らせられていた。ところがどうしたはずみか、荷物を片づけているうちに、妙な本が一冊ころがり出て来た。コナン・ドイルの『失われた世界(ロスト・ワールド)』の廉価本である。

これはもう二十年も前に、ロンドンでディーケ博士から貰った本である。オランダの理論物理学者であるが、理研でしばらく一緒にいたことがあるので、その後も親しくしていた。そのディーケがロンドンの学会へやって来た時、ホテルのロビーでこれを読んでいた。そして別れしなに、丁度読み終ったこの本を、私に残して行ってくれたのである。その時はすぐ読んでみて、たいへん面白かったのであるが、それなりに忘れてしまっていた。それが二十年の後に、敗戦後の北海道の僻地で、わずかな疎開荷物の中から、ひょっくり現われたのである。

これはまことに大助かりであった。南米アマゾンの秘境、人界から遠く隔絶された「失われた世界」に、ジュラ紀時代から生き残っている巨大爬虫類(はちゅうるい)が棲んでいる世界がある。その

秘密を求めて、英国の科学者たちが、敢然魔境に踏み入って行く。この「探検記」こそは、カインの末裔の土地で、連夜の吹雪にとじこめられている敗戦国の子供たちにとっては、何よりの贈り物であった。

「この本は、英国のチャレンジャー教授という先生が、南米のアマゾン河のずっと上流のところ、もちろん、人間など一度も行ったことのない秘密の世界なんだが、そこへ探検に行った時の報告なんだ。古代の恐ろしい龍だの、怪獣だのが其処に本当にいたんだよ。いつか雑誌で見たでしょう。ディノザウルス（恐龍）なんていう龍の中には、このおうちの三倍くらいもある大怪物もいたんだが、それがのそっのそっと歩いていてね。イグアノドンなんていうのもいたんだよ。ああいう龍は、ジュラ紀といって、一億年以上も昔の時代には、たくさんいたことがよくわかっているんだ。化石になって残っているからね。それが今でも生きていて、そういう古代の生物ばかり住んでいる世界が、アマゾン河の上流にはあるんだ。どうだ、今夜からこの本を一節ずつ読んでやろうか」というと、もちろん子供たちは、歓声をあげた。

まだ小学校へ行っている下の男の子などは、もうそれだけで、すっかり上気してしまった。頬を赤くしながら、眼を輝かせて、「本当？　本当？」と、覗き込む。もちろん小説であるから、写真や図などはない。幸い秘境に到る道順を描いたスケッチ地図が、一枚だけついていたので、それを説明してやると、この方は簡単に承服してしまった。

「これが断崖だよ。低いところで千尺、高いところは三千尺もある。真っすぐにつき立った岩壁でずっと囲まれているんで、この崖の上は、外の世界からすっかり切り離されているんだ。だからこういうところに、古代の生物が生き残っていても、誰も知らなかったわけだよ。もっともこの断崖へ行くまでが、たいへんなんだ。これがアマゾン河の上流で、ここだって普通の船は行かないところなんだ。これからこの支流を小さい丸木舟でのぼって行くんだが、もちろん普通の人間は誰も行ったことのないところさ。それでもこの辺までは、まだ人食人種がところどころにいてね、道など一本もない恐ろしい密林の奥から首切りの祭の太鼓の音が、かすかに聞えてくることもあったのさ。しかしこの細くなっているところね、これから先は、カヌーも行けなくなるんで、みんなで荷物をせおって歩いて行ったんだよ。もうここまで来ると、人食人種だっていなくなって、人間なんて、全然いないところになっちゃうのさ。ほら此処に印をつけてあるだろう。此処で初めてプテロダクティルを見たんだよ。プテロダクティルって、翼のある龍なんだ。戦闘機くらいもあるかな」

ここらあたりで、下の子供はもうすっかり興奮してしまって、すうすうと寝息のような息をしている。そして眼を光らせながら、身動きもしない。二番目の娘も「本当らしいわ。よくそんな本があったね」という。ただ一人、もう女学校にはいっていた長女だけが、なかなか承知しない。「小説でしょう。小説みたいな本じゃないの」と、英語がわかりもしないくせに、生意気なことをいう。

科学の素晴しい進歩によって、人間はもう地球上のことは、何もかも知り尽くしたように思っている。しかしまだ何が隠されているかしれたものではない。ロスト・ワールドの恐龍や翼肢龍こそは、さすがにその現存の可能性は考えられないが、それに類する事件は、近代になっても、時々実際に起っている。少し昔の話でよければ、南米の海岸に、牛くらいの大きさの動物で、脚が六本ある怪物の屍体が、漂着したことがある。大部分腐っていたので、その詳細な記録は残っていないが、そういう怪物が、まだ神秘の大洋の何処かで、ひそかに棲息しているのかもしれないと考えた方が、かえって科学の心に通ずるであろう。

一億年前の怪魚

『コンティキ号漂流記』の著者は、まことに巧いことをいっている。古代インカ帝国の住民が使っていたのと、全く同じ筏を造って、この若い探検家は、南米からタヒチ島の近くまで、自分で漂流をしてみたのである。そして南太平洋の大洋の真ん中で、いろいろ不思議な生物に遭遇している。

近代の文明人は、大きいそして強力な汽船を造って、即ち科学の巨大な力を利用して、七洋を隈なく調べつくしているが、ただ一つ大切なことを忘れている。それはそういう立派な汽船は、船体も大きくまたスクリューの音も大きいということである。近代の探検船では遭

遇しなかった怪物を、筏の漂流者が目撃することがあっても、別に不思議ではない。海面すれすれのところに、じっと坐り込んで、二カ月以上も潮流と風だけに送られて、あの広大な太平洋の真ん中を漂ってみた人は他にはいない。そういう人間だけにその姿を見せる怪異な生物がいたとしても、別に不思議ではない。この漂流者は若い考古学者であって、小説家ではない。しかもこの冒険は、今度の大戦後に行われた、ごく最近の話である。

海はあまりにも広く、船が通るところは、その極めて僅かな部分にすぎない。しかもわれわれの知識は、海面からごく近いところの水中だけに限られている。深海探測といっても、調べ得るところは、海の面積からみたら問題にならない。大洋のただ中、その深所には、何が棲んでいるか、人間の想像の及ぶところではない。その一番良い例としては、先年南アフリカの海底から、少なくも五千万年以上、多分一億年くらいの太古の怪魚が、本当に生きた姿で出現した異常な事件を挙げるべきであろう。

それは昭和十三年十二月二十二日のことであった。即ち日華事変が最高潮に達していた頃の話である。英領南アフリカ喜望峰の近くに、東(イースト)ロンドンという小さい漁港がある。その西方数マイルの海底から、トロール網にかかって、不思議な魚が揚って来た。全体長一メートル半、目方七十五キロの大きい魚で、全身は青色に輝いた金属光沢を帯び、魚体は脂ぎってぴかぴか光っていた。頭は西洋兜のような形をし、胸及び腹の鰭は、赤児の腕の先に羽がついたような怪異な恰好になっている。さらに著しい特徴は、脊柱がずっと尾鰭の真ん中をつ

き抜けて伸び出ていることである。如何にも古色蒼然として、一見古代生物の異風をそなえた曲者（くせもの）であった。この怪魚こそは、中生代の白堊紀、即ち少なくも五千万年以上の太古において、既に地球上からその姿を消していた、総鰭魚類の空棘魚科に属する化石魚であったのである。

この種類の化石魚は、古代生物としても、非常に古いもので、巨大爬虫類のディノザウルスなどが、その怪異な姿を見せていた時代、即ちジュラ紀よりも、さらに一億年近い太古において、既に地球上に出現していたものである。最初にこの魚類の化石の現われるのは、古生代のデボン紀であって、それは現在の知識では、現代から、二、三億年も昔のことと推定されている。それからずっとこの異魚は、たいした体形の変化もなく、中生代末の白堊紀即ち、ジュラ紀の次の時代まで、太古の海中に種属の繁栄をつづけて来た。そして巨大爬虫類の怪物たちが、地球上からその姿を消した次の時代には、この魚たちも完全に絶滅してしまったのである。少なくも昭和十三年の十二月二十二日までは、そう信ぜられてきていた。

ところがその五千万年ないし一億年以前の魚が、突如として南阿の一角に出現し、暫時ではあったが、現にこの太陽の光の下で、その生命を見せてくれたのであるから、この方面の専門学者たちはもちろんのこと、世界中の人々をあっと驚かせたのも、当然のことである。当時この話は日本の新聞にも載り、また翌年の『科学』には、詳しい紹介がなされた。それは匿名の紹介であったが、原著よりもわかりよい立派なものであった。しかし丁度その時期

は、漢口陥落の提灯行列を過ぎて間もない頃であった。日本人の大多数は、南アフリカで獲れた奇魚などに、かかわりあってはいられなかった。

この話は、コナン・ドイルとはちがって、本当の話である。その標本は、漁獲後間もなく東ロンドン博物館の主事ラチマー女史の手許に送られた。同女史はこの方面の専門家ではなかったが、その怪魚の異風に驚き、標本のスケッチに簡単な説明をつけて、グラハムスタウンの大学のスミス博士に手紙で報告した。ところが時たまたまクリスマスの季節にあたったために、手紙の配達がおくれ、僅か四百マイルを隔てたスミス博士の手に入るまでに、十日以上の日子を要した。そしてことの重大さに驚愕したスミス博士が、折返し電話で連絡した時には、残念ながら、魚体は既に腐敗し、外形だけが剥製となって残っていたのである。それでも確かに五千万年以上の昔に絶滅したはずの空棘魚であることは、確認されたのであるが、学問的に最も重要な部分、即ち内臓その他の軟体部分は、遂に神秘のベールの彼方に隠されたまま、闇から闇に葬り去られたのである。

世界中のこの方面の学者たちは、スミス博士の第一報を、英国の科学専門雑誌ネーチュア誌上で知って、驚愕と歓喜との念に打たれ、この発見を「今世紀における動物学界随一の大収穫」とした。まさに文字どおりの奇蹟であったのである。この発見の意義が、あまりにも大きかっただけに、その重要部分の喪失は、甚だしい失望感をもって迎えられた。その詳細を記述したスミス博士の第二報が、同じくネーチュア誌上に出た時は、世界各国の学者から、

激越な批判の手紙がたくさん来たそうである。これは突如冥界からの通信に接して驚愕した人間が、いざ話しかけようとした時に、その通信が切れたような感じである。惜しいといえば惜しいが、またそれでよいのだという気もする。それほどの異常事件なのである。

ロスト・ワールドの話の前置きとしては、この「化石魚の蘇生」の話くらい巧い話は、一寸他に類がないであろう。それで第一夜は、子供たちにこの現世化石魚の話をすることにした。ストーブに薪を追加しながら、南アフリカの海底から突如として出現した、五千万年ないし一億年前の太古の怪魚の話を聞いている子供たちは、戸外の吹雪も、乏しい食糧のことも、すっかり忘れたようであった。

幸いこの詳しい紹介の載っている『科学』が手許にあったので、一通り話をしたところで、写真を見せてやった。剝製にされた怪魚の写真と、ジュラ紀の空棘魚の復原図とを並べたところを見ると、両者は全く一致している。これにはさすがの長女もいささか驚いたようであった。

復原図の方が、もちろんこの現世空棘魚の出現以前に描かれていたものである。化石として残るのは、たいてい硬骨部分の一部と、その他の部分のかすかな痕跡とである。そういう断片的な材料をもとにして、化石学者たちは、原体制の復原という困難な仕事をなしとげる。それはいわば「小説」をつくるのである。しかしこの場合は、その「小説」にぴったりとあった生きた証拠が出て来たのであるから、その点だけでもまさに驚くべきことである。「ほ

んとにねえ」と、最後に長女が陥落する。これでロスト・ワールドの話に、安心してはいって行けるわけである。

アマゾンの秘境

この「探検記」は、チャレンジャー教授の探検隊に参加したデイリー・ガゼットの記者マローン君の手記から成っている。チャレンジャー教授は、癇癪持ちで、人間嫌いで、時々狂暴性を発揮する人物である。学界からもロンドン人からもひどく嫌われているが、動物学者としては、独創的な考えを持ち、かつ甚だ実行力に富んだ人である。そのチャレンジャー教授は、かつて単身南米アマゾン上流の秘境を探検したことがある。アマゾンの上流は、たくさんの支流に分れていて、その中には、まだ白人の足を踏み入れたことのない支流がいくつも残されている。

チャレンジャー教授は、カヌーに乗って、その支流の一つを遡航した。そしてインディアンの部落で、丁度今息を引きとったばかりの白人の遺骸にあう。その僅かな遺品を整理して、この白人は、アメリカのデトロイトの市民ホワイトという人であることを知る。画家でありかつ詩人であるこのホワイト君は、アメリカの物質文化に飽き果てた挙句、新しい霊感を求めて、アマゾンの秘境を放浪していた男であるらしい。「疲れ切った姿で、クルプリの棲む

密林の方から、さまよい出て来て、部落にたどりついた途端に倒れた」という以外には、この男のことは何もわからない。クルプリというのは、南米インディアンの間に広く行き渡っている伝説で、山の精を意味する。この山の精に遭った人は、再び生きて人間の社会には戻れないと、昔からかたく信ぜられていたのである。

ホワイト君は、死ぬまで肌身はなさず、一冊の写生帳を持っていた。ぼろぼろになったジャケットの下から出て来たこの写生帳が、話の発端である。その中には、いろいろな写生があるが、終りの方に、平原の彼方に、切り立った断崖に縁どられた高台の絵がある。そしてその次に、巨大な怪物の写生があって、それでおしまいになっている。そしてそれはジュラ紀の恐龍の一種ステゴザウルスそのままの姿なのである。

初めてチャレンジャー教授を訪れた時、マローン君は、この写生帳を見せられる。そしてランケスター氏の著書に出ているステゴザウルスの復原図とくらべて見て、両者が完全に一致していることにひどく驚いたのである。これが始まりで、いろいろな経緯の末、けっきょくチャレンジャー教授を首班とする探検隊が、この失われた世界に出かけ、ステゴザウルスやイグアノドンの生きた姿を見ることになるわけである。南アフリカにおける現世空棘魚の発見の話は、このコナン・ドイルの小説を、まさに地で行ったものといえよう。

昨年の暮、英国のエベレスト遠征隊が、ヒマラヤで奇怪な人獣の足跡を発見したという記事が、一時新聞紙上を賑わしたことがあった。その時、食卓の話題に上ったのは、この五年

前のロスト・ワールドの話である。もう大きくなった子供たちは、「おやじさんの嘘」もすっかりばれてしまっていたが、人界を遠く離れた、アマゾンの秘境がもつ特異の妖しい美しさは、依然として頭の底に残っていたらしい。「ほら、あの失われた世界への入口のところ、カヌーがもう行けなくなるあたりね。あの細い川のところ、あそことても綺麗だったわ」といい出したのは、そんなことなどとても憶えていそうもない二女であった。

探検隊を乗せた二隻のカヌーは、隠された細流の入口に達する、浅黄色の葦が一面に生い茂った葦叢の中を、数百ヤードばかり無理にカヌーを押して行くと、突如として、静かな浅い流れに出る。水は驚くほど透明で底は美しい砂になっている。川幅は二十ヤードくらいの狭い流れであって、両岸の植物は、自然の豪奢の限りを見せている。それはまさに仙境であり、これこそ失われた世界への入口なのである。繁り誇った熱帯の草木は、水面の上に生いかぶさって、自然の天蓋を作り、緑の葉をとおしてくる黄金色の日光は、黄昏を思わせる美しさである。その青緑のトンネルの下を、緑の静かな流れが行く。流れの美しさは、樹間を洩れる光によって異常な色調を帯び、不思議な美しさを呈している。その輝く水面の上を、カヌーの一櫂ごとに、数千の漣が伝わってゆく。それは神秘の国への通路として、まことに適わしいものであった。

コナン・ドイルもこのあたりの描写には大分馬力をかけているようである。どうも御本人自身が、ロスト・ワールドにあこがれているらしいところが大いにある。彼は、いつまでも

童心を失わなかった人なのであろう。子供というものは、魚粉と稲茎の粉とのまじった団子を食ったことは忘れるが、そのとき聞いたアマゾンの秘境の情景は、なかなか忘れないものである。

ヒマラヤの人獣の足跡

もっともすべての大人にも、多かれ少なかれ、この童心は残っている。ヒマラヤの怪巨人にしても、何も今度突然出現した話ではない。昭和十一年に、立教大学のナンダ・コット登攀隊が、印度に遠征した時にも、たいへんな騒ぎが起きていたそうである。ヒマラヤ山麓の村に、身の丈四十フィートの怪物が現われ、土地の住民はもとより、全印度人の間に大評判になっていた。この怪物は、汽車をまたいだり、大きい樹木を踏み倒したり、婦女子を気絶させたり、散々あばれ廻った挙句、再び山中深くその姿を消してしまった。その時足跡が残されたのであるが、それは長さ二十二インチ、幅十一インチもある巨大なもので、人間の足跡に似た形であったという。

ヒマラヤの山中に巨人かゴリラかわからない怪物が棲んでいるという伝説は、土地の人たちばかりでなく、印度人の中でも信じている人がかなりある。昨年のエベレスト登山隊長シプトン氏の手記によると、ヒマラヤの住人たちは、この怪人をヤティ（縁起の悪い雪男）と

呼んでいるそうである。シプトン氏の案内人の一人は、二年前にこのヤティに遭ったといっているが、それは半人半獣の怪物で、背丈けは五フィート六インチくらい、全身赤味がかった栗色の毛で蔽われていたが、顔だけは毛がなかったという話である。

シプトン氏が写真に撮った奇怪な足跡を、動物学者たちは、ラングール猿だと鑑定したが、シプトン氏は大分不服のようである。朝日新聞に連載された氏の手記の中から、これに関係した部分を抜萃してみるのも、興味あることであろう。この足跡を発見したのは、昨年の十一月八日のことで、エベレストに近いメンルンツェの氷河の上である。「われわれは午後三時半、峠の向う側の氷河に達し、南西の方向に下って行った。丁度午後四時、行く手の雪の上に奇妙な足跡を発見した」「奇怪な生物は少なくとも二頭以上が打ち連れて通ったことが、入り乱れた足跡によって確認された。その大きさはわれわれの山靴の跡よりは幾分長く、幅は非常に広かった。詳しく調べると、三本の幅広い足指と、別に横に張り出した大きな親指とが認められた。われわれはその足跡を追って一マイルあまり氷河を降ったが、氷がモレインに蔽われた場所で、はっきりと切れていた」

この足跡は、写真撮影もされ、また観察者がちゃんとした人だけに、汽車をまたいだ怪巨人の話とは少しちがった意味がある。従って動物学者たちも、放っておくわけには行かない。鑑定の結果、ラングール猿ということになったのであるが、これに対するシプトン氏の反対意見には、もっともなところがある。

第一に、ラングール猿は菜食動物であるが、高度一万九千フィートの氷河の上で、植物は何があるのだろうか。肉食動物ならば、氷河の下部にはモルモットもチベット鼠も棲んでいるので、それらを常食として生きて行けるが、菜食動物は、こういうところでは、生存し得ないはずである。

第二に、ラングール猿の足形は、どんなに大きいものでも、長さ八インチを越えるものは、今まで知られていない。ところが問題の足跡は、十二インチ以上と実測されている。もっとも多くの足跡は形が崩れているので、雪解けのために、幾分大きくなったと考えられる。しかし氷河の氷の上に積っていた雪は、きわめて薄く、かつ足形がはっきり残っていたところからみて、雪が解けて大きくなったとしても、大したちがいはないはずである。それでこの怪物は、既知のラングール猿よりは、遥かに大きい生物にちがいない。

この議論の当否は、ここで論議すべき問題でない。ただ一つ確かなことは、シプトン氏が「私はこの問題については門外漢で、嘴を入れる筋合のものではないが」動物学者の鑑定には異論があると言った、そのこと自身の中に、彼の童心が認められる点である。

ヒマラヤでは、この前年、即ち一昨年にも、アッサム州の密林の中に、体長九十フィート、身のたけ二十フィートの怪獣が出現して、住民を震え上がらせたという話がある。体長九十フィートのこの怪物は、ジュラ紀の恐龍に似た形をしていたといわれている。ロスト・ワールドの夢は、原子力の世界にも、なおその生命を保っているのである。

イグアノドンの唄

ロスト・ワールドの話の中で、一番子供たちに人気のあったのは、大きいくせにおとなしいイグアノドンであった。このジュラ紀の菜食性巨大爬虫類を、コナン・ドイルは原始人類の家畜と為し、象の皮膚のようなその皮の上に、粘土のマークをつけさせた。それを地質年代の錯誤と早まってはいけないので、同じ時代の空棘魚が、喜望峰州の住民と、先年ちゃんと対面をしているのである。

イグアノドンが、子供たちの間で如何に人気があったかは、次の唄でも充分うかがうことが出来る。

イグアノドンの背中に
　ゴリラが乗ってった　乗ってった
ゴリラの背中に
　お猿が乗ってった　乗ってった
お猿の背中に
　鼠が乗ってった　乗ってった

鼠の背中に
　蚊とんぼが乗ってった　乗ってった
蚊とんぼの頭の上を
　艦載機が飛んでった　飛んでった

このイグアノドンの唄を作ったのは、下の男の子である。自分の国の敗戦も、自分の身体の栄養低下も、実感としては何も知らなかった子供たちは、カインの末裔（まつえい）の土地で、「イグアノドンの唄」をうたって、至極御機嫌であった。しかしその男の子は、その後間もなく、栄養低下が禍いして、仮りそめの病気がもとで、急に亡くなってしまった。しかし生き残った娘たちは、今はきわめて元気である。

この暮から正月にかけて、私は扁桃腺（へんとうせん）の除去と、蓄膿症の手術とのために、K病院へ入院した。二十年来の懸案を片づけるためである。この道では、日本一の名国手と称えられているK博士の手術を受けるのであるから、何の不安もなく、経過もきわめて順調であった。

時々妻と交替に付き添いにやって来た長女は、何も用事がないので、初めは少し手持無沙汰のようであった。それで或る日、ロスト・ワールドを持ってやって来た。昼寝をするために、夜早く寝つかれなかった私は、十二時頃まで寝つこうとしないことにして、ベッドの上でぼんやりしていた。時々一寸目をやると、長女は夢中になって、読みふけっている。「ど

うだい、面白いのかい」ときくと、「うん、とっても」と返事をするのも億劫なように、頬をほてらせている。

「わかるのかい。大分むつかしい名前があるだろう」といっても、「そうよ。でも辞書なんか引いていられないのよ。今失われた連鎖（ミッシング・リンク）がやって来るところよ」と、受け付けもしない。もう夜中近いらしい。それでよいのだ、生きる者はどんどん育つ方がよいのだと、私は目をつぶって寝入ることにした。

（昭和二十七年三月）

水中生活者の夢＊香山滋

種村季弘

　年表をくってみると、この作品集の冒頭に収録されている『オラン・ペンデクの復讐』が第一次「宝石」懸賞募集に入選したのは、戦後も間もない昭和二十二年のことで、この小説を読むのは今度がはじめてだが、次作『海鰻荘奇談』や『蜥蜴の島』あたりからは私も当時すでに読んでいた記憶があり、指折り数えてみれば二十数年前、紅顔の中学生の頃からの読者だったわけで、思えばこの作家とのつき合いもずいぶん古いことになる。

　さて、二十年ぶりに読み返して私が端的に得た感想は、第一に、香山滋が時代の現実からほとんど時代錯誤的といっていいほど無縁であったということであり、第二に、思ったほどテーマにヴァリエーションがなく、彼の夢想の世界がかなり限定された狭い世界である、ということだった。といって、私はそのために香山の作家的評価を貶しめようとしているのではない。小説といえば風俗小説や社会派だけが大手をふってまかり通っている現今、いささ

か逆説めくかもしれないが、おのれの夢想を純粋に夢想として追求した彼のような人こそが小説の大道を行く作家ではなかったかと私自身はひそかに考えているのである。

　同時代に香山と同じようにおのれの夢想に忠実であった作家としては、久生十蘭や橘外男の名が思い浮ぶ。そうはいっても三人の間には判然とした個性的懸隔があって、たとえば久生十蘭において現実を潔癖に排除するよすがとなったのは、あの禁欲僧のようにストイックな文体の習練であり、橘外男では、そのシャルラタンな大道香具師めいた大言壮語癖が、当人がまことしやかに述べ立てれば立てるほどなにもかもが壮大なハッタリだと思わせるような無邪気な美質をそなえていて、それが薄汚れた現実にたいして作家を無垢のままにとどめる役割を果したのだった。

　香山の場合はそれぞれこの二人とは明らかに異質である。異国趣味に訴えはするが、橘ほど底抜けに放胆ではない。エンターテイナーとしては類例を見ないこまやかな文体の持主ではあるけれども、久生のように極度に知的な計算に立脚した演技的スタイルとはまたちがって、基調としては咏嘆に流れかねない華奢な抒情家の面影をのこしている。もう一つ下世話な言い方をすれば、香山の文体には、なにやら特定の一人物（それもたぶん女性）にたいして思いつめたように綿々と訴えかきくどく風情の、熱っぽい憧憬の感情がひときわいちじるしいのである。その意味では、香山の全作品がたった一人の女性にあてた長大な口説（くぜつ）であったといえないこともないので、先に私が、香山の世界が狭いといった本意もそういうことな

のである。

それでは香山滋が綿々とかきくどいていたという、その当の女性とは何者か。私の見当では、母親、もしくはそれにかわる近親者の女性ではないかと思う。

『エル・ドラドオ』と並んで収録作品のなかの白眉と見られる『オラン・ペンデク後日譚』のなかに、石上学士ともその双生児兄弟ヨハン・ヘイステルともつかない仮面の人物が、船底の一室にこもったまま、海中の生物の分布変化から隠された未知の海流を推論してゆく件りがある。この海流は炭酸石および炭酸苦土の溶解のきわめて稀薄な特異な水質のものであるために、そこに棲息するプランクトンや海老は甲殻が欠如したものとなる。すなわち、甲殻を形成すべき苦土が欠乏しているために、この特殊な海流のなかでは、すべての海中生物が裸になり、あまつさえしだいに軟体化していく。そして石上学士ことヨハン・ヘイステルの到達すべき島はその海流の行きつく涯に浮び上ってくるはずなのである。

甲殻類が軟体化していくこの逆進化論的潮流こそは、幼年時への退行の願いをかなえてくれるあの若返りの水ではなかろうか。この小説では甲殻類ばかりではなくて人間も、逆進化、もしくは幼年期退行の兆候を示すのである。オラン・ペンデク族は代を重ねた近親相姦のためにいまや滅亡寸前にさしかかっている。

「極度に血の清らかさをのみ追ってきた彼等は狭隘な土地と、限られた人口とのために単一純粋な一民族としての終末に到達しかかっている。男は男同士、女は女同士、年齢の差のみ

あって個人差を持たない。すべての男はヨハン・ヘイステル氏であり、すべての女はモアである。二百歳の、九十歳の、二十歳の、十六歳の、三歳のヨハン・ヘイステル氏であり、モアである。彼等は通常の結婚生活を持たない、年に二回限られたる日数の結婚日を持つ。その結婚季節に於てのみヨハン・ヘイステル氏達と性生活に入る。個人差の欠如と結婚季節の習俗——これは明らかに人類としての退化現象だ。」

二百歳、三百歳のヘイステル氏やモアがいるからには、オラン・ペンデク族は年齢（とし）をとらないわけではないらしい。年齢はとるが、いくら年齢をとっても「子供」なのだ。いわば彼らは固有名詞で名づけられるような個人（インディヴィドゥム）を形成せず、たんに男、女という普通名詞だけでことたりるようなヨハン・ヘイステル氏とモアでしかない。したがって、すべての性生活は兄妹相愛となり、その結果生殖がおこなわれて子供が生れても、万人が子供なのだから親子関係が成立するはずもなくて、生れた子供も兄か妹か、つまりヘイステル氏かモアかのいずれかになる。永遠に幼年期を脱しないこの退化種族ではエディプス的葛藤もなく、すべてが死の世界に閉ざされているように静謐である。

ときには衒学的なまでにきらびやかに見える生物学（とりわけ古生物学）にたいする博大な教養を自在に駆使しながら、香山滋は右のような退化的ユートピアの諸相をさまざまなヴァリエーションとして追求してやまないのである。人間はしだいに軟体化して胎児に近くなり、それとともに世界は氷河期以前に逆進化する。失われた世界（ロスト・ワールド）や秘境への彼の偏愛は、こ

とごとくこうした退化願望に、あるいはむしろ母胎還帰衝動に結びつくものであろう。
たとえば『エル・ドラドオ』の結末でも、滅び行く種族の女王ラアラ・サラアドは二千人の軟体動物の棲息する魔の沼にみずから跳び込んで軟体動物に変身し、ぶよぶよと小止みなく膨れたり縮んだりしながら、不断に変形する奇怪な生き物となって沼の水のなかに漂いはじめる。また『怪異馬霊教』の地下王国の住人たちは、活動するとき以外は四肢の骨をばらばらに解きほぐしてぐにゃぐにゃした骨抜きの肉塊となり、胎児のような姿勢で蹲ってしまう。これらの場合には明らかに羊水のなかを漂う胎児の至福状態が志向されているが、冷血動物に退行して爬虫類に酷似した女と同性愛に耽る『月ぞ悪魔』の女主人公にしても、『白蛾』のカメレオンのように環境に超適応して滅形してしまうファーギァニ公爵夫人や冬にしても、前進化段階にある流動的で無定形（アモルフル）な下等動物にむかって、個体の明確な骨骼をそなえた高等生物が解体し分解しつつ同化してしまおうとする逆進化論的一元化の熱望に抗いようもなく駆り立てられているのである。

人間の大部分が退化人間であるばかりか、香山滋が描く秘境魔境もかならずといっていいほどロスト・ワールドで、その音の死に絶えた原生林とか地下世界とか洞窟とかは、ことごとく失われた母胎への無意志的追想（レミニッサンス）から生れてきた場所であろう。そして文明人は、失われたはずの世界をふたたび眼のあたりに見て、その一切を溶解して一元的にエロス化してしまう魔力に抗しきれずに、未知の地（テラ・インコグニタ）に足を踏み入れたまま二度と帰ってはこない。形あるものは形の無いものに、文明は未開に、進化した高等生物は退行に、たえず憧れていて、いまにも自分の骨骼や殻を破ったり溶解したりして始源の混沌に向って流出しようとする（まさにエロチックな）回帰衝動に駆られている。香山滋のファンタジーの内的構造とは、およそこうしたものであろう。

香山のこの流出しようとする回帰衝動は、ときとして父権の禁止に遭遇するような場合には、ワーグナー的な激情にまで昂まることもある。わけても『海鰻荘奇談』の兄妹愛が暗澹たる挽歌のうちに水底に引きずり込まれて消亡していく件りなどに、私はまさにトリスタンとイゾルデの楽章を髣髴とするのである。ことのついでに『月ぞ悪魔』の自分の腹のなかに許婚の男を縫い込まれた両性具有者（ヘルマフロディトス）的な娘スーザもまた、香山好みの兄妹愛的な愛の観念の産物であることを指摘しておきたい。直接の着想はたぶん谷崎潤一郎の『人面疽』あたりから得たものに違いないが、この自我愛的に閉ざされた不毛な畸型美の世界は、外見のグロテスクさにもかかわらず、兄妹愛の甘美な戯れを隠しているのである。

さて、このような香山滋を一体どんな文学的系譜の上に位置づけるべきかとなると、さしあたり私は信憑に足る資料をもたない。中島河太郎氏の『探偵小説辞典』によれば、香山滋（本名山田鉀治）は明治四十二年東京に生れ、法政大学経済学部を卒業後、長らく大蔵省官吏を勤め、かたわら筏井嘉一の短歌雑誌「定型律」で作歌活動をつづけていた。作家としての登場は、先にも述べたように、昭和二十二年「宝石」懸賞入選の『オラン・ペンデクの復

讐』がきっかけでかなり遅いが、第二作『海鰻荘奇談』（昭22・宝石）が翌年早くも第一回探偵作家クラブ新人賞を得るや一躍評価を固めた。

雌伏の間に蓄積した彼の生物学的・地質学的知識がどれほど博大なものかは作品を読めば一目瞭然であろうが、文学的にも歌人らしいこまやかで華麗な筆致は同期の新人中群を抜いているといえる。作品から推測するかぎり、久生十蘭や小栗虫太郎の秘境物、江戸川乱歩の偏奇趣味など、戦前の「新青年」作家の作風が完全に自家薬籠中のものとされているのは明らかだが、そのほかに香山にいちじるしい影響を投げかけていると私に思われるのは、やや唐突な連想かもしれないが、あの明治大正昭和三代に亘った幻想作家泉鏡花ではあるまいか。『怪異馬霊教』の地下王国に集（つど）った「選ばれた人びと」のなかには、双葉山らしき青葉山関（おそらく当時の爾光尊事件にヒントを得たのであろう）とともに、「先頃物故した大家」巽杏花なる人物が紹介されている。物故年時はいささか食いちがうが、香山の念頭にはどうやらあの迷信深かった鏡花の面影が浮んでいたのではないかと思う。『夢応の鯉魚』の上田秋成や八犬傳の馬琴以来、鏡花が香山の得意とする動物変身譚の近代における巨匠であったことは、『高野聖』一篇を読んでもよくわかる。ちなみに『エル・ドラドオ』の数千の軟体化した旧家臣に守護されながら、みずから軟体吸血動物となって昔の情夫の生血を吸いとる鬼気迫る結末を読むと、『高野聖』の女主人公の裸身の周囲に、蛭や猿や鳥に変身したかつての無数の情人たちが慕い寄ってくるどこか甘い戦慄に満ちた件りがおのずと鮮明に思い起さ

れてくるにちがいないのである。

思えば鏡花も旅と驚異博物誌の作家であった（『高野聖』、『眉かくしの霊』）が、そればかりか生涯を通じて近親女性（姉）思慕の作家でもあった（『照葉狂言』）。この暗合は偶然であろうか。しかし、『アーサー・ゴードン・ピムの物語』や『ハンス・プファールの冒険旅行』の作家エドガー・A・ポオが、同時に近親相姦コンプレックスの濃厚な『リジェイア』や、『アッシャー家の崩壊』の作家でもあったことを思い合せるなら、驚異博物誌見聞記としての旅行文学と近親相姦願望の間にはなにか密接なつながりがあることを、大方の読者はたちまち察知されるであろう。

驚異博物誌と旅行文学がもともと密接な関係にあることは、途上さまざまの妖怪や異習に遭遇するホメーロスの『オデュッセイア』以来、シラノ・ド・ベルジュラックの月世界旅行、さらに現代のＳＦ宇宙旅行小説まで、すでに大方の解説者によって指摘されている通りである。そもそも変身と旅とは相互にアナロジカルな関係にあって、旅行者はさまざまの事物や世界の変身に遭遇し、その迂余曲折した旅程の彼方に驚異の博物誌を手掛りにして、好奇の眼をいっぱいに見開きながら死の世界を垣間見ようとするのである。しかし、最後に到達すべき旅の行方である死のまどろみは、円環的にそのまま誕生以前の原記憶の再発見となるべきはずの永遠の睡眠である。そしてほかでもない、誕生以前のまどろみとは、さだかならぬ白い顔の、仄かな匂いにつつまれたある女性の胸のなかにあえかに保護されていたあの至福

状態である。

香山の、さらに鏡花の作中人物が女性にたいするとき、漁色家というにはほど遠い、能動性を欠いた、徹底的に受動的な態度しか示さないのも右の消息から説明できると思う。

「その心地の得もいわれなさで、眠気がさしたのでもあるまいが、うと〱する様子で、疵の痛みがなくなつて気が遠くなつて、ひたと附つついている婦人の身体で、私は花びらの中へ包まれたやうな工合。」（『高野聖』）

「と、いましがた袋猿が下りて行ったテラスの階段を、逆に登って来るあわただしい、ぴしゃぴしゃという裸足の足音がきこえて来た。彼は本能的に警戒意識を呼び覚されて跳ね起きた。とたんに、彼は彼のからだに何者かがのしかかるような、むしろ彼が抱きかかえられるような重量感を覚えて息ぐるしくなった。……（中略）……その声はまさしくイッポリータ・ファーギァニ公爵夫人に違いない。顔が彼の額に寄せられているのであろう、甘い息がまともにふりかかる。」（『白蛾』）

見えない母、見えない姉妹は、甘い息や花びらのなかに包み込むような気配で、艱難にみちた生と意識の旅路を往く旅行者をかき抱いてくれる。だが彼を引き裂きもせず、またおのれが引き裂かれもせず、直接のあらわな接触はあらかじめ断念しているかのようである。

もうおわかりかと思うが、この近親相姦願望にもとづく受動的な内包状態への憧れを地理学的次元におきかえたのが、いわゆる秘境魔境の類であり、民俗学者たちなら「隠れ里」と

呼ぶにちがいない山間や離島の忘れられた隠密な共同体である。香山において特徴的なことは、この隠れ里が通常はスタティックに俗世間と併存していて、万一俗世間と交渉する場合にはかならず「復讐」という形式をとることである。抑圧の大洪水の波間に埋れた隠れ里の住人は、傷つけられるや一瞬復讐鬼として波立ち騒ぎ、目的を達するとまたしても元の隠れ処にひっそりと戻っていく。同じく逆進化をテーマにしたSFでも、たとえばJ・G・バラードの『沈んだ世界』のように、熱帯が永続的に叛乱して文明を破壊しつくし、トカゲやイグアナのみが棲息する世紀へと総体的に地球を逆戻りさせてしまうような攻撃的な悪意は稀薄で、血の復讐に一時はやむをえず赴きながらも、むしろ終始一貫滅びゆくものの嫋々たる挽歌を主導底音としてノスタルジーを誘う落日の世界こそが、香山のつねに愛惜してやまない逆ユートピアであったようだ。

湖上の怪物

W・A・カーティス（佐川春水訳）

謹啓、日誌を記し候事は小生年来の習慣に有之、茲に封入致置候部分は、過ぐる三ケ年間に遭遇せし出来事の顛末を、順を逐うて御披露仕候様、取揃え候ものに御座候。久しき以前、小生は新高の山、峰峙ち、鳥ならでは得も通うまじき険峻の地に、怪しき湖水ありと、仄に聞き及び候。此湖水に就きては諸説紛々として一ならず、化石と成りて掘出さるればいざ知らず、到底現代にありては、見る能わざる動物数多棲めりなど、信じ難き風評のみ、多く伝わり居り候。

抑、此湖水は、其周囲の山形より見るも原と火山の作用にて成りしものなれば時々、其中心部に於いて、恰も絶大なる噴水井が、幾万仞の地底より、奔龍の勢、茲に万斛の水量を放射するかと思わるる如き、大々的震蘯を起こし候は、左迄恠むべき義には無之と申す事に候。此大震蘯の起るに方りては、湖水忽ち暴漲して、岸辺を囲む磊塊たる赭岩を浸し、濁浪の怒

号物凄けれど、頓て震蘯の遏むと同時に、退き行く水の脚早きに取り遺されて、磯辺には、軟骨性の動物、見も馴れぬ樹木の幹、さては珍らかなる羊歯科植物など、到底地上には生育せざるは固より、石炭坑か石層中の他にては、見る事すらも叶わぬ、異様の物横わり候由、若し又好奇の人ありて、暗濁なる水中に糸を垂るれば、全身刺に蔽われたる奇魚鈎に繋るとの事に御座候。

以上は往昔黒姫の翁のものしし記録中に相見え候が、更に翁は一歩を進めて、地球の中部は、一大洞穴を成し其処には、地上にては遠き昔日に絶滅したる、動植物の今も尚、生育繁茂し居る事、さては、此湖水は、即ち此大洞穴に到る通路なりと主張致居候。

南北両極に巨口ありとの末松氏の説は、兄の熟く知らるる処にして、諸家の説を綜合するに、益々確実と相成候えば、充分信拠すべき事と存じ候。斯くて、太陽は両極の巨口より不断日光を、地球の中心部に注射しつつある事に御座候。

友人深見規矩雄と共に、双影寂しく、草茂る山路を踏みしだきて、笻をここ黒姫の湖畔に曳き候てより、指摟うれば、早や三年と相成申候。氏の同行せしは学術研究と云わんよりは、寧ろ、斯かる清純なる山野の空気を呼吸し、親しく自然に接しなば、幾分の保養ともならんかとの、覚束なき望より出でしものに有之、まこと、氏は胃弱に悩む事年久しく、苦痛激しき折々には、殆ど狂者に近き挙動さえ有りし次第に御座候。

湖水を匝る一帯の巉巌、磊々として横たわるが中に、塊の巨石、危く水を瞰う辺りに、往

昔、仙人などの住みしものかと思わるる、石造の小屋を見出し申候。素より粗造云わん方なく、隙漏る風は防ぎ難く候えども雨も稀なる此地方の、殊に暫時の仮の宿なれば、此上なき住家と頼み、玆に両人、草鞋の紐を解き申候。其後の出来事は、封入致置候日記の抜萃にて、御承知有之度候、頓首。

明治三十二年

四月一日　　　増山　武

医科大学教授

河島　好殿

＊　＊　＊　＊　＊

二十九年四月二十九日

此珍らしい湖の岸辺に打上げられて居る植物の採集で、四五日以来殊の外忙しい。深見は唯一心に釣魚をして居るが、遂々地球の中心部と湖水との通路と見る可き物を発見したと、頻に得意になって居る。又実際通じて居るのであろう、此間深見は湖水の中央に舟を浮べて釣魚をして居た時、三本結合わした、約三百尺程の糸を下げたが、底に達かぬので、岸へ戻って来て、有りったけの糸や、縄を繋ぎ合せ、五百尺計りにして、下げて見たが、まだ底は知れぬのである。

五月二日夕

過ぐる三日間は、植物の採集やら、標本を作るやらで、忙しくもあるが、又太だ有益な作業なので、暮れ行く日影が怨めしい程であった。今朝は、深見が、例の胃弱が良くないので、萎れ返って居る。気候が変ったので、大層身体に宜い様に見えたが、矢張思った程でなく、ほんの一時の事であったらしい。柔かな枯草を布いた蓐の上に横になって、独り淋しげに呻吟く態は、実に見るに忍びぬ。先ず些なりと快くなったら、早速人里へ伴れて行かねばなるまい。

此不思議な小天地を、まだ録々探検もせぬ内に、立去らなければならぬとは、自分に取って如何にも残念な事なので、寧、深見を同伴しなければよかったなど返らぬ事を悔んで居ると、突然、恐ろしい浪の音が聞えて来た。今迄眠れるが如く静穏であったのに、俄に荒れるのは怪しい。いや、そればかりでない、仮令、南から吹いて、此処は巌の陰で当らないとしたところで、風は中々強いに相違ないのに、玆では隙漏る風のそよともしないとは、愈々不思議である。若し又風が無いとすれば、濤波は立たない筈であるのに、怒号の声は刻一刻と烈しくなる。深見は……

五月三日朝

昨夜は、実に怖ろしい晩であった。夕方であったが、丁度自分が日誌を記して居ると、突然シャーという音がするので、下を見ると、土間に長く匍匐って居る物があるので、思わず慄然とした。初は蛇か何かだと思ったが、よく見ると何時の間にか、一条の水が流れ込んで

来て、焚火に触れたので、あんな鋭い音を出したのである。と見る間に諸方の間隙から、水は猶予なく入って来て、何と手の付けようも思い付かぬ間に、早や土間一面に、三寸ほどの深さとなって仕舞った。水嵩は一秒毎に増すばかりである。

扨て、斯うなって見れば、今迄聞えた波浪の音の原因も判った、深見を呼び起し、半ば曳摺る様にして戸口へ出で、畳み上げた石の隙間へ手足を懸けて家根の上へと攀じ登ったが、後は何としたものであろう。背後は削り成せる懸崖、手足の掛け様もあらばこそ。右も左も急勾配の傾斜。湖畔への通路に当って一帯の高地はあるが、翼無き身の達する術が無い。

暫く経ってから、自分は燐寸を擦った。可怪事には、此程の震蕩にも拘らず、空気は殆ど動揺しないので、燐寸は直に点火いた。見ると、小屋の半は既に水中に浸って恰ら大河の決潰した様な勢で水は西の方へと流れて居る。大小の樹木が絶えず流れて来て恐ろしい勢で、突当るので、石小屋は今にも壊れそうである。一時間許り経つと怒濤の響は、漸く静まって来て、頓て全くの静寂に復した。足の下僅か一尺計りの点迄来た水は増しも減りもせぬ。

間もなく微に私語くような音が聞えると思うと、忽ち仁王の鼾も斯くやと思わるる囂々たる響と変じ、やがて、吹き荒ぶ嵐の音に伴れて鳴動四隣を圧し、湖水は再び動揺を始めた。が、今度は水は東に向い、渦巻に捕られて行く樹の幹も家の傍を流れ去って、水嵩は減るばかりになった。遠く湖心の辺りに眸を放てば震蕩の名残と見ゆる大渦巻は今しも中窪みの圏を画き初めて朧げながら月影さえ宿す滔々たる濁水を深く、深く、深く、幾千仞の底にと落

し行く光景が、高地だけに手に取るように見えるのである。

今朝は、湖水も最早平水に復した。が、さて、馬は溺れて仕舞う、舟は毀れる、食品は湿る、折角丹精した標本も諸道具も、悉く水害を蒙って、かてて加えて、深見は大病。何うあっても不日此処を立退かねばならぬか、如何にも残念で堪らん。黒姫翁の紀行中にも、丁度昨夜の様な椿事があるが、斯ういう時は、得て地底から何か異った物を噴出する事が有る。そう言えば、あの大渦巻の捲き収めた湖水の中央に、種々の物が浮いて居る。其中の多くは、多分、木の株や枝であろう、とは思うが果して何物だか、只看たばかりでは分らない。

望遠鏡で見ると素敵に太い樹の幹、と云うよりは寧ろ切株が浮て居る。元来の樹はカリフォーニヤ産の大木位はあったに違い無い。主な部分の長さは三丈、幅は一丈許りもありそうである。それから突き出て俯けに水面に横たわって居るのは、根か枝か、長さ一丈五尺経三尺許りと見た。自分は深見の病気が少し快くなり次第、出発する心算であるが、発足前に、此木が運好く岸に流れ付いてでも呉れれば有難いが、さもなくば筏を造ってでも是非行って見る考えである。

五月四日夕

今日は、実に珍い、不思議な目に遭遇った日である。今朝起き出でて、眼鏡隻手に眺め渡すと、鏡の様な湖水の中央には、昨日の儘に木が浮んでいるが、あの黒い切株は影も見えない。元来あれは、他の浮木よりも少し離れた位置にあったのであるし、其後別に風も吹かず、

水も揺かぬのに、他の木の陰に隠れる筈は無い。思うに元来が重いので、少し水に浸れば直ぐ沈んで了う方の質でもあるのだろう。

十時頃、深見はすやすやと眠込んだので、自分は標本入と南米製の大小刀とを携えて、沿岸へ採集に出懸けた。此小刀は自分が三年前、南米ブラジルへ漫遊を試みた時、役に立った物で、それ以来持って居るのだが、洋刀の様な形をして居る。岸辺には奇妙な草や貝が一面に散乱して居るから、早速一箇拾い上げようと、身を屈める途端に、突然背後からぐいと袖を曳く者がある。同時にばくっと云う音がしたので、振り向いて見ると……何物？……いや、見るには見たが、実際何物であるかは夢中で、突然小刀を揮って、其物の頭を痛か斫り付けたまま、自分はよろよろと間近の浅瀬へ倒れ込んで、殆ど気絶の体であった。

湖水の中央に見えた、彼の大きな黒い樹の正体は今此処に居る。大鰐と蛇の混種見た様な太古の怪物。洋刀を並べ植えた様な歯を剥き出し、皿の様な眼を見張って、宛ら自分を睨むかのよう、顎長の首を自分の頭上高く巉巌の上から出して居る。身体は、巌の向側に隠れて見えぬが、斯かる動物は、其身体から、絶えず異様の音響を発するものであるが、少しもその様な音は聞えない。屹度、突然頭脳を斬られた為に、昏睡の状態に陥ったのであろう。そうとすれば、全く死に切る前に再び力を回復し、死に際の苦し紛れに身を搔いて水中に潜られでもした日には、何とも取返しが就かぬ。そこで自分は心を励まし震える手先に、小刀を取り直して手早く怪物の脳漿を抉り出し、先刻斬り取られた頭蓋骨を以前の通り結合せて、

さて、此巨大なる捕虜の検査に取り係った。

軀幹の丈は正に二丈八尺、太さは一番太い個処で側から側へ、直経八尺、背から腹へ六尺、発育不十分な手足とも謂うべき四つの鰭、怖ろしく長い蜿蜒した頸、と都合是れだけが、軀幹。頭は比較的小さくて丸く、そして、家鴨の嘴のような長い顎が突出して居る。鞣革の様な皮膚は黒くて光沢がある。眼は褐色を帯びて実に大きいが、其底には一種陰鬱な温和しい色が有って、じっと視詰るよう。即ち『エラスモソーラス』と云って世界の大洪水前の動物には相違無いが、彼の骨となって近頃現われた物と同種類か如何かは分らぬ。

前世界の溢れ物！　斯んな話をしたら、如何な病人でも、起き上るだろうと、検査が済むや否や、自分は急いで深見を呼びに行った。見ると、今朝よりは幾分苦痛も減じたよう。頻に怪物を見たがるので、連れ立って来て見ると、驚いた事には、怪物の心臓の鼓動は停んで居らぬ。死後一時間を経ったのに、身体の諸機能は平常と異ならず行われて居るのである。併し鯊の心臓は、切断されてから、数時間鼓動を止めなかった例もあれば、又、頭を切られた蛙が、平気で、幾週間も跳び廻る事もあるのを見れば、此れとて左まで珍らしいと云う程の事ではなかろう。

頭を開いて、検めると、再び驚いた。先刻の創口は段々癒って来る。内部の色は健全で異状は無く、別に過度の出血をした個処も見えぬ。確かに彼は、脳は無くとも、立派に生存して往こうとして居るのである。頭蓋骨の内部を見るに人間のと酷似て、大さと云い、形と云

い、先ず$7\frac{1}{8}$の帽子を被る男の頭位。又、脳髄を調べると、これも普通の人間の大さである。尤も、繊維や皺襞は少ないが、不思議にも人間に類似して居るのである。

五月五日朝

深見の容態は非常に悪い、今にも死ぬような心地がするの、早く寿命が尽きて此の苦悩が無くなれば善い、さもなければ、寧そ自殺をして仕舞おうのと情無い事計り言うのである。自分は百方慰めて見たが其甲斐も無く持合せの二三種の薬剤は何れも効験が無い。

五月五日夕

深見の死骸を今、湖辺の砂中に埋めた。が併し、別に何の儀式も行わない。と云うのは、随分雲を攫む様な話だが、真の深見は未だ死んでは居らぬと、自分は信じて居るからである。兎も角も斯様して置いて明朝になって見たところで、自分の手術が、いよいよ無効と定ったならば、其時此の土饅頭の上へ石碑を建ててやろう。併しあんな実験の成功を望むのは勿論無理の事とは思うが。

話は前に溯るが、今朝の十時頃であった、深見の病苦も稍薄らいだので、二人伴れ立って、怪物を見に出懸けた。怪物は、昨日の儘の場所に位置も変えずに居るが、呼吸は行われ、諸機能に何の異状も無い。頭部の傷は昨夜の中に著しく癒って居る。此調子なら一週間も経ったらば、全快するだろう。爬虫類の疵の治り方の迅いのは、実に驚く可きものである。自分は、淡菜の殻を剝いたのを六七斗ばかり、怪物の口中へ注ぎ込んでやると、痙攣るような喘

ぎと共に嚥み下して、静かに口を結んだ。

『此の動物を何時迄生かして置く心算かね』と深見は聞く。

『友人の理学者連中に通知したら、定めし、観に来るだろうから、それ迄は、生かして置く。最寄の人里へ、君を伴れて往って、其処から方々へ手紙を出し、僕は再び此処へ引返して来て、此怪物に一定の食料を与え、友人たちの来た上で、最後の処分法を決する積りだが、多分剝製にでもする事になるだろう』

『然し、傷を付けずに、殺すのは中々容易じゃ無いぜ君。そうかと云って目茶々々に切って了っては何にもならないしさ。嗚呼僕に此の動物の活力が有れば何の事は無いのだがなあ。脳漿を取り去られても、身体に異状が無いと云う斯様な怪力を備えた者もあるのに……噫、誰か僕の身体だけ奪って呉れないかなあ。有っても用の無い此奴の力の幾部分でも宜いから、若し僕の自由に出来たら嘸善かろうに』

『君は精神上の活動が激し過ぎて、それが肉体の害になるのだ。肉体の運動は殆ど皆無であるに引換え、脳を使うのが過度、と云うのだから、病気も起る理さ。若し君が、此動物の様に強健であったら、面白かろう。だが、此の怪力に君の智力と来たら、それこそ鬼に金棒で、大した物が出来上るだろうね』

言いつつ自分は怪物の方へ行って、持て来て居た外科器械で、其の傷口に手当を加えようと思って居ると、突然、深見が呻く声がするので、振り向いて見ると、こは如何に、彼は今、

砂に転って四苦八苦の状態！　飛んで往ったが既間に合わぬ。彼れは器械箱から、一番大きな、最も鋭利な小刀を取り出して、己れの耳から耳へと、美事に喉を切り離して仕舞ったのである。

『深見、深見』と声を限りに叫ぶと、不思議や彼は眼を見据えて、意味ありげに、自分を眺める。此時、偶然思い浮んだのは、断頭台で首を切られてから数分間の後に、瞬で談話をしたと云う、例の仏蘭西の医者の事だ。

『僕の言う事が聞えたら瞬をし玉え』と自分が叫ぶと、彼れは右の眼を閉って、パッと開いた。果然！　肉体は死んでも、脳髄は生きて居るのだ。ふと怪物の方を振向くと、半ば口を開いて、水晶の様な歯を露出した状は宛然微笑して人を誘うかのよう……人間の脳力、動物の体力……動物の心は死んでも、体は活きて居る、深見の身体は死んでも、心は活きて居る……不思議にも此動物の頭蓋骨が、人間に似て居るのを思い出して、自分は覚えず胸を踊らせた。

『未だ生きて居るのか、深見君、』

右の眼は之に応じて瞬をした。今は器械を択んでなど居る場合じゃない。唐突自分は大小刀を取った。遽いで手荒い事をして悔を遺すかも知れぬが、猶予したら尚更駄目なのは知れ切って居る。直様、深見の頭蓋を披いて、脳漿を取り出した。幸い傷は付けぬ。そこで怪物の頭の傷を披いて、見事、深見の脳を詰め込み、繃帯をして置いて、家へ取って皈し、あ

りったけの刺激剤を持って来て服ませた。

この脳交換という技術は、長年の間、我が医学協会の大問題となって居るので、何日か成功するだろうとは云うものの、何故思う様に行かぬかと云えば、実験せぬからである。肉体の死したる人から脳を取っても役に立たぬし、又生きて居る者なら、誰れが他人に、頭蓋を切開さして其幾分を取らせるなどと云う危険な手術を甘んじて受けよう。

怪我などで破れて出たとか云う場合には、脳は度々検査され、又幾部分は切取らるる事もあるが、その部分へ他人の脳を詰めた例は、未だ曾て無いのである。又怪我もせぬのに、他人に、脳を寄附する様な人も無いと云う訳であるから、死刑の宣告を受けた罪人を学術研究の材料にとて、学者の手に渡されるようにでもならぬ内は、脳交換と云う事も出来まい。と云って其様な事は輿論が許さぬ。

今や自分の実験を本式にやるには万事好都合である、天気は涼しくて平穏だから、傷は癒える事受合い。実際、近世の動物中に在って怪力彼れに及ぶ者は有るまい。

若し果して肉体が、他より移し入れた脳の主となって、之れに栄養を供し、之れと調和し得るものであるとすれば、此の体力豊かなる怪物は無論其働が有るに違い無い。或は之に依って、世界の歴史に一新紀元を画するに至るかも知れぬ。

五月六日午

今少し実検の結果を見るのを延ばそうと思う。

五月七日午

最う決して徒らの想像ではない。今朝怪物の眼を見ると、確かに表情がある。尤も濛朧と淀みを持って、空行く雲の影の様に薄らとはして居るが。

五月八日午

今日は昨日より確かである。例えば、眼を開いた儘、悪夢に襲われたとでも云う様に、恐怖に悩む状が眼ざしの裡にありありと見える。

五月十一日夕

病気して三日間と云うもの彼の様子を見ぬが、暫く離れて居る方が、却て実験の結果を見るには好都合であろう。

五月十二日

斯る大成功を得ようとは予期しなかった。思えば我ながら怖ろしい気がする。今朝怪物の許へ行って見ると、鰭のあたりで微かに水が揺くので、多分今頼りない姿に横って居る彼を、魚共が餌食にしようと、突ッついて居ることと思って熟視るとそうではない。水の騒ぐのは正しく彼が鰭を動かして居るためである。

「深見深見」と叫ぶとその巨大なる身体は微かに動いた。極微かではあるが分らぬ程ではない。此怪物の脳髄は、否寧ろ深見という方が適当であろうが、今熟睡って居るのか、或は未だ五体と十分の脈絡が通じないのか、無論、彼はまだ其体軀を支配する迄には行かないので、

結局熟睡も同様、無感覚になって居るのである。性来五官の作用を有せぬ人ならば我身の存在を知ろう筈が無い。深見も同じく未だ彼れの新しい身体と脈絡が通ぜぬのである。して自分は、ここ両三日を経過しなければ何れとも分らぬ此の身体へ、従来通りの食物を当てがった。

五月十七日夕

三日前から又も病気なので今朝迄は外出も為なかったが、今、湖の辺に行って見ると、怪物は依然として動かない。死んだのかと思ったが、やがて呼吸をして居る様子を見て占たと思い、直様食物の用意に取り掛って頻りにやって居ると、微かに喘ぐ様な声がするので、見上げると思わず慄然とした。

宛然、半信半疑の祈禱の効験が見えて、顔は見たいが、さりとて見るのも怖いという亡友の姿が、思い設けぬ当面に現われた様な気がする。堪えられなくなって自分は絶叫した。声は谺に響いて一層気味が悪い。声に伴れて怪物は長い頸を遺憾無く延ばしたが尚首筋はふらふらとして落付かぬ。口を歪めるのは何か言おうとするのであろう。両の眼は或は恐れに堪えざるが如く、或は憐を乞うが如く、絶えず自分の方を眺めて居るのである。

『深見！』と自分は叫んだ。

彼は急に口を結んで、丁度犬の様に熟と情を含んで自分を見詰めた。

『僕の言う事が分るかね』

口は又もやもごもごやり始めた。喘ぐのと呻くのが微かに聞える。

『分るなら頭を下げ給え』

頭は垂れて来た。自分の言葉を解するに相違無い。実験は成功したのである。自分は無言の儘暫時この不思議な事件を回想したが、ともすれば夢かと疑われるのを、夢でも無ければ気の狂いでもないと合点した上で、さて、彼れが自殺未遂以来今迄に到った経過を徐ろに話し初めた。

一通り話が済んでから僕は言った。

『僕の考えでは、君の身体は半身不随症に罹って居るようなものだ。君の新精神は未だ其の新肉体を支配する事が出来ない。先ず何うか斯うか、頭だけは動かせる様になったが、全身を動かす事が出来るかね。ウン出来ない。そうだろうと思った。然し今に出来るようになるさ。口は利ける様になるかどうか分らぬが、多分出来るだろう。出来なければ何か二人の意志を通ずる方法を考えよう。何れにしても、君はもう人間の身体を捨てて、君が羨んだ此の体力偉大な動物の身体を君の物にしたのだから、其筋骨を左右する力を得た暁には、此の湖水と地球の中心との聯絡を発見して探検に尽力して貰いたいのだ。そうなったら地質学上にどれ程の貢献が出来るか、君まあ考えて見給え。僕は君の発見した事を記述して、深見増山合著として天下の地質学者を驚嘆せしめようではないか』

つい話に身が入って深見を励まして居ると、彼の眼は言うに言われ

ぬ悦びの光を放った。

六月二日夜

深見は今物も言う、身体も自由に使い得る。斯くなる迄の径路は余りに緩漫で際立った処も無いから、別に日々の事を取立てて記す必要も無い。今や彼れの身体は全然彼れの意志に従い、先きの怪物に劣らぬ動作を為し得るのみでなく、詩吟をする、唱歌をやる、実に奇妙である。今も現に「橋弁慶」を謡って居るが、張のある太い声は、夕方から吹き初めた北風の怒号と相和して、一種物凄い音楽を成すのである。

今日、彼は地球の中心部に大遠征を試みようとしたのであるが、湖の下にある噴出口は岩石で塞がっているので、何の得る所も無かったとの事。彼れは自分に置き去りに為れはせぬか、そうなったら彼れは孤独に堪えかねて焦れ死をするであろうと、始終そればかりに心を悩まして居るのである。併し何で自分が彼れを見捨てよう。否、そればかりではない、若し此間の様な大噴蘯が起ったらば、地球の中心部との通路が開くかも知れぬと思うので、自分は尚此処に留って居る考である。

猶一つ彼れの心配となるのは、誰かに発見され、捕われて見せ物や博物館で晒物にされはせぬかと云う事で、若し彼れを捕えようなどとする輩があらば、残念ながら其奴等の命を取っても、飽迄抵抗を試みる心算であると意気込んで居る。勿論、動物として見れば彼は捕獲者の所有に帰する事を免れない。尤も自分は、彼を養い馴らしたと云う点で、所有権を主張

すればするのだが。

七月六日

深見の心配したのも空事ではなかった。どんよりと雨を持った雲が、重そうに頭上に垂れて来るのを眺めながら、自分が丁度湖の方へと峠路を急ぐ折柄、岡の向うにちらりと掬網が見える、と続いて持主が現われた。湖水の方を眺めて居るので自分には熟くは見えぬが、此の辺へ来るからには理学者に相違無い。丁度この時、山に鳴り水に響いて『早や々其衣を返し候え』と羽衣の曲を謡う声が起った。見ると彼方の入江に墨の様な太頸を高く延し上げ、鋸の歯を並べた様な口を大きく開いて居る者がある。謡の主は深見である。茫然と斯の有様を眺めて立って居た今の理学者は、持って居る掬網の落ちるのも気が附かない。深見が謡を遏め、身を跳らすよと見る間に再び大きなずう体をざぶんと水に落すと、湾内一面に立ち騒ぐ波の音、ワッハ……という高笑いは百鬼の一時に笑うが如く、崖から崖へと山彦が伝わる。哀れな理学者は気も魂も身に沿わず、宙を飛んで逃げ去った。

＊　＊　＊

この後約一ケ年間は、余り必要も無之候えば茲に省き申候。

＊　＊　＊

三十年六月三十日

近来確かに深見の様子が変って来た。尤も暫く前から気は附かぬでもなかったが、気の所

為として努めて信じないようにして居た。ところが、今こそ只事でない。猛獣の身体が人間の智力を併呑するのである。この例は沢山ある。人にしても、肉体の頭脳に及ぼす力は、頭脳の肉体に及ぼす力よりも大なるものである。病人の深見、蒲柳の深見、風雅の深見は逝き、その後身として残虐な怪物が残った。その語る処の野卑下劣であるのを見れば、刻々堕落する彼の精神が読める。最早彼れは学術上の研究に興味を有たない。学術なんて痴人の夢だなどと云って居る。何時も吾々の閑散な湖岸生活中に起る些々たる出来事を、下品な冗漫な言葉で繰返し繰返し話すばかり、苟も教育ある者の耳を傾けるに足る事柄は一つも無い。将来如何なる事か果てしが知れぬ。物質は竟に精神に勝つのであるか。神の面影茲にぞ映る良心の鏡も昏濁なる湖水に汚れて、あわれ、深見規矩雄は、竟に獣類に堕落し了るのであるか。噫さらば、友深見は已に世に亡きものである。彼れの人としての遺骸を埋めた跡へ一基の墓標を樹てて、自分は此住み馴れた、さりとて今は名残も惜しからぬ、黒姫湖畔を立ち去る場合となった。

△　△　△

拝哲、別紙書翰並に封入の原稿、意外の機会に依り小官の手に入り申し候に付、其宛名に従いて、茲に御手許まで御送附申上候。二週間以前小官は、生蕃追討の命を受け、歩兵一個中隊、騎兵若干、及、山砲一門を率いて、新高山脈に踏み入り申候。険峻なる山嶺を踏破し、到る処に蛮民を駆逐して、其第七日には路も知れざる、山谷狭隘の地に迷い入り候処、彼方

の巌陰より、何者とも知れざる怪しき吼り声に続いて、救を求むる人の声相聞え候につき、急ぎ小高き丘に馳せ登り、彼方を見下ろし候に、水色昏濁にして物凄き湖水有之、其諸汀にて見も馴れぬ動物、一人の男を捕え、無残にも噛み裂き居るを発見致候。

小官等を認め候や、怪物は、紅に染みたる顎を開き、からからと打笑い申候。此事たる、余りに不可思議なれば、真偽の御疑もあらんかなれども、全く事実たる事小官の誓って証言する処に候。吾等は未だ曾て斯かる人語を操る大怪物を見聞したる事無之、一時は是れぞ世に所謂悪魔なる者なるべしと怖気立ちし兵士も相見え候え共、眼前彼の残忍なる行為を目撃致候小官は憤激に堪えず、山砲発射の用意を為さしめ候処、彼れ怪物は何やらん絶えず

喋々喃々と漫語致し居候様相見え申候。其の声は病者の囈語とも就かず酔漢の駄弁とも就かず候えども、兎に角、朧げながら人語に似通い居り候事は確実に御座候。やがて二回続けさまに発砲致し候処幸いにも命中、彼れは苦悶の声を揚げて、水底に没し去り申候。

怪物の餌食となりし人物の、著名たる増山博士なりし事遺骸の傍に落ち散り候別紙にて分明致し、一際哀悼の情を切ならしめ候。即ち同博士の着衣並に一括したる書類等取纏め御送附申上候。何等かの手段を以て彼の怪物を捕獲致さば、博物館裏一奇宝を加え候事と存候。

草々敬具。

明治三十二年四月十五日　　陸軍大尉

中山進

医科大学教授

河島好殿

楢ノ木大学士の野宿（抄）

宮沢賢治

楢ノ木大学士は宝石学の専門だ。
ある晩大学士の小さな家へ、
「貝の火兄弟商会」の、
赤鼻の支配人がやって来た。
「先生、ごく上等の蛋白石の注文があるのですがどうでせう、お探しをねがへませんでせうか。もっともごくごく上等のやつをほしいのです。何せ相手がグリーンランドの途方もない成金ですから、ありふれたものぢゃなかなか承知しないんです。」
大学士は葉巻を横にくはへ、
雲母紙を張った天井を、
斜めに見上げて聴いてゐた。

「たびたびご迷惑で、まことに恐れ入りますが、いかゞなもんでございませう。」
そこで楢ノ木大学士は、
にやっと笑って葉巻をとった。
「うん、探してやらう。蛋白石のいゝのなら、流紋玻璃を探せばいゝ。探してやらう。僕は実際、一ぺんさがしに出かけたら、きっともう足が宝石のある所へ向くんだよ。そして宝石のある山へ行くと、奇体に足が動かない。直覚だねえ。いや、それだから、却って困ることもあるよ。たとへば僕は一千九百十九年の七月に、アメリカのヂャイアントアーム会社の依嘱を受けて、紅宝玉を探しにビルマへ行ったがね、やっぱりいつか足は紅宝玉の山へ向く。それからちゃんと見附かって、帰らうとしてもなかなか足があがらない。つまり僕と宝石には、一種の不思議な引力が働いてゐる、深く埋まった紅宝玉どもの、日光の中へ出たいといふその熱心が、多分は僕の足の神経に感ずるのだらうね。その時も実際困ったよ。山から下りるのに、十一時間もかかったよ。けれどもそれがいまのバララゲの紅宝玉坑さ。」
「ははあ、そいつはどうもとんだご災難でございました。しかしいかゞでございませう。こんども多分はそんな工合に参りませうか。」
「それはもうきっとさう行くね。たゞその時に、僕が何かの都合のために、たとへばひどく疲れてゐるとか、狼に追はれてゐるとか、あるいはひどく神経が興奮してゐるとか、そんなやうな事情から、ふっとその引力を感じないといふやうなことはあるかもしれない。しか

しとにかく行って来よう。二週間目にはきっと帰るから。」
「それでは何分お願ひいたします。これはまことに軽少ですが、当座の旅費のつもりです。」
貝の火兄弟商会の、
鼻の赤いその支配人は、
ねずみ色の状袋を、
上着の内衣嚢(うちポケット)から出した。
「さうかね。」
大学士は別段気にもとめず、
手を延ばして状袋をさらひ、
自分の衣嚢(かくし)に投げこんだ。
「では何分とも、よろしくお願ひいたします。」
そして「貝の火兄弟(けいてい)商会」の、
赤鼻の支配人は帰って行った。
次の日諸君のうちの誰(たれ)かは、
きっと上野の停車場で、
途方もない長い外套(ぐわいとう)を着、
変な灰色の袋のやうな背嚢(はいなう)をしょひ、

七キログラムもありさうな、
素敵な大きなかなづちを、
持った紳士を見ただらう。
それは楢(なら)の木大学士だ。
宝石を探しに出掛けたのだ。
出掛けた為(ため)にたうとう楢(なら)ノ木大学士の、
野宿といふことも起ったのだ。
三晩といふもの起ったのだ。

野宿第三夜

（どうも少し引き受けやうが軽率だったな。グリーンランドの成金がびっくりする程立派な蛋白石（たんぱくせき）などを、二週間でさがしてやらうなんてのは、実際少し軽率だった。
どうも斯（か）う人の居ない海岸などへ来て、つくづく夕方歩いてゐると東京のまちのまん中で鼻の赤い連中などを相手にして、いゝ加減の法螺（ほら）を吹いたことが全く情けなくなっちまふ。どうだ、この頁岩（けつがん）の陰気なこと。全くいやになっちまふな。おまけに海も暗くなったし、なかなか、流紋玻璃（りうもんはり）にも出（で）っ会（く）はさない。それに今夜もやっぱり野宿だ。野宿も二晩ぐらゐはいゝが、三晩となっちゃうんざりするな。けれども、まあ、仕方もないさ。ビスケットのあるうちは、歩いて野宿して、面白い夢でも見る分が得といふもんだ。）

例の楢（なら）ノ木大学士が
衣嚢（ポケット）に両手を突っ込んで
少しせ中を高くして
つくづく考へ込みながら
もう夕方の鼠（ねずみ）いろの
頁岩の波に洗はれる

海岸を大股（おほまた）に歩いてゐた。
全く海は暗くなり
そのほのじろい波がしらだけ
一列、何かけもののやうに見えたのだ。
いよいよ今日は歩いても
だめだと学士はあきらめて
ぴたっと岩に立ちどまり
しばらく黒い海面と
向ふに浮ぶ腐った馬鈴薯（いも）のやうな雲を
眺（なが）めてゐたが、又ポケットから
煙草（たばこ）を出して火をつけた。
それからくるっと振り向いて
陸の方をじっと見定めて
急いでそっちへ歩いて行った。
そこには低い崖（がけ）があり
崖の脚には多分は濤（なみ）で
削られたらしい小さな洞（ほら）があったのだ。

大学士はにこにこして
中へはひって背嚢をとる。
それからまっくらなとこで
もしゃもしゃビスケットを喰べた。
ずうっと向ふで一列濤が鳴るばかり。
「ははあ、どうだ、いよいよ宿がきまって腹もできると野宿もそんなに悪くない。さあ、もう一服やって寝よう。あしたはきっとうまく行く。その夢を今夜見るのも悪くない。」
大学士の吸ふ巻煙草が
ポツンと赤く見えるだけ、
闇の向ふで
「斯う納まって見ると、我輩もさながら、洞熊か、洞窟住人だ。ところでもう寝よう。
濤がぼとぼと鳴るばかり
鳥も啼かなきゃ
洞をのぞきに人も来ず、と。ふん、斯んなあんばいか。寝ろ、寝ろ。」
大学士はすぐとろとろする
疲れて睡れば夢も見ない
いつかすっかり夜が明けて

昨夜の続きの頁岩が
青白くぼんやり光ってゐた。
大学士はまるでびっくりして
急いで洞を飛び出した。
あわてて帽子を落しさうになり
それを押へさへもした。
「すっかり寝過ごしちゃった。ところでおれは一体何のために歩いてゐるんだったかな。えゝと、よく思ひ出せないぞ。たしかに昨日も一昨日も人の居ない処をせっせと歩いてゐたんだが。いや、もっと前から歩いてゐたぞ。もう一年も歩いてゐるぞ。その目的はと、はてな、忘れたぞ。こいつはいけない。目的がなくて学者が旅行をするといふことはない、必ず目的があるのだ。化石ぢゃなかったかな。えゝと、どうか第三紀の人類に就いてお調べを願ひます、と、誰か云ったやうだ。いゝや、さうぢゃない、白堊紀の巨きな爬虫類の骨骼を博物館の方から頼まれてあるんですがいかゞでございませう、一つお探しを願はれますまいかと、斯うぢゃなかったかな。斯うだ、斯うだ、ちがひない。さあ、頁岩だ。もうこゝでおれは探し出すつもりだったんだ。なるほど、はじめてはっきりしたぞ。さあ探せ、恐竜の骨骼だ。恐竜の骨骼だ。」
学士の影は

黒く頁岩の上に落ち
大股(おほまた)に歩いてゐたから
踊ってゐるやうに見えた。
海はもの凄(すご)いほど青く
空はそれより又青く
幾きれかのちぎれた雲が
まばゆくそこに浮いてゐた。
「おや出たぞ。」
楢(なら)ノ木大学士が叫び出した。
その灰いろの頁岩の
平らな奇麗な層面に
直径が一米(メートル)ばかりある
五本指の足あとが
深く喰ひ込んでならんでゐる。
所々上の岩のために
かくれてゐるが足裏の
皺(しわ)まではっきりわかるのだ。

「さあ、見附けたぞ、この足跡の尽きた所には、きっとこいつが倒れたまゝ化石してゐる。
巨(おほ)きな骨だぞ。まづ背骨なら二十米はあるだらう。巨きなもんだぞ。」
大学士はまるで雀躍(こをどり)して
その足あとをつけて行く。
足跡はずゐぶん続き
どこまで行くかわからない。
それに太陽の光線は赭(あか)く
たいへん足が疲れたのだ。
どうもをかしいと思ひながら
ふと気がついて立ちどまったら
なんだか足が柔らかな
泥に吸はれてゐるやうだ。
堅い頁岩(けつがん)の筈(はず)だったと思って
楢(なら)ノ木大学士はうしろを向いた。
そしたら全く愕(おどろ)いた。
さっきから一心に跡(つ)けて来た
巨(おほ)きな、蟇(がま)の形の足あとは

なるほどずうっと大学士の
足もとまでつゞいてゐて
それから先ももっと続くらしかったが
も一つ、どうだ、大学士の
銀座でこさへた長靴の
あともぞろっとついてゐた。
「こいつはひどい。我輩の足跡までこんなに深く入るといふのは実際少し恐れ入った。けれどもそれでも探求の目的を達することは達するな。少し歩きにくいだけだ。さあもう斯うなったらどこまでだって追って行くぞ。」
学士はいよいよ大股に
その足跡をつけて行った。
どかどか鳴るものは心臓
ふいごのやうなものは呼吸、
そんなに一生けん命だったが
又そんなにあたりもしづかだった。
大学士はふと波打ぎはを見た。
濤がすっかりしづまってゐた。

たしかにさっきまで
寄せて吠えて砕けてゐた濤が
いつかすっかりしづまってゐた。
「こいつは変だ。おまけにずゐぶん暑いぢゃないか。」
大学士はあふむいて空を見る。
太陽はまるで熟した苹果のやうで
そこらも無暗に赤かった。
「ずゐぶんいやな天気になった。それにしてもこの太陽はあんまり赤い。きっとどこかの火山が爆発をやった。その細かな火山灰が正しく上層の気流に混じて地球を包囲してゐるな。けれどもそれだからと云って我輩のこの追跡には害にならない。もうこの足あとの終るところにあの途方もない爬虫の骨がころがってるんだ。我輩はその地点を記録する。もう一足だぞ。」
大学士はいよいよ勢こんで
その足跡をつけて行く。
ところが間もなく泥浜は
岬のやうに突き出した。
「さあ、こゝを一つ曲って見ろ。すぐ向ふ側にその骨がある。けれども事によったらすぐ無

いかも知れない。すぐなかったらも少し追って行けばいゝ。それだけのことだ。」
大学士はにこにこ笑ひ
立ちどまって巻煙草を出し
マッチを擦って煙を吐く。
それからわざと顔をしかめ
ごくおうやうに大股に
岬をまはって行ったのだ。
ところがどうだ名高い楢ノ木大学士が
釘付けにされたやうに立ちどまった。
その眼は空しく大きく開き
その膝は堅くなってやがてふるへ出し
煙草もいつか泥に落ちた。
青ぞらの下、向ふの泥の浜の上に
その足跡の持ち主の
途方もない途方もない雷竜氏が
いやに細長い頸をのばし
汀の水を呑んでゐる。

長さ十間、ざらざらの、
鼠いろの皮の雷竜が
短い太い足をちゞめ
厭らしい長い頸をのたのたさせ
小さな赤い眼を光らせ
チュウチュウ水を呑んでゐる。
あまりのことに楢ノ木大学士は
頭がしいんとなってしまった。
「一体これはどうしたのだ。中生代に来てしまったのか。中生代がこっちの方へやって来たのか。ああ、どっちでもおんなじことだ。とにかくあすこに雷竜が居て、こっちさへ見ればかけて来る。大学士も魚も同じことだ。見るなよ、見るなよ。僕はいま、ごくこっそりと戻るから。どうかしばらく、こっちを向いちゃいけないよ。」
いまや楢ノ木大学士は
そろりそろりと後退りして
来た方へ遁げて戻る。
その眼はじっと雷竜を見
その手はそっと空気を押す。

そして雷竜の太い尾が
まづ見えなくなりその次に
山のやうな胴がかくれ
おしまひ黒い舌を出して
びちょびちょ水を呑(の)んでゐる
蛇に似たその頭がかくれると
大学士はまづ助かったと
いきなり来た方へ向いた。
その足跡さへずんずんたどって
遁(に)げてさへ行くならもう直きに
汀(なぎさ)に濤(なみ)も打って来るし
空も赤くはなくなるし
足あとももう泥に食ひ込まない
堅い頁岩(けつがん)の上を行く。
崖(がけ)にはゆふべの洞(ほら)もある
そこまで行けばもう大丈夫
こんなあぶない探険などは

今度かぎりでやめてしまひ
博物館へも断わらせて
東京のまちのまん中で
赤い鼻の連中などを
相手に法螺(ほら)を吹いてればいゝ。
大体こんな計算だった。
それもまるきり電(いなづま)のやうな計算だ。
ところが楢(なら)ノ木大学士は
も一度ぎくっと立ちどまった。
その膝(ひざ)はもうがたがたと鳴りだした。
見たまへ、学士の来た方の
泥の岸はまるでいちめん
うじゃうじゃの雷竜(らいりゅう)どもなのだ。
まっ黒なほど居(を)ったのだ。
長い頸(くび)を天に延ばすやつ
頸をゆっくり上下に振るやつ
急いで水にかけ込むやつ

実にまるでうじゃうじゃだった。

「もういけない。すっかりうまくやられちゃった。いよいよおれも食はれるだけだ。大学士の号も一所になくなる。雷竜はあんまりひどい。前にも居るしうしろにも居る。まあたゞ一つたよりになるのはこの岬の上だけだ。そこに登っておれは助かるか助からないか、事によったら新生代の沖積世が急いで助けに来るかも知れない。さあ、もうたったこの岬だけだぞ。」

学士はそっと岬にのぼる。
まるで蕈とあすなろとの
合の子みたいな変な木が
崖にもじゃもじゃ生えてゐた。
そして本当に幸なことは
そこには雷竜が居なかった。
けれども折角登っても
そこらの景色は
あんまりいゝといふでもない、
岬の右も左の方も
泥の渚は、もう一めんの雷竜だらけ

実にもじゃもじゃしてゐたのだ。
水の中でも黒い白鳥のやうに
頭をもたげて泳いだり
頸をくるっとまはしたり
その厭らしいこと恐いこと
大学士はもう眼をつぶった。
ところがいつか大学士は
自分の鼻さきがふっふっ鳴って
暖いのに気がついた。
「たうとう来たぞ、喰はれるぞ。」
大学士は観念をして眼をあいた。
大きさ二尺の四っ角な
まっ黒な雷竜の顔が
すぐ眼の前までにゅうと突き出され
その眼は赤く熟したやう。
その頸は途方もない向ふの
鼠いろのがさがさした胴まで

まるで管のやうに続いてゐた。
大学士はカーンと鳴った。
もう喰はれたのだ、いやさめたのだ。
眼がさめたのだ、洞穴は
まだまっ暗で恐らくは
十二時にもならないらしかった。
そこで楢ノ木大学士は
一つ小さなせきばらひをし
まだ雷竜が居るやうなので
つくづく闇をすかして見る。
外ではたしかに濤の音
「なあんだ。馬鹿にしてやがる。もう睡れんぞ。寒いなあ。」
又たばこを出す。火をつける。

楢ノ木大学士は宝石学の専門だ。
その大学士の小さな家

「貝の火兄弟商会」の
赤鼻の支配人がやって来た。
「先生お手紙でしたから早速とんで来ました。大へんお早くお帰りでした。ごく上等のやつをお見あたりでございましたか、何せ相手がグリーンランドの途方もない成金ですからありふれたものぢゃなかなか承知しないんです。」
大学士は葉巻を横にくはへ
雲母紙を張った天井を
斜めに見ながらからかう云った。
「うん探して来たよ、僕は一ぺん山へ出かけるともうどんなもんでも見附からんと云ふことは断じてない、けだしすべての宝石はみな僕をしたってあつまって来るんだね。いやそれだから、此度なんかもまったくひどく困ったよ。殊に君注文が割合に柔らかな蛋白石だらう。僕がその山へ入ったら蛋白石どもがみんなざらざら飛びついて来てもうどうしてもはなれないぢゃないか。それが君みんな貴蛋白石の火の燃えるやうなやつなんだ。望みのとほりみんな背嚢の中に納めてやりたいことはもちろんだったが、それでは僕も身動きもできなくなるのだから気の毒だったがその中からごくいゝやつだけ撰んださ。」
「ははあ、そいつはどうも、大へん結構でございました。しかし、そのお持ち帰りになりました分はいづれでございますか。一寸拝見をねがひたう存じます。」

「あゝ、見せるよ。たゞ僕はあんな立派なやつだから、事によったらもうすっかり曇ったちゃないかと思ふんだ。実際蛋白石ぐらゐたよりのない宝石はないからね。今日虹のやうに光ってゐる。あしたは白いたゞの石になってしまふ。今日は円くて美しい。あしたは砕けてこなごなだ。そいつだね、こはいのは。しかしとにかく開いて見よう。この背嚢さ。」

「なるほど。」

貝の火兄弟商会の
鼻の赤いその支配人は
こくっと息を呑みながら
大学士の手もとを見つめてゐる。
大学士はごく無雑作に
背嚢をあけて逆さにした。
下等な玻璃蛋白石が
三十ばかりころげだす。

「先生、困るぢゃありませんか。先生、これでは、何でも、あんまりぢゃありませんか。」

楢ノ木大学士は怒り出した。

「何があんまりだ。僕の知ったこっちゃない。ひどい難儀をしてあるんだ。旅費さへ返せばそれでよからう。さあ持って行け。帰れ、帰れ。」

大学士は上着の衣嚢から
鼠いろの皺くちゃになった状袋を
出していきなり投げつけた。

「先生困ります。あんまりです。」

貝の火兄弟商会の
赤鼻の支配人は云ひながら
すばやく旅費の袋をさらひ
上着の内衣嚢に投げ込んだ。

「帰れ、帰れ、もう来るな。」

「先生、困ります。あんまりです。」

たうとう貝の火兄弟商会の
赤鼻の支配人は帰って行き
大学士は葉巻を横にくはへ
雲母紙を張った天井を
斜めに見ながらにやっと笑ふ。

沼

吉田健一

沼と言つても、水の下は泥ばかりといふことはない。その泥で水がすつかり濁つてゐる訳でもないことは勿論である。沼の澄んだ水の底が、その辺だけかどうかは解らないが、砂地で、藻が影を落してゐるのを縫つて目高が泳いでゐても、その為にここは泥沼の筈だつたのにといふ考へに別にこだはる必要はないのである。岸に立つて下を見た時に、丁度そういふ光景が眼に映つた。

ものを眺める気持といふものは、その場合の尺度がどれ位かでどうにでもなるものである。子供の頃に、北支の草原の中に建つた家に住んでゐたことがあつて、よく見ると、家の軒近く群生してゐる小さな草が、細い茎の先から五、六枚の葉を出してゐるのが椰子の木にそつくりで、そこも下が砂地だつたし、椰子の森林が拡るアフリカの西海岸辺りの景色がそこにあるものと思はずにはゐられなかつた。その印象が余り強いので、五分ばかりの高さの瀬戸

物で出来た象の玩具を持つて来て草の根元に置いたら、そこは確かにもうアフリカの西海岸だつた。実に鮮かな一つの世界の出現で、自分の眼に見えることは疑へず、それでゐてそこは、日常の知識に従へば自分が住んでゐる家の廻りの草原だつたのだから、大人の頭でも整理が付かない妙な感じがした。遠くには、山海関に迫る山に万里の長城の廃墟がうねつてゐた。併しその草原では、もつと面妖なことが起つた。

雨が降り続いて、そこ一面が水浸しになり、天気がよくなつてからも方々に水溜りが残つた。そして砂地だから綺麗な水が椰子の雛型の葉辺りまで来てゐる中に、どういふ訳で湧いたのか、変つた形をした虫が水の底を泳ぎ廻つたり、浮き上つて来て宙返りを打つたりしてゐて、それがどう見ても古生代の海に住んでゐた、それまでは化石でしか付き合つたことがない三葉虫だつた。勿論、二、三寸の深さの水溜りにゐるのだから、これも大きさは尾を入れて四、五分のものだつたが、草が椰子の木になれば、五分の虫も古生代の三葉虫を遙かに越えた怪物で、その甲羅の所が日光を射返す有様は、恐竜が這い廻る先史時代の世界でも見られなかつた壮観を呈した。三葉虫がどんな虫かと言ふと、今でも瀬戸内海にゐるあの鱟魚といふ一種の甲殻類に一番似てゐて、鱟魚は埴輪の兜の形をした頭の次に胸当風の胴があり、その端から長い尾が突き出てゐる。頭から尾の先まで二尺位あるが、椰子の木の半分もある三葉虫、鱟魚、或はその北支の得体が知れない虫だつたら、甲羅だけでも何畳敷かの、大海亀そこのけの動物が、丸太の太さの尾で梶を取りながら水の底から浮んで来ることになる。

その興味に釣られて、それでもこれは小さな虫なのだといふ実感を味ふ為に、虫を一匹摑まへて水を入れた壜の中に放したら、壜は途方もなく大きくなつて、こつちは水中で鱟魚の化けものに出会つた恰好になり、その餌になるのは願ひ下げにして、虫は水溜りに戻した。併しさういふ訳だから、沼の藻の蔭に目高が泳いでゐるのをどんなに大きなものに見ることも出来る。枯葉が落ちてゐるのは、巨木が水底に倒れてゐるのであり、それならば藻は何とも異様な植物である。アンデルセンの人魚の話では、珊瑚虫が四方八方に腕を伸ばしてゐる森の奥に海の魔女が住んでゐて、珊瑚虫がその腕に魚や人魚を摑むと、もうどんなに踠いても放さず、さうして食べられた魚や人魚の死骸がまだ腕に巻かれたまま、潮流に揺れてゐることになつてゐて、これはアンデルセンの珊瑚虫といふ生物に対する思ひ違ひから来たことのせゐであるが、沼の藻は生物学によるのではない、アンデルセンの話に出て来る方の珊瑚虫ではないだらうか。

藻そのものは、泳いでゐる人間に絡み付いて溺れさせる位のことしか出来なくても、藻には更に色々な奇妙なものが附着してゐるらしい。沼ではなくて海の藻を少し持つて来て、金魚鉢に海水を入れて浮かせて見た時、暫くすると藻の細い枝に丁度、秤と同じ形をした生物が立つてゐるのに気が付いて、それが秤の桁に当る体の部分と、その両端に皿が吊つてある具合になつてゐる二つの爪に似たものを、これも秤と少しも違はない風に上げたり下げたりしてゐた。さうして水を掻き混ぜて、流れ寄つた微生物を爪で取つてゐたのだらうと思ふ。

金魚鉢に入れた海水の中でも、そのやうにして何も知らずに、或は知つても何でも、秤が餌を漁るのだから、一粒の水の中にも天地があり、主人の家の前で餓ゑ死にする犬のことを歌つたブレイクの詩が身に染みる。併しそれが身に染みたりするのは、精神の緊張が足りないからだとも考へられて、沼はもつと無表情に空の下に横たはつてゐる。

この伝で行けば、目高は怪魚である。同じアンデルセンの人魚の話では、鯨が通ると、その影が海の底の砂地に落ちて来て、人魚の王女の一人がその形に海の花で花壇を作る所がある。併し枯枝を巨木に見立てる要領で目高を眺めるならば、これは全身が半透明で光つてゐるから、鯨よりももつと素晴しい動物に変る。密林の蔦にも似た、茎が電信柱程の太さがある藻が緑に光を滴らせて揺れてゐる中を、全身が光つて肋骨まで透けて見える鯨が通つて行く。それが目高の早さで、群をなしてのことならば、辺り一面に光が走つて、その光るものの影が砂の上に落ち、夕焼け雲が真昼の空に乱舞してこの世のものではない眺めが得られるに違ひない。そして後はどうか。水で霞む遥か上の方まで、形からは藻と言ふ他ない植物が伸び、茶碗位の大きさの泡が時に茎から離れて水面に向つて昇つて行き、さうすると砂に半分埋まつて、やはり片側が蔭になつてゐるのは、余りにも普通の大木が朽ち掛けてゐるのに似て、日常との区別が付かなくなるのではないだらうか。

水は透明で、それが層をなすに従つて視界を遮るのは、我々に眼が届く限り進みたい気を起させて、それが我々を水に引き入れる作用をし、更にそのことから水の下に拡つてゐる空

間のことを思はせる。英国のコオンワル州といふのは先住民のケルト族に残された最後の拠点の一つであり、セント・マイクルの山といふ小島にフランスのと同じ様子をした城があつたりして、今でも伝奇的な感じが強いが、セント・マイクルの山城が見降してゐる湾の底に、トリスタンとイソルデの話に出て来るリオネツスの王国が沈んでゐることになつてゐる。といふのは、沈んだまま、そこにまだあると信じられてゐるので、天気がいい、波が静かな日には、幾重にも重なつた水の遙か底の方にこの王国の森や、教会の塔が僅かに見えるといふのである。竜が夜光珠を守る竜宮でも、釣り気違ひがガイガア計で追ふ大魚でもなくて、人間の世界がそこに眠つてゐるのであり、教会の鐘の音が聞えて来ることもあるといふことだから、眠りに似た安穏な存在が続けられてゐるに違ひない。そこに注いだ葡萄酒の一滴が薄煙になつて消えるのに、酔ふのは古代の人間である。

　トリスタンとイソルデの悲劇が海の底で静まつたといふのは、いい考へである。マロリイの物語を読んでゐると、何よりも先に、中世紀の恋愛が如何に粗野で、血塗れであると同時に遠慮会釈もないものだつたかといふことを感じさせられる。グイネヴィアがランセロツトの寝室に入つて来て、ランセロツトの情婦のエレナが裸のまま寝台から飛び出して跪き、ランセロツトは気が違つて森の中を荒れ廻る。或は、情婦を殺した騎士がその罰に、自分が切り離した女の生首を自分の首に括り付けて、ロオマまで懺悔をしに行かせられたりする。中世紀に恋愛と呼ばれてゐたものは、確かにさういふ荒つぽいものだつたのに違ひない。そし

て又、それだけでもなかつたことを、トリスタンとイソルデの話は示してゐる。

　この話を終りまで支配してゐるのは、イソルデが船でアイルランドからリオネツスに来る途中、着いてからマルク王と飲む筈の秘薬を、イソルデを迎へにやらされたトリスタンと間違つて飲んで以来、もうどうにもならないことになつてゐるのだといふ感じである。マロリイが語る限り、露台での別れも、露台に立つて日が早く暮れないのを嘆くイソルデもなくて、ただイソルデはトリスタンのことを思ひ、トリスタンはイソルデのことを思つて、その為にマルク王はイソルデを癩病患者の群に連れて行かせたり、焼き殺さうとしたりし、トリスタンはトリスタンで放浪し続けて、イソルデも、トリスタンも死んでから、二人の墓から蔦が延びて来て絡み合つたと、それだけのことしか書いてない。そしてそれが恋愛であることを我々はいや応なしに納得させられて、これに比べるとグイネヴィアとランセロツトの話などは、ただの情事ではないかといふ気がする。

　そして中世紀には確かにこの二種類のものが恋愛で通つてゐたやうである。女が言ふことを聞くまで、城の一室に閉ぢ籠めて置いて餓ゑさせた騎士もゐた。それ以上の手段に出なかつたのは、女の心よりも体の方が大事だつたからに違ひない。併しプロヴァンスの貴族達は恋人同士、銀の鎖で手と手を繋ぎ合せて宴会に出た。そして恋愛といふのは、さういふものでしかない。恋愛から他の観念で置き換へられる凡てのものを取り去つた後に残るのは、この離れたくても離れられないといふことだけなのである。それに気が付いて、恐らくは時計

の鎖のやうに華車な銀の鎖で自分達を繋いでゐたプロヴァンスの恋人達は、何と優雅なことをしたのだらう。引きちぎらうとすれば、女の腕が一緒に付いて来る。それでも引きちぎることが出来るならば、自分の状態を苦労して恋愛と考へることはないので、恋人達は鎖を半ばは諦めの気持で眺めたに違ひない。ダンテがフランチェスカに言はせる、「私からもう決して離れることがない人」といふ言葉には、自分の宿命に対するどれだけのさういふ諦めと悔恨が含まれてゐることか。そしてそれ故に二人は地獄にゐるのである。

トリスタンとイソルデは、コオンワル州の湾の底にゐる。もし岸に立つてゐるものに教会の鐘の音がまだ聞えて来ることがあるならば、二人の墓にも苔が生し続けて、蔦は今は腕の太さの木になつて墓に蔽ひ被さつてゐるかも知れない。海の表面は荒れてゐても、底まで行けば水の重みが大気よりも堅固にその辺一面にあつて、凡てをただ静寂に誘ふばかりであることが、恋愛に付き纏はれて死んだ人間を埋める場所の条件を見事に満してゐる。恋愛と海が直ぐに結び付いて、恋愛詩に始終出て来たりしないのは、海に向つてゐると、海が空の下一杯に拡つてゐるのが我々までをその中に取り込んで、微妙に人間的な感情など持つ余地がなくなるからである。海が荒れ狂つてゐれば、波は船の檣よりも高くなり、それが砕ける音を聞いてゐるだけでも、自分はただそこに立つてゐる自分だけになる。死人の妄執も、海の壮大な狂態は晴らしてくれていい筈である（それ故にタイモンは海辺に墓を選んだ）。そしてその底の静寂に包まれてならば、パオロとフランチェスカも眠れる。

その静かなことは、アンデルセンの鶯が支那の皇帝の枕許で死神に歌つた、この世に残されたものの涙に濡れた墓場どころではない。どこまで行つても沈黙であつて、果てしなく続く平原は細かな砂で蔽はれ、余り細かな砂なので時々遠方から自由の旗と言つた恰好でひらひらしながら到着した平たい魚の尻尾の煽りを食つて砂煙が立ち、その魚は我々の前を通り過ぎて、我々を残して向うに泳ぎ去り、それを砂の外に僅かに現れてゐる大きな眼が眺めてゐて、彼等にとつてはそれが唯一の新聞なのである。……といふのは、他所から借りて来た言葉であるが、要するに、又しても砂地であつて、水の堆積の下にあるものが砂の堆積であれば、音といふものの観念自体が三マイルも、四マイルも上の水面に忘れて来たものになる。リオネツスの王国も、そんな所にあるのだらうか。

そこには、それ以上のものがあるかも知れない。我々が住んでゐる世界と凡てが逆になつてゐる反世界の存在が確認されて、この二つの世界が初めは一つだつたのが或る時代に猛烈な勢で引き離されたのだと考へられるに至つたことは、プラトンの八本の手足と両性の特徴を備へたアンドログネの説を裏付けるものであり、それならば彼が大西洋に没したアトランティス大陸に就て言つたことも、本当でいい筈である。ただそれだけではなくて、西インド諸島に行くと、探検家は色々な奇妙な事実にぶつかるらしい。例へば、南北アメリカ大陸のどことも系統が違つた文化の遺蹟が発見された島に火山の跡があつて、噴火口から流れ出した熔岩が一直線になつて海に向ひ、海底に没して沖まで続いてゐるのが海岸から見える。併

し噴火があつた時に既にそこに海が出来てゐたのならば、熔岩は海水に浸(ひた)つて急激に冷却して暗礁の塊(かたまり)をそこに拡げる筈であり、一列になつたまま海の中を進む訳がない。そこで発掘された花崗岩(かこうがん)の得体が知れない偶像は、鶴嘴(つるはし)に当るとぼろぼろになつたといふことだから、花崗岩も腐る程遠い昔には、海があつた所は陸地で、そこに噴火があつてから何世紀も後に陸地が海に変つたのだといふことが充分に考へられる。

さうすると、砂は何を埋めてゐるか。海の底は微生物の死骸が際限なく降り積つて、その沙漠(さばく)が凡(すべ)てのものを隠してゐるといふことだから、深くなればなる程、その沙漠が続くのを我々は見ることになる。沙漠よりも、泥沼と言つた方が事実に近いだらうか。プラトンのアトランティスの描写は華麗であつて、大理石の神殿に黄金で出来た四頭立ての馬車の像が置いてあつたりした光景を、プラトンは確信を持つて語つてゐるやうに受け取れる。そこの木の梢(こずえ)を風が吹き渡る有様はもう見られないが、この大陸とその文化のことが永遠に人間に知られずにすむかどうかは解らない。砂も、泥も、石材や器物を保存するのに絶好のものである。いつか、それが取りのけられる日が来たらどうだらう。地中の都市の廃墟(はいきょ)を発掘することはシュリイマン以来珍しくなくなつたが、北アフリカの海岸では、晴れた日には海中に没したギリシヤの植民地都市の廃墟が海の底に見える。そしてミロのヴィイナスが引き上げられたのも、海中からである。

そのモデルも海から現れた。併(しか)しそれはどうでもいいとして、水圧だとか、呼吸困難とか、

アトランティスを守る凡ての条件が克服された時に、大西洋の底の随所に見られる光景をここで想像したい。ポムペイに行つたものは感じた筈(はず)であるが、死んで長い間、日の目を見ずにゐた都市は、皆が鎧戸(よろいど)を締めて昼寝をしてゐるので何一つ動かないイタリイの午後の街以上に妙にひつそりした空気を漂はせてゐるものである。それに包まれて、一都市全体が砂原に横たはつてゐるのを眺めたら、どんなだらうか。砂か、泥か、微生物の死骸の綿かの下に埋まつて、外気から更に四マイルの深さの海水で距(へだ)てられてゐれば、大理石はまだ純白で、陶器の釉薬(ゆうやく)もまだ色褪(あ)せてゐないかも知れない。その白い大理石の廃墟が神殿を中心に並び、劇場はまだはつきり円形を描き、街の次に街が続くのが郊外に向つて延び、丘の上の祠(ほこら)まで行く途中に石段も崩れずに残つてゐたら、それが明かに人間の世界だつたものであるだけに、我々は恐怖よりも、懐しさを感じるのではないだらうか。そしてもしその都市を築き、そこに住んだ人々がギリシヤ語を話したことが解り、壁に、美しいアルキビアデスとか、美しいカルミデスとか落書きがしてあつたら、それはもう懐しさですむものではない。

併しプラトンが言つた馬の像は、実際は牛だつたかも知れないのである。石田英一郎氏によれば、インドから近東アジアに掛けて最初に人間に使用された家畜は馬ではなくて牛で、馬はもつと後になつて中央アジアから入つて来た。ポセイドンも、初めは馬の神ではなくて牛の神で、牛とともにエジプトから海を渡つて来たから、海の神でもあり、牛に乗つたポセイドンの絵も現に残つてゐて、そしてポセイドンはオリュムポスの山上に集つた神々の間で

は、常に外来神として扱はれた。そのポセイドンが、プラトンによれば、アトランティスでも祀られてゐて、黄金で出来た像が置いてあつたのは、確かポセイドンの神殿だつた。何れはその土地が海に沈むことを予感してのことだつたのだらうか。他の神々を率ゐてゼウスに反逆したのもポセイドンで、それならばアトランティス大陸の陥没は、ゼウスが弟神をその領分である海に追ひ返したのだとも解釈出来る。併し神話によれば、ゼウスはポセイドンと仲直りして、ポセイドンをもと通りの地位に戻してやつたことになつてゐる。神話は、真実の或る一部を我々に覗かせてくれればいいのである。

南アメリカ大陸の地質の調査などから、アトランティスが海中に没したこの変動は、例へば日本列島が次第に北アメリカに近づいて行くといふ風に徐々にではなしに、急にこの今は海中の大陸を襲つたものと考へられてゐる。南アメリカには、最下層にある筈の玄武岩の塊が大河の真中から突き出たりしてゐる所が方々にあつて、アンデス山脈の湖水の中にトルテツク文化の神殿の柱が倒れてゐるのも有名な話であり、現状から判断した限りでは、大西洋と南アメリカは我々の想像を絶する天災によつて出来たものらしい。アンデス山脈自体も、それから先日、英国が念の為に占領して英国領であることを宣言したロツコオルといふ大西洋上の、島とは呼べない程の岩も、何れも、この天災の産物かも知れない。この岩は勿論、海底に聳える高山の頂上で、その麓もアトランティスになる訳である。海面の近くは海藻に蔽はれてゐて、藤壺がその根元の岩肌にしがみ付き、魚が寄つて来るのは海の中にある

大概の岩と変りはない。もう少し下まで行くとどんな生物がゐるのか、我々は深海魚の写真には馴れてゐるから、さういふものを想像することで大体の見当は付く。そして愈々水面の光線が届かなくなり、完全な暗黒に包まれた海底の、ロツコオルの麓がアトランティスである。

そこの都市が発掘された所を勝手に考へて見たい。砂か、泥か、微生物の死骸の綿で保護されて来たならば、地震が来た時に崩れた神殿も、まだギリシヤや南部イタリイに残つてゐるものと同様に、何本かの柱が蛇腹と台輪を支へたままなのがその姿を現すといふこともあり得る。十世紀かに、或るポルトガル人が南米で偶然に発見した都市の廃墟では、民家も凡て石で出来てゐて、それが中央の神殿や宮殿がある広場に向ふ幾つかの道路に面して何千と並んでゐたといふことであるから、そういふ市街も、大体の原形を留めて残つてゐるに違ひない。そこで作業する以上、その辺がもとの暗黒のままで置かれる訳もなくて、人工太陽と呼んでいい程の照明が行はれるならば、その異様な光を受けて都市は純白に輝き、光に引き寄せられて集つて来た怪魚の群も、都市そのものに恐れをなして泳ぎ去りはしないだらうか。野原を照す金色の夕日とは違つた光が、欲望を満す船が集つて来る港とは別種の美しさがある町に差すのである。

併し沼は、海に比べれば陸も同じであつて、少しばかりの砂地が岸から見えても、この沼は兎に角、その大部分が泥である。葦の根元は確かに泥で、それが向う岸まで続いてゐると

思はなければならない。泥は都市と段々縁が遠くなつて行くもので、石を敷き詰めた都市は古代にも幾らもあつた。例へば、だから、町中で犬を飼つてゐると、散歩に連れて行つても足に土が付くことがないので弱つて来ることがある。日本の道路は世界一に悪いことになつてゐるが、他所での評判ばかり気にしてゐないで、自分の生活に即して辺りを眺めるならば、砂利が敷いてあることになつてゐた日本の町や田舎の泥道には、障子や火鉢と一つになつた潤ひがあつた。英国に始めて行つて、徒歩旅行でどんなに遠くまで出掛けても、地図にない小道までマカダム式にこちこちに鋪装してあつて、変に勝手が違ふ気がしたことがあつた。セント・マイクルの山に城が建つてゐるコオンワル州の湾を眺めた時である。

雨が降つた時の日本の町にも、道がぬかるみなので風情があつた。風情といふ言葉が茶の湯風でいやなら、フランスの象徴派の詩論に従つて作品に的確に盛り込める、日本人でなければ解らないのではない美しさがあつた。泥道に水溜りが出来てゐれば、曇り日の明りがそこに映り、窓に蝙蝠傘が陳列してある店の向うの電信柱には自転車が立て掛けてある。さういふ美しさは、例へばパリでは、時代がたつて真黒になつた石の建物に挟まれた横丁が谷間に感じられ、その先の大通りに薬酒とスウプの素の広告が広告塔に貼つてあるのがやはり雨に打たれてゐる、といふ風なことで表される。東京とパリの違ひで眼の色を変へるのなら、大西洋の海底に眠つてゐる都市などどう受け取つたらいいか解らなくて、その道の専門家が書いた解説を読み、新聞の特種記事に似た言葉を並べる他なくなるだらうと思ふ。併し古代

のギリシヤ人も、極く普通な人間の生活を楽んでゐたのである。

泥が我々にとつて懐しいものなのは、農業の問題は別とすれば、或はそのこととも関聯して、人間が泥から生れたものだからかも知れない。海からか、泥からか、どつちと言ふべきか解らなくて、エムプソンといふ英国の詩人によれば、生物は凡て海から生れた証拠に、人間の血液にも塩分が残つてゐるのださうである。正確には、海から泥が出来て、その泥の中から生物が陸に這ひ上つて来たといふことになりさうな気がする。陸は、初めは沼だつたとよく本などに書いてある。アトランティスの一部だつたかも知れない火山の跡がある島のもつと南に、それよりも更に小さな島があつて、そこの、始終泡が立つてゐるあをみどろの池で鳥の嘴に蜥蜴に似た頸の、脚と尾が鰐と同じの三尺ばかりの亀が発見されたことが記録されてゐる。その話を或る生物学者にして、珍しいことではないだらうかと言つたら、シイラカンスだとか、恐竜の卵の化石だとかいふのは素人の分類学者に任せて置けばいいことなので、今日の生物学者はもつと生命の本質に関する研究を進めてゐるのだと、頭から馬鹿にされて散々な思ひをした。併しこの亀は、泥の中からどんな化けものが出て来るか解らないことを示してゐるやうである。

泥が我々に懐しいものであるばかりでなくて、何かさういふ気味悪さも伴ふものであるのは、我々が我々の生れを恥ぢてゐるのだらうか。泥沼には、我々を過去の我々の汚行に引き戻さうとするものが確かにあるやうで、のたうち廻るといふのは陸に、或は泥沼に最初に姿

を現した生物にとつては普通の体の動かし方だつたらしい。ディプロドクスとか、ギガントサウルスとかいふ、何十メエトルもの長さがある昔の動物が、その大きな体の割に足がよちよちしてゐて、そして頸と尾が異常に発達してゐたのは、泥沼の泥で体を半分支へてゐて、それでその幾トンあるか解らない体重に堪へる程強い足が必要でなかつたらしい。尾もさうなれば足の一種で、長い頸を沼から突き出しては、岸に生えてゐる植物を食べてゐたのださうである。この光景も、想像して見るのに値する。

その頃は、沼の蒸気が霞んで照り付ける太陽の熱を加減し、蘇鉄のお化けのやうな植物の林に囲まれた沼のあちらこちらに、鯨そこのけの動物が頭と背中だけを出してゐたに違ひない。ディプロドクスの絵などを見ると、かういふ動物は艶々した滑かな皮膚をしてゐたらしいから、これが日光を浴びて鈍く光つてゐたものと思はなければならない。動物園で河馬が水の中から出て来る所を見たことがある人は、この古生代の沼がどんなだつたか、察しが付く筈である。河馬とディプロドクスでは形が違ふが、我々が昔の生物を如何にも不恰好な、又それ故に恐しいものに思ふのは、その頃の環境も不恰好で、日光ももつと荒つぽい差し方をしてゐたのに違ひないことを忘れる為でもあることを、勘定に入れなければならない。鯱が南極洋で跳ねるのを見たものは、それが壮観であると言つてゐる。そしてそれならば鯱の何倍もあるギガントサウルスが古生代の沼で、広々とした背中を泥の中から現してゆつくり動き廻る有様は、その環境のことを思ふならば、のどかな感じさへするものではなかつたのだらうか。

遅き日に江山の麗しく
春の風に花草は香んばし
泥は融けて燕子の飛び
沙は暖かにして鴛鴦の睡る

これは「新唐詩選」の吉川幸次郎博士の書き方に従つた杜甫の詩で、ディプロドクスとは関係がないやうでもあるが、燕だからのどかで、プテロダクティルではさうではないといふ風に決めてしまふ所から、詩の硬化が生じる。泥沼の靄の中でディプロドクスが体を伸ばして眠つてゐる所ものどかなものなので、その体がとてつもなく大きいだけに山が昼寝をしてゐる姿にも似通ひ、これは海底に紫色の怪物が眠つてゐるのに呼応する。ディプロドクスが明日のことに頭を悩まさなかつたことだけは確かである。

そしてそれで又思ひ出すのだが、誰だかが未来の人類の為にといふので埋め立てに掛つた沼の岸にはフィレモンとバウキスといふ、幸福な生涯の終りに近づいた老夫婦が住んでゐた。ゼウスもその幸福を羨んで二人の為に神殿を建ててやり、二人が同時に死ぬことを許し、死後は二人を神殿の前に生えてゐる二本の木に変へた位だから、神々の食卓にも、女神の床に

もない幸福といふものもあるのである。その二人の訴へを聞いて、ファウストも胸を掻きむしられた。併しここでも、二人の幸福と人類の幸福を比較するやうな野暮なことがしたいのではない。二人は幸福だつたので、そして人類のうちにも、二人と同じ幸福を知るに至るものがある。ファウストもそれを思つて、しまひには悪魔との賭けに負けることが出来た。

ディプロドクスと、フィレモンとバウキスと、そして序でに、カドモスとハルモニアのことを考へて見てもいい。ここから遠いアドリア海の波が温かな湾に砕ける所、といふのだから、沼ではないが、この二人はそれまでは幸福とは言へなかつた。四人の娘のうち、一人はアクタイオンの母、一人はゼウスによつてディオニュソスの母になり、一人は金羊毛の伝説がその為に起つた程のことをしながら、四人とも非業の最期を遂げて、カドモスとその妻は悲みに堪へず、神々に願つて姿を蛇に変へられてそのアドリア海の湾に住み付いた。そして花が咲くその辺の丘を這ひ廻り、湾に寄せる波を眺めて、ヴィイナスの怒りも、アルテミスの復讐も忘れて、幸福に一生を終つたといふのである。

その二匹の蛇は、大蛇だつたと思ひたい。蛇は木のやうに、年輪を加へて成長するのではないだらうか。我々の一生も、振り返つて見れば、さういやなことばかりではない。悪いことばかりだと思ふものもゐるかも知れないが、その間にも年輪を加へて老境に向つて行く。巨大な蛇になつて、沼に降りて行つて水を飲むのも楽しい。フィレモンとバウキス、ディプロドクスにカドモス夫婦、そして我々である。沼にはそれだけの広さがある。

その沼が眼の前にあつて、さう遠くない所を利根川が流れ、これは昼飯に鰻の蒲焼を食べに来た帰りだとすれば、今までのことは凡て昼の眠さ凌ぎの白昼夢に過ぎなかつたことになる。小説にならなかつたのが残念である。

恐竜展で

清岡卓行

——あれは　恐竜のオチンチン？
と　幼い子が指で差した。
なるほど　股のあいだから
斜め下前方へ一メートルあまり
異様に突き出たものがある。

マメンチサウルス・ホチュアネンシス。
日本の東京の
上野公園にある国立科学博物館へ
中国の四川省の合川（ホチュアン）の

楼古山にあるジュラ紀の地層から
約一億四千万年もかけて
はるばるやってきた　恐るべき珍客
巨大な化石の全骨格。

——ははははは　あのとんがりはね
と　父は仕入れたばかりの知識を用いる
——恥骨っていう骨でね
もし　オチンチンがあったとしたら
あの先っぽの下のへんじゃないかな。

全長二十二メートル
生時の推定体重約四十五トン
アジア最大の恐竜といわれる　この
竜盤目・竜脚類のマメンチサウルスは
水陸両生　草食　四脚歩行で
とても小さな頭を載せた頸が　すごく長く

胴体は包(パオ)のように　大きくふくらみ
四肢は柱のように逞ましく
尾は根太く先細りで　やはり長い。

レッドキング　ゴモラ
ゴルドン　アボラス　バニラ
ネッシー　ケラトサウルス
ボーンフリー。
これらは　幼い子がかつて熱中した
テレビ映画に登場の
恐竜のような　空想の怪獣たち。
そんな連中の姿も　いくらか重なるのか
また　マメンチサウルスそのものに
なかなか見あきないのか
幼い子はにこにこしている
――こわいけどね　おもしろいよ。

父のほうが茫然としている。
たとえば　すぐ近くに見える後脚の
爪の鋭い趾骨の大きさと形に
連想すべきほかの生物の指がなく
少年の日の薪割(まきわり)まで　呼び戻すのだ。
また　後脚の　優美な曲線の脛骨の
灰色がすこしかぶさった茶色に
連想すべきどんな悲哀の光もなく
夢のなかの望楼まで　呼び戻すのだ。

父はふと
マメンチサウルスの亡霊に
底の知れない鏡をかんじる
――人間とは　ふしぎなものだ！

湖や川のほとりで　集団でくらし

亜熱帯の植物で　一生成長をつづけ
肉食恐竜が襲ってくると
深い水中にのがれ
頭だけ出していたというマメンチサウルスは
図体に似合わず　優しく
子煩悩であったともいうのだが——。

入場者の混雑のなかで　父と子は
第一室のマメンチサウルスのあとも
恐竜かそれに近いものにばかり　目を奪われた。
デボン紀の魚や植物から
更新世の大荔人(ターリイ)の頭骨にいたるまで
中国でとれた化石が三百七十二点
展覧会に並べられている。

三畳紀のヒマラヤサウルスは
いるかに似た恐竜というが

頭・背骨のかけらだけで　姿が浮かばない。
ジュラ紀のユンチュアノサウルスは
大きな頭と鋭い歯が密生の　肉食二脚歩行で
頭骨だけだが　ライオンのように怖ろしい。
ジュラ紀のトウジャンゴサウルスは
背に対の棘板(きょくばん)の　見事な全骨格で出ており
一見恐そうだが　じつは防禦的なのだろう。
白亜紀のチンタオサウルスは
草食二脚歩行で　頭上に鶏冠(とさか)のような突起があり
その立姿の全骨格は　話す人間に少し似ている。
白亜紀のズンガリプテルスは
空を飛ぶ翼竜で　湖の魚が餌食というが
全骨格は　大きな沙漠をも越えるスピードだ。

会場からの出口で　見物のひとびとは
そこに置かれた　別のマメンチサウルスの
大腿骨の化石に

つぎつぎと手の平をのせていた。
父と幼い子も　その行列のしっぽにつながり
こんな文字のあるカードをもらった
――あなたが一億四千万年前の
　恐竜の骨にふれたことを証明します。

会場から公園に出ると
目が痛くなるほど　眩しい
真夏の快晴　正午すこし前。
緑の空気が熱っぽく　爽やかな
その沈黙の深さのなかで
父と子は　しばらく
人間の　短かすぎる
生命（いのち）をもてあましていたようだ。
手をつないで　並木の蔭を求めて歩き
昼めしになにを食べるか
どんな店に行くか

その相談が天から降ってくるまで
たがいに声を消していた。

トリケラトプス

河野典生

その父と子はサイクリング帰りだった。
秋も深まったある日曜日、二人は川沿いのサイクリング・コースへ出かけて行った。それから、国道の排気ガスと土ぼこりの中を潜り抜け、ようやく自宅まで約一キロの住宅地へ乗り入れて来たところだった。この、いくらか古い住宅地を抜け、小さな丘の向う、新開地に、父と子の住居はあった。
七時をわずかにまわった時刻だが、晩秋の陽はつるべ落しで、あたりに闇がひろがっている。
街灯の黄色い光の下、父親は自転車を停め、大きく深呼吸した。
息子の自転車が近づいて来る。
「どうしたの？　お父さん」

「膝がもうガタガタだ。ちょっと一服させてくれよ」
「ぼくは平気だよ」
「そりゃそうだろうさ」
父親は言い、煙草に点火しながら、苦笑を浮かべる。「きみは、躰をきたえるため走ってる感じなんだが、おれの齢だと、寿命縮めるために走ってるみたいなのだからな」
「ヘッ、もうそんな齢ですかねえ」
「そんな齢さ」
ふーッと煙を父親は吐く。
息子は停めた自転車の上で、サドルにまたがったまま、両脚交互にぶらぶらさせている。
ずいぶん背が高くなったな。
父親は思う。サドルを少し上げてもよさそうだ。まだ中学一年生だが、背丈はおれと、もう幾らもちがいはしない。
どこか、むっとする動物に近い体臭――いや実際に体臭をまきちらしているというわけではないが――そんな感じさえする圧迫感を、もう、おれに与えやがる存在だ。
結婚後数年間の狭い市街地のアパート暮し。あの頃、こいつは、よく泣きわめく子供だった。
それから、公団アパートでの永い生活。

現在の住いを曲りなりにも手に入れるため、おれは働き続け、これからも働き続けなければらないが。
「あ、どっかでカレーライス作ってる」
息子がいきなり言った。
「腹ぺこだよ、ぼく。そろそろスタートしようよ。もう、すぐじゃないか」
「そうだな」
父親は苦笑した。
ときに生意気なことを口走っても、まだ、やはりこいつは子供だ。父親は煙草を靴先でつぶし、ハンドルに手をかけた。
「じゃ、行くか」
「うん」
父と子がペダルに片脚をかけて、前方に目を向け弾みをつけようとした瞬間だった。
五、六メートル先の十字路を、大地をゆるがせ、巨大な影がよぎって行った。
まさに、ブルドーザーか、いや、むしろ十トンダンプかと言った量感、そして力感の持ち主だった。しかもその影は、一瞬の間ではあるが、あきらかに動物質のぶ厚い皮膚、ぬめっとした光、筋肉のうごめき、それらをはっきり父子の目に焼きつけて、走り去ったのだ。
ペダルにかけた脚を降し、ハンドルを固く握りしめながら、父と子は前方を凝視していた。

街灯の光の中、もうもうたる砂塵が舞っていて、地響きはしだいに遠去かって行く。
低い地鳴りのように、それは轟いていた。
やがて、ふっと、その轟きは消えた。まるで、録音テープの音響が、いきなりカットされたような、いくぶん不自然な感じの消滅だったが、とにかく、轟きは消え、赤ん坊の泣き声、夕餉のにおい、けたたましいＴＶコマーシャル、それらが、あたりに満ちはじめていた。
——行ってみるか。
父親が目顔でたずね、息子はうなずいた。
父と子は十字路で自転車を停めた。
数本の街灯が、ぼんやり光を投げかけていて、ガス、水道工事の痕跡がいたるところにある、ひび割れたアスファルト道路が、静まりかえって延びていた。
「どこへ行ったんだろ」
息子が言った。
「ああ」
父親がうなずく。
二人とも、しばらく黙っていた。
やがて息子が言った。
「ねえ、何だと思う？」

「わからないな」
「犀かとも思ったんだ。牛にしては大きすぎるでしょ。なんか七、八メートルはあったみたいなんだ。錯覚かも知れないけど、高さは、この塀の二倍はあったみたいで。そうだとすると、三メートルより、もっと高いし……」
「ああ」
　父親はうなずいた。「犀が動物園から逃げたケースだって、そりゃないことはないだろう。しかし、おまえ、あいつ頭に二本、角を持ってたのを見なかったかい？」
「角？　うん、そういえばあったみたい」
「だとすると犀じゃないな」
「じゃあ、やっぱり牛かな？」
「そうだね。最近あまり見かけないが、どっかの小牧場あたりから、雄牛が逃げ出して来たんじゃないかね」
「うん」
「ま、とにかく、あの勢いじゃ、出会いがしらに車かなんかにぶつかると、大事故になるのは間違いなしだな」
「うん」
　父と子は、あらためて道路の向うを見た。

　耳をすましてみた。だが、やはり、夕暮の町の平穏きわまるさんざめき以外、特別の気配は何ひとつ伝わって来ない。
　——まるで何ごともなかったかのようだ。
　父親は頭を振った。——おれひとりが見たのだとすれば、幻覚としか思えなかったろう。
　やがて父と子は黙々とペダルを踏み、家路を急いだ。道は次第に登りになり、何度か二人は小休止した。
　背後に町がひろがっていて、父と子は振り返ってみたが、異変の気配も、それらしい影も、地響きも土埃りさえも、まったく気配はどこにもなかった。
「ねえ、尻尾は見なかった？」
　ぽつんと息子が言った。
「さあ、そいつはどうかな？」
「なかったかなあ。すごく太い尻尾……」
　やがて父と子は、坂を登り切り、わずかに残った雑木林の間を抜ける。
　いきなり眼下に、自宅のある新開地がひろがる。新しい町の新しい家々、それらは、それぞれ灯を点しているが、そこここに見える水銀灯の鋭い光のせいだろうか、ずんぐりうずくまってみえるのだった。

＊

「おお、いや。ほんとに、そんなに大きいの?」
　食事の箸を停めて、母親は父と子を見た。
「そうさ。犀かと思ったくらいなんだ」
「それじゃ大変な出来事じゃない。町じゅう大騒ぎになってたでしょ」
「ところが、まるで騒ぎにはならない。走って行く物音だって、ふっと消えちまったしな」
「うん、嘘みたいに消えちまった」
「でも、そんなことってある? あ、そうか。それで二人とも、めずらしく、さっきニュース見てたわけね。何かニュースで言ってなかった?」
「ないんだな、それが。しかし、まだニュースになるには、早すぎるかも知れない」
「きっと、ぜったいニュースになるよ。だって、七、八メートルは確実にあったし、高さは三メートルを越えていたし……」
「いくら何でもオーバーよ。だって、そんな大きな牛、見たことも聞いたこともないわ。ね、ほんとに本当? かついでるんじゃない?」
「かついでなんかいないよ。とにかく見たことは確かなんだ。ね、お父さん」
「ああ。とにかく、あれが牛だとすると、ステーキ五百人分は優に取れるね」

「いやよ、いや! やっぱり、かついでるんじゃない」
　母親は、けたたましく笑い、父と子は奇妙にあいまいな表情のまま顔を見合わせた。
　やがて父親も、短く乾いた笑声をあげる。
「ま、どうだっていい話だがね。いきなり地響きがして、あっという間に駆け抜けて行ったから、こっちの驚きも大きくてね。そのせいで、街灯の影も加わり、ぐっと大きく錯覚させられちまったのかも知れない。とにかく、はっきりしてることは、犬とか豚の類いの動物ではなくて、ぐっと大型の動物だったということだけさ。な? そうだよな」
「うん」
　幾分不満そうに息子はうなずき、黙々と箸を動かしはじめる。
　テレビは歌謡番組を流していた。薄物を身にまとった混血女性歌手が、くねくねと手脚をゆらめかしながら、吠えるような、いきむような奇妙な声で唄っている。
　ふたたび、けたたましい声で母親が笑った。
「どうしたんだ?」
「だって、この歌手、いま鼻を鳴らしたわ」
「鼻を?」
「なによ。きのう、あなた言ってたばかりじゃない。この歌手、いきんで唄ってるうち、思わず鼻を鳴らすくせがあるって。あたし、そんなばかなって笑ったけど、ほんとに、いま鳴

らしたのよ。だから、あたし、おかしくって……」
母親は、ふたたび笑い転げる。
父と子は苦笑し、首をすくめた。

*

その日、夜半近くまで父親は酒を飲んでいた。
妻と息子は眠りについたが、彼だけは寝つかれないまま起き出して来て、居間の炬燵に脚を突っこみ、片肘つき斜めに躰を起した姿勢で、少しずつ注いだウイスキーを、ゆっくりとすすり続けていた。つけ放したままのテレビ画面が、最後のニュースを始めたが、やはり、それらしい報道は何ひとつない。
――やはり何かの見まちがいか。
疲労しきった筋肉のすみずみまで、しみとおったアルコールが、ぐったり躰を鞣して行く。
いつしか、父親はまどろんでいた。
誰かが鼻を鳴らしている。やがて、それは、さらに荒く、まるでふいごか何かのように激しさを増す。冗談じゃないぜ。いくらなんでも、あの歌手はこんな鼻の鳴らし方をしやしない。ひどい夢を見ているものだな。半醒半眠のまま、そんなことを考えていた。
やがて、低い、しかも巨大な洞穴の中でのそれのような、野太いうなり声が加わって来た。

いや、歌手の声なんかじゃない。これは何だ。
ふいに目をひらく。
うなり声。
ふいごのような物音。
それらは続いている。
ブラウン管を見た。すでに放映は終っていて、チカチカする砂嵐のような光、雑音が流れている。スイッチを切った。
物音は戸外だった。
カーテンの隙間から戸外を見た。
猫の額ほどの庭に、まばらな雑木の植木があり、その向うの生垣の上に、巨大な黒い影、そして夜目にも鋭く光る目があった。
犀にも似ていた。
だが、鼻の先の角は、犀よりさらに鋭角的だったし、その下に猛禽の嘴に似た口があり、その口から、まるで蒸気機関車のように激しく白い息を吐いていた。頭部は躰の三分の一あり、どちらかと言えば野牛に似ていた。長大な二本の角が、槍の穂先のように突き出していたが、頭と胴との間にある、めくれあがった兜状のひだは、知っている限りのどの動物にも、似ているものはないようだった。

ドアのひらく物音がした。
振り返ると、息子が立っていた。パジャマの上からズボンをはき、セーターに片腕を通しながら、真剣な目で父親を見ていた。
「いるの?」
声をひそめて息子が言った。
「ああ」
父親は顎をしゃくって、戸外を示す。
巨大な動物は、角の先端で、生垣を二、三回、引っかくようにした。それから、ゆっくりと横を向いた。進みはじめる。まるで夜戦に向う重戦車と言った感じに。暗褐色にみえる背、そして尻、その尻の頂点から垂れているずっしり太い大とかげに似た尾、それらが、ゆっくりと視界をよぎる。ぶ厚い皮膚の下の筋肉のうごめき。
「牛でも犀でもないよ」
息子が喉にからんだ声で言った。
「ああ。どうやら恐竜だ。そうとしか思えない」
「あの恐竜なら、ぼく本で見たことがある。有名な恐竜なんだ。アロサウルスでもないし、スティラコサウルスでもないし……」
「アロサウルスというのは確か肉食だったな? ティラノサウルスなんかとおんなじで、す

ごい歯をもっている。いまのやつは嘴はすごく尖っていたが、歯はたいしてなかったみたいだ」
「嘴みたいな口だったの?」
「そうだ」
「トリケラトプスだ! そうでしょ、お父さん! 三角竜ともいうんだ。鼻の先の一本と額の二本と、合計三本、角があるでしょ」
「そうか。そう言えばトリケラトプスだ」
約七千万年以前、中世代白亜紀後期、史上最も狂暴だったと推定される肉食獣ティラノサウルスが横行する世界にあって、生存競争のため、激烈な闘いをくり返さなければならなかったトリケラトプス。自衛のための、最も強力な武器を保持していた、その草食恐竜が、いま、ゆっくりと目前の路上を歩いていた。
「出てみるか」
「うん」
父と子は玄関のドアをすり抜け、戸外に出た。寒気が満ちていたが、風はなかった。
十メートルほど向うを、トリケラトプスの小山のような尻が、電信柱ほどの尻尾をひきずって、ゆっくりとうごめき進んでいた。ぐいと張った兜状のひだで頭部の様子はわからなかった。だが、トリケラトプスの姿勢から見て、前脚を曲げ、頭を下げて、あたりの気配に慎

重に身がまえ進んでいる姿は、だいたい想像できるのだった。

やがて、トリケラトプスは道路の突き当りに着いた。前方は大谷石の塀、左右にも石塀、煉瓦塀があった。

――引き返して来るぞ。

父と子はそう思い、自宅の門柱のあいだに身を引こうとしたが、瞬間、彼らは声もなく立ちすくんだ。

トリケラトプスは立ち停らなかった。大谷石の塀に頭をつけ、なめらかに沈み込んで行った。首のひだが消え、前脚とその上の背の部分が消え、胴が消え、尻と後脚が消え、尻尾のつけ根から末端まで、じりじりじりと消えて行った。

*

朝になって、会社へ向う父親と学校へ出かける息子は、二人同時に家を出た。

疲れ切った顔で、食も進まぬ父と子に、無理なサイクリングなんかするからよと、ぶつぶつ母親は言っていたが、彼らは抗弁しなかった。

父と子は目くばせをし合い、突き当りの大谷石の塀まで歩いて行く。塀はずっしり、立ちふさがった。

触れてみたが、変化はなかった。

塀の向う、モルタル塗りの住居の壁、窓ガラス、それらのどれにも破壊された部分は何ひとつない。

息子が言った。

「次元断層って話、読んだことあるけど……」

「ああ。あれは、あくまでも仮説だ」

「仮説って？」

「実際には証明できないことを、仮にこうじゃないかと考えてみることさ」

「だったら、次元断層というもの、実際あるわけじゃないの」

「だから、あると考えてみただけさ。あるかも知れないし、ないかも知れない。あると考えれば、この塀の平面あたりが断層だろうな。七千万年前、トリケラトプスの世界と、おれたちの世界のね。しかし、ほかに、どんな考え方だって許されるんだ」

「たとえば？」

「たとえば、おれたちの世界とトリケラトプスの世界と、同時に存在してると考えてもいい。たまたま生じた断層から、出たり入ったりするのじゃなくて、わずかなずれがあるだけで、同時に存在しているんだ。だから、なにかのぐあいで、おれたちはむこうの世界を透かして見ることが出来るし、むこうからも見ることができる。その程度の微妙なずれさ」

「ふうん？」

「おれが、そう思ったのは、今朝方、なにか、むっとする、なま暖いような動物のにおいが家の中にこもってるのに気がついたからさ。しかも、これは、はじめてじゃない。少なくとも一、二カ月前からこんなぐあいだった。そんなふうに思えて来たからだ。この家の人びとだって、きっと、そうにちがいないんだ」
「トリケラトプスが入って行ったから？」
「そうさ」
「見ることもできる？　ぼくたちみたいに」
「ああ。……しかし、人間の頭ってものは、あり得べからざるものは否定しようとするからな。一種の防衛本能でね。だから、何かのぐあいでふっと見えたり、感じたりしたことがらも、たいてい、自動的にシャットアウトして、見もしないし、感じもしないことにしてしまう。もし、見たことを一度、二度、再認識することになっても、こんどは常識というやつがのさばって来て、気のせいだとか、妙なことを考えたもんだな？　とか苦笑いして終ってしまう」
「終らなければ？」
「まわりが受け入れてくれないさ。つまり社会生活ができなくなる」
「病院に入れられる場合もあるね」
「そうさ」

息子は軽く首を振り、短く笑った。
「どうしたんだ？」
「ううん。ちょっとお母さんのこと考えたからさ。ゆうべ、ここで見たこと話さなかったでしょ。話したら、どんな目に会うかと思ってさ」
「はは」
父親も軽く笑い声をあげた。「ま、とにかく、ひどい目に会うことは確実さ。彼女が、たまたま同じ物を見た後でない限りはね」
「友だちにも黙ってなきゃなんないな」
「それは当然さ。じゃ、とにかく行くか。帰ってからまた、ゆっくり話そう」
「うん」
父と子は歩きはじめた。
ときおり、何ごとか話し合い、楽しそうに笑声をあげながら。
近隣の人びとに出会うたび、
「おはようございます」
「おはようございます」
弾んだ声のあいさつをまき散らしながら。

*

それから父と子は、しばしば恐竜を見た。
夕映えの空を振りあおいだとたん、プテラノドンらしい巨大な翼竜の影が、ひらひらとよぎって行くのを見たこともあったが、地上の恐竜は、ほとんどトリケラトプスだけであった。
奇妙な石頭を持った恐竜、パキセファロサウルスが同じ時代に生きていたのを調べて来て、息子は出会ってみたいと思っているようだったが、おそらくこの一帯はトリケラトプスに最も適した生息地だろう。通りがかりのガレージの乗用車とちょうど頭部を重ねたかたちの、奇妙な角を生やした車がいびきをかいて眠っているようなユーモラスな風景、道端でむずかって泣いている幼児の頭上を、ゆっくりと通過して行く巨大恐竜、それらはすべてトリケラトプスだった。
その頃は、夜に限らず、父も子も、幾分、薄れてはみえるにしろ、光の降りそそぐ、まっぴるまの路上でも、彼らの生態を見ることができた。
目にみえるものばかりではない。むっとする動物のにおい、低い呻き。そして氷の張った厳冬の朝、あり得べくもない花粉のにおいに父子ともども襲われ、大きくむせかえりながら駅まで走り続けたり、交尾期のせいか、夜通し鳴き交すトリケラトプスのバスーンに似た遠吠えを聞いたりした。

――なんだか最近、ぼくと、お父さん、いやに親密みたいね。なにかあるの？
母親がそんなことをいう日もあったが、息子は、ただニヤッと笑って、
――べつに？
というだけだった。
そんなある日、やはり日曜の夜、最初のトリケラトプスに出会った日ほど遠出ではないが、近郊のサイクリングに出かけた父と子が、丘の上の雑木林を抜け、新開地を見降したとき、彼らは思わず自転車を停め、声もなく立ちすくんだ。
町のあらゆる家という家に、トリケラトプスが重なり合っていて、水銀灯の光のせいか、鮮やかな緑褐色にみえる皮膚を、ゆるやかに息づかせていたのだ。ときおり彼らは薄く目をひらくが、現存の鰐のある種属にみられる、昼間の光を吸収するロドプシン色素のせいか、目をひらくたび、鮮やかなバラ色に輝く瞳が現われ、巨大なホタルのまたたきのような、夢幻的な美しさだった。
「やつらの地形と、この町の地形が似てるのかな？」
「うん。それとも、むこうもこっちが見えたり、感じたりしていて、なんとなく暖かいところへ集まっちゃったのかも……」
「そうだな」
「でも、なんだか変な感じ。この町の人はみんな恐竜の腹の中から会社や学校へ出かけ、ま

た腹の中へ帰って来て、ごはん食べたり、テレビ見たりしてるんだから」

「そういうことだね」

「あ、ぼくの部屋はお尻のあたりだ」

「はは。気にしない、気にしない」

「しかし、ずいぶん平和なんだね。あんな、すごい格好してるくせに、トリケラトプスが闘ったの見たことないよ」

「走ってるのもめったに見ないし」

「そうだ。隣町で最初に見たやつだけだな」

「あれは、どうして走ってたんだろう」

「さあ、どうしてかな？」

「とにかく今は平和なんだね」

「まあ、平和にこしたことはないさ」

*

だが、やはり平和は永くは続かなかった。

大陸からの黄砂が空を覆い、陽の光を血の色に変えた、いやな気分の日だった。

その日、友人宅から帰る途中、丘の上から何げなく国道のあたりを見降していた彼の息子

が、土煙りをあげ、駝鳥に似た奇妙な大またの二本足で、長い尾をはねあげながら走っている十数頭の恐竜を見た。

「あれは、ぜったいティラノサウルスだったよ。すごく太い後ろ脚と、飾り物みたいなちっちゃな前脚でさ。ぐっととがった口のあたり。とにかく、ティラノサウルス、すごい勢いでさ。駅前あたりまで走って来たんだ」

「駅前からだと、こっちはすぐじゃないか。しかし、さっき帰って来る途中、おれはぜんぜんティラノサウルスの気配も感じなかったぜ。ガレージのトリケラトプスなんかも、相変らず半眼ひらいてジロッとこっちを見ただけだしさ」

「でも、たしかに見たんだがなあ」

「この町は素通りして、どっか、ほかの場所へ行ったんじゃないか？」

「でもどうしてだろう。駅前あたりで、どんどん見えなくなっちゃったけど」

「うーむ」

父親は腕を組んだ。「だとすると、あのあたりに、やつらが、まだ群れたままでいるか、それとも……」

「行ってみようか」

息子が言った。

また内緒で何かたくらんでるのね。そんなふうに母親が声をかけたが、父と子は笑って手

を振り、自転車にまたがった。

駅まで走ったが、やはりティラノサウルスの影は見えない。駅前広場で、しばらく様子をうかがってから、父と子はゆっくりと帰りはじめた。

駅近くから、かつての小川の上にコンクリートの蓋をかぶせ、その上を子供の遊び場にしている暗渠が延び、もうひとつの道路のかたちで新開地近くまで続いている。

「こっちから帰ってみるか」

父と子は自転車を乗り入れた。

「やはり、いないようだな」

ゆっくりとコンクリートの平板の上、父と子は自転車を走らせて行く。平板の継ぎ目に乗りあげるたび、自転車のタイヤは大きく弾み、ガタガタと音を立てた。

前照灯が右に左に大きく揺れた。

しばらくして、彼らは奇妙な物音を聞いた。それは激しい水音と、一オクターブ低い無数の豚のいななきのようなもので、やがて大地の響きが、加わっているのが分って来た。

自転車を停め、父と子は耳をすました。

いきなり足元を見た。通気口の鉄蓋まで走った。網状の鉄蓋の下激しく水を蹴立てて、やつらが走っていた。濡れた皮膚を光らせ、ぐいと首を突き出し、まるでベルトコンベアのように際限なく、ティラノサウルスの群は新開地へ向っていた。

水路伝いに彼らは来たのだ。

国道の一団は、一部、別動隊で、駅前から合流したのだろう。

「ひどいことになりそうだぜ」

「とにかく急がなきゃ」

急いだところで、どうにもならないが、父と子は自転車を走らせた。

新開地近く、暗渠を覆う、コンクリートの表面から、無数のティラノサウルスが、まるで遠目には泥水の噴出のように、地上へ躍り出していた。

やがて斜面の新開地の、あらゆる家々が、いっせいにぐいと屋根を持ちあげ、そのまま移動をはじめたかにみえた。

トリケラトプスが立ちあがったのだ。

闘いは始まった。

父と子のすぐ目の前でも、頭を下げ突進して来たトリケラトプスが、鋭い二本の角を、ティラノサウルスの頸動脈に突き立てた。長い尾を振って離れたティラノサウルスは、消防ホースからほとばしる水のように高々血液を噴出しながら、大きくはねあがり、前脚二本指のカギ型の爪で、一気にトリケラトプスの眼球をえぐり取った。

父と子の家の数メートル手前では、横倒しになったトリケラトプスの巨体に、三頭のティラノサウルスが群がって、爪で引き裂いた腹の肉に、鋭い歯を立てていた。あたり一面、濁

流のような血の洪水だった。
「うちのトリケラトプスじゃない？」
おびえた声で息子が言った。「ほら、ちょっと右の角に傷があるでしょ。あれ覚えがあるもの」
「どうやらそうだな」
玄関先にはティラノサウルスが倒れていた。その血走った目、大きく波打つ腹、それらを横目で見ながら、父と子は自転車を私道に入れた。
闘いは夜通し続いた。
ブラウン管の中の家族歌合戦の笑いさざめきの最中にも、父と子は彼らの雄叫び、厚い皮膚の引き裂かれる音、断末魔の悲鳴、それを聞き続け感じ続けた。
朝になり、父と子は、黙りこくって駅までの道を歩く。
闘いは、ほぼ終了し、トリケラトプスの、ティラノサウルスの、数知れぬ死体、わずかに尾の先端を動かしている者、引き裂かれた腹をひくつかせている者、それらの巨体が、あらゆる場所に転がっていた。
トリケラトプスの躰は、ほとんど例外なく、内臓がさらえられ、肋骨が露出し、頸部のひだが引き千切られたりしていたが、ティラノサウルスのそれは、首や腹に刺し傷を見せているだけで、破壊しつくされてはいなかった。

だから、傷を負って、うごめいている躰のほとんどは、ティラノサウルスのそれだった。そこここに、生き残っている者たちもいた。しかし、彼らにしても、傷を負わない者は皆無で、もう闘いを続ける気力もすっかり失ってしまっていた。
腿の部分から、なかば千切れかけた片脚を投げ出し、それでも、自分の倒したトリケラトプスの腹部から、内臓を引きずり出して来ては、むさぼり食っているティラノサウルスがいた。
彼の背後には、大きく頸部に穴がうがたれ、乾いた血を全身こびりつかせた仲間の躰が転がっていて、その傍ら、つまりは、生きているティラノサウルスから、五メートルと離れていない地点で、片方の目から血を流し続けるトリケラトプスが、黙々と草を食んでいた。ティラノサウルスは、ときおり腹の肉から顔をあげ、気のせいか、恨みがましい目で、草を食むトリケラトプスを眺めやった。
――おい、そんなものを食うなら、どうして殺した。
そんな声がきこえるように、父と子は感じた。
――食いきれないのに、どうして殺す。
血の流れていないトリケラトプスの片方の目が、そんな感じに見返していた。
父と子は、それらを眺めながら、ゆっくりと駅まで歩いて行った。濡れていない死体なら、まだよかった。道路いっぱい、引き裂かれた腹から飛び出したティラノサウルスの大腸が、

のたうちまわったかたちに転がった地点では、さすがに立ちすくみ、ようやく、道路の端を迂回して通った。

それら血まみれの光景の間を、洒落た白いパンタロンの女性が、いぶかしそうに父と子を見やって、靴音高く通り過ぎる。

幼稚園児を満載したマイクロバスが、けたたましいさえずりを乗せて通り過ぎる。

揚雲雀、空に舞い、
神、空にしろしめす。
すべて世はこともなし。

恐竜

山野浩一

褐色の土は湿気を帯びているため、時折西側の山から吹き降りてくる風が、砂埃を巻き上げる事もなく、グラウンドの周辺に並んだ闊葉樹の小枝をざわめかせるだけで、あたり一面快い静寂が漂っていた。

太陽が東の空の中程に位置し少しずつ夏の射光を投げ始める頃には、山からの風が完全に止まり、八月の熱気と乾燥が付近を支配する。

「ファイト、ファイト、ファイト、ファイト！」

キャプテンの吉川が真新しいボールを一直線に蹴ると、それを追うように二十人近くの若者達が駈け出し、静寂を破る掛声とスパイクの音がグラウンド一杯に蒔き散らされた。

「あと二日だ、馬力だせよ！」

先頭を走っていた木村がボールに追いついて、振り返り、足でボールの転がりをくい止め

ると、彼の直後に居た五島がボールを奪おうと木村に体当りする。球は五島の足先に当って勢いよく転がった。

「五島、随分はりきってるな」

木村が云うと、五島は陽に焦げた顔を彼に向けて「オゥ！」と答える。

キーパーの森はゴール前で球を待ちながら大声で言った。

「そいつは合宿になるとはりきるんだ。五島、お前は合宿好きだな！」

身体に似合わぬ森の甲高い声は、彼等の走った所だけにスパイクの跡が残されたグラウンドの土に吸い込まれていくようだ。

「あたりまえよ！　何か好きでなけりゃ、こんな儲からん商売続けられますかってんだ！」

叫び声とボールの音と静寂は規則的に繰り返されて、時折笑い声がそれに加わる。

木村が中心になったフォワードの攻勢が、五島らのバックによる防禦陣を破って、キーパー森の前方に球を転がす。森はゴール前に中腰で構え、五島と木村がボールに追いつくと、全員が構えを解かずに成り行きを見守った。五島は足がボールに触れると素早く足の甲をひねって体の後へ転がし、そのままドリブルにはいろうとする。彼が完全に球を足の動きに合わしたと思った時、木村の右足が球と足の間に食い込んで、五島の走る方向と逆に球を転がし、次の瞬間には木村の矢のようなシュートがゴールに向かった。森はそのボールに飛びつこうとゴール一杯に身体を伸ばしたが、その時にはグラウンドの端に生えた雑草の間を転々

とする球が、既にスピードを失って、緊迫した時間の終りを告げた。

吉川は少し間をおいて笛を吹いた。笛の音が青空に向かって拡がると、底のない空間から指令を受けたように全員が吉川の近くに走り寄る。彼等の剝げたブルーのユニホームには、S高校のマークが大きく染め込まれていたが、六日間の合宿で付いた泥に、新しい泥が加えられて殆ど判らない。また黒いパンツには所々ボールの型が付いていて、それらは彼等がこの地で合宿した結果得た土の養分のように、体内にまで染み込んでいるかと思えた。

太陽が頭上を過ぎて、午後の直射を更に強く受ける頃には、顔面から次々と流れ出す汗をぬぐおうともせず、足を素早く動かしてダッシュした。特に小廻りを必要とするバックは、ターンの練習に午後の大半を費やしたが、倒れそうに身体をひねってターンする一、二年生の部員に何度も怒鳴り声と冷い笛の音が浴びせられた。

「こらあ、ダッシュしろ！」

吉川が叫ぶと一年生の松川は思い出したようにひざを上げて足を速める。彼の姿勢が最も安定した時、笛が彼を呼び止める。彼は狼狽して身体を無理に後向かせるが、足はそのまま直進して、彼の身体は伸びきったまま褐色の土の上に転がった。

「転べと誰が云った！　足からターンするんだ、足から！」

立ち上がろうとして膝を起こす松川に、上級生の罵倒が飛ぶ。彼は再び同じ方向にダッシュする。たて続けに笛が吹かれ、松川はターンを繰り返し、終いには独楽のようにぐるぐる

廻る。いいかげんに廻った時、笛の音が止む。松川は半廻りしてあわてて走り始めるが、方向を失って吉川の立っている所に向かって進んでしまい、二人は衝突する。吉川はすぐ起き上がったが、二度目の転倒で立ち上がれない松川は、スパイクに掘り返された土に顔を俯せたまま、暫く動かなかった。

松川は誰も自分を助け起こさないのを見て自分に怪我のない事を知り、両手に力を加えて足を引き寄せると言った。

「すみません」

そして、やっと松川はターンの練習から解放された。

太陽が西の山陰に姿を隠し、海からの快い風がグラウンドを通り抜ける頃、彼等は汗を流し尽くして、乾いた身体を動かせる事を楽しく思えるようになっていた。それだけに、その日の予定の最後に組まれていたヘディングの練習は、明快な神経に痛烈に響き、まるで、鉄の球を頭にぶっつけたように感じさせた。前のヘディングの痛さが消えない内に、次の球が頭蓋を攻め、やがてその痛みも感じなくなる。そして彼等の頭髪に泥が溜まり、体中に泥の付かない部分がなくなった時、彼等の一日の練習が終わった。

快い海風と、乾いた空気を、まるで老人のように吸い込んでその一日が果された事を漠然と考える。

「──ああ、いい気持だ。練習の後は、何ていいんだろう」

誰もがそう考えながら、誰も何も喋らず、黙々と深呼吸を続けた。

体操が一通り終わると、吉川はその日最後の笛を吹いた。皆はすぐ吉川のところに駈け寄りたく思いながら、ゆっくり歩いて集まった。

彼等は円陣を組んで、肩と肩を寄せあい叫び声をあげる。

「ファイト、ファイト、ファイト、ファイト！」

その声を最後に、グラウンドは再び静寂に包まれ、やがて夜と共にやって来る山風を受けて騒ぐ闊葉樹の音が聞こえる迄、それが守られた。

彼等は手に手に、ボールや空気入れやネットを持って合宿に戻って行く。

「さっき倒れた時、どうもなかったのか？」

吉川は思い出したように言った。

「ええ、大丈夫です」

松川は笑いながら答えた。

夕陽は完全に山の陰に落ちて、逆光に照らされた稜線が真赤に染まり、そこから彼等の背に至るまで、闇が被っていた。

風呂と夕食を済ませるとそれぞれが思い思いの休息を取る。合宿が始まった頃は、殆ど寝ころんでじっとしていたが、六日目ともなれば、囲碁やポーカーや雑談に花が咲いた。

褐色に焦げた背中を夜風にさらして、五島達は縁側から貧弱な庭をながめている。中尾は最後まで飯を食っていたが、おおような動きで胡座を解くと、立ち上がりゆっくり五島達の居る縁側まで歩いた。
「吉川達はどこへ行った？」
「ああ、吉川さん達、海岸でしょう」
一年生の町田が答えた。
「そうか」
と言いながら中尾は五島の横に腰を下ろした。
「お前ら、この合宿の間、何回小便した？」
中尾が言ったので、一年生達は少し考えた後一寸不安になって言った。
「そう言えば、僕は一度も行ってないぞ」
五島は声を立てて笑ったが、中尾は真面目に言った。
「大いによろしい。小便に行くような奴は汗を流し足らん奴だ」
「大便は毎朝しますよ」
松川が笑いながら言った。
「あたりまえだ。大便だけは、いくら練習しても出るもんだ」
中尾はそれだけ言って立ち上がり、囲碁をしている二年生にも面白くない冗談を言って部

屋を出た。
彼等が泊まっている旅館は、先輩の関係している所で、S高サッカー部が毎年決まって合宿に使っていた。三年生の中尾は旅館の内部はもちろん、付近の地理まで殆ど知り尽くしていた。海岸は少し離れていたが、旅館を出ると真先に波の音が聞こえ、快い山風が彼の全身を包んだ。
海岸の防波堤に、三つの黒い影が並んでいる。闇の彼方から押し出される波は、コンクリートの堤にぶっつかり、その飛沫の一滴は彼等が坐っている所まで飛んできて、剥き出しの腕に冷たく触れる。木村はその腕をそっと口の所に持ってきて嘗めてみた。丁度真上に来た半月が、その焦げた腕を照らす。
「今年の合宿は先輩が来なくてよかったな」
森は例の甲高い声で言った。
「勝手なもんだ、先輩なんて、弱けりゃ弱いでだらしないと言って、『俺達の頃は』だろ。強くなったら強くなったで、『お前達が強くなったのは俺達のお陰だ』と言いたがる」
一度退いた波が打ち寄せて、轟音を立て、再び退くのを待って、吉川は言った。
「そう言っても俺達、先輩が居なけりゃこんなに一生懸命やる気になっていないだろうし、俺達が強くなったのは、やはり先輩のお陰だよ。今年は準決勝までは間違いなく進めるだろうし、うまくいけば優勝できるだろう。やっぱりそれは嬉しいさ。先輩だって寄付だけ取ら

れて部が弱いんじゃたまらないだろうしね」

「お前には、そういった優しい所があるからキャプテンなど務まるんだな」

森は心持ち声を落として言う。

「俺には、結局俺達が先輩に利用されているとしか思えないんだ。俺達が強くなって、例え優勝したとしても、それで何があるんだ。勝った時には確かに嬉しいさ。だけど嬉しいだけじゃないか。一体なぜ嬉しいんだ。先輩にも母校にも顔が立つって言っても、なぜ顔を立てなきゃならないんだ？　顔を立てる事が本当に嬉しいのか？　たとえ、先輩が作った強いという伝統があったとしても、なぜ俺達がその伝統を守る事に一生懸命にならなければならないんだ？」

森の言葉の終わりの方は、打ち寄せて、コンクリートと衝突する波の鈍い音に掻き消された。彼はその間一呼吸待って、再び続けた。

「先輩達は、自分達が作り上げたものを崩したくない為に、伝統という大義名分を分って、俺達に死守させるんだ。それだけさ。俺達はそれを自分の課題だと信じてやっているだけさ。騙されてるんだ」

森が喋り終わっても、誰も口を開かない。波の音だけが何度も繰り返され、打ち寄せる毎に「騙されてるんだ」という最後の言葉が再生されて、反復した。

三人の影の上にもう一つの影が重なった。中尾は三人のすぐ後に立ち停まった。

「おう！」

と木村が声を掛けたので、中尾は木村の横に坐った。堤防のコンクリートから彼等の裸足が投げ出され、それ等は水面に向かってぶらぶら振られていた。

「お前だって、後輩がサッカー部を弱くしてもらいたくないだろう」

吉川は、空間を動く足先を見つめて言った。

「そりゃ、弱くなって欲しくない。だけど俺の欲望をなぜ後輩に押しつける事ができるんだ。俺は後輩達が自分達の本当に信じる方法でやってくれる方がいいよ。それでもなお強ければ、それに越した事はないしね」

森は、俯いた吉川の頭の上で喋った。木村は沖の方で時々キラキラ輝く夜光虫を見つめていた。吉川は頭を上げて森を見たが、視線が合うとすぐ、元の足先へ眼をやった。

「俺達今年の三年生はまとまっているという評判なんだぜ、今更、森がそんな事を言い出すと思えなかったな」

吉川が言うと、すぐ森が答えた。

「まとまっているのはいいさ。俺がこんな事言ったたって俺達はまとまっているさ。だけど俺達がまとまっていて、今年のサッカー部が強いとしても、それが先輩達に作られたものでしかないし、俺達が本当に強くなりたかったかどうか判らない。ただ、先輩達の作った仕組みの中で、その中のとりきめを守ってきただけじゃないか」

森と吉川の間に交差していた対話に、中尾のしゃがれ声が割り込む。彼は木村の肩越しに森を見ながら言った。

「お前はなぜそんなに先輩を気にするんだ？　一寸被害妄想じゃないか？　今実際にサッカーをやっているのは僕らじゃないか。僕らの事をなぜ先輩の話にするんだ？」

「本当に俺達がサッカーをやらなきゃならなかったか、本当にサッカー部を強くさせなければならなかったか、という事だよ。少なくとも、俺は青春を過ごす最もよい方法がサッカーだとも思えない。少なくとも、俺は自分の青春を自分で歩んでいると思えないんだ。俺の場合、兄貴がサッカー部員だったという理由だけでサッカー部にはいり、いつの間にか熱中しだしたんだ」

「そうだろう、お前は熱中してるんじゃないか！」

中尾は森の言葉を遮るように言った。

「なぜ熱中したんだ！」

森の声は次第に高くなって、練習の時のような甲高い声が、波の音以上の響きで伝わった。

「俺は先輩達が作った暗黙の仕組みにはいり込んだだけじゃないか。一度部にはいった者には退部を許さない。練習に出てこない奴はみんなで呼び出す。そして強くなる事だけに専心する。強くならなければならないと信じる。強いことが正しい事だと考える。みんな先輩が作ったデマじゃないか！　誰が一体、強くなる事を正しいと信じるようにしたんだ」

森の言葉が途切れると、再び波の音が四人の耳に侵入する。森以外の三人は沖の夜光虫を見ていた。森もそれを見た。夜光虫は少しずつ移動している。少しずつ輝きが沖に向かっている。それは、夜光虫が移動しているのか、光線の関係で移動しているように見えるのか判らなかった。

「俺はやっぱり強くなる事が正しいと思う」

中尾が言った。森はすぐ答えなかったので、吉川が答えた。

「中尾、森は何も強くなる事が正しくないと言ってるんじゃないんだ。強くならせるためだけに作られた仕組みを批判しているんだ。だから、……」

吉川が言葉に詰まった時、森が言った。

「悪循環があるだけさ。次々と先輩が後輩に強制して行くなんて。先輩がどんな無理を言ってもじっと我慢して、自分が先輩になったら意地悪く後輩に当る。『俺達だって苦労したんだ。お前達も辛くないはずだ』ってね」

「だけど、そう言った仕組みがあるから、僕らは一生懸命やる気になって、強くなるんじゃないのか？」

中尾が言った。

「そう言った仕組みがあるから、という理由だけしか、俺達がサッカーをやる目的がないんじゃないかと言うんだ」

森は速やかに反論した。
「じゃ、お前はサッカーが嫌いなんだな。やる気がないんだな」
「今更、嫌いじゃない。それどころか好きでしかたがないさ。それにやる気だって一杯ある」
「森は何もサッカーがいやだって言うんじゃなくて、強くなる為だけに何もかもすてて、伝統を守るだけの犠牲になるのはいやなんだ。そうだろ？」
吉川が言うと、森は頷いた。その間も木村は黙り続けていた。木村は喋らないタイプではなかった。
「木村、お前はどう思うんだ」
吉川が言った。木村はその吉川を一寸見て再び沖の微光を見つめた。
「お前には何の不満もないのか？」
吉川が重ねて尋ねた。
「別に不満はない」
木村は素気なく言った。
「今の話、どう思うんだ？」
森が言った。
「強くなる事が正しいさ。それしか言えない。だけど、俺は先輩に強制されているだけだと

思えない」
木村は途切れ途切れに喋った。指を一度口にくわえて、それを引き出す。
「森が言うように、部が強くなる事だけがサッカーの目的だと思わないけれど、つまり、俺達が一生懸命やる事には、一人一人が自分の中に持っている目的があるんだ」
木村は考えながら話しているように、話を少しずつ区切って言った。
「それがサッカーでなくてもいいだろうし、サッカーであってもいいはずだ。俺達が、何かに夢中にならなければならないだけなんだ。夢中にならなければ、俺達は自分を考える全てを失うんだ。それは自分だけが、それぞれに持っているものなんだ。現実に自分が先輩達の作ったわくにはまっているだけでも、それと自分の問題とは別の事だと思うんだ」
森が何か言おうとして、木村を見たが、木村は喋り続けそうだったので口を噤んだ。
「俺は昨晩、夢を見たんだ。昨晩だけじゃない。ここへ来てから毎日、同じ夢を見るんだ。変な夢だ。
遠い南の海を、巨大な前世紀の怪物が泳いでいるんだ。そいつは大きな吠え声を上げて、首を振り廻して泳ぐんだ」
「それが、どうしたんだ？」
森はたまりかねたように言った。
「俺は、その夢を見るとなぜか勇気づけられるんだ。自分が正しいと信じられるようになる

んだ。なぜか判らない。だけど大海原を吠え廻る恐竜に、なぜって質問したってしかたがないさ。それは丁度、俺達がサッカーをやる時のように、一生懸命吠え廻って、泳いでいるんだ」
「そうさ、サッカーなんて、恐竜と同じくらいでっちあげの夢でしかないんだ。俺達がいくら一生懸命やっても、吠え廻る恐竜ぐらいの現実感しかないんだ。その時だけ欺されていて、後には馬鹿馬鹿しいと感じるだけなんだ」
森が言った。
「現実的でなくてもいい。それが俺達の心の中にあればいいんだ」
木村は、まだ沖を見つめていた。闇と闇を結ぶ水平線を見極めようと努めている様であった。
「その夢は、毎日同じなのか？」
吉川が言った。
「いや、その恐竜はいつも俺に向かって泳いでくるけれど、毎日、俺の方に近付いてくるんだ。明日にでも、この海岸にやってきそうな感じなんだ」
「さっきから、その事を考えて黙っていたのか？」
森が言った。
「色気のない夢だな」

中尾が言った。
「そろそろ、ミーティングをやらなきゃ。みんな帰らないか」
吉川が言った。四人は立ち上がって、歩き始めた。半月に映えた堤防のコンクリートと、そこに写し出された自分達の影を見ながら。

彼等が合宿に帰った時、既にミーティングの準備が、下級生達によって為されていて、机の周辺に坐ったまま話合っている下級生達が、彼等を迎えた。
「松川、お茶もらってこい」
坐るなり、中尾は言った。
「はい」
と言って松川が立ち上がると、五島がその松川を制して言った。
「松川、俺が行ってきてやる」
五島はそのまま廊下へ出る。皆の視線はその五島を追ったが、森は苦々しげに呟いた。
「何だ、あいつ兄貴振りやがって」
「そう言うな、あいつは、ああするのが好きなんだ」
と吉川が言う。
五島が戻ってきて、大きな身体いっぱいに愛嬌を振り舞いてお茶を配ると、吉川は喋り始

めた。

「ところで、合宿もあと一日で終わりだ」

「明日は飲めるぞ！」

五島が調子に乗って言った。

「飲める事は飲めるが、今年はそうしても居れない。リーグ戦が一ケ月繰り上がって、九月にあるからだ。この合宿で何とか形をつけなければ、学校が始まってからはあまり練習も出来ない事だろうと思う。

今年のリーグ戦の目標を一応明栄高校においている。敵の戦力は、何といっても石黒を中心としたフォワードだ。ところがうちの弱点は、五島には悪いが、フルバックだ」

「へえ、どうも」

と五島が言ったが、誰も笑わなかった。

「石黒は馬力があるだけでなく、横の動きも素早い。うちのバックが、一人ぐらいでマークしたって、彼の強引な球捌きにかかると、忽ち抜かれてしまうだろう」

その場の二十人近い若者達は、真剣な顔で吉川を見つめた。ただ、木村だけは俯いて、別の事を考えていた。そして彼もまた真剣な顔を崩す事がなかった。

——なぜ、俺は、毎日毎日、恐竜の夢を見るのだろう。何億年も昔からやってきたように、巨大な身体をうねらせて、大洋を泳いで行くあいつは、一体何を求めているんだ？　もし本

当に、今の時代に恐竜が生き残っていたとしても、そいつは、何によって、今という時代を過ごす事ができるのだろう。種族の栄華した時代を遠く離れて、細々とした繁殖の能力すら失って、ただ一頭、大海原を暴れ廻るのは何の為だろうか？——

木村がサッカーを始めたのも、他の大部分の部員と同じく、一寸した切掛からだ。その頃、何かやりたいという漠然とした気持で部屋を覗いて、単純にサッカーをやれば、身体が強くなるだろうと考えて練習に参加した。実際にはサッカーなどをやると怪我が絶えず、病気すら多いのだ。彼は練習をサボッたり、止めさせてくれと言ったりしながら、その度毎に先輩から叱られたりおだてられたりして、あいまいな形で続けていた。彼にはそれ程、サッカーが面白くもなかったし、練習が辛いばかりだった。

そんな彼が、サッカーを続ける気になったのは、町子と知り合ってからだった。

近くの高校との練習試合の折、彼が蹴ったボールが、ラインオーバーして、転がっていった所に町子が居た。町子はボールを拾って木村に投げ返しながら言った。

「木村さん、ガンバッテね！」

彼は、それから一週間後、絵画の時間に、町子と逢った。

「なぜ、僕の名前を知っていたんです？」

そういった取り留めない話から彼等は親しくなった。そして、その後、町子がサッカー部の上級生達の間で話題になっている女である事を知った。彼には女が、美人であるかどうか

という判別がつく訳でなく、ただ、上級生達が話題にするような女と付き合う事に喜びを感じただけだった。

町子は彼の練習を見に来て、試合には必ず応援に来た。雨の中で、赤い傘をさした町子がただ一人の観客である事もあった。町子は彼の挙げた得点に拍手を送り、そんな彼を男らしいと言った。彼は更にファイトを燃やし、ゴールに向かった。

二年生になった時には、彼はS高校不動のセンターフォワードとして重要な得点源となっていた。特にゴール前の球捌きは連盟一と言われ、チームでは重要な位置を示すようになっていた。

彼は更に巧くなろうとし、自分の力で、チームを優勝させたいと思うようになった。敗ければ悔やみ、練習が進まぬと苛立ち、勝つ事を暗黙のテーゼと認めた。

木村の女ファンは町子だけでなくなったが、彼は先輩の戒め通り、女には近寄らず、練習だけに打ち込んだ。やがて、町子は彼から去って行ったが、先輩が町子に手を出したという話を吉川から聞いた事があった。そんな彼には、その時の町子の気持等判らなかったし、判ろうともしなかった。

――俺は、町子を好きになったところで、留まるべきだったのだろうか？　俺はあの頃から、どう変わったのだ？――

目を上げると、吉川はまだスピーチを行なっていた。彼は再び考えた。

――一体、今俺は何を求めているんだ？　今年のリーグ戦にチームが優勝して、俺がその立役者になったとして、それが俺に決定的な喜びをもたらすとも思えない。優勝の後には馬鹿騒ぎがあるだけだ。俺の大嫌いな馬鹿騒ぎ、そして先輩のうわべだけの賞め言葉。

俺はサッカーが好きだ。サッカーの何が？　ゴールに向かって球を操りながら突進する時、その瞬間が俺は特に好きだ。――

木村の耳の奥では恐竜の叫び声が聞こえ、彼の頭の中の大海を恐竜が暴れ廻っていた。

――俺はあの恐竜と同じく、暴れたいのだ。俺はいつも暴れ廻っていたいのだ。なぜ？なぜ暴れ廻りたいのだ？――

その時、吉川の声が木村の回想を打ち切った。

「木村、何をぼうっとしてるんだ？」

吉川は木村の焦点のない視線に異様なものを感じながら言った。

「ああ、何だ？」

「副主将からも何か言ってやってくれ。女の口説き方でもいいぞ」

全員の視線が木村を捕えた。

「うん。何も言う事もないけれど……」

木村は皆の視線を避けて眼を閉じ、再びそれを見開いてから喋り始めた。

「まあ、これは僕の個人的な考え方だが、一応僕らは試合を目標に練習しているけれど、単

に試合だけの為に合宿しているんじゃなくて、練習そのものにも僕らの行為に於ける何等かの意味があり、それらが前提となって僕らのサッカーに対する考え方が生まれるんじゃないかと思うんだ。合宿が終わる事と、試合が終わる事は同じくらい大きなけじめだ。合宿が終わった後、この合宿でみんなが何を得たかよく考えてみてくれ」

暫くして吉川は言った。

「それだけか？」

木村は頷いた。

「じゃ、今日のミーティングはこれで終わる。消灯は10時、明日は8時、海岸集合だ」

吉川の指示に、全員が快い返事をした。ガタガタ言わせて机を片付けながら、一年生の酒井が言った。

「女の口説き方は教えてくれないんですか？」

「女の話はふとんの中で」

と横から五島が答えた。

再びそれぞれが自由時間を過ごし始めた時、吉川は木村の腕をつかまえて言った。

「さっき、何を考えていたんだ？」

「恐竜の事さ」

「まだ考えてたのか。恐竜が怖いんだな」

笑いながら吉川が言うと、木村も笑って答えた。

「いや、恐竜が好きなんだ」

その顔に、久々のおおらかな満足感が充ちていた。

彼等は殆ど一斉に眠った。合宿の初めの頃は、一人二人暗闇の中で疲れた体をもぞもぞと動かせていたが、六日目ともなると消灯と共に全員が眠りに就いた。

荒々しくふとんを蹴り上げ、大きな鼾をかいて眠る彼等には、健康な若者達のエネルギーが満ち溢れている。遠く聞こえる波の音も、彼等の眠りを妨げる事を憚るように低く聞こえていた。

木村はその日も夢を見た。

水平線を境に分かれた空と海は互いに照らし合い、海は空の青を、空は海の青を受けてますます青く冴え亘る。空には太陽が、海には小さな白い波があり、それらは動いていないように見える程静かだ。全てが明快だ。

恐竜が濃い緑の長い首を斜めに振って、尾を海面にたたきつけると、そこに荒々しい波が起こり、四方に拡がる。身体全体を首に合わせてうねらせた後、首を海中に突っ込み、そのまま直進したかと思うと、すぐに勢いよく海面に飛び出す。暗黒につながる海底から閃光の

ように明るい太陽の下に変わる恐竜の視界。巨大な二つの足で水を蹴ると、片足が水面へ飛び出してポチャッという音を残す。

グワーォ！

恐竜は吠えた。己れの背にあるうろこを逆立てて、尾を左右に鋭く振り廻して伸び上がる。そして再び海中に潜ると前足を引っ込め、首を一直線に伸ばして海中をかなりなスピードで前進し始めた。

やがて再び首を海面から振り上げて、大気を一杯吸い込むと、一気に身体を飛び立たせ、轟音と共に海面にたたきつける。そこから円い波の紋が生じ四方に拡がっていくと、恐竜は再び海中に潜り、四つの足を小刻みに動かして進んでいく。

また、首を出すと、今度も吠えた。

グワーォ！

グワーォ！

数億年も昔の海を思い出しているようではない、どこにも居ない仲間を捜し続けているのでもない。恐竜は、その種族の終末を既に知っているように、己れが時代遅れの怪物である事を知っているように、残された生命を吠え声によって充たそうとする。暴れ廻る事によって、己れの一瞬に占める場を拡大しようとしているように思える。歴史から見離された恐竜は、その刹那だけに己れを主張しようとしているようだ。暴れる事で、吠える事で。

吠え、暴れる恐竜の視界に、緑の一点が加わる。異様な臭気を放つ不気味な陸地、それを楽天地とも、地獄とも考えない。それは、時代遅れの恐竜が、最も醜く、最も貧弱に見える所だ。そこで破廉恥な己れのみっともない姿を、己れの為に示さねばならぬ。太古が、そのひとかけらを、現代に投げ込み、それが空しく滅びていく姿を、じっと見つめねばならぬ。嘗て、悪魔の使いと怖れられていた彗星すら、現代文明の中では笑い者なのだ。高々、一頭の恐竜にどれだけの恐怖が発散されよう。それは吠え、暴れる中に、精一杯の羞恥心を示さねばならない。見せかけだけの反抗と、嘘っぱちの自己主張によって、己れの太古をいじめぬかねばならないのだ。

恐竜は緑の一点に向かって一心に泳ぎながら、更に大声で吠えた。

グワーォ！

その声は、眠っている木村の耳に伝播した。彼は恐竜のように身をうねらせて眼覚めた。既に朝日が縁側に差し込んでいた。

木村はそっと起き上がると、素早く服を着て庭に出てみた。

真赤な巨大な太陽が、海の方向の家並みから昇ってくる。波の音は聞こえず、代わりに蝉や小鳥の鳴き声が聞こえる。彼は振り返り、背後の山々を見つめた。緑の小さな山。恐竜が遠くから水平線上の一点に認めた山だ。雑木が混然と生い繁り、淡い緑の質素な光景。

「木村、早いなあ」
　薄暗く見える屋内から吉川の声が聞こえた。そして暖かい光の中に吉川の姿が現われると、木村は彼の方に二、三歩近寄った。
「夢はどうだった？」
　吉川が言った。
「この海岸にやってきたよ」
　木村は真面目な表情をくずさずに言った。
「ほう、それは見物だな」
　吉川が笑いながら言うと木村も思い出したように笑った。
「今日は最終日だから練習を早く切り上げて海岸でその恐竜を待とう」
　吉川が言った。木村は吉川の顔をしばらく見つめて言った。
「なぜ、急にそんな事を言い出すんだ？」
「面白いじゃないか、毎日同じ夢を見るって言うのも何か暗示的だし、俺もその在りもしないものを待ってみたいんだ」
「有難う」
「何も礼を言う事はないよ。みんなが心の中に持っているはずのものを待つだけなんだから。君が昨夜言った、この合宿で得たものを考える為にね」

　吉川はそう言うと、部員達が顔を洗ったり、寝間着を片付けたりしている方に向かって大声で言った。
「今日は練習を昼迄で切り上げる」
　中尾は不服そうな顔を吉川に向けたが、一、二年生の「ワーッ！」という歓声に押されて何も言えなかった。

　海岸で準備体操をして、砂浜をランニングし始めた時、もう部員達は何の不満も、何の心配もなく自分のその一瞬のエネルギーを練習だけにつぎ込んでいた。
　その日もプログラム通りの練習が行なわれた。ターンして足をもつれさせた松川に森の叫び声が飛ぶ。
「ダッシュしろ！」
　木村の巧みなドリブルに喰い下がる五島、まるで五島の裏をかいて球を動かす木村のドリブルを、五島は必死で追う。
「五島！　足首を使え！」
　吉川が呶鳴った。
　松川と市川が球を両側から追って正面衝突する。生身の身体がぶつかったと思えない音がグラウンドに響いた時、

「いいファイトだ！」

吉川が言いながら走り寄った。

倒れた松川と市川は起き上がりながら笑う。

最後にシュートの練習を行なって、合宿最終日の練習が終わった。誰も命令しなくても、全員が吉川の所に集まる。体操を終えて円陣を組むと最後の力を腹の底に集めて叫んだ。

「ファイト、ファイト、ファイト、ファイト！」

その声は松林から海岸に飛び出し、遠く水平線の彼方に進んで行った。

海には一隻の船も見えず、波と、波を作る風だけが白い光の乱反射の中で規則的な動きを繰り返していた。

砂浜に長い足跡が続き、真黒に陽焼けした若者達の顔が遠い水平線に向けられている。みんなに合宿が終わったという解放感が見られる、それは単に練習に縛られ苦痛から解き放たれたという事だけでなく、もっと自由な、何もかも充たされた時にのみ感じる事ができるものだった。

「何とかリーグ戦でがんばれそうだな」

吉川が言った。五島は砂浜に転がった砂利から平たい石を選んで拾い上げると、海に向かって投げつけた。

「サッカーか！　それでもサッカーは素晴らしいぞ！」

五島が勢いよく腕を振って石を投げながら言った。石は海面に当ってはね返り、再び空中に舞い上がった。

「うん、あのでっかい時代遅れの恐竜と同じくらい素晴らしい」

木村が言った。

「そうだ、これは木村の夢の中に現われた恐竜と同じだ。同じ青春の虚像だ」

森が言った。

「嘘だ。虚像じゃない。ちゃんとここにサッカーのボールがあって、俺達が試合をする。そして勝つ！　実像じゃないか！」

五島が言った。

「勝つ事が現実的なだけに、俺達の心には虚像としてしか受けとめる事ができないのじゃないか？」

みんな黙って森の方を見た。

「現実に勝つ、それで俺達に何が残るんだ。現実的に勝ったという事を俺達は何かの形で残したいと考えるから虚像を作らなければならないのだ」

この森の結論に誰も反論するものは居なかった。

暫く沈黙が続いた。吉川がその沈黙を破る言葉を捜している内、一番言いたくなかった言

葉を口にした。
「どうやら恐竜もやって来ないな」
部員達はその言葉に緊張が解かれて笑った。
「海は大きいなあ、俺も、こんな大きな海のような実像を捜していたんだ」
誰かが立ち上がって言った。みんなじっと海の方をみつめていたので誰が言ったのか判らなかった。その時、
「おい！　木村、あれを見ろ！」
市川が大声で叫んだ。
水平線に、ギラギラ輝く海面を掘り返すように波立たせて、潜っては首を出し大空に向かって伸び上がる巨大な恐竜が、海面に向かって泳いでくる。
グワーォ！
グワーォ！
その声は、誰の耳にもはっきり聞こえた。
恐竜はその時代遅れの酷い姿をさらけ出すために陸に向かって泳いでいるのだ。長い長い年月を深海で過ごした恐竜は、短い青春をサッカーのために過ごした若者達の虚像として、そこに姿を現わしたのだ。

ここに恐竜あり

筒井康隆

幸夫は、春休みを利用して、網走にある叔父の家に旅をした。そんなに遠くまで、たったひとりで旅をしたことなど、中学生の幸夫にははじめての経験だった。
中学校では、幸夫は理科が好きだった。特に、生物が好きだった。だから、こんどの旅で幸夫がいちばん楽しみにしていたのは、網走原生花園の見学だった。
網走湾を左に見て、叔父の運転する車に乗り、幸夫は海岸ぞいの道路を原生花園に向かった。晴れた日で、黒い海はおだやかだった。
「おや」
幸夫はふと、車の窓ごしに、沖あいをながめた。
不気味な色をたたえた海の一部分が、ざわざわと黒く波立ち、わきかえるように、白いアワを立てているのだ。

「あれは、なんでしょう」
叔父は車をとめ、海に眼を向けた。「なんだろうな。あんなものを見るのは、わしもはじめてだ」
ざ、ざ、ざざざっ。
波の表面が、めくれかえった。白いしぶきをあげ、黒い、巨大なものが、ぬっと海上に立ちはだかった。
「あ……」
幸夫も、叔父も、しばらくはものもいえず、眼を見ひらいて、それをながめた。
それは、恐竜だった。
中生代にさかえ、今はもうほろびて、地球上にはいないとされている恐竜が――。その恐竜が、今、幸夫たちの眼の前へ、網走湾の海底から立ちあがったのである。そして、それは、海岸めがけて歩いてくるのだ。幸夫たちの方へ、近づいてくるのだ。
幸夫には、信じられなかった。幸夫の横で、あんぐりと口をひらき、逃げようともせず、ただぼんやりしている叔父にしても、今、眼の前に起こっていることが、信じられないにちがいなかった。
ふたりとも、何も考えられなかった。頭の中が、からっぽになったようだった。
恐竜は、短い前肢を胸のあたりにだらりとさげ、あと肢だけで歩きながら、砂浜にあがっ

てきた。からだの大きさは十メートルもあるだろうか。眼を赤く光らせ、からだ中から水をしたたらせながら、その恐竜は、幸夫たちの乗っている車の前を、通りすぎていこうとした。
「ティラノサウルスだ……」
幸夫は、ゆっくりと、そうつぶやいた。中世代の爬虫類のことには、幸夫はくわしかった。そのつぶやきが、まるで聞こえたかのように、恐竜は幸夫たちの方を、ふりかえってにらみつけた。
「わ……」
叔父が、がたがたとふるえはじめた。ティラノサウルス――それは中世代の爬虫類の中でも、もっとも獰猛（どうもう）な肉食の恐竜なのだ。その大きな口からはみ出した、白い、するどい歯をひと眼見れば、叔父でなくてもふるえだしただろう。
その時――。
幸夫の頭の中には、恐竜の声が聞こえた。幸夫だけに、はっきりと聞こえたのだ。
「お前は、わたしを知っているのか」
「知っている」幸夫も、心の中でそう答えた。「君は、ティラノサウルスという、あばれん坊の恐竜だ。いったい君は、何のためにあらわれたのだ」
「なんのためだと」幸夫には恐竜が、白い歯をむきだして、にやりと笑ったように思えた。
「教えてやる。人間どもに、ほんとうのことを知らせてやるためだ」

「ほんとうのことって……いったい、何を」

幸夫が心の中で、そうたずねかえした時には、すでに恐竜は、車道をわたり、馬の群を追いちらしながら、牧草地帯の中へ入っていってしまっていたのである。

「……に、逃げよう」

やっと正気にもどった叔父が、あわてふためいて車をUターンさせ、網走の町の方へ走らせはじめた。

「あいつはいったい、何をする気だろう……」幸夫は考えつづけた。「人間に、何を知らせるというのだろうか……」

幸夫にはそれが、いつまでも気にかかっていた。

恐竜は、網走に上陸したのち、石狩山を越えて、どんどん西に向かっていた。恐竜の行く先ざきの村では、大さわぎになっていたが、恐竜は、たいした被害をあたえることもなく、それらの村や小さな町を通りすぎていった。そういったことを、幸夫は、網走の叔父の家で、新聞やテレビによって知ることができたのである。

やがて春休みも終りに近づいた。幸夫は東京に帰るため、まず網走から鉄道で、札幌に向かった。

列車は、次第に札幌に近づいた。列車の中で、幸夫は、あの恐竜が今、札幌の町であばれまわっているという話を耳にした。

「あばれているんだって……。だが、どうしてだろう。あばれることが、人間たちに、何を教えることになるんだろう……」

列車は札幌の町に入った。

その時、幸夫は、恐竜の叫ぶ声を、頭の中に聞いた。恐竜は、あばれながらわめいていた。

「さあ。思い知ったか。おれの恐ろしさを」

恐ろしさだって——。そんなことは、誰でもが知っていることじゃなかったのだろうか。

幸夫がそう考えた時、列車は札幌駅の手前で急停車した。

「怪獣が、あばれています」と、車内放送のアナウンサーが叫んだ。「列車は、これ以上先へは進めません」

幸夫たち乗客は、停車した列車からレールの上へ、おりなければならなかった。

雷のような咆哮（ほうこう）が、すぐ近くでとどろいた。幸夫は顔をあげた。恐竜が、札幌駅のビルをたたきこわしていた。

「やあ、カイジュウだ。すごいな」列車からおりたばかりの、小学生らしい男の子と女の子が、レールの上を、恐竜の方へ走りだした。

「これっ。どこへいくの」母親らしい若い女が、子供たちを追ってかけだした。

「あっ。あぶない」と、幸夫は叫んだ。

恐竜が、子供たちの方へ近づいてきた。

あたりにいる、おとなたちは、子供たちをとめようともせず、だまって見ていた。それはまるで、恐竜がいくらあばれようと、子供たちにだけは害をあたえるはずがないと、たかをくくっているように思えた。

「こっちへくるな」と、幸夫は、心の中で恐竜に叫んだ。「そこに子供がいるんだ」

「かまわん」

恐竜はそう答えた。そして、その巨大な足で、子供たちふたりを、ぐいと、ふみつけてしまったのである。

わっ——という声が、幸夫のまわりの、おとなたちの中から起こった。

子供たちの母親は、半狂乱になり、恐竜に叫んだ。

「なんてことするの」

だが恐竜は、その母親さえ、足でふみつぶしてしまった。

「なぜだ。なぜ、そんな、ざんこくなことをしたんだ」幸夫はまた、自分のそばを、あばれまわりながら通りすぎていく恐竜に、そう叫んだ。

「いいか、おれは恐竜なんだぞ」と、恐竜の声が幸夫の頭の中に、大きくひびいた。「恐竜には、ざんこくなどいう、人間の考えかたはない。わかるか。これが、あたりまえなのだ。おれの方へ走ってきた子供たちは、おれのことを、おもしろいと思っていた。その母親も、おれのことを、話のわかるカイジュウだと思っていた。ほかの、おとなたちも、おれのこと

を、子供にだけは害をあたえない、やさしい恐竜だと思っていた。だが、それはまちがいだったのだ。お前はおれのことを、よく知っている。だから、わかるだろう。それは、まちがいだったのだ」

たしかに、そうだった。恐竜は、もともとおそろしいものなのに、子供たちはおもしろいと思っていた。それは、まちがっていた。そのまちがったことを、子供に教えたのは、いったい、だれか——。幸夫は、千歳空港へ向かうバスの中で、そう考え続けた。——若い母親や、おとなたちに、恐竜には話が通じるのだという、まちがった考えかたを教えたのは、いったい、だれか——。

恐竜は、札幌の町を、さんざん荒らしまわってから、幸夫の乗ったバスのあとを追いかけるように、こんどは南へ向かっていた。その恐竜は、ずっと幸夫の頭の中に、話しかけていた。いや、話しかけているのではなく、それは恐竜が、ただ考えているだけのことなのかもしれなかったが、その考えが、幸夫の頭には、なぜか、しみこむように、入ってくるのだった。

「そうとも、おれは恐竜なのだ。けっして、おもしろいものではないのだ。恐ろしいものなのだ。話のわかるカイジュウなどというものではない。おれには、人間の話など、通じないのだ。おれはそれを、人間たちに教えてやるのだ。話しあいなどというものが、通じない相手もいるのだということをな。おれは、子供だって、へいきで殺すのだ。おれには、やさしい気持ちなんてものはないのだ。なぜなら、おれは、爬虫類なのだ。血の冷たい恐竜なの

だ」

そうだったのか——。千歳空港から、ジェット旅客機で東京へ向かいながら、幸夫は考えた。——人間たちに、知らせてやるとは、そのことだったのか——。

恐竜は、ジェット旅客機のあとを追って、さらに、南へ南へと進んでいた。千歳や、室蘭の町であばれまわり、内浦湾を渡って函館の町にあばれこみ、建物をたたきこわし、人を殺し、そして、津軽海峡を越えて、本州へ渡ろうとしていた。

東京へ帰ってきた幸夫の頭には、恐竜の声は、もう響かなくなっていた。遠くはなれてしまったからにちがいない——幸夫はそう思った。

しかし、恐竜のうわさは、毎日のように、新聞やテレビで見たり聞いたりした。恐竜はあいかわらずあばれまわりながら、東京へ向かっていた。いずれは、東京にもやってくるだろうと、東京の人たちは話しあっていた。それはしかし、恐竜をこわがっているのではなく、スリルを楽しむような気持ちで、むしろおもしろがり、恐竜がやってくるのを期待しているかのように、幸夫には見えた。

みんな恐竜のこわさを知らないんだ——幸夫は悲しくなった。このままでは東京は、きっとひどいことになるぞ——なぜなら、恐竜は、自分をこわがる人間には手出しせず、おもしろがったり、カッコいいと感じたりする人間だけを殺しているからだ。もちろん恐竜にしてみれば、逃げていく人間を追いかけなくても、彼を見ようとしてやってくる人間を殺すだけ

でせいいっぱいだったのかもしれない。それほど、恐竜をこわがらない人間はたくさんいたのだ。

恐竜が、東京に近づいてくるにつれ、幸夫にはふたたび、恐竜の声が聞こえるようになってきて、それは次第に、頭の中で大きくひびきはじめた。

「どうだ、思い知れ。おれは、ほんとのおれは、映画や、テレビや、ＳＦマンガの中に出てくる、オモチャのようなカイジュウとは、わけがちがうのだ。わかったか。わかったか。今こそおれは、恐竜としての権威を、とりもどすのだ。怪獣などではない。おれはティラノサウルスなのだ。今こそおれは、巨大な爬虫類としての、トカゲの先祖としての力をとりもどすのだ」

そして彼は、ついに東京へあばれこんできた。

東京タワーなど、テレビの電波を送る高い鉄塔は、まっ先に、片っぱしから倒された。テレビ局などの建物も、第一番にふみつぶされた。恐竜を写真にとって、コマーシャルに使ってやろうという考えから、かけつけてきたカメラマンは、いちばん先にふみ殺された。カイジュウにキャラメルをやって、仲よく遊ぼうと思い、かけよってきた子供たちは、ぜんぶ、たたき殺されてしまった。なぜ、そんなにあばれるのかと、いろいろ質問し、カイジュウを理解してやろうと考え、やってきたおとなたちも、ひとり残らず、ふみつぶされてしまった。話せばわかりますと叫んで、子供たちが殺されているくせに、なおも対話しようとやってき

た母親たちも、すべてふみにじられ、ぺしゃんこにされてしまった。
やっとのことで、あのカイジュウを殺せという声が、あちこちから、あがりはじめた。それでもまだ、殺すのはかわいそうだと叫ぶ人たちがいた。そんな人たちは、つぎつぎと、たたき殺された。
とうとう、自衛隊が出動し、ミサイルで恐竜を殺すことになった。
ミサイルなどを使うと、いっしょに、たくさんの人が死ぬから、やめろという声もあった。しかし、そんなことをいった人たちも、恐竜からいよいよ殺されそうになった時、自分のいったことを後悔した。
さらに、いくつもの建物がこわされ、何百万人もの人が死んだ。自衛隊が、いよいよ恐竜に向けて、ミサイルを発射した時には、すでに東京の町は、廃墟のようになってしまっていたのである。
恐竜は、胸にミサイルを受けて、倒れた。
死んでいこうとする恐竜の、さいごのつぶやきが、幸夫の頭に、かすかに、かすかにひびいていた。
「そうだ……それでいいのだ……。やっと、わかってくれた……人間は、そうあるべきなのだ……恐竜とは、はじめから、こうして、殺されるべきだったのだ……そう……これでいいのだ」

恐竜と道化

井辻朱美

フエルトの断ちくずよりも色あざやけき丈夫なりしと物語はいえり

頁岩（けつがん）とまじりあいたるよろこびに椎骨（ついこつ）ながき陽（ひ）を浴びいたり

大陸がいまだひとつでありし世に足音おもき竜生きて死ぬ

脂色（やにいろ）にけぶりてあれよ顎骨（がくこつ）のむかしの風を食（は）みたるかたちに

太陽はむらさき色のコロナする　しわ深きまぶたの見上げしシュロの葉

あたたかき肉塊の中に牙（きば）うめて生命（いのち）はかくも赤きと思うあけぼの

みどり濃き森に棲むゆえ身をめぐる体液は指の先までおそろしき赤

暁新世（ぎょうしんせい）の岩棚にふるき尾を垂らし風にふかれていし異星人

波の痕（クロスラミナ）なだらかにある岩にきて膝つけば暗きリンパの記憶

歯を抜きし三日はたえず口中に血の味ありきわれもジュゴンも

一体の道化が踊りつつゆくかユラ紀の森の〈ピッパ　パッセズ〉

風奔（はし）るつかのまわれによみがえり硅石（けいせき）のごときあの世の太陽

釘のごと歯を鳴らしつつ過ぎたれば　そは大いなる帝王竜なり

水晶球投げ上げるとき全宇宙が吸いこまれたり　あなにやしエオン

むらさきの穂先もて刺す水晶の岩床にきて擦られたる風

高熱にきらめきふくれるガラス液　ハドロサウルスのくちばし聖(きよ)き

両棲類のあわき肺胞陽(ひ)にけぶりピアノの音にたたかれてゆく

肉厚き声帯もちていたりしが共鳴孔のみ残る頭骨(とうこつ)

凹凸のかすかにいまも陽をはじく恐竜の皮膚の他界の思い出

あたたかき毛をそよがせる恋人ら　見よ帝王竜の亡霊とおる

横倒しのバイクいくつも重なりて風は体毛なきものを愛す

なだらかな砂漠に沈みしランボーの一本の足　海竜の耳骨（じこつ）

卵色の手袋ひらきちかづくは道化の幽霊　ユラ紀の夜の風

サーカスの天幕のさきとがりいて星を刺したるままに揺れたり

血の色のサボテンのように生えているこの世の辻の四角いポスト

目にみえぬ海草がなおたなびきてなまぐさきまで碧（あお）き天かな

大いなるものの体毛身じろげばまひるの月は北風に浮く

肉茎（にくけい）をさしのばしたるかたつむり　他界の温度を感じていたり

こはたれの心臓なりしか薔薇水晶　水よりあげればピアノがひびく

唇をもつことのなかった竜たちはざらざらの顔で月を食いたり

大いなる海鰐（うみわに）の尾の旋転（せんてん）を恐れて泣けば真夜中の雲

吊られつつ顎ひらきいる恐竜も木偶人形（でくにんぎょう）もおのずとわらう

顎骨（がくこつ）のひとつが月を浴びている　あれは道化のおもちゃであった

素手よりも風の織り目にふれやすき指なし手袋かざして道化が

棍棒（こんぼう）をたずさえてゆくかの道化　時空の辻をユラ紀へ折れる

収録作品解説

東雅夫

数多ある「恐竜本」の中で、とりわけ印象深い座右の一冊を挙げよ、と求められたなら、私は迷うことなく大きな声で、次の書名を告げるだろう。

ドナルド・F・グルートの『恐竜スクラップブック』(Donald F. Glut THE DINOSAUR SCRAPBOOK Citadel Press, 1980)!

草創期の復元図から、パルプ・マガジンの挿絵やコミック、アニメ、商業広告まで。

あるいは、映画やテレビのスチルから、博物館・テーマパークの陳列模型スナップまで。

さらには、ミニチュア玩具やプラモデルの類に至るまでを、在野の「恐竜博士」グルートが渉猟しスクラップした……要するに同書は、大衆文化のヴィジュアル・イメージとして夢見られた「恐竜」造形の一大カタログなのである。

さまざまにデフォルメされた恐竜たちの姿態を眺めていると、いやでもひとつの事実に気

づかされる。

最新の科学的研究成果が造形に反映されるようになるのは、近年になってからの傾向であること。しかも、造形の対象となる恐竜の種類が一部に限られている、という点である。

ティラノサウルス、アパトサウルス、ステゴサウルス、トリケラトプス、プテラノドン……すなわち獣竜（ケモノ）、雷竜、剣竜、角竜、翼竜という慣用の「和名」を代表する五大恐竜が圧倒的多数を占め、首長竜（プレシオサウルスなど）や魚竜（イクチオサウルスなど）といった水棲爬虫類や、鎧竜（アンキロサウルスなど）、禽竜（イグアノドンなど）、帆立竜（ディメトロドンなど）あたりはアクセントに追加される程度。「ラプター」ことヴェロキラプトルに代表される小型肉食恐竜が人気アイテムとなったのは、それこそ映画「ジュラシック・パーク」公開以後といってよい。

もっとも、これを一概に、画一的な商業主義の弊害であるとか、子供だましの所為ゆえと決めつけるわけにもゆくまい。

ロバート・T・バッカーを筆頭とする革新的恐竜学者の出現で、旧来の恐竜観が根底から揺るがされる「恐竜ルネサンス」の激震がアカデミズムの世界を襲ったのは、一九七〇年代以降の出来事なのだから。

そしてまた、それら画一的で、多くの場合、非科学的でさえある「中世暗黒時代」（金子隆一）の恐竜造形は、少なくとも私の目には今なお、このうえなく魅力的に映るのだ。

なぜだろうか？

それらのディテールに、各時代、あるいは各分野に生きた人々が「恐竜」に託した夢や妄想の反映を読み解く愉しみも、無論のこと、ある。

しかしながら、その根本的由来は、恐竜たちのフォルム――とりわけ、先に挙げた五大恐竜の特徴的姿態が、さまざまなヴァリアントを許容し誘発する「元型」としての魅力にあふれているからではあるまいか。

なだらかな山容を思わせる雷竜の優美、重戦車を連想させる角竜の重厚、過剰の美学（マニエリスム）に貫かれた剣竜の異形、西欧的デーモンのプロトタイプともいうべき翼竜の幻怪……なかでも「ゴジラ」をはじめとする怪獣たちの造形に圧倒的な呪縛力を及ぼしてきた獣竜の卓越したフォルムは、人類が発見（発掘!?）した「幻想涵養装置」の最高傑作のひとつといっても過言ではあるまい。

ヴィジュアル・イメージとしての恐竜について、冒頭から長々と綴ってきたのはほかでもない、右に指摘したような「幻想涵養装置」の機能は活字メディア、とりわけ文学の世界においても十全に発揮されてきたと思われるからである。

その意味で本書は、恐竜という名の幻想涵養装置が、極東の島国で生み出した文学的所産を集大成する試みといえよう。

午後の恐竜　星新一

　現代の大都会を恐竜たちがのし歩く……「街角のロスト・ワールド」とでも形容すべき幻想的な光景は、恐竜が隠れ棲む秘境での冒険行を描いた「ロスト・ワールド参入」と双璧をなす「恐竜文学」の基本テーマである。
　いまは亡きショートショートの岳父・星新一が遺した本篇は、凝縮された語り口と構成で、同テーマのエッセンスを抒情豊かに描き尽くした小さな大傑作。「ガイア」の観念が提唱されるはるか以前に、かかるアイディアを思いついたのも恐るべし、だが、それにもましてここには、人類には及びもつかぬ長大な期間、地上に覇を唱えた大先達に寄せる畏怖と敬愛の念があふれている。その裏には、愚かしくも卑小なホモ・サピエンスに対する痛烈な諷刺と苦い絶望がこめられているわけだが……。その対比が、寥々と胸に迫る。

危険水域　井上雅彦

「キング・コング」（三三）のウィリス・オブライエン、「恐竜１００万年」（六六）のレイ・ハリーハウゼンから、フィル・ティペット＆デニス・ミューレンの「ジュラシック・パーク」（九三）コンビに至るまで、銀幕の魔術師（特撮監督）たちが生み出したスクリーンの恐竜たち――本物さながらのリアルさで咆哮し躍動するその勇姿は、大衆文化における恐

竜イメージ醸成に決定的な影響を与えてきた。
　星新一の衣鉢を継ぐアイディア・ストーリーの名手である作者のモンスター映画フリークぶりは、夙に有名だろう。その真骨頂を示したムービー・ホラー連作集『１００１秒の恐怖映画』（九七）から抜いた本篇は、レイ・ブラッドベリの傑作恐竜短篇「霧笛」（五一）の異形の後日譚であると同時に、かれらヴィジュアル・エイジの恐竜創造者たちに捧げられた心からなるオマージュともなっている。

過去の翳　豊田有恒

「恐竜人類（ディノサウロイド）」を御存じだろうか？　カナダ自然博物館に展示されている等身大復元モデルは、どこか異星人（エイリアン）グレイを連想させる頭部に、つるんとしたトカゲ男めく無気味な容姿で来館者を出迎えているとか。
　もしも恐竜が絶滅することなく、高度な知的生物へと進化を遂げていたら……というＳＦ的な夢想に科学的裏付けを付与しようとする試みは、カール・セーガン『エデンの恐竜』（七七）中での言及が点火役となって、一気に学界に広まったのだそうである（金子隆一『新恐竜伝説』参照）。
　してみると、セーガンの著書に先駆けて構想・執筆された本篇は、世界初の「恐竜人類」ストーリーということになる！

ちなみに作者には、本篇のアイディアをさらに発展させて、恐竜から進化した未来人と現行人類が存亡をかけて闘う歴史改変テーマの長篇ＳＦ『ダイノサウルス作戦』（七七）があることを申し添えておこう。

大相撲の滅亡　小林恭二

同時代における恐竜科学の尖端的知見を意欲的に取り込んだ「本格」恐竜ＳＦに続いて、一読抱腹絶倒必至な「変格」恐竜ＳＦの極致というべきケッサクに登場願おう。

初期の『小説伝』から三島賞受賞の近作『カブキの日』に至るまで、奇想と不条理の世界を描き続ける作者には、巧まざるユーモリストとしての一面がある。そうした嗜好が最も過激に突出しているのが、本篇を含む短篇集『日本国の逆襲』（九二）といえよう。

なお、本篇についてもいち早く言及されている巽孝之の『恐竜のアメリカ』（九七）は、まとまった形としてはおそらく史上初の恐竜文学論の試みであり、本篇の要諦ともいうべき「巨大妄想」をめぐって示唆に富む考察が展開されている。併読をお勧めしたい。

クラシック・パーク　景山民夫

恐竜幻想に仮託して末世の日本国を笑いのめす、機略縦横の傑作パロディをもう一篇。「ジュラシック・パーク」変じて「妖怪ランド」と化す成りゆきも胸ときめかすものがある

が、作者はさらにもうひと捻り、ダメを押すことで、代表作『遠い海から来たＣＯＯ』（八八）以来の「恐竜愛」を貫いてみせた。

バブル景気華やかなりし頃、「町おこし・村おこし」の美名のもと列島各地で繰り広げられた狂騒絵巻は、いまとなってはいっそ懐かしい感すらあるが、思えば十九世紀中葉このかた「開発＋イベント」は、欧米における化石発掘＝恐竜学発展の大きな原動力ともなってきたのである。このアイロニーは、なかなかに奥が深い。

恐竜レストラン　荒俣宏

一八五一年に開催されたロンドン万国博覧会は、大衆文化における恐竜イメージ形成の端緒となった「イベント」としてもよく知られている。五四年、万博会場となった水晶宮のシドナム移築にともない、恐竜たちの実物大模型を点在させた史上初の「恐竜パーク」が開設される運びとなったのだ。

監修責任者となったリチャード・オーエンは、「恐竜（ダイノソア）」という呼称の生みの親でもあった。

博物学幻想の巨人アラマタの著作の中でも、とびきり美しい本のひとつである『図鑑の博物誌』（八四）の片隅から拾い上げた、この涙なくしては読めないささやかなエピソードには、そんな恐竜幻想草創期の熱気と興奮が息づいている。

イグアノドンの唄　中谷宇吉郎

滋味掬すべき……という形容がいかにもふさわしい、恐竜随筆の知られざる逸品をお目にかけよう。

寺田寅彦の学統を継ぐ物理学者にして達意のエッセイストであった作者は、師匠ゆずりの旺盛なる「理科系の好奇心」を発揮して、しばしば心霊やＵＭＡ（未確認生物）などのテーマにも臆することなく筆を進めた。

その白眉たる本篇は、子供たちと、子供の心を忘れない大人たちが抱く「ロスト・ワールド憧憬」の原風景を、静かに、細やかに、一抹の哀感をたたえて綴って、まさに余すところがない。

水中生活者の夢　種村季弘

ドラコニアを自称し、「化石は生きていた」の新聞記事を丹念にスクラップしていた澁澤龍彦、「ティラノサウルスがちいちゃな前肢で、こりこりって首のあたりをひっかく、あの動作が怖いんだよなぁ」と映画「キング・コング」におけるＷ・オブライエンの手腕を称賛してやまなかった中井英夫……幻想文学の先達にも隠れ恐竜ファンは数多いが、内外のロスト・ワールド文学に関して、おりにふれ瞠目すべき見解を披瀝してきたという点で、作者の右に出るものは少ないだろう。白水社版『現代ドイツ幻想小説』に編者みずから訳出収録したマヌエル・ヴァン・ロッゲム「窓の前の原始時代」（五八）も、「午後の恐竜」に比肩すべき恐竜ショートショートの佳作だった。河出書房新社版〈種村季弘のネオ・ラビリントス〉が『怪物の世界』で幕を開けたのは、伊達ではないのだ！

古生物幻想の作家・香山滋の本質に迫る本篇は、その最良の一例である。

湖上の怪物　Ｗ・Ａ・カーティス（佐川春水訳）

全国ン千人（……ン百人!?）のハードコアな恐竜文学マニアの皆さま、お待たせいたしました。少年時代の乱歩に忘れがたい感銘を与えた（江戸川乱歩「怪談入門」参照）という噂の怪作、堂々の初復刻であります。

本篇発掘の栄誉は、ひとえに横田順彌&會津信吾の「こてん古典ＳＦ」コンビに帰せられる。詳しくは両氏の共著『新・日本ＳＦこてん古典』の「第二講　失われた世界へ」を是非御一読いただきたいのだが、とりわけ會津氏による執念の探索ぶりには敬服するしかない。

本篇の原題は The Monster of Lake LaMetrie で、一八九九年、米国の「ウィンザー・マガジン」に発表された怪奇ＳＦの先駆というべき作品である。

作者のウォードン・アラン・カーティス（Wardon Allan Curtis 1867-1940）は、世紀転換期に活動した米国の大衆作家で、本篇のほか、アラビアン・ナイト風のファンタジー「大いなるソロモンの封印」（一九〇一）、東洋風ファンタジーと怪奇ミステリーを融合させた作

品集『ミドルトン氏の奇怪な冒険』（〇三）などを残している。

翻訳者の佐川春水に関しては、明治四十（〇七）年に本篇が英和対訳本として出版された当時、正則英語学校・法政大学の英語講師の職にあり、本書に先立ちコナン・ドイル原作の対訳本『銀行盗賊』を公刊していたということしか分からない。

それにしても明治末に、このような恐竜ホラーの怪作が、ほとんどリアルタイムで紹介されていたとは！「過去の翳」といい、本篇といい、こと「文科系の恐竜学」に関しては、我が国は欧米の恐竜先進国にも決してひけをとらないと思うのだが……如何？

檜ノ木大学士の野宿（抄）　宮沢賢治

読みやすいとはお世辞にもいえない明治の文語文（と、その奇ッ怪な内容）に疲弊した向きには、『春と修羅』の詩人が鉱物幻想の極致をたおやかに詠いあげた本篇で、リラクゼーション(!?)を満喫していただこう。

恐竜文学史の劈頭を飾るジュール・ヴェルヌ『地底旅行』（一八六四）を持ち出すまでもなく、地底世界幻想とロスト・ワールド憧憬は因縁浅からぬ関係にあるが、その交錯がもたらす夢幻の光輝をかくも純度高く描いた作品は、海外にも例がないように思う。

なお、紙幅の制約から涙を呑んで割愛した「野宿第一夜」と「野宿第二夜」に描かれる鉱物たちの愉快な宴の光景も、機会があれば是非目を通していただきたいものである。

沼　吉田健一

地質学的夢想が喚起するロスト・ワールドの幻景を描いて読む者を陶然たる境地へと誘う名品を、もう一篇。こちらは、その壮大さと疾走感において、初期ディズニー・アニメの名作「ファンタジア」（これまた「幻想涵養装置」がフル稼働された一例だろう）をゆくりなくも想起せしめるところがある。

英文学の深い素養に裏打ちされた特異なスタイルの散文で、戦後文学に独自の地歩を占めた作者には、ネス湖の怪物や雪男、マンモスなどの怪しい消息を綴ったUMA随筆集『謎の怪物・謎の動物』（六四）を嬉々として著す茶目っけたっぷりな一面があった。

融通無碍という言葉を絵にかいた如き趣の本篇からも、その恐竜怪獣フリークぶりの片鱗がうかがえるに違いない。

恐竜展で　清岡卓行

恐竜たちは現代詩の世界にも、こんな愛すべき足跡を刻している。

「夢」をモチーフとする詩や散文の紡ぎ手として定評のある作者は、本篇を収めた詩集『幼い夢と』（八二）のあとがきで、次のように記している。

「この詩集の根本の動機はなにかと、作者自身が横から眺めるとき、それは、中年も終りに

近い父が、幼い末っ子と同じ地球のうえであとどれだけいっしょに生きられるだろうかと考えて感じる、寂しさだろうと思われます」

この「寂しさ」は、「地上の過客」たる恐竜と人類、それぞれの行く末にも重ね合わせられるべきものだろう。

トリケラトプス　河野典生

父と子と、恐竜の物語を、今度は散文で味わっていただこう。

本篇を含む連作短篇集『街の博物誌』（七四）は、都市生活者の日常をひそやかに侵犯する非現実の世界を活き活きと描き出した現代版「驚異博物誌」であり、「午後の恐竜」や山田正紀の長篇『竜の眠る浜辺』（七九）と並ぶ「街角のロスト・ワールド」テーマの傑作でもある。

就中、サイクリングに出かけた父と子が、丘の上から新興住宅地（と、重なり合って存在する恐竜たちの群れ）を見おろして息を呑むシーンの描写は、このうえなく美しい。

恐竜　山野浩一

「スペキュレイティヴ・フィクション」という言葉が魅力的な輝きを放っていた、あの懐かしい一時期、その代弁者として論陣を張った作者が、おりにふれ世に問うた物語の中には、

粗削りだが一読忘れがたい原石の輝きがしばしば含まれていた。

青春の鬱屈と断末魔の恐竜の咆哮が、驚くべき大胆さでつかのま交錯する本篇には、いまは過ぎ去った「日本ＳＦの青春」が息づいているのだ。

ここに恐竜あり　筒井康隆

第一次怪獣ブームの終息期、怪獣王ゴジラが、核時代の恐怖の権化から幼児の愛玩物へと限りなく頽落していった過程は、図像的には、その「恐竜性」の喪失として顕れていたように思えてならない。ひかえめだった前肢は人間並みの太さと長さに進化（？）し、頭部は精悍な獣竜型から滑稽なカエル型へと変貌していった。

そんなゴジラの変質は、子供心にもなにやらん腹立たしく情けない気がしたものだが、人間である私ですらそうなのだから、当の恐竜たちがその惨状を目撃したら、さぞかし悲憤慷慨することだろう……といったような、怪獣ファンと恐竜ファン（しばしば両者はイコールで結ばれるかもしれないが）共有の「思い」を、作者ならではの強靭無比なファルスの形で描き出したのが、本篇である。

その意味でこの作品は、国産怪獣文学と恐竜文学の集大成をもくろんだ前著『怪獣文学大全』と本書を通じてのグランド・フィナーレにふさわしい物語といえるのではなかろうか。

恐竜と道化　井辻朱美

エンディング・クレジットの背後に流れるテーマ音楽の良し悪しは、その映画の印象を左右することにもなりかねない。

ロスト・ワールドの夢へと読者を誘うララバイもしくは鎮魂歌として、当代きってのファンタジストの手になる幽艶な恐竜短歌ほどふさわしいものはあるまい。

作者の恐竜エッセイ「水族あるいはOtherness」から、ロスト・ワールドの暗冥を触知する次の一節を引いて、結びに代えよう。

> もはやかれらには肉も血もない。黒ずんだ骨格標本として、博物館の片すみにたたずんでいるばかりだ。歯茎を失った口にたけだけしい歯をむきだし、うつろなゆがんだ頭骨――しかもまぎれもなくそれは人間とにかよったかたちなのだ――をかたむけて、気の遠くなるような何億年もの過去から、現在にひきずりだされたものの、おそろしいOtherness を発散しながら、わたしたちを見下ろしている。親子づれが平然とその前を通り過ぎる。かれらにはわからないのだろうか。このことの意味、あってはならぬこと、いまに存在するはずではなかったものを見てしまっていることの異質さが。昼日中の亡霊。わたしたちはこの生き物から生まれてきたのだ。それを思うと、わたしは目先がくらくらし、それは博物館のしんと冷たいわずかホルマリンくさい空気とあいまって、背すじにぞうっとするものを走らせる。崇高の定義のなかに恐怖をくわえた美学者は正しかったと思う。崇高とはこれかもしれぬと、わたしはイグアノドンや高さ二十五メートルのブラキオザウルスを見あげながら感じる。ヌミノーゼ。ある絶対的な存在を前にしたときの、畏敬と恐怖。まったくのOthernessの感じ。

一九九八年九月

初出誌・単行本一覧

午後の恐竜（星新一）『午後の恐竜』早川書房　一九六八年十月
危険水域（井上雅彦）「日本版ファンゴリア」一九九六年一月号「竜のいる風景」改題
過去の翳（豊田有恒）「奇想天外」一九七七年三月号・四月号
大相撲の滅亡（小林恭二）「小説新潮」一九八九年新春号
クラシック・パーク（景山民夫）「小説新潮」一九九三年十月号
恐竜レストラン（荒俣宏）『図鑑の博物誌』リブロポート　一九八四年三月
イグアノドンの唄（中谷宇吉郎）『イグアノドンの唄』文藝春秋新社　一九五二年十二月
水中生活者の夢（種村季弘）香山滋『海鰻荘奇談』解説　桃源社　一九六九年十二月
湖上の怪物（W・A・カーティス）『湖上の怪物』建文館　一九〇七年九月
楢ノ木大学士の野宿（宮沢賢治）生前未発表　十字屋書店版全集第五巻　一九四〇年十二月
沼（吉田健一）「群像」一九五七年三月号
恐竜展で（清岡卓行）「文藝」一九八一年十月号
トリケラトプス（河野典生）「SFマガジン」一九七四年二月号
恐竜（山野浩一）『X電車で行こう』新書館　一九六五年十二月
ここに恐竜あり（筒井康隆）「西日本新聞」一九六九年四月三日号
恐竜と道化（井辻朱美）『コリオリの風』河出書房新社　一九九三年一月



恐竜文学大全

編者　東雅夫

一九九八年一〇月二三日　初版印刷
一九九八年一一月　四　日　初版発行

発行者　清水勝
発行所　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三二-二
☎〇三-三四〇四-八六一一（編集）
〇三-三四〇四-一二〇一（営業）
振替口座　〇〇一〇〇-七-一〇八〇二

デザイン　粟津潔

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-309-40554-1

フランス怪談集

日影丈吉〔編〕　46066-6

古代の女神像ヴィーナスに突如霊が宿ったのか？　ある日人が殺される……短編の名手メリメによる古典的傑作「イールのヴィーナス」をはじめ、ジュリアン・グリーン「死の鍵」の本邦初訳など12篇を収録。

イギリス怪談集

由良君美〔編〕　46070-4

イギリスは怪奇幻想譚の本場であり、怪談の名手を数多く生んだ。ブラックウッドの「空き家」、ウェルズの「赤の間」、ストーカーの「判事の家」など、名品19篇を精選した豪華版傑作集を新訳でおくる。

ラテンアメリカ怪談集

鼓直〔編〕　46080-1

ボルヘス、コルタサルを始め、アンデルソン＝インベル、ムヒカ＝ライネスなど本邦初訳10編を含む15作品が描き出す、ラテンアメリカの不思議な怪。「魔法の書」や「断頭遊戯」など未体験ゾーンをあなたに！

中国怪談集

中野美代子／武田雅哉〔訳〕　46095-X

食人の記録から壮大なSF宇宙論、天安門事件の共産党声明文まで幅広く取り上げ、中国的感性の途方もない巨大さを丸ごとすくいあげた異色のアンソロジー。現実がフィクションを食いつくす中国の恐怖記録。

東欧怪談集

沼野充義〔編〕　46136-0

吸血鬼を生んだ魔術的世界へようこそ。ポトツキ「サラゴサ手稿」バシヴィス（I・シンガー）「バビロンの男」等異色の作品からマケドニア等本邦初訳の作品まで、原語直訳の待望のオリジナル・アンソロジー。

くるみ割り人形とねずみの王様

E・T・A・ホフマン　種村季弘〔訳〕　46145-X

チャイコフスキーのバレエで有名な「くるみ割り人形」の原作が、今、新しい訳でよみがえる。「見知らぬ子ども」「大晦日の冒険」をあわせて収録したホフマン幻想短編集。冬の夜にメルヘンの贈り物を！

河出文庫

怪獣文学大全

東雅夫〔編〕　40545-2

ゴジラ、モスラ、マタンゴ、ガブラ、マグラ……怪獣を主人公にした、幻の名作を集大成した決定版アンソロジー。純文学からホラーの元祖、さらには哲学的な考察まで、荒々しくも孤高な怪獣たちの夢の饗宴!!

不気味な話　1

江戸川乱歩　40433-2

人間は遠い昔から「不気味なもの」に深い恐れと憧れを抱きつづけてきた。日本を代表する作家たちの残した幻想短篇を集大成したシリーズ第一弾。人外の恋、異形楽園、犯罪幻想、真の乱歩の世界がここにある。

不気味な話　2

夏目漱石　40442-1

遥かな異郷の地の血腥い伝説、自らの夢の深層に蠢く暗い欲望の流れ、そして臨死体験……。われわれが見慣れた、国民作家・漱石ではなく、異形の世界に住む幻視者・漱石の姿がここにある。漱石幻想短篇のすべて!!

世界幻想名作集

澁澤龍彦〔編〕　40488-X

「ウンディーネ」「フランケンシュタイン」等、澁澤龍彦選による幻想小説の名作十篇を、種村季弘、中井英夫、河野多恵子、大庭みな子、後藤明生等が語り直すアンソロジー。併せて澁澤による「幻想美術の流れ」を付す。

暗黒のメルヘン

澁澤龍彦〔編〕　40543-6

異界への果てしなき夢、ノスタルジー、禁断の幻影……澁澤龍彦が選ぶ非現実と幻想の時空。16名の著名な作家の短篇をまとめた珠玉のアンソロジー。現代日本文学のひとつの頂点を示す幻想パノラマの世界。

契丹伝奇集

中野美代子　40467-7

蜃気楼、砂漠、迷宮の都市……。広大な中央アジアを舞台に繰りひろげられる、時間と空間を超えた奇想天外な不思議の世界。古今東西の正史秘史に精通した、中国文化史家・中野美代子の初の幻想小説集。

薔薇十字の魔法

種村季弘　40368-9

謎の秘密結社として知られる薔薇十字団。世界救済のみちびき手としてたえず待望されつづけたこの不可思議な幻の集団の教理を分析しながら、その正体にせまるエッセイ集。

謎のカスパール・ハウザー

種村季弘　40502-9

十九世紀初頭のドイツに突然現れた一人の野生児。彼こそは死んだはずの王子なのか？　それとも詐欺師か？　びんの中の謎の手紙で幕を開け、殺人によって終わりをとげた怪事件の真実に挑むスリリングな評伝。

錬金術とタロット

R・ベルヌーリ　種村季弘〔訳〕　47235-4

C・G・ユング主宰の『エラノス年報』に発表された錬金術とタロットに関する有名な論文に編者種村季弘の関連エッセイを付したオカルティズム論集。残された豊富な図像を解読しながらその思想大系を解明！

突然変異幻語対談

筒井康隆／柳瀬尚紀　40390-5

『文学部唯野教授』を執筆中の小説家と、ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』訳出中の翻訳家が、数回の往復書簡と対談でくり広げる、空前絶後、一読驚愕の文学原論。言葉芸と虚構の本質をつくレクチュア。

筒井康隆の文芸時評〔文藝コレクション〕

筒井康隆　40475-8

小説の読み方、書き方がわかる！　「断筆」の理由はここでしか読めない！　筒井流「感情移入批評」を実践し、数々の小説を読み説いた、読んで楽しい、話題爆烈！最初で最後の文芸時評。

驚愕の曠野〔文藝コレクション〕

筒井康隆　40515-0

おねえさんが子供たちにきかせる「天井まで届くほどの長い物語」の目眩く断片の万華鏡。ファンタジーの終りから始まる終りなき夢の鎖を紡ぎながら、書物の曠野に時を超えてめぐる新しい小説空間をひらいた実験作。

吸血鬼幻想

種村季弘　40046-9

文学、映画、絵画などに出現する吸血鬼の影を追い求めながら、戦慄すべき血とエロチシズムにみちた夜の世界、死と生が交錯する境界領域を縦横に考察するエッセイ集。種村版＜吸血鬼大全＞。

アナクロニズム

種村季弘　40109-0

UFO、地球空洞説、魔術など、かつて熱狂的に信じられ、今や文化的ガラクタとして周辺におとしめられてしまった古ぼけたイメージの数々に再びスポットをあてながら、その魅力を物語る種村版＜綺想の博物誌＞。

怪物の解剖学

種村季弘　40179-1

ゴーレム、機械人間、巨人伝説など、人間の夢と欲望を凝縮した人工生命の系譜を歴史の闇から再生させ、神と人間の間に介在した幻想の生物のなかに、蘇るべき祝祭空間をさぐる綺想の現象学。

悪魔礼拝

種村季弘　40214-3

古代ギリシャから現代に至るヨーロッパ悪魔学の系譜をとりあげながら、悪魔礼拝をめぐる奇怪な習俗・信仰を紹介し、悪魔払いとしての近代文学が成立する過程を論ずる異色作。

詐欺師の楽園

種村季弘　40279-8

「詐欺とはインテリの犯罪である」――口八丁、手八丁、モト手いらずの才覚だけで、人々を煙に巻きつづけたヨーロッパのペテン師たちの神出鬼没の活躍を描き、トリックスターたちの肖像を活写する痛快エッセイ！

影法師の誘惑

種村季弘　40323-9

幼少年期に強く心ひかれた幻想、魔術、見世物、覗きからくり、映画、時計、人形、といったオブジェやイメージの眩惑の秘密をめぐって、少年が意識する自己の分身としての影を考察する夢幻的なエッセイ集。

恐竜の謎

J・N・ウィルフォード　小畠郁生〔監訳〕　25039-4

最初の恐竜化石の発見から最新の情報まで、恐竜に憑かれた男たちの数々のドラマをおりこみながら描く、ピュリッツアー賞受賞の科学ジャーナリストによるユニークな恐竜発見史！

恐竜　地球環境からみた恐竜の進化と絶滅の物語

Mr. & Mrs. ツェルカス　小畠郁生〔訳〕　25055-6

世界的に有名な恐竜イラストレーターの新作90枚をもとに、最新の学説をふまえ、恐竜の発生から絶滅までを、地球的視野から物語る恐竜本の最高傑作！　失われた驚異の世界へご招待。

肉食恐竜事典

G・ポール　小畠郁生〔訳〕　25061-0

恐竜のなかでも最も興味深く進化史上でも多くの謎をひめた捕食恐竜を全てとりあげて解説する恐竜ジャンル別事典!!　第一部で全体像を解説。第二部で別種目別の全恐竜を詳細にデータ化する!!

恐竜　過去と現在（1・2）

S・J・ツェルカス／E・C・オルソン　小畠郁生〔監訳〕　25069-6　25070-X

恐竜はどのようにイメージされ描かれてきたか。過去100年にわたる恐竜画を収集し、イメージの変遷をたどりながら恐竜観の変化をあとづける。あわせて恐竜研究の最先端を紹介する。

オウムガイの謎

P・D・ウォード　小畠郁生〔監訳〕　25074-2

先史時代からの「生きている化石」を捕らえるため、生命を賭して太平洋の深海に挑んだ科学的冒険の記録。謎にみちたオウムガイの生態を解明する感動の科学ノンフィクション。

シーラカンスの謎

K・S・トムソン　清水長〔訳〕　25081-5

八千万年前に滅んだとされていた「生きた化石シーラカンス」は、人類を含む高等脊椎動物の進化のジグソーパズルを解く重要な鍵である。その謎に挑んだ科学者たちの驚異の物語。